



TITLE:

中期ビザンツ帝国の社会と皇帝権  
力--9世紀を中心として--(  
Dissertation\_全文)

AUTHOR(S):

小林, 功

---

CITATION:

小林, 功. 中期ビザンツ帝国の社会と皇帝権力--9世紀を中心として--. 京都大学, 1997, 博士(文学)

ISSUE DATE:

1997-03-24

URL:

<https://doi.org/10.11501/3123221>

RIGHT:

博士論文

# 中期ビザンツ帝国の社会と皇帝権力

～ 9 世紀を中心として～

小林 功

## 博士論文目次

目次	i
略号表	iv
凡例	vi
皇帝在位表	vii
簡易・爵位の序列	ix
アナトリコンのストラテegos就任者(700-963)	xii
1 はじめに	1
(1) 環境	1
① 小アジア	1
② バルカン半島沿岸部	1
③ 地中海	2
④ 気候	3
(2) 問題の所在	3
2 9世紀初頭までのビザンツ帝国と皇帝権力	7
(1) はじめに	7
(2) 7世紀の変化	7
(3) 8世紀の展開	10
① 中央権力の強化	10
② 高官の政治的影響力上昇	12
(4) 皇帝権力の後退 ～775-820年～	15
① コンスタンティノス6世とエイレーネ	15
② ニケフォロス1世・ミカエル1世ランガベと高官	18
③ レオン5世の政権	20
(5) おわりに	23
3 高官層の形成 ～820-856年～	25
(1) はじめに	25
(2) ミカエル2世の政権	25
(3) テオフィロス政権を支えた人々	30
① 官僚機構との関係	30
② 軍事力の掌握	32
③ 皇帝との血縁関係	33
④ 人材の登用	35
⑤ 小括	37

(4) 地方行政機構の整備	37
(5) テオドラの政権	39
(6) おわりに	41
<b>4 ミカエル3世と「従者団」</b>	42
(1) はじめに	42
(2) 親族ネットワークとミカエル3世	43
(3) 「従者団」の分析	45
(4) ミカエル3世と高官層	48
(5) おわりに	50
<b>5 バシレイオス1世時代の支配層</b>	52
(1) はじめに	52
(2) バシレイオスの経歴と「従者団」	53
① バシレイオスの経歴	53
② バシレイオスの「従者団」	55
③ 小括	57
(3) バシレイオス1世の即位と政治支配層	57
① バルダスの暗殺まで	57
② ミカエル3世の暗殺	58
③ 政治支配層の反応	61
④ 小括	62
(4) バシレイオス1世の時代	63
① バシレイオス1世時代の海軍	63
② コンスタンティノーブルの高官・官僚たちとの関係	66
(5) おわりに	69
<b>6 陸軍と皇帝・高官</b>	70
(1) 小アジア軍事家門の出現	70
(2) 変化の背景	72
① 小アジアの状況の変化	72
② 中央の変化	74
(3) おわりに	75
<b>7 変化の時代 ～レオン6世・アレクサンドロス 886-913年～</b>	76
(1) はじめに	76
(2) レオン6世の即位	76

(3) レオン6世の政権	80
① ザウーツェス一族とサモナス	80
② ドゥーカス一門の反乱	83
③ ヒメリオスと海軍	88
(4) アレクサンドロスの政権	90
(5) おわりに	91
<b>8 ロmanos1世政権の成立と展開</b>	92
(1) はじめに	92
(2) 摂政政権の時代	92
(3) ロmanos=レカベノスの権力獲得	95
① ロmanos=レカベノスの一族と経歴	95
② 対ブルガリア戦から宮廷クーデターまで	95
③ ロmanos=レカベノスの勝利	97
(4) ロmanos1世の政権	100
① 陸軍と小アジア軍事家門	100
② ロmanos1世と海軍	103
③ ロmanos1世を囲む人々	104
④ 小括	108
(5) コンスタンティノス7世の復権	108
(6) おわりに	110
<b>9 おわりに</b>	111
<b>参考文献目録</b>	117
<b>地図</b>	
小アジア・地中海北半の地形	2/3
小アジアの土地利用・降水量	2/3
740年頃のビザンツ帝国東部	10/11
10世紀中頃のビザンツ帝国東部	92/93
<b>系図</b>	
(1) アモリア朝とバルダス一族	34/35
(2) バシレイオス1世・レオン6世関係	56/67
(3) ロmanos1世レカベノス関係	106/107



# 略号表

AASS	<i>Acta Sanctorum</i> , Paris, 1863-1940.
AB	<i>Analecta Bollandiana</i>
AHR	<i>The American Historical Review</i>
Vannier	J.F. Vannier, <i>Familles Byzantines: Les Argyroi (IX<sup>e</sup> - XII<sup>e</sup> siècles)</i>
BBA	Berliner byzantinische Arbeiten
BCH	<i>Bulletin de correspondance hellénique</i>
Beck	H.-G. Beck, "Byzantinische Gefolgschaftswesen"
BF	<i>Byzantinische Forschungen</i>
BHG	<i>Bibliotheca hagiographica graeca</i>
BMGS	<i>Byzantine and Modern Greek Studies</i>
BS	<i>Byzantinoslavica</i>
Bury(1911)	J.B. Bury, <i>Imperial administrative system in the ninth century</i>
Bury(1912)	J.B. Bury, <i>A History of the Eastern Roman Empire</i>
BZ	<i>Byzantinische Zeitschrift</i>
Cheyne	J.-C. Cheyenne, "Les Phocas"
DAI	Constantinus Porphyrogenitus, <i>De Administrando Imperio</i>
DeCer.	Constantinus Porphyrogenitus, <i>De Cerimoniis</i>
Deiparae	<i>De Sacris aedibus deque Miraculis Deiparae ad Fontem</i>
DOP	<i>Dumbarton Oaks Paper</i>
EEBS	<i>Epeteris Hetaireias Byzantinon Spoudon</i>
EHR	<i>English Historical Review</i>
Fine	J.V.A. Fine, Jr., <i>The Early Medieval Balkans</i>
GCA	Georgius Continuatus A, <i>Chronographia</i>
GCB	Georgius Continuatus B, <i>Chronographia</i>
Gen.	Joseph Genesius, <i>Regum Libri Quattuor</i>
GRBS	<i>Greek, Roman and Byzantine Studies</i>
Haldon(1990)	J.F. Haldon, <i>Byzantium in the seventh century</i>
Herlong	M.W. Herlong, <i>Kinship and Social Mobility in Byzantium 717-959</i>
Jenkins(1965)	R.J.H. Jenkins, "The Chronological Accuracy of the "Logothete" for the Years A.D. 867-913"
JHS	<i>Journal of Hellenic Studies</i>
JÖB	<i>Jahrbuch der Österreichischen Byzantinistik</i> (before 1969, <i>Jahrbuch der Österreichischen byzantinischen Gesellschaft</i> )
JRS	<i>Journal of Roman Studies</i>
la mer	H. Ahrweiler, <i>Byzance et la mer</i>
Lewis	A.R. Lewis, <i>Naval Power and Trade in the Mediterranean A.D. 500-1100</i>
LG	Leo Grammaticus, <i>Chronographia</i>

Lilie	R.-J. Lilie, <i>Byzanz</i>
Listes	N. Oikonomides, <i>Les Listes de préséance Byzantins des IX<sup>e</sup> et X<sup>e</sup> siècles</i>
Malamut	E. Malamut, <i>Les Îles de l'Empire Byzantin VIII<sup>e</sup> - XII<sup>e</sup> siècles</i>
Mango	C. Mango, "Eudocia Ingerina, the Normans and the Macedonian Dynasty"
Mansi	J.D. Mansi (ed.), <i>Sacrum Conciliorum nova et Amplissima Collectio</i> , Paris-Leipzig, 1901-1927.
MGH	<i>Monumenta Germanicae historica</i>
MGH SRG	<i>Monumenta Germanicae historica : Scriptores rerum Germanicarum</i>
MGH SS	<i>Monumenta Germanicae historica : Scriptorum</i>
PG	J.-P. Migne (ed.), <i>Patrologiae cursus completus, Series graeca</i> , Paris, 1857-1866.
Polemis	D. Polemis, <i>The Doukai: A Contribution to Byzantine Prosopography</i>
Practicians	J.F. Haldon, <i>Byzantine Praetorians</i>
Ps. Sym.	Pseudo Symeon Magister, <i>Chronographia</i>
Reaktion	R.-J. Lilie, <i>Die byzantinische Reaktion auf die Ausbreitung der Araber</i>
REB	<i>Revue de Études Byzantines</i>
Runciman	S. Runciman, <i>The Emperor Romanus Lecapenus &amp; his reign</i>
Scyl.	Ioannes Scylitzes, <i>Synopsis Historiarum</i>
SOC	<i>Scriptores Originum Constantinopolitanarum</i>
State Finances	W. Treadgold, <i>The Byzantine State Finances in the eighth and ninth centuries</i>
Stav.	S. Stavrakas, <i>The Byzantine Provincial Elite</i>
Thama.	Constantinus Porphyrogenitus, <i>De Thematribus</i>
ThC	Theophanes Continuatus, <i>Chronographia</i>
Theoph.	Theophanes Confessor, <i>Chronographia</i>
ThM	Theodosius Melitenus, <i>Chronographia</i>
TIB	<i>Tabula Imperii byzantini</i>
TM	<i>Travaux et Mémoires</i>
Treadgold	W. Treadgold, <i>The Byzantine Revival 780-842</i>
Vasiliev	A. Vasiliev, <i>Byzance et les Arabes II-2</i>
VE	<i>Vita Euthymii Patriarchae CP</i>
VV	<i>Vizantijskij vremennik</i>
Winkelmann	F. Winkelmann, <i>Quellenstudien zur herrschenden Klasse von Byzanz im 8. und 9. Jahrhundert</i>
ZRVI	<i>Zbornik radova Vizantoloskog Instituta</i>
ZV	G. Zacos & A. Vegliery (eds.), <i>The Byzantine Lead Seals I</i>



(1) ギリシア語の表記について:

- ①表記はビザンツ時代の発音ではなく、古典期の発音に基づいて表記している。
- ②ただし、φに関しては[ph]ではなく[f]で表記している。
- ③原則として母音の長短は区別せず、全て短音で表記している。ただし以下の場合例外とする。

(a)既に慣用的表記が確立しているもの。

例: ストラテゴス

(b)冠詞 τῶν, τοῦ, τῆςに関しては誤用を避けるために長音で表記している。またそれに伴ってこれらの冠詞のかかる語に関しても長音で表記している。

例: ドメスティコス・トーン・スコローン

(2) 7世紀以前の皇帝に関しても本稿ではギリシア語表記としている。

(3) 官職名については原則として原音表記とし、本文中に特に日本語訳は挿入していない。職務については巻頭の官職表を参照のこと。

(4) 皇帝の在位年に関しても同様に、巻頭の皇帝在位表を参照のこと。

(5) 『シュメオン年代記』の引用に当たっては、『シュメオン年代記』の原典にもっとも近いと考えられる『テオドシオス=メリテノス年代記』を定本として利用している。ただし脚注には他の主要写本に関しても対応頁を示している。またB系統に関しては、A系統と同様の情報に言及している場合には、原則として示していない。『偽シュメオン年代記』も同様。

(6) 本文で引用される論文・著作に関しては二回目以降の言及の際には、最初の何文字かで略して紹介していることがある。ただし頻繁に囲繞される文献に関しては全て略号を付してある。

ビザンツ帝国皇帝在位表(518-1204)

	皇帝名	在位年	前皇帝との関係・備考
	ユスティノス 1 世	518-527	
	ユスティニアノス 1 世	527-565	甥
	ユスティノス 2 世	565-578	甥
	ティベリオス 2 世	578-582	共同皇帝
	マウリキオス	582-602	カイサル、死後の婿
	フォーカス	602-610	
10	ヘラクレイオス	610-641	
	コンスタンティノス 3 世	641	息子
	ヘラクロナス	641	異母弟
	コンスタンス 2 世	641-668	コンスタンティノス 3 世の息子
	コンスタンティノス 4 世	668-685	息子
	ユスティニアノス 2 世	685-695	息子
	レオンティオス	695-698	キビュライオタイのドゥルンガリオス
	ティベリオス 3 世	698-705	
	ユスティニアノス 2 世	705-711	再任
	フィリッピコス	711-713	
20	アナスタシオス 2 世	713-715	
	テオドシオス 3 世	715-717	
	レオン 3 世	717-741	アナトリコンのストラテゴス
	アルタバドス	741-742	婿
	コンスタンティノス 5 世	741-775	レオン 3 世の息子
	レオン 4 世	775-780	息子
	コンスタンティノス 6 世	780-797	息子
	エイレーネー	797-802	コンスタンティノス 6 世の母親
	ニケフォロス 1 世	802-811	ロゴテテース・トゥー・ゲニクー
	スタウラキオス	811	息子
30	ミカエル 1 世ランガベ	811-813	ニケフォロス 1 世の婿
	レオン 5 世	813-820	アナトリコンのストラテゴス
	ミカエル 2 世	820-829	ドメスティコス・トーン・エクスクビトーン
	テオフィロス	829-842	息子
	ミカエル 3 世	842-867	息子
	バシレイオス 1 世	867-886	共同皇帝
	レオン 6 世	886-912	息子
	アレクサンドロス	912-913	弟

	コンスタンティノス 7 世	913-959	レオン 6 世の息子
	ロマノス 1 世レカペノス	920-944	ドゥルンガリオス・トゥー・プロイムー
	ロマノス 2 世	959-963	コンスタンティノス 7 世の息子
	ニケフォロス 2 世フォーカス	963-969	東方のドメスティコス・トーン・スコローン
	ヨハネス 1 世ツイミスケス	969-976	
	バシレイオス 2 世	976-1025	ロマノス 2 世の息子
	コンスタンティノス 8 世	1025-1028	弟
	ロマノス 3 世アルギュロス	1028-1034	エバルコス
	ミカエル 4 世	1034-1041	
10	ミカエル 5 世	1041-1042	
	ゾエ	1042	コンスタンティノス 8 世の娘
	テオドラ	1042	コンスタンティノス 8 世の娘
	コンスタンティノス 9 世モノマコス	1042-1055	
	テオドラ	1055-1056	再任
	ミカエル 6 世	1056-1057	
	イサキオス 1 世コムネノス	1057-1059	
	コンスタンティノス 10 世ドゥーカス	1059-1067	
	ロマノス 4 世ディオゲネス	1067-1071	
	ミカエル 7 世ドゥーカス	1071-1078	コンスタンティノス 10 世の息子
20	ニケフォロス 3 世ボタネイアテス	1078-1081	
	アレクシオス 1 世コムネノス	1081-1118	イサキオス 1 世の甥
	ヨハネス 2 世コムネノス	1118-1143	息子
	マヌエル 1 世コムネノス	1143-1180	息子
	アレクシオス 2 世コムネノス	1180-1183	息子
	アンドロニコス 1 世コムネノス	1183-1185	マヌエル 1 世の従兄弟
	イサキオス 2 世アンゲロス	1185-1195	
	アレクシオス 3 世アンゲロス	1195-1203	兄
	イサキオス 2 世アンゲロス	1203-1204	再任
	アレクシオス 4 世アンゲロス	1203-1204	息子
30	アレクシオス 5 世ムルツプロス	1204	

## 表 官位・爵位の序列

### ①中央の官位

<u>バシレオパトル</u>	(特殊称号)
<u>ライクトル</u>	皇帝顧問官
ドメスティコス・トーン・スコローン	タグマタ長官
ドメスティコス・トーン・エクスクビトーン	タグマタ長官
エバルコス	首都長官
サケラリオス	総務長官
ロゴテテース・トゥー・ゲニクー	税務長官
クアイストル	司法長官
ロゴテテース・トゥー・ストラティオティクー	軍隊財務長官
ドゥルンガリオス・テース・ビグラス	タグマタ長官
<u>メガス・ヘタイレイアルケス</u>	ヘタイレイア長官
ロゴテテース・トゥー・ドゥロムー	通信・外務長官
ドゥルンガリオス・トゥー・プロイムー	中央艦隊長官
ロゴテテース・トーン・アゲローン	皇帝領管理長官
ドメスティコス・トーン・ヒカナトーン	タグマタ長官
ドメスティコス・トーン・ヌメローン	監獄防衛長官
ドメスティコス・トーン・オブティマトーン	タグマタ長官
コメス・トーン・テイケオーン	城壁防衛長官
カルトゥラリオス・トゥー・サケリウー	財務長官
カルトゥラリオス・トゥー・ベスティアリウー	貨幣鑄造・輻重長官
オルファノトロボス	孤児院管理長官
エビ・トゥー・カニクレイウー	皇帝のインク壺管理長官
プロトストラトル	皇帝乗馬時の隨身
プロトアセクレティス	尚書長官
コメス・トゥー・スタウルー	皇帝の厩管理長官
<u>ミュスティコス</u>	皇帝秘書
エビ・トゥー・エイディクー	貯蔵物資管理長官
メガス・クラトル	皇帝直轄領管理長官
クラトル・トーン・マンガノーン	マンガナの皇帝直轄領管理長官
エビ・トーン・デエセオーン	請願書管理長官
オルファノトロボス	国立孤児院管理長官
デマルコス・ベネトーン	青組長官
デマルコス・プラシノーン	緑組長官

(以下省略)

☆プロトスパタリオス以上の爵位を持った人物が就任することの多い役職を示した。ただし爵位と官位の間に、明確な対応関係が必ずしもあるわけではない。



☆下線の引いてある役職は9世紀中盤以降新設された役職。

☆斜線の役職は皇帝一門や宦官の就任することの多く、皇帝に私的に奉仕する意味合いの強い役職。  
ゆえに中央行政機構の役職とは厳密には言いがたい。

☆時代の経過にしたがって役職の序列も変化する。この表は基本的には9世紀中盤の序列。

## ②宦官の官位

ブライボシトス	宮廷管理長官
皇帝のパラコイモメノス	寝室管理長官
皇帝のプロトベスティアリオス	衣服管理長官
皇帝のエピ・テース・トラベゼース	宴席管理長官
アウグスタのエピ・テース・トラベゼース	皇后の宴席管理長官
大宮殿のパビアス	大宮殿管理長官
大宮殿のデウテロス	皇帝の標章管理長官
皇帝のピンケルネス	皇帝の杯管理長官
アウグスタのピンケルネス	皇后の杯管理長官
マグナウラのパビアス	マグナウラ宮殿管理長官
ダフネのパビアス	ダフネ宮殿管理長官

## ③テマ・クレイスラの官職

ストラテegos/クレイスラルケス	テマ長官/クレイスラ長官
エク・プロソプー	テマ長官代理（臨時の役職）
トゥルマルケス	テマ次官
コメス・テース・コルテース	陣営管理長官
<u>クリテス</u>	テマ行政官
<u>プロトノタリオス</u>	テマ財務官（サケリオン）
<u>カルトゥラリオス</u>	テマ軍財務官（ストラティオティコン）
<u>エポプテス</u>	テマ税務官（ゲニコン）
ドゥルンガリオス	分隊長（1000人の兵）

☆下線の引いてある役職は中央とも結びついている役職。カッコ内は中央の上級官庁。

☆原則として9世紀後半以降の役職。

## ④爵位

1. カイサル
2. ノベリッシモス
3. クロバラテス
4. ゾステ・パトリキア（女性の爵位）
5. マギストロス
6. アンテュパトス（テオフィロス時代に新設）

7. パトリキオス
8. プロトスパタリオス
9. ディシュパトス
10. スパタロカンディダトス
11. スパタリオス
12. ヒュパトス
13. ストラトル
14. カンディダトス

（以下省略）

☆9世紀前半には爵位の序列は（特に中位以下は）なお流動的であった。

☆プロトスパタリオス以上が元老院議員に相当する爵位。

## ⑤宦官の爵位

1. パトリキオス
2. プロトスパタリオス
3. プリミケリオス
4. オスティアリオス
5. スパタロクビクラリオス
6. クビクラリオス
7. ニブシスタリオス



テーマ・アナトリコンのストラテゴス就任者 (700-963)

	人名	在任が確認できる時期	在任時の爵位
1	シシニオス	700	
2	レオン	714-717	
3	ランキノス	741-742	
4	ヨハネス	8世紀	パトリキオス
5	マリアノス	8世紀	パトリキオス
6	(Maur)ikios	8世紀	プロトスパタリオス
7	ミカエル=メリッセノス	767-772	パトリキオス
8	アルタバドス	778	
9	ミカエル=ガングリアノス	798以前	
10	アエティオス	802	
11	バルダネス=トゥルコス	802-803	パトリキオス
12	レオン	810-811, 811-813	パトリキオス
13	マヌエル	813, 829	パトリキオス
14	クラテロス	819	パトリキオス
15	フォティノス	826	パトリキオス
16	アエティオス	838	パトリキオス
17	ヨハネス	9世紀	パトリキオス
18	テオドロス	9世紀	プロトスパタリオス
19	テオドトス=メリッセノス	855以前 (840年代)	パトリキオス
20	アンドレアス=クラテロス	868	パトリキオス
21	アエティオス	9世紀後半	
22	バシレイオス	9世紀~10世紀	プロトスパタリオス
23	レオン	9世紀後半	
24	レオン=クラテロス	バシレイオス1世時代	パトリキオス
25	ニケフォロス	9世紀末~10世紀初頭	
26	レオン=フォーカス	9世紀末~10世紀初頭?	パトリキオス
27	バルダス=フォーカス	910-919	パトリキオス
28	ニケフォロス=フォーカス	944-955	パトリキオス
29	レオン=フォーカス	955-963	パトリキオス

出身地	備考	
	レオン3世を登用	1
イサウリア	皇帝 (3世、717-741)	2
		3
	印章資料	4
	印章資料	5
	印章資料	6
小アジア	コンスタンティノス5世の妃の兄弟	7
		8
	798にフランクへ派遣される	9
	宦官、オブシキオンのコメス兼任	10
	803に反乱を起こすが失敗	11
アルメニアコン	皇帝 (5世、813-820)、バルダネス=トゥルコスの一族?	12
パフラゴニア	皇后テオドラの一族	13
		14
オブシキオン	年代記作者テオファネスの一族	15
		16
	印章資料	17
	印章資料	18
小アジア		19
バルカン?	バシレイオス1世の側近	20
	印章資料	21
	印章資料	22
	印章資料	23
バルカン?	アンドレアス=クラテロスの兄弟?	24
カッパドキア?	印章資料、ニケフォロス=フォーカス?	25
カッパドキア	ニケフォロス=フォーカスの子	26
カッパドキア	レオン=フォーカスの弟	27
カッパドキア	レオン=フォーカスの子、皇帝 (2世、963-969)	28
カッパドキア	ニケフォロス2世の弟	29



## 1 はじめに

### (1) 環境

7～10世紀のビザンツ帝国の統治していた領域は大別して3つに分類できる。すなわち小アジア、バルカン半島沿岸部、そして地中海である。ビザンツ帝国の影響力は南イタリア、クリミア半島、アドリア海周辺部などにも及んでいた。本節ではこの地域の地形、気候などについて、本稿に関係のある事項を中心にごく簡潔にまとめていきたい。

#### ① 小アジア

本稿で扱う7世紀から10世紀のビザンツ帝国の中心的な領域は、小アジア半島であった。ただしこの時期ビザンツ帝国の支配下にあったのは現在のトルコ共和国の領域よりは狭く、黒海沿岸の都市トレビゾンドの東方からユーフラテス川の上流部、さらにタウロス山脈を通り、セレウキアの東方で地中海に達するラインより西方であった。小アジアは中央部と南部の険しい山脈・高原地帯と北西部・エーゲ海沿岸部の平野部に大別できる。また黒海沿岸部、及び地中海沿岸のアッタレイア周辺部にも小規模ながら平野部が広がっている。本稿で扱う時代の初期、すなわち7世紀には、小アジア中央部の山岳地帯はテマ・アナトリコンとアルメニアコンに組織されていた。また北西部・エーゲ海沿岸はテマ・オブシキオンとトラケシオンとなっていた。さらに地中海沿岸部には8世紀前半にテマ・キビュライオタイが設置されている。

小アジア中央部の高原は一部の地域を除いて標高1000[m]から2000[m]あり、東部では2000[m]を越える地域もある。一方地中海沿岸地域はタウロス山脈・アンチタウロス山脈から続く山岳地域である。リュキア地方では海岸部から一気に標高が上昇する地域も多い。

小アジア中央部はきわめて降水量が少ない。特に中央部のテマ・アナトリコンとカッパドキアに相当する地域の年間平均降水量は400[mm]に至らない。特に夏は激しく乾燥する。冬には降雪し、交通路も閉ざされることが多い。一方北部の黒海沿岸地域や南部の地中海沿岸部は降水量が多い。地中海沿岸部は中央部と同様夏は降水量が減り、冬に比較的雨が降り、一方黒海沿岸部は5月頃は比較的降雨が少ないものの、一年を通じて平均的に降雨がある。この両地域では年間平均降水量が1500[mm]を越える場所も多い。こうした気候条件の結果、小アジア中央部には可耕地は少ない。この地域では現在にいたるまで牧畜がきわめて盛んである。さらに人口密度もきわめて低い地域だった。しかし黒海・地中海沿岸部では農業が活発に行われている。

テマ・オブシキオン、ブーケラリオン、トラケシオンに相当する小アジア北西部・エーゲ海沿岸部は平野部が広がっている。この地域の大半は標高が1000[m]以下であり、500[m]以下の地域も多い。年間平均降水量は600[mm]から1000[mm]の地域がほとんどを占める。この地域には肥沃な平野が広がっている。さらにエーゲ海を通じた交易活動も活発に行われている。こうした恵まれた気候・地理条件に支えられて、この地域は小アジアでもっとも農業が盛んで、富裕な地域である。人口密度も高かった。無論この地域は古代以来数多くの都市が繁栄している。その中にはスミルナ（現代名イズミール）のように、現在までその繁栄を維持している都市も多い。この地域はビザンツ帝国の農業生産の中核地域であった。

#### ② バルカン半島沿岸部

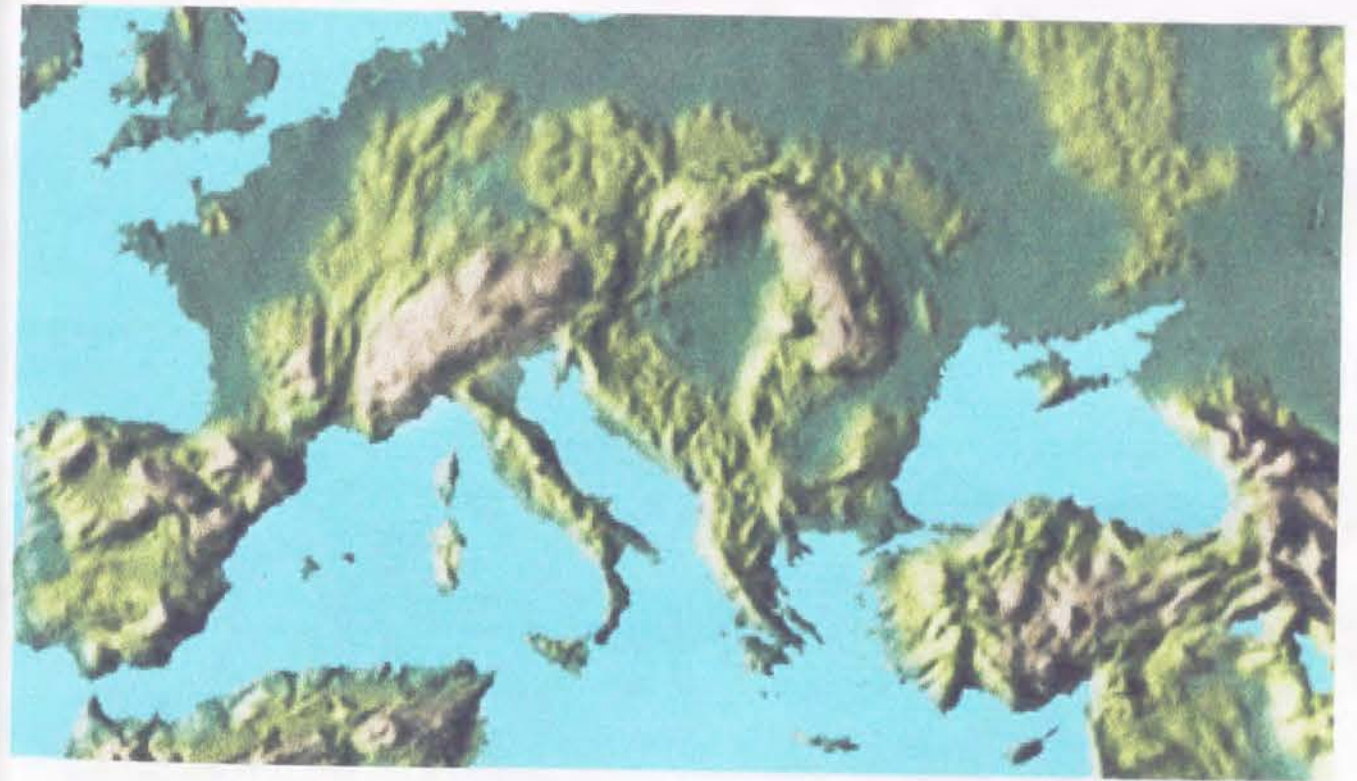
本稿で扱う時代、バルカン半島におけるビザンツ帝国の支配領域はきわめて限られていた。すなわち7世紀後半から8世紀後半、ビザンツ帝国の実効支配が及んでいたのは首都コンスタンティノープルの後背地であるトラキア、テッサロニケ周辺、アッティカ地方、ペロポネソス半島の



## 小アジアの地形



## 地中海北半の地形



東部、そしてデラッキオン周辺部に過ぎなかった。その後8世紀末に入るとコンスタンティノープルからテッサロニケに至るエーゲ海沿岸地域、テッサリア地方、ペロポネソス半島の全域、そしてエピロス地方の一部がビザンツ帝国支配に戻る。バルカン半島の北部、ブルガリア地方がビザンツ領に回復されるのは11世紀の初頭である。

9・10世紀にビザンツ領だった地域の年間平均降水量は、ペロポネソス半島の西部とトラキア地方の一部を除いて400[mm]から800[mm]程度である。またトラキアやテッサロニケ周辺地域は冬になるとかなり気温が下がり、降雪もある。夏になると降水量は減り、気温もかなり上がる<sup>1</sup>。

これらの地域のうち、コンスタンティノープルの後背地であるトラキア地方は広い平野が広がっている。この平野は北方のドナウ下流域、そしてウクライナ平原にまで続くものである。トラキア平原は可耕地は比較的少ないものの農業が行われていないわけではなく、特にビザンツ時代には農業もかなり盛んに行われていた。ビザンツ時代、この地域はテマ・トラキア、そして8世紀末にトラキアから分離したテマ・マケドニアに編入されていた。

しかしエーゲ海沿岸部ではバルカン山脈の支脈であるロドペ山地が海岸近くまで迫る。テッサロニケ周辺は平野が広がっているものの、テッサロニケから先は再び平野部は少なくなる。まとまった平野部のあるのはテッサリア平原とデラッキオン周辺部に過ぎない。

ペロポネソス半島は全体に山がちである。しかしビザンツ時代にはペロポネソスは養蚕・絹織物産業の中心地として繁栄した。また少なくとも9世紀までは森林資源にも恵まれていた。

9世紀以降、アドリア海沿岸のダルマティア地方も名目的にはビザンツ帝国の支配下にあったが、実効支配は及んでいなかった。しかしこの地域からは鉱山資源が帝国中心部に送られていた。

### ③ 地中海

地中海はユーラシア大陸とアフリカ大陸の間にある内海である。そして西方ではジブラルタル海峡によって大西洋と、また東方ではダーダネルス海峡によってマルマラ海・黒海とつながっている。さらにスエズ地峡を通じて比較的容易に紅海・インド洋に到達が可能である。

地中海周辺地域はいわゆる地中海性気候の地域であり、かなり均質的な風土を持っている。土地は全般的にあまり豊穡ではなく、オリーブなどの栽培には適している。夏の降水量は少ないものの冬季にはまとまった降水があり、そのため冬の地中海は航海には適さない。古代から中世にかけての資料にも、港湾都市で越冬を行っている旨の言及が多い<sup>2</sup>。

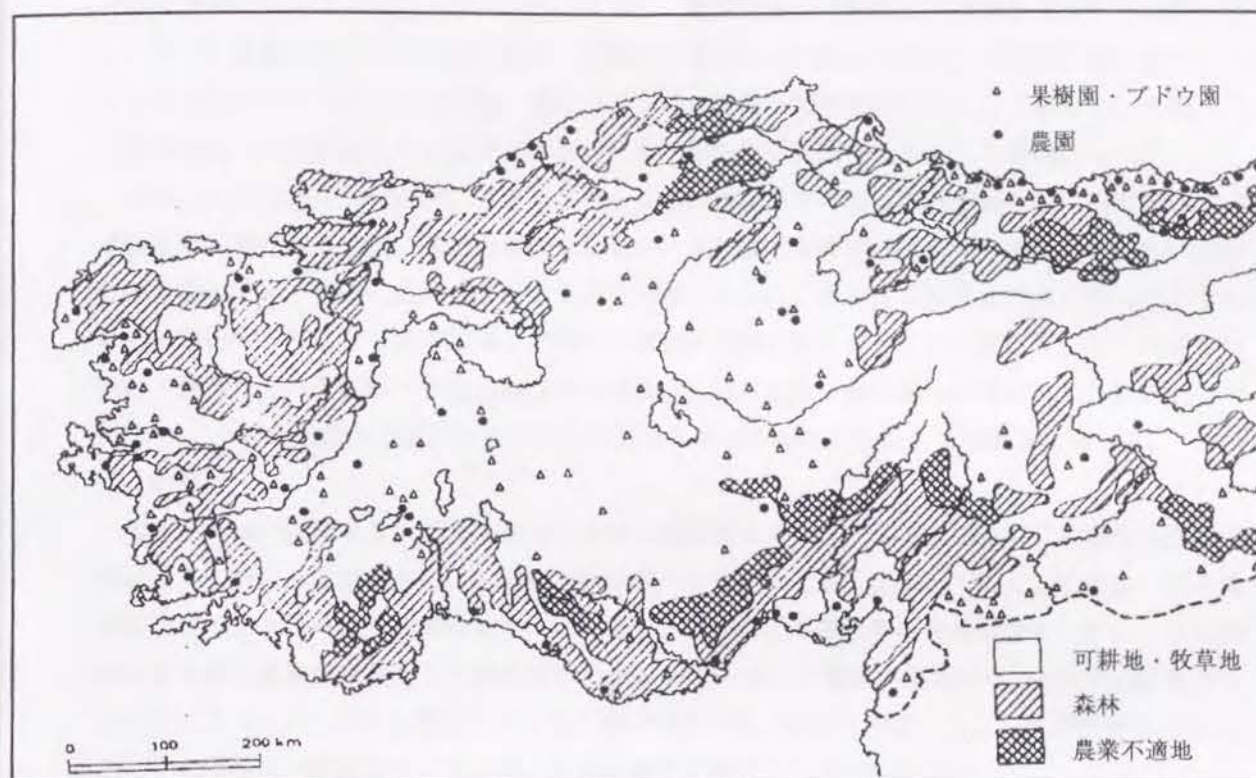
しかしこの時期までに地中海の北と南では大きな様相の差異が生じていた。それは森林資源の有無である。古くから文明が発展したシリア・エジプトでは木材の伐採が早くから大規模に進み、レバノン杉の大森林に覆われていたシリア地方も7世紀までには木材資源はほぼ枯渇した。エジプトも同様であった。それに対してヨーロッパ側ではまだ森林はかなりの規模で残存していた。ペロポネソスで森林資源の枯渇が問題になっていくのはようやく9世紀以降のことである。また小アジア半島南部には現在もお豊かな森林に覆われている地域がかなり残っている。

地形的にも地中海の北と南で様相をかなり異にしている。北側、すなわちヨーロッパ側はエー

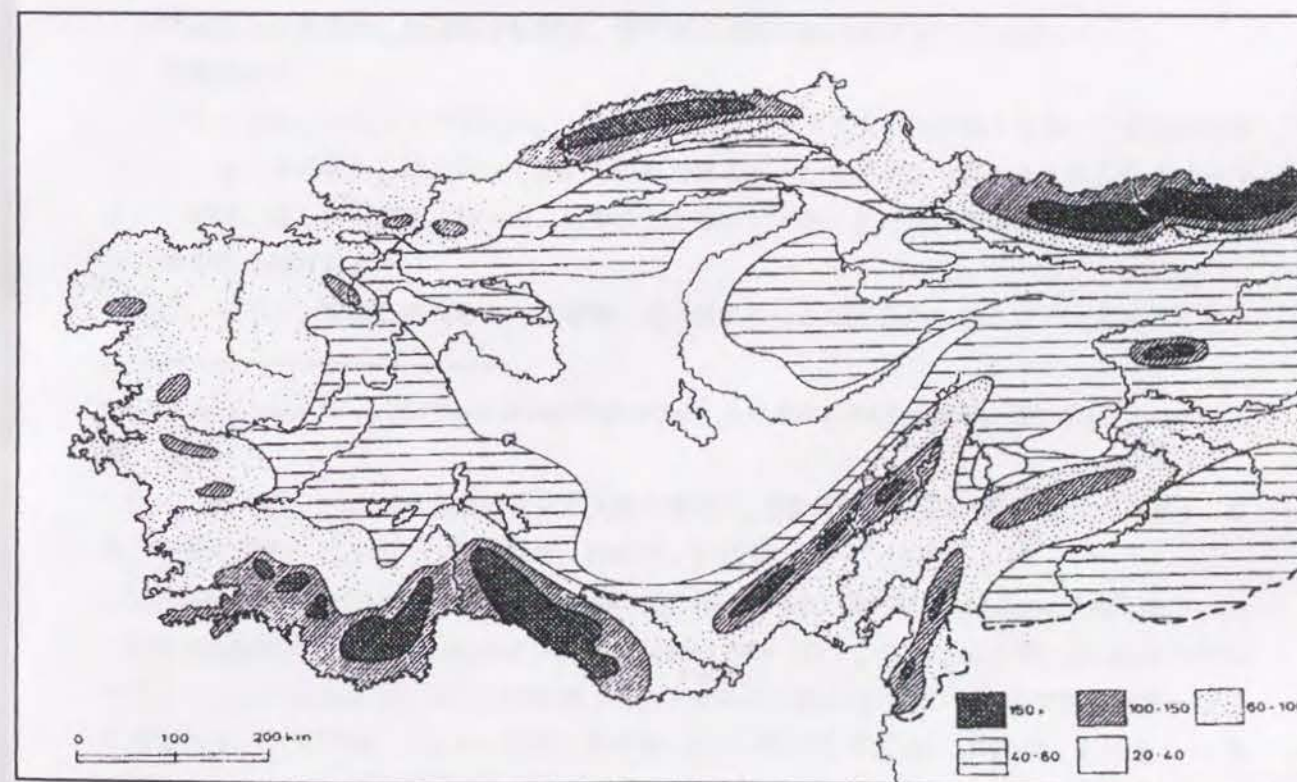
<sup>1</sup> 小アジアとバルカン半島の気候については、基本的にM.F.Hendy, *Studies in the Byzantine monetary economy c.300-1450*, Cambridge, 1985, pp.21-68. に拠った。

<sup>2</sup> cf. F.Meijer & O.van Nijf(eds.), *Trade, Transport and Society in the Ancient World: A Source Book*, London, 1992, pp.165-167; Vita Georgii Decapolitae, Paris, 1936, p.53.





小アジアの土地利用（現代）



降水量(cm)



ゲ海やダルマティア沿岸部に代表されるように、無数の島々や複雑な入り江が連続する地形が多い。こうした地域は天然の良港となり、海運の発達を大いに促してきた。また地中海の北半にはイタリア半島やペロポネソス半島、小アジア半島と密接な関連を持つシチリア島やクレタ島、キプロス島などの比較的大きな島々も点在し、地中海海運を発達させる大きな要因となった。

それに対して地中海の南岸、アフリカやシリアの沿岸部では全く状況が異なる。この地域では単調な海岸線が続き、港に適した場所も少ない。また地中海南岸には島々も少ない。これは沿岸航法に頼っていた当時であって海上交通を困難した上に、戦時にも大きな欠点となった。すなわち国家の中心部に至るまでに多くの港湾や諸島で防衛できたヨーロッパ側に対して、南岸では政治・経済などの中枢部が外敵の海上からの侵入に対して全く無防備な状態でさらされるからである<sup>1</sup>。こうした地理的な要因はビザンツ帝国とムスリムの戦いに大きな影響を及ぼした。

#### ④ 気候

地中海地域の気候は3世紀後半頃から次第に寒冷化していったようである。この寒冷気候は5世紀近くにわたって継続する。しかし700年頃から気候は次第に変化していく。古代シリアの隊商都市バルミユラ付近の発掘結果や、メソポタミアの古代の運河跡の発掘結果などから、この時期大きな気象変動が起きたことが確認できる<sup>2</sup>。ただしエーゲ海周辺地域では、726年に起きたテラ（サントリーニ）島の大爆発によって日照が阻害され、気候に影響を与えた可能性がある<sup>3</sup>。しかしこの影響は一時的なものであり、全体的傾向を妨げるには至らない。

そして8世紀後半以降、気候は急速に温暖化していく。また注目すべき点として、6世紀以降繰り返して資料で言及されるペストなどの伝染病の流行が、747/748年のペストの流行の記録を境として、ほとんど言及されなくなる<sup>4</sup>点にも注目したい。何世紀にもわたって地中海周辺諸地域を襲っていた伝染病の猛威が8世紀後半以降影をひそめるのである。無論これには気候の温暖化も何らかの関係があったと考えるのが自然であろう。

8世紀後半以降現出した温暖な気候は、その後9世紀、10世紀を通じて存続していく。

#### (2) 問題の所在

ビザンツ帝国には始まりがない。ビザンツ帝国はアウグストゥスに始まるローマ帝国の後身であり、ローマ帝国から絶え間なく続いた国家である。そしてビザンツの人々も自らを「ローマ人」と呼び、自らの国家を「ローマ人の帝国」と呼んでいた。ビザンツ帝国は中世におけるローマ帝国そのものであった。

だが、ビザンツ帝国を古代のローマ帝国と同一視することは許されない。ローマ帝国とビザン

<sup>1</sup> A.R.Lewis, *Naval Power and Trade in the Mediterranean A.D.500-1100*, Princeton, 1951 (以下、Lewis と略) ,p.71.

<sup>2</sup> 阪口 豊「過去1万3000年間の変化と人間の歴史」、吉野正敏・安田喜憲編『歴史と気候』（講座 文明と環境 第6巻）、朝倉書店、1995年、1-12頁。

<sup>3</sup> cf.E.Malamut, *Les Iles de l'Empire Byzantin VIII<sup>e</sup> -XII<sup>e</sup> siècles*, Paris, 1989 (以下、Malamut と略), pp.51-60.

<sup>4</sup> cf.W.Treadgold, *The Byzantine Revival 780-842*, Stanford, 1988 (以下、Treadgold と略) pp.43-45.747/48年のペストについてはさしあたって拙稿「ニケフォロス1世の対スクラヴィニア移住政策—9世紀初頭のビザンツ帝国、バルカン半島、地中海—」、「西洋史学」181、1996年、1-16頁、11頁参照。



ツ帝国との間には、領域や公用語といった外見以上に、大きく異なった点がいくつも看取できる。

だが共通する点もあった。最大の共通点は、双方とも皇帝の統治する国家であった、ということである。ビザンツ人たちが自らの国家を「ローマ人の帝国」と呼んでいたことからわかるように、皇帝によって統治される国家であることは当然の理だったのであり、同時に古代ローマ帝国から受け継いだ最大の政治的遺産だったのである。事実皇帝はビザンツ帝国の政治や文化のあらゆる局面に大きく関係する存在だった。

しかしこの「皇帝の統治する国家」というビザンツ帝国の最大の特徴は、どのような要素によって形成され、維持されていたのであろうか。ビザンツ帝国の最大の特徴が「皇帝によって統治されていること」であるということは、ビザンツ帝国が4世紀のコンスタンティヌス大帝の時代から起算しても1100年の長きにわたって存続した最大の要因が、皇帝がこの間常に帝国の頂点として君臨し、統治を続けられたからであることを意味している。すなわち皇帝が帝国の頂点としてその権力と権威を維持し続けたことが大きな意味を持っていたのである。

では、何ゆえ皇帝は権力と権威を維持することが可能になったのであろうか。理念的には、4世紀に国教化されたキリスト教と密接に結びついた形で成立した、キリスト教専制皇帝理念を忘れることはできない。「皇帝は地上における神の代理人である」という皇帝理念が、ビザンツ皇帝に強力な権威と支配の正当性を与えたことは否定できない。だが権威はそのような理念のみによって支えられていたわけではない。皇帝が実際に保持しており、実際に行使していた権力とも密接に関係して存在していたものであった。すなわち皇帝が保持する権力によって権威もいや増したのである。

ビザンツ帝国の皇帝が保持していた権力は、何に由来しているのか、という点が本稿での根源的な問題となる。従来皇帝の行使していた権力に関しては、いくつかの視点から考察が行われてきている。第一は先述した理念的な側面である。皇帝の権力の源泉もまた皇帝理念によっても支えられ、強化されていたことは間違いない。第二は、国制史研究からのアプローチである。神の地上の代理人であるとはいえ、皇帝は無制限な権力を保証されていたわけではなかった。皇帝の権力行使に際しては、それを制限する制度的規範が存在していた。こうした規範については今世紀初頭 J.B.ビュアリによって初めて明確に指摘された<sup>1</sup>。そしてこうした視点はその後ドイツの H.-G.ベックによって大きく展開される<sup>2</sup>。皇帝といえども束縛される規範があるという考えは、その後のビザンツ研究者にとっては自明の前提条件になったと言っても過言ではない。そしてベックの議論はその後 R.-J.リーリエらによって修正を加えられつつ<sup>3</sup>も、現在にいたるまで基本的研究として受け入れられてきている。そして第三点目として、制度史からの視点がある。西欧諸国とは違ってビザンツ帝国において皇帝権力が強靱さを保持した要因として、古代ローマ帝国から受け継いだ機能的な官僚制度があげられることは多い。そして官僚制度の機能や制度的展開に

<sup>1</sup> J.B.Bury, "The Constitution of the Later Roman Empire", in: *Selected Essays of J.B.Bury*, Cambridge, 1930, pp. 99-125. (初出は1910)

<sup>2</sup> H.-G.Beck, "Res Publica Romana Von Staatsdenken der Byzantiner", *Bayer. Akad. der Wiss. Kl. Sitzungsberichte*, 1970, S.7-41.; cf. 渡辺金一『コンスタンティノープル千年—革命劇場—』、岩波新書、1985年。

<sup>3</sup> R.-J.Lilie, *Byzanz: Kaiser und Reich*, Köln, 1994 (以下、Lilie と略)。

関しては、先述したビュアリの嚆矢として、現在まで N.イコノミデスや F.ヴィンケルマンらの研究者によって活発な研究が行われてきている<sup>1</sup>。

しかしながら、こうした従来の研究方法だけでは、ビザンツ帝国の皇帝権力の諸相の全てを汲み尽くすことはできない。皇帝理念の探求のみでは、権力の実際の行使がどのようにして実行されたのか、という点が看取しにくいことは明確であるが、国制史からのアプローチや制度史的側面からのアプローチについても同様のことがあてはまる。すなわちベックに代表される国制史研究は、ビザンツ帝国1100年の歴史の中で失われることのなかった普遍的要素の考察に主眼が置かれているように思われる。そうした要素の探求は必要な作業ではあるが、その反面ビザンツ帝国の各時代に特徴的な要素に関しては注意が向けられることが少なく、静態的な色彩が強くなっている。それゆえビザンツ帝国の各時代に独特の要素に対する関心は低く、皇帝が実際にどのような権力を行使していたのか、といった点に関して説得力のある議論を行うことは難しい。一方制度史的なアプローチも、ビザンツ帝国の官僚制度の展開やその要因については有効な議論が行えるものの、皇帝がそうした官僚制をどのようにコントロールし、帝国を主導していたのかについては、説明を行うことは難しい。

それゆえ皇帝が実際にどのような手法を利用して権力を行使し、また皇帝権力の保持に成功していたのかについては、別の角度からの議論が必要となる。そして本稿では、中期ビザンツ時代、9世紀から10世紀前半期におけるビザンツ帝国の皇帝権力の展開について、こうした視点から考察を行っていきたい。この時期はビザンツ帝国の官僚制度が完備し、もっとも効率的に機能した時代と考えられている。そして同時に、皇帝権力がきわめて強大化した時代とも捉えられており、皇帝がどのような行動をとっていたかの考察を行うためにはきわめて有効な時期であると言える。

本稿で特に注目していきたいのは、皇帝をめぐる人々との人間関係である。皇帝が最高権力者であるとはいえ、皇帝個人単独で政治を行うことはできない。官僚たちを始めとして、多くの人々と協力、あるいは対抗することによってさまざまな関係を持っていた。そしてそれらの関係の総合が皇帝の権力行使に大きく影響したのである。本稿では皇帝をめぐる人々と皇帝との関係に着目して、皇帝が実際にはどのような手段を用いて権力を行使し、帝国の政治に関与していたのかについて、分析を行っていく。

こうした研究を行っていく際に有効な材料を提供してくれるのが、近年のプロソポグラフィ研究の進展である。本稿で扱う時代はビザンツ帝国の歴史においてももっとも資料の乏しい時代である。しかしながら近年は印章資料などをも活用し、当時どのような人物がどのような活動を行っていたのかについて、断片的ながらも新たな情報が提供されるようになっている。R.ギュイヤンやヴィンケルマンらの研究がその代表である<sup>2</sup>。本稿ではこうしたプロソポグラフィ研究の

<sup>1</sup> J.B.Bury, *Imperial administrative system in the ninth century*, London, 1911. (以下、Bury(1911)と略) ; N.Oikonomides, *Les Listes de Préséance Byzantins des IX<sup>e</sup> et X<sup>e</sup> siècles*, Paris, 1972 (以下、Listes と略) ; F. Winkelman, *Byzantinischen Rang- und Ämterstruktur im 8. und 9. Jahrhundert*, Berlin, 1985.

<sup>2</sup> R.Guilland, *Titres et Fonctions de l'Empire Byzantin*, London, 1976.; F. Winkelman, *Quellenstudien zur herrschenden Klasse von Byzanz im 8. und 9. Jahrhundert*, Berlin, 1987. (以下、Winkelman と略) ; M.W. Herlong, *Kinship and Social Mobility in Byzantium 717-959* (Ph.D.thesis of the Catholic University in America), Washington D.C., 1986 (以下、Herlong と略) ; 家門別の研究としては、D.Polemis, *The Doukai: A*



成果をも積極的に活用しつつ、皇帝をめぐる人間関係とその結果招来される皇帝権力の展開について、考察を行ってきたい。

また、強力な皇帝権力を前提とした帝国統治は、皇帝権力の帝国全体への浸透なしに達成できるものではない。そのため皇帝権力の展開を考える上では、地方に対する皇帝権力の浸透がどのように行われたのか、という点についても無視することはできない。

効率的な伝達・輸送手段の存在しなかった前近代の国家においては、地理的要因は効率的な統治を大きく阻害した。特に中期ビザンツ帝国の場合、皇帝の統括する中央権力がいかにして地方へその権力を浸透させていくのかは、皇帝権力の展開にとって無視することができない。本稿では皇帝と地方との関係についても、注意を払い続ける。これは従来のアプローチ、特に国制史的な研究手法に特に欠如していた態度であるように思われる。

9世紀は通常、ビザンツ帝国の復活の時期とされる。すなわちビザンツ帝国がそれまでの守勢から攻勢へと転じるとともに、経済的にも文化的にも強力な地位を取り戻した時期とされている。実際には、別稿でも触れているように9世紀にはビザンツ帝国は地中海の制海権を喪失して、地中海周辺諸地域全体に影響を及ぼす国家から、地中海東部の地域国家へと転落する時期<sup>1</sup>でもあるから、9世紀を一概に「復活」の時期と断定することはできない。だが小アジア東部やバルカン半島などにおける陸軍の攻勢、スラヴ人への布教活動、そして文化の復興や経済活動の活性化などが起きたのは事実であるから、9世紀を大きな転換点と見なすこと自体は過ちではない。

そして、7世紀～8世紀にビザンツ帝国と対立し、ビザンツ帝国にとって大きな脅威であった東西の強国、東方のウマイヤ朝・アッバース朝と西方のフランク王国が9世紀以降急速に衰退し、分解過程に入ってしまったのに比べて、同時期のビザンツ帝国の展開は大きく様相を異にしている。特にムスリム勢力について言えることであるが、フランク王国、アッバース朝ともに西欧・ラテン圏やイスラム圏自体は縮小することなくこの時期拡大していたのに対して、それまで全体を統括していた国王・カリフの権力が大きく後退していることは注目し得る。9世紀・10世紀を通じて継続したこのような現象の違いが何に起因するのか。ビザンツ帝国の皇帝権力の展開についての考察がこうした問題についても何らかの示唆を与えることになるだろう。無論西欧・ビザンツ・ムスリムの三勢力の国王・皇帝権力の展開を比較・検討していくことまでは本稿では不可能であるが、最後に簡単な問題点の整理を行うことはできるだろう。そしてそれは中世初期の地中海周辺諸地域におけるビザンツ帝国の占める位置を明らかにしていくうえでも必要な作業となる。

*Contribution to Byzantine Prosopography*, London, 1968 (以下、Polemis と略) ; J.F. Vannier, *Familles Byzantines: Les Argyroi (IX<sup>e</sup>-XII<sup>e</sup> siècles)*, Paris, 1975 (以下、Vannier と略) ; J.-C. Cheynet, "Les Phocas", in: G. Dagron & H. Mihăescu (eds.), *Le Traité sur la guérilla de l'empereur Nicéphore Phocas*, Paris, 1986, pp. 289-315 (以下、Cheynet と略)。

<sup>1</sup> 前掲拙稿参照。

## 2 9世紀初頭までのビザンツ帝国と皇帝権力

### (1) はじめに

本稿で主な考察対象となるのは、9世紀から10世紀前半の皇帝権力と、それをめぐる諸集団の動向である。しかしながらその考察に当たっては、それ以前の時代の展開についても、ある程度の知識が必要となるだろう。特に本稿で扱うような問題の場合、7世紀と8世紀の動向についての概観は不可欠である。なぜなら7世紀にビザンツ帝国は大きな社会的変化を経験し、古代末期とは国家システムが大きく変化しているからである。

### (2) 7世紀の変化

7世紀から8世紀初頭はビザンツ帝国にとっては存亡の危機をかけた苦難の時期であった。7世紀初頭のササン朝ペルシアの侵入は辛うじて撃退に成功したものの、30年代から開始されたアラブ人の侵入には効果的な反撃を行うことができなかった。かくしてわずかな期間に帝国は全オリエントを喪失した。さらに8世紀初頭までにはカルタゴを中心とする北アフリカ西部、さらに上部メソポタミアからキリキアにいたる地域からも帝国の勢力は撤退せざるを得なくなった。

帝国の勢力の顕著な後退はオリエントやアフリカだけでは留まらなかった。首都コンスタンティノーブルのまさに後背地であるバルカン半島からも、帝国の勢力は後退した。すなわち6世紀後半から開始されたアヴァール人のバルカン半島侵入と、それに続行するスラヴ人の南下及びバルカン半島定住である。アヴァール人の攻勢は次第に沈静化していくもののスラヴ人の定住は続き、7世紀末までにはバルカン半島の大半は「スクラビニア（スラヴ人の土地、の意味）」と呼ばれ、ビザンツ帝国の実効支配の及ばない地域となっていた<sup>1</sup>。

こうした状況下、帝国の国家機構にも大きな変化が生じた。7世紀前半、ヘラクレイオス帝の時代まで維持されていた後期ローマ帝国の国家機構には、いくつかの特徴があった。第一は、軍事と行政の完全な分離である。そして第二は、皇帝権力の安定化のために各役職の権限が不分明となっていることである。例えば帝国の行政は、*magister officiorum* が管轄する一方で、*praefectus praetorio* が大きな力を持っていた。その結果、ある特定の人物に大きな権力が集中することが抑止されていた。このようなシステムでは、行政の遂行に非効率が生じる。しかしながら当時は行政の効率性よりも皇帝権力の安定のほうが優先されていたのである。またこうした形態は、同時に帝国に「宰相」的な役職が出現するのを防ぎ、皇帝を帝国の唯一の最終統括者たり続けることを保証するものであった<sup>2</sup>。

だが7世紀のアラブ人やスラヴ人の激しい攻撃によって、旧来の体制はこの全般的危機にうまく対応できないことが明らかになっていった。そして新たに、危機的状況に迅速に対応できる国家機構が姿を現してくるのである。

変化の第一としてあげられるべきは、テーマの発展である。テーマは古代末期に帝国辺境に展開していた野戦軍に起源をもつ。それが7世紀のアラブ人やスラヴ人の勢力拡大によって小アジアに相次いで撤退してきた。小アジアへの撤退と駐屯は、元来臨時的措置であったが、オリエント属

<sup>1</sup> スラヴ人の侵入に関しては J. V. A. Fine, Jr., *The Early Medieval Balkans: A critical survey from the Sixth to the late Twelfth century*, Ann Arbor, 1983 (以下、Fine と略), pp. 25-73.

<sup>2</sup> Lilie, S. 46-48.



州やバルカン半島の回復が不可能となった結果、駐屯は恒常化した<sup>1</sup>。こうして7世紀中盤には小アジアにアナトリコン、オブシキオン、アルメニアコン、トラケシオンの四つのテーマが成立した。

このような成立の状況からわかるように、テーマは元来純粋な軍事組織であって、属州行政とは直接関係がなかった。しかしながら恒常的に存続した戦争状態の結果、行政システムと軍との密接な連絡は不可避であり、次第に属州行政機構に対する軍の発言力が強まっていった。そして8世紀初頭までには、テーマの司令官であるストラテゴスが、属州行政に対しても事実上の監督権を獲得するようになるのである。地方行政機構としてのテーマは、こうして姿を現していく。ただし旧来からの属州行政システムは名目的には8世紀を通じて存続する<sup>2</sup>。

10 変化の第二としては、中央行政機構の効率化があげられる。6世紀まで多くの部局を統括し、多くの権能を持っていた *magister officiorum*, *praefectus praetorio* などの下部部局が独立した部局となっていた。それに伴ってこれらの役職の重要性は急激に低下していく。*praefectus praetorio* は7世紀末までにその権能のほとんどを失って消滅した。また *magister officiorum* は7世紀末まで名目的には高い地位を維持し、8世紀以降も皇帝の顧問官的位置を維持するものの、爵位（マギストロス）へと転化していく。

これらに代わったのが、古代末期まではこうした官職の監督下にあった部局とその長官であった。古代末期に皇帝領の管理を行っていた *sacrum cubiculum* の下部部局の長官だったサケラリオスの地位が上昇し、7世紀末には中央行政機構のリードする役職の一つになったことは、その例である。また *praefectus praetorio* の下僚であったロゴテテース・トゥー・ドゥロムー、ロゴテテース・トゥー・ゲニクー、ロゴテテース・トゥー・ストラティオーティクーが独立した部局の長官として発展していくのも7世紀である<sup>3</sup>。

20 このように7世紀には、9・10世紀の中央行政機構に言及される官職の多くが出現する。こうした変化によって、行政を実際に遂行していた部局が独立して皇帝に直接責任を負うようになっ

<sup>1</sup> テマの成立と発展については、R.-J. Lilie, *Die byzantinische Reaktion auf die Ausbreitung der Araber: Studien zur Strukturwandlung des byzantinischen Staates im 7. und 8. Jahrhundert*, München, 1976 (以下、*Reaktion* と略) ; id., "Thrakien" und "Thrakesion": Zur byzantinischen Provinzorganisation am Ende des 7. Jahrhunderts", *JÖB* 26(1977), S. 7-47.; id., "Die zweihundertjährige Reform: Zu den Anfängen der Themenorganisation im 7. und 8. Jahrhundert", *BS* 45(1984), S. 27-39.; J. F. Haldon, *Byzantium in the seventh century: The transformation of a Culture*, Cambridge, 1990 (以下、Haldon(1990)と略) , pp. 208-253.; id., "Military administration and bureaucracy: state demands and private interests", *BF* 20(1993), pp. 43-63.; id., "Military Service, Military Lands, and the Status of Soldiers: Current Problems and Interpretations", *DOP* 47(1993), pp. 1-67.; W. Treadgold, "The Military Lands and the Imperial Estates in the Middle Byzantine Empire", *Harvard Ukrainian Studies* 7(1983), pp. 619-631.; 中谷功治「テマの発展—軍制からみたビザンティオン帝国—」『古代文化』41, 1989年, 8-21頁; 同「テマからテマ制へ—テマ制度の成立時期をめぐって—」『待兼山論叢』第21号史学篇, 1987年, 29-51頁。

<sup>2</sup> Haldon(1990), pp. 201-207.; cf. N. Oikonomides, "Silk Trade and Production in Byzantium from the sixth to the ninth century: the Seals of Kommerkarioi", *DOP* 40(1986), pp. 31-53.

<sup>3</sup> Haldon(1990), pp. 183-200.; Bury(1911).

た。その一方で皇帝が唯一の最終監督者であるという原則は維持された。

だが7世紀の段階では、皇帝が強大な権力を行使していたとはいいがたかった。その最大の要因は地方に対する中央の影響力が確立していなかったことに由来する。リーリエが指摘しているように、テーマの発展によって地方にも力の中心が生まれ、中央権力はそれらに対して限定的なコントロールしか行えない状況にあったのである<sup>4</sup>。7世紀末からの約20年あまり、テーマと海軍によって次々と皇帝がすぐ替えられたことは、軍が大きな力を持っていたことと、中央がなお地方や軍隊をコントロールできていなかったことを如実に示している。

10 以上要するに、7世紀の危機的状況に対応してビザンツ帝国の国家システムは大きく変化した。すなわちテーマの発生と中央行政機構の効率化である。特に後者によって中央集権的皇帝専制国家への道が開かれた。しかしテーマの発生による地方での新たな力の中心の出現によって中央の地方に対するコントロールは阻害され、皇帝権力の強大化が妨げられていた。

帝国の政治支配層にも大きな変化が起きた。古代末期には中央には元老院貴族層が存在していた。また地方では都市参事会層たちが影響力を維持していた。しかし7世紀後半になると、元老院が大きな役割を果たすことはなくなる。また地方都市が中央の管轄下に入ったことによって都市参事会層は没落し、古代末期まで維持されていた帝国の「都市国家の連合体」的な性格<sup>5</sup>は失われる。そして中央に対して地方の利害を主張する役割をも失った。7世紀末から8世紀初頭にかけてテーマの反乱が相次ぐことも、こうした変化と無縁ではない。都市に代わってテーマが地方の利害を中央に主張するようになったのである<sup>6</sup>。

20 元老院貴族層や都市参事会層が没落していったのに代わって、新たな政治支配層が7世紀に出現した。皇帝は有能な人材を状況に応じて自らの裁量で積極的に登用した。7世紀後半以降、アルメニア人などのコーカサス系の人々が帝国の行政の中核である役職に大挙して進出してくることは、この変化を明確に現している<sup>7</sup>。また同様の現象は、テーマなどの軍幹部にも当てはまる。

30 要するに元老院貴族層の崩壊と元老院の政治的影響力消滅、さらに地方都市の自立性の消滅によって、帝国で政治的に大きな影響力を持つためには、中央行政機構で能力を発揮し要職に就するか、あるいは軍で勤務して幹部に上昇するかの道しかなくなっていた。これはすなわち自らの能力によって社会的に上昇する機会が以前より拡大したということである。社会的地位が低い人物でも、能力があつて皇帝ないしは上司の知遇を得られれば、高い地位を獲得することが可能だった。このことは同時に、古代末期までのような安定した政治支配層の出現を抑制することになる。古代末期までのように永続的な政治的影響力を持つ集団は生まれにくくなっていた。7世紀には、社会の流動性がそれ以前に比べて一気に強まったのである<sup>8</sup>。

<sup>4</sup> Lilie, S. 48-53.; cf. マックス・ウェーバー(世良晃志郎訳)『支配の社会学』I、創文社、1960年、229-230頁。

<sup>5</sup> cf. P. Brown, "A Dark-Age crisis: aspects of the Iconoclastic controversy", *EHR* 83(1973), pp. 1-34.

<sup>6</sup> W. Liebeschuetz, "The End of the ancient city", in: J. Rich(ed.), *The City in Late Antiquity*, London, 1992, pp. 1-49.; J. F. Haldon, op. cit., pp. 41-53.; Haldon(1990), pp. 395-402.

<sup>7</sup> Haldon(1990), pp. 160-172.

<sup>8</sup> ただしこのことは、古代末期の社会の流動性が低かったことを意味しているのではない。古代



要するに、7世紀の変化によって古代末期に中央と地方で大きな発言力を持っていた元老院貴族層と都市参事会層が没落した。それに代わって新たな人々が帝国の新たな政治支配層を形成した。しかしながらビザンツ社会は7世紀にはきわめて流動的になっており、彼らが何代にもわたって政治的影響力を保持することは困難になっていた。

### (3) 8世紀の展開

7世紀末から8世紀初頭の相次ぐ皇帝交替は、当時のビザンツ帝国の国家システムの持っていた弱点が露呈した結果引き起こされた。すなわち地方に対する中央のコントロールが効率的に行なわれていなかったことである。8世紀のコンスタンティノス5世は地方に対する中央のコントロールを強化し、中央集権体制の確立の努力を行った。しかしこうした努力は一方で、新たな問題をも引き起こすことにもなった。本節ではコンスタンティノス5世による中央集権化への方策と、そうした方策の影響について分析していきたい。

#### ① 中央権力の強化

はじめにコンスタンティノス5世の父のレオン3世の時代について概観しておく。レオン3世は、シリア北部のゲルマニケイアの出身である。彼は恐らく7世紀末のユスティニアノス2世の時代以降軍で勤務していた。そして皇帝アナスタシオス2世、あるいはテオドシオス3世によってアナトリコンのストラテゴスに任命される。さらに717年、彼はアルメニアコンのストラテゴスであったアルタバドスと結んでテオドシオス3世を失脚させ、帝位についた<sup>1</sup>。

レオン3世は即位すると盟友のアルタバドスをオブシキオンのコメス<sup>2</sup>に任命する。テマ・オブシキオンは古代末期の中央軍の後身であり、皇帝の近衛軍としての役割をも持っていた帝国最強の軍隊であった。また同時に7世紀末以来続いていた皇帝位の頻繁な交替に際して、海軍とともに反乱の中心となっていたテマであった<sup>3</sup>。オブシキオンのコメスにアルタバドスを任命したことは、レオン3世とアルタバドスとの個人的人間関係を利用して、オブシキオンをコントロールする方策だったことを示唆している<sup>4</sup>。またレオン3世自身、テマで勤務していた人間だったことも大きく影響していたに違いない。要するにレオン3世は自らが永年テマで構築していた人間関係を利用して、地方に対する発言力を保持したのである。

一方彼はもう一つの反乱の温床であった海軍に対しては厳しい措置を断行する。当時海軍は7

末期の社会は元首政期に比べると流動性が高かった。K.Hopkins, "Social Mobility in the Later Roman Empire: The Evidence of Ausonius", *Classical Quarterly (new series)* 11(1961), pp.239-249.; A.H.M. Jones, "The Caste System in the Later Roman Empire", *Eirene* 8(1970), pp.79-96.; A.Demandt, *Die Spätantike: Römische Geschichte von Diocletian bis Justinian 284-565 n. Chr.*, München, 1989, S.275.

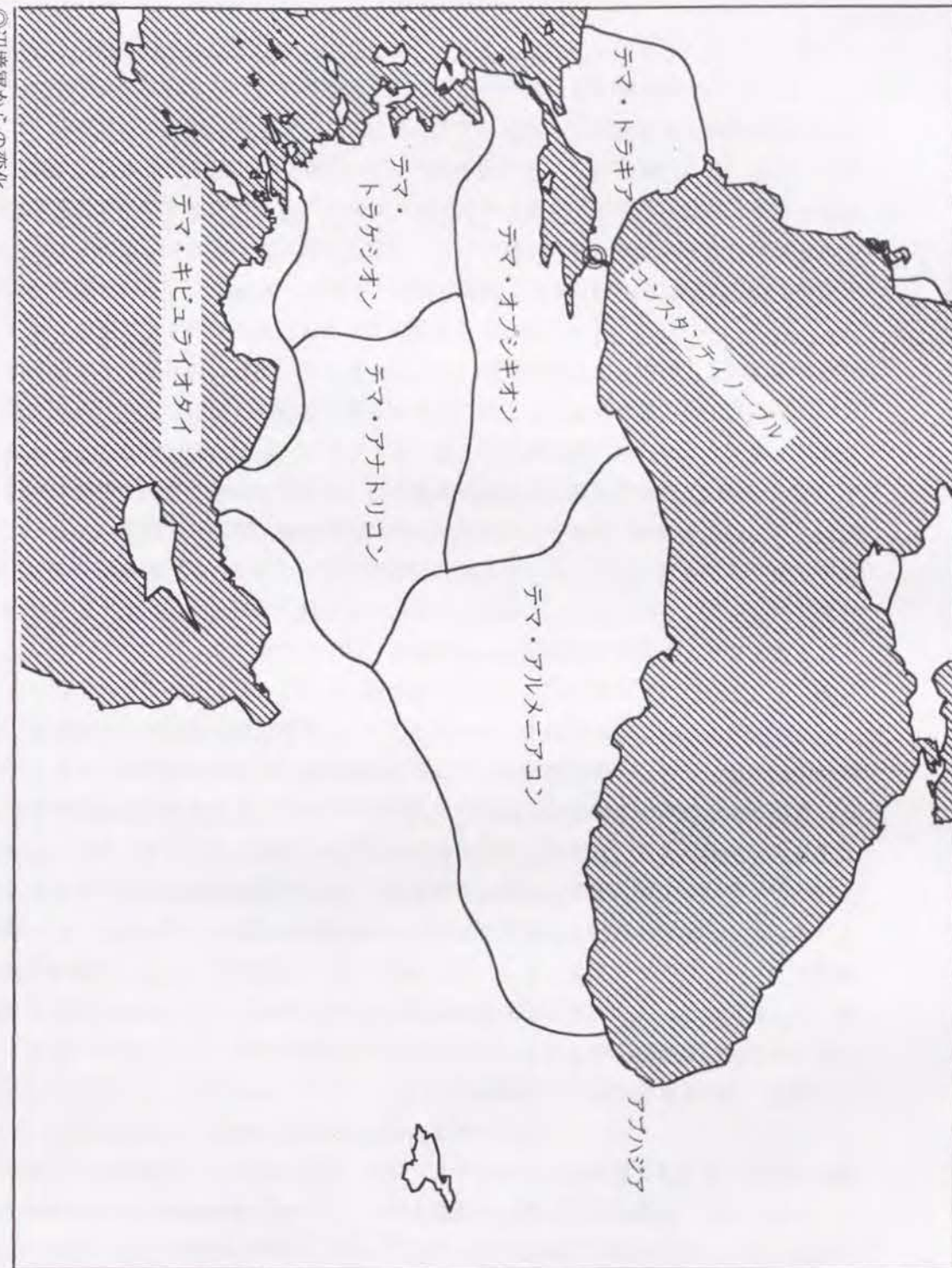
<sup>1</sup> レオン3世に関してはさしあたって、Herlong, pp.31-32.; 中谷功治「テマ反乱とビザンツ帝国—「テマ=システム」の展開—」『西洋史学』144(1987), pp.22-40.

<sup>2</sup> テマ・オブシキオンのみは長官の職名がストラテゴスではなくてコメスである。オブシキオンの中央軍としての古代末期の地位に由来。

<sup>3</sup> J.F.Haldon, *Byzantine Praetorians: An Administrative, Institutional and Social survey of the Opsikion and Tagmata, c.580-900*, Bonn, 1984 (以下、Praetoriansと略), pp.142-190.

<sup>4</sup> 中谷前掲論文参照。

◎ 辺境軍からの変化  
① 中央軍→オブシキオン  
② オリエンタル方面軍→アナトリコン  
③ アルメニア方面軍→アルメニアコン  
④ トラキア方面軍→トラケシオン  
◎ テマ・トラキアは7世紀末にオブシキオンから分離した。  
◎ テマ・キビュライオタイはレオン3世時代にカラビシアノイの一部が再編されたもの。





世紀中盤に設置された帝国初の常設海軍、カラビシアノイとして存在していた。カラビシアノイは帝国領の全海域を統括区域とし、アラブ艦隊に対抗するため強力な軍事力を持っていた。しかしその一方で、根拠がコンスタンティノーブルにあったこともあって政治にも大きな影響力を持っていたのである。レオン3世はこのカラビシアノイを解体する。この改革によって小アジア南部のアラブ艦隊と直接対峙する位置に新しくテマ・キピュライオタイが設置される。その一方帝国の中枢に近いエーゲ海・マルマラ海にはコルボス・エーゲ海・ドデカネソスの3つのドウルンガリオス管区が設置された<sup>1</sup>。これによって海軍が帝国の政治と大きく関わる事態は、中央艦隊が新設される9世紀中盤まで1世紀以上にわたって回避されることになる。

10 以上要するにレオン3世は自らが持っていたテマとの人間関係を活用して地方との関係を安定化させる一方、海軍に対しては厳しい措置を断行することによって安定政権を現出させたのである。しかしながらこうした統治方法は、レオン3世の個人的人間関係、特にレオン3世とアルタバスドスとの人間関係に大きく依存しており、国家機構の弱点を克服したものではなかった。それゆえレオン3世という個人の存在に帝国の安定の全てがかかっており、741年にレオン3世が没すると帝国の安定は崩壊する。レオン3世の息子のコンスタンティノス5世とアルタバスドスは1年以上にわたって対立し、最終的にはアルタバスドスが敗北してコンスタンティノス5世が帝位につく。レオン3世のとった方策のみでは、永続的な安定は獲得できなかったのである。

20 これに対してコンスタンティノス5世のとった方策は大別して以下の3つにわけられる。第一は父のレオン3世がとった方策の継続である。すなわちテマとの個人的結びつきの強化である。コンスタンティノス5世は毎年のように遠征軍を組織して自ら陣頭指揮をとり、大きな成果を挙げた。これは中谷功治氏の指摘するようにテマの将兵たちの絶大な信頼の獲得に大きく影響しただろう。またコンスタンティノス5世はミカエル＝ラカノドラコンなど、自らの信頼する將軍たちをテマのストラテゴスに送り込んでいる。これもテマと皇帝との間の個人的結びつきの強化に資したであろう。しかしテマと皇帝との関係がレオン3世の場合とは性格を異にしていることには注意しなければならない。すなわちレオン3世の場合、レオン3世とアルタバスドスの関係に最も明確に示されているように、皇帝とテマは一種の同盟関係にあった。いわば皇帝とテマは同格だったとも言う。しかしそれに対してコンスタンティノス5世の場合は、明らかにテマに対して優位に立っている。ミカエル＝ラカノドラコンとの関係にも明らかなように、皇帝とテマは同盟者だったのではなく、皇帝の指揮下に組み込まれていた<sup>2</sup>。

30 第二は、テマ・オブシキオンの分割である。テマ・オブシキオンは先述したように皇帝の近衛軍の役割をも果たしていた最強の軍であった。しかしながらこのことは同時に、オブシキオンの政治的影響力を増大化させる最大の要因ともなっていた。そのためコンスタンティノス5世はテマ・オブシキオンを分割してその軍事的脅威を減少させたのである。コンスタンティノス5世の時代、オブシキオンからテマ・ブーケラリオンが分離される。さらに正確にはテマではないもののオブティマトイが新設されてオブシキオンから分離した。その結果オブシキオンの軍事力は一

<sup>1</sup> Malamut, pp. 297-306.; H. Ahrweiler, *Byzance et la Mer: la marine de guerre, la politique et les institutions maritimes de Byzance aux VII<sup>e</sup>-XV<sup>e</sup> siècles*, Paris, 1966 (以下、la mer と略), pp. 31-44.

<sup>2</sup> 中谷前掲論文参照。



挙に低下して、これまでのように反乱を起こしても成功がほとんど見込めなくなった。これによって皇帝の地位は一層安定化し、地方に対する発言力の強化が進んだのである<sup>1</sup>。

第三の方策は、タグマタの新設である。先述したようにレオン3世の時代まで、テマ・オブシキオンが帝国の近衛軍の役割をも果たしていた。しかしながらこれは同時に、オブシキオンが反乱を起こした際にはそれに対抗する軍事力が存在しないということをも示している。すなわちレオン3世の時代までは、中央で皇帝に直属する軍事力は事実上存在しなかった。コンスタンティノス5世が設置したタグマタは、こうした問題への解答であった。コンスタンティノス5世はコンスタンティノープルにスコライとエクスクビトイという二つの部隊を設置する。これは皇帝直属の近衛軍を構成し、対外遠征などの際には皇帝が直接指揮をとる精鋭部隊としての役割を持っていた<sup>2</sup>。タグマタの設置によって、テマに対抗する中央独自の軍事力が出現し、テマの反乱が成功する可能性はさらに減った。

こうした方策の結果、地方に対する中央の優位が次第に確立していった。無論これだけでは方策としては不十分であり、実際8世紀後半以降はオブシキオンに代わって最大の軍事力を持つようになったテマ・アナトリコンを中心として何回かテマの反乱が引き起こされる。しかしながら8世紀後半以降、地方に対する中央の優位は次第に確立していく。また8世紀中盤以降ムスリムとの戦いが一段落し、帝国が恒常的な臨戦状態から解放されたことも大きく影響している。すなわちテマの重要性の相対的な低下が生じたのである。

## ② 高官の政治的影響力上昇

一方コンスタンティノス5世の時代には、帝国の政治支配層にも大きな変化の兆しを確認できるようになっている。すなわちそれまではあまり確認できなかった、家系的連続性が看取できるようになってきたことである。特にこの状況はコンスタンティノープルにいる中央行政機構の要職についている人々について明確に確認できる。例えば8世紀初頭にマギストロスかつコメス・トーン・エクスクビトーンを努めていたシシニオスの息子のゲオルギオスは、パトリキオスかつクアイストルに就任している。その息子のタラシオスはプロトアセクレティスを努め、さらにコンスタンティノープル総大主教を歴任した。その兄弟であるシシニオスも軍人として活躍している<sup>3</sup>。また8世紀後半にはメリッセノス家やモノマコス家など、以降のビザンツ史に大きな影響を与えるようになる家門が出現するようになる。メリッセノスやモノマコスといった家門名の出現は、家系的連続性が出現していることを示している<sup>4</sup>。

<sup>1</sup> Praetorians, pp. 191-227.

<sup>2</sup> Praetorians, pp. 228-235. スコライとエクスクビトイは元来古代末期に設置された宮廷内軍力であったが、特に7世紀以降コンスタンティノス5世の時代までは、儀仗兵としての意味しか持っていなかった。

<sup>3</sup> シシニオスの家系については、Herlong, pp. 88-97.

<sup>4</sup> メリッセノス家については、S. Stavrakas, *The Byzantine Provincial Elite: A study in social relationships during the Ninth and Tenth Centuries*, Ph.D. thesis of University of Chicago, 1978 (以下、Stav. と略), pp. 37-42. モノマコス家は11世紀の皇帝コンスタンティノス9世モノマコスの一族。初出は8世紀末のニケタス＝モノマコス。Vita Nicetae Patricii, in: D. Papachryssanthou, "Un Confesseur du second Iconoclisme: la

家系的連続性の出現の背景については、史料が乏しいせいもあって明確なことはわからない。ただしいくつか要因と考えられる点は論じられてきている。

第一が、経済的状況の好転である。8世紀後半にはムスリムとの戦いは国境付近での散発的なものに落ち着いた<sup>1</sup>。その結果小アジアでもっとも生産力の高い北西部にはようやく平穏な状況が復活した。無論このことは人口の増加を促進する。また先述したように8世紀後半以降は気候の温暖化なども進んだ。こうした要因が重なった結果、8世紀後半には大所領経営からの経済的利益の獲得が比較的魅力的になった。

大所領を獲得する際、中央の高官たちは明らかに優位な立場にあった。貨幣経済が後退していたこの時期、所領獲得に必要な経済力を獲得するためには、中央行政機構で要職について国家からの再分配を獲得するのが事実上唯一の方法であった。国家からの再分配としては、官位・爵位に対して支給されていた俸給のほか、皇帝からの贈与があげられる。また職務に付随する利益や、当時帝国の経済の中心であったコンスタンティノープルでの経済活動などもあげられる。また皇帝から特権として税の一部免除なども行われていたようである。こうした結果、中央の高官たちは莫大な財産を形成可能であった。そしてこの時期、土地経営の安定化によって、これらの経済力が土地に投下されたとしてもおかしくはない<sup>2</sup>。

8世紀に関しては史料が乏しいものの、9世紀や10世紀の高官たちの中には、小アジア北東部に大所領を保持していたと思われる例が多い。例えばコンスタンティノス7世の家庭教師であったテオドロスは、テマ・オブシキオンに所領を持っていた<sup>3</sup>。またミカエル3世時代のエバルコスであったコンスタンティノス＝カプノゲネスもテマ・オブシキオンの主要都市、ニコメディアの出身であって、恐らくその付近に所領を持っていたと考えられる<sup>4</sup>。

大所領経営の安定化によって、高官たちは自らの中央での役職などに左右されることの少ない経済的基盤を獲得することになった。これが家門的連続性を保証する大きな要因になったことは明らかである。

また教養の持つ意味が次第に重要性を帯びていたことも見逃せない。7世紀～8世紀はビザンツ文学の暗黒時代だった<sup>5</sup>。こうした状況に変化が生じてくるのもコンスタンティノス5世時代で

Vie du Patrice Nicetas (†836)", *TM* 3 (1968), pp. 309-351.

<sup>1</sup> 8世紀後半のムスリムとビザンツの戦いについてはさしあたって、Reaktion, S. 162-182.

<sup>2</sup> こうした点に関しては資料状況の乏しさから、未だ詳細な研究は行われていない。さしあたっては Winkelmann, S. 25-32. 参照。

<sup>3</sup> Theodosius Melitenus, *Chronographia*, München, 1859 (以下、ThM と略), p. 214, Leo Grammaticus, *Chronographia*, Bonn, 1842 (以下、LG と略), pp. 303-304, Georgius Continuatus A, *Chronographia*, Bonn, 1838 (以下、GCA と略), p. 890, Theophanes Continuatus, *Chronographia*, Bonn, 1838 (以下、ThC と略), p. 397, Georgius Continuatus B, *Chronographia*, Petrograd, 1922 (以下、GCB と略), pp. 47-48.

<sup>4</sup> ThC p. 208, 250.

<sup>5</sup> cf. W. Treadgold, "The Revival of Byzantine Learning and the Revival of the Byzantine State", *AHR* 84 (1979), pp. 1245-1266.; C. Mango, "The Availability of Books in the Byzantine Empire, A.D. 750-850", in: *Byzantine Books and Bookmen: A Dumbarton Oaks Colloquium*, Washington D.C., 1975, pp. 29-45.; F. R.



ある。コンスタンティノス5世時代には、続く8世紀末から9世紀初頭にかけて帝国の文化をリードしていく文人たちが教育を受けた時代であった。すなわち先述した総大主教タラシオス、タラシオスの後任の総大主教のニケフォロス、ストゥディオス修道院長のテオドロス、年代記作者のテオファネスなどである。教養を持った人々が社会で活躍する状況が次第に熟成されてきたのである。こうした教養を獲得するためには、コンスタンティノープルにいてある程度の経済力をもった高官たちが有利だったことは疑いない。先に挙げた文人たちもみな高官の一族だったり、あるいは自身が高官だった人物ばかりである<sup>1</sup>。

さらに高官の一族のほうで、皇帝の知遇を得て中央行政機構で昇進していくのに有利だった。地方組織の例であるが、J.F.ハルドンによると8世紀後半にはテマの将校になれるのは、それ以前から比較的高い社会的地位にあった人々に限られるようになり、下賤な階層の人間が将校になれる可能性はきわめて低かった<sup>2</sup>。例えば元来貧民であるヨアンニキオスという人物は、20年にわたって兵士を務めたにも関わらず、昇進することはなかった。反対にテマの将校の一族だった人物が急速に昇進していく例は、かなり多く看取できる<sup>3</sup>。同様のことは中央行政機構にも当てはまるのではないかと。すなわち古くからの高官の一族に生まれた人物のほうで、そうでない人に比べると社会的に昇進する機会に恵まれていた可能性が、8世紀中盤以降高まった可能性は高い。

こうした傾向の結果、中央行政機構内で安定的に政治的影響力を持つ家門が出現するが、これはそれまで中央行政機構を独占的に管轄していた皇帝の裁量権を脅かす場合が現れることを意味する。特にコンスタンティノス5世時代には中央集権化が大きく進展しただけに、中央行政機構の要職に就任している人々の政治的影響力は無視できなくなってきたのである。

そのことを示すのが766年の陰謀である。この陰謀に加担としてコンスタンティノス5世が処断した高官は『テオファネス年代記』によると、パトリキオスかつロゴテテース・トゥー・ドゥロムーのコンスタンティノス＝ポドバグロス、その兄弟でスパタリオスかつドメスティコス・トーン・エクスクビトーンだったストラテギオス、ロゴテテース・トゥー・ドゥロムーを経てシチリアのストラテギオスとなったアンティオコス、スパタリオスかつオブシキオンのコメスだったダウィド＝ベセル、プロトスパタリオスかつトラキアのストラテギオスのテオフィラクトス＝イコニアテス、パトリキオスのヒメリオスの一族であるスパタリオスのクリストフォロス、パトリキオスのバルダネスの子であるスパタリオスかつプロトストラトルだったコンスタンティノス、カンディダトスのテオフィラクトス＝マリナケス、そしてエバルコスのプロコピオスらが処罰された<sup>4</sup>。これは中央行政機構の要職を中心とする集団が皇帝権力の脅威になりつつあったことを意味している。また高官たちの一族が同様に高官になっていることが多かったことも、この史料か

Trombley, "The Council in Trullo (691-692): A study of the Canons to Paganism, Heresy, and the Invasions", *Comitatus* 9(1978), pp.1-18.

<sup>1</sup> ニケフォロスは総大主教に就任するまではプロトアセクレティスだった。テオファネスの父親は恐らくエーゲ海のドゥルンガリオス。テオドロスの父親のフォティノスは中央の財務官僚。

<sup>2</sup> Praetorians, pp.328-337.

<sup>3</sup> *Vita Sancti Ioannicii*, in: AASS Nov. II-1, 1894, pp.334-335, 337-338.

<sup>4</sup> Theophanes Confessor, *Chronographia*, Leipzig, 1883 (以下、Theoph.と略), p.438.

ら容易に確認できる。

以上要するに、コンスタンティノス5世の時代には中央集権化の進展や経済状況の変化などの要因の結果、中央行政機構の要職就任者たちの間に家系的連続性が看取できるようになる。そして彼らは次第に皇帝の裁量権をも脅かす存在へと発展していったのである。

ただし注意しておかねばならない点もある。彼らは皇帝権力から完全に独立した存在だったのではない。彼らの政治的影響力の基盤は皇帝から授与された官位や爵位であり、経済的基盤も国家からの年俵や皇帝からの贈与に大きく依存していた。彼らが皇帝を頂点とする中央行政機構に依存しているかぎり、皇帝権力から完全に独立することはできなかった。むしろ皇帝権力が安定しているならば、皇帝権力に大きく依存しているほうが彼らにとっても有利だったのである。

#### 10 (4) 皇帝権力の後退 ～775-820年～

775年にコンスタンティノス5世が没して以降の約半世紀の間、ビザンツ帝国の政局は大きな混乱を繰り返すことになった。その最大の要因は皇帝位をめぐる争いの結果、皇帝権力が動揺し、その結果中央政権の弱体化が顕在化したからといえる。この時期、中央においてはクーデターや陰謀が繰り返される一方、地方においては軍隊による反乱が続発したのである。

本節ではエイレーネーからニケフォロス1世、そしてレオン5世にいたる時代における中央政権の動向について分析を進めていく。

##### ① コンスタンティノス6世とエイレーネー

775年にコンスタンティノス5世が没した後、ビザンツ帝国の皇帝は目まぐるしく交替した。775-820年の皇帝の平均在位年数は6年あまりに過ぎない。目まぐるしい帝位の交替は、皇帝の指導力を大きく交替させる結果となった。この時期皇帝に対する陰謀や反乱が頻発したのも、無理からぬことだった。

特にこの時期の前半、コンスタンティノス6世とエイレーネーの時代に頻発したのがテマの反乱であった。その要因は前章での考察から容易に説明できる。すなわちコンスタンティノス5世の時代、皇帝は自らテマの軍を率いて遠征を行い、大きな戦果を上げていた。皇帝個人とテマの将兵との結びつきが、皇帝に対するテマ全体の忠誠と支持につながっていたのである。しかしながらコンスタンティノス6世とエイレーネーはこうした関係を構築することができなかった。コンスタンティノス6世は、治世前半は幼児で軍を率いることは不可能であった。さらに治世後半は何度か遠征を試みているものの祖父のコンスタンティノス5世のような軍事的才能に欠け、大きな成果をほとんどあげることができなかった。これは明らかに将兵たちの忠誠の獲得にはマイナスに働いた。さらにコンスタンティノス6世は皇帝とテマの将兵との結びつきの重要性を理解してはいなかった。彼は790年にテマ・アルメニアコンの支持を得てエイレーネーを摂政の座から退け、親政を開始した<sup>1</sup>。だが彼は792年には、そのテマ・アルメニアコンに兵を送っている<sup>2</sup>。治世末期、コンスタンティノス6世はテマの支持をほとんど失っていた。

テマの支持を獲得できない状況は、エイレーネーも同様であった。なぜならエイレーネーは女性であって、自ら軍を率いることは不可能であった。エイレーネーが女帝として帝国を統治して

<sup>1</sup> Theoph. pp.465-467.

<sup>2</sup> Theoph. pp.468-469.



いた時代、彼女の側近であった二人の宦官、スタウラキオスとアエティオスが激しく対立した。そして中央での政争に敗れたスタウラキオスがカッパドキアで反乱を起こしている<sup>1</sup>。これは地方のテーマがエイレーネーを強固に支持をしていたのではないことを示唆している。

こうした状況下、特にエイレーネーは政権維持のための方策をいくつか実行に移している。第一に、タグマタの強化・再編である。コンスタンティノス5世が設置したスコライとエクスクビトイの二つのテーマは、皇帝の強力な支持母体となっていた。しかしながらコンスタンティノス5世が没して以降は、必ずしも皇帝の以降に忠実にしがつていたわけではない。786年にエイレーネーがコンスタンティノープルでイコン崇拜復活のための公会議を開催しようとした際、それに反対して実力で開催を阻止したのはタグマタであった<sup>2</sup>。タグマタはコンスタンティノス5世のイコノクラスムの路線を支持しており、特に自ら軍を率いることもないエイレーネーに対しては批判的であったのである。エイレーネーはそれに対してスコライ・エクスクビトイの将兵の大幅な組み替えで応じた<sup>3</sup>。さらにエイレーネーはタグマタの第三の部隊としてビグラ（アリトゥモイ）を設置した。この方策は、中央の皇帝に直属する独自の軍事力の強化、というコンスタンティノス5世の政策を踏襲したものと理解していいだろう<sup>4</sup>。この方策は続くニケフォロス1世時代のヒカナトイの新設とフォイデラトイのタグマタ化<sup>5</sup>、さらに恐らくテオフィロス時代と考えられるヘタイレイアの設置へとつながっていく<sup>6</sup>。

第二の方策は花嫁コンクールである。788年にエイレーネーはコンスタンティノス6世の皇后を選ぶため、帝国各地から3人の候補者を集め、宮廷でコンクールを行った。その結果選ばれたのが当時テーマ・アルメニアコンの一部だったパフラゴニア地方の大富豪であるフィラレトスの孫、アムニアのマリアである<sup>7</sup>。マリアとコンスタンティノス6世の結婚に伴って、宮廷にマリアの一族が入ってきて、高い地位を得るようになっていく。マリアの叔父のヨハネスや、マリアの姉妹のエウアンティアなどがその例である。注目すべき点は、このマリア・フィラレトスの家系は恐らく7・8世紀を通じてパフラゴニアの大富豪であったこと<sup>8</sup>、そしてにもかかわらずこのコンク

<sup>1</sup> Theoph.pp.474-475.;Treadgold,pp.115-117.

<sup>2</sup> Theoph.pp.461-462.

<sup>3</sup> Theoph.p.462.

<sup>4</sup> Praetorians,pp.236-245.

<sup>5</sup> Praetorians,pp.245-256.

<sup>6</sup> ヘタイレイアはタグマタが長期遠征を主目的とする機動部隊へと変化しつつあった9世紀前半に、タグマタに代わる宮廷護衛部隊として設置された。タグマタとは違ってヘタイレイアは外国人を中心として組成されている。文献の初出はミカエル3世時代、テオクティストスの暗殺時である。第3章・第4章参照。

<sup>7</sup> Theoph.p.463.;*Vita Sancti Philareti*,in:M.-H.Fourny & M.Leroy(eds.),*"La Vie de S.Philarete"*,*Byzantion* 9 (1934),pp.85-170.

<sup>8</sup> フィラレトスの父親のゲオルギオス＝フェロニユモスもまた富裕な人物だったようである。フィラレトスの年齢を考えると、ゲオルギオス＝フェロニユモスは7世紀後半～8世紀前半の人物となる。*Vita Sancti Philareti*,p.113.

ールまで帝国の政治に何の関わりも持っていなかったことである。ヴィンケルマンが示唆しているように、7・8世紀には地方で政治に何の関わりを持たずにいた大土地所有者がかなりいたと考えられる<sup>1</sup>。それゆえエイレーネーが企画したこのコンクールは、こうした地方の潜在的な有力者を自らの血縁とすることによって、地方に対する影響力の強化を促進するとともに、自らの中央での支持者をも強化する目的があったものと思われる。

花嫁コンクールがこの後9世紀に盛んに行われたのは、こうした目的が当時の皇帝たちの意図にかなっていたからだろう。すなわち9世紀の皇帝たちにとって、地方の有力者を取り込んで自らの支持者にするとともに、地方とのつながりを獲得することは、皇帝権力の強化にとってきわめて有効な方策だったと理解できる。そしてそれが10世紀には行われなくなったということは、10世紀に皇帝権力の変質や中央と地方との関係が変化したということを示唆している<sup>2</sup>。こうしたことは次章以下の分析からも明らかになるだろう。

また花嫁コンクールで選ばれたのかは不明であるが、エイレーネー自身も地方の有力者の一族であった<sup>3</sup>。そしてエイレーネー時代にはエイレーネーの一族のセラントペコス家が高位を宮廷で維持している<sup>4</sup>。花嫁コンクールはこうした自らの経験に基づいて企画されたものであるとも考えられる。

だがこうした方策にもかかわらず、エイレーネーは政権の安定化には失敗した。その最大の要因は地方対策ではなく、中央政権内での対立にあった。すなわちエイレーネーの最大の側近である二人の宦官、先述したスタウラキオスとアエティオスの対立であった。後継者のいないエイレーネーの次の皇帝をめぐる、スタウラキオスとアエティオスは激しく対立する。そしてついにスタウラキオスが敗死する。この事件は大きな影響をエイレーネー政権に与えることになった。すなわちスタウラキオスがいなくなったことによる中央行政機構の動揺である。スタウラキオスはエイレーネーがコンスタンティノス6世の摂政だった時代から、永年にわたってロゴテテース・トゥー・ドゥロムを努めた有能な政治家であった。しかし彼がいなくなったことによって、エイレーネーと中央行政機構との関係は円滑さを欠くようになった。さらにアエティオスの勝利

<sup>1</sup> Winkelmann,S.29-32.

<sup>2</sup> 花嫁コンクールについては、それが実際に行なわれたのかをめぐって現在まで論争が続けられている。cf.K.Fiederius(ed.),*Byzantium:Identity,Image,Influence(XIX International Congress of Byzantine Studies)*,Copenhagen,1996,pp.506-507.確かに花嫁選びが厳密な意味での「コンクール」として行なわれたとは考えにくく、開催前から勝利者が決定していた可能性はきわめて高い。しかし宮廷に何人かの女性を集めてその中から一人を選ぶという形式（実際には事前に決定していたにせよ）をとっていたことは認めてもよいのではないか。

<sup>3</sup> エイレーネーはアテナイ出身。Theoph.p.444.

<sup>4</sup> パトリキオスで恐らくテーマ・ヘラスのストラテゴスであったコンスタンティノス＝セラントペコスとその息子でスパタリオスのテオフィラクトス＝セラントペコスが798/799年にテーマ・ヘラスで起きたスラヴ人アカメロスの反乱を鎮圧している。テオフィラクトスはエイレーネーの甥とされている。Theoph.p.474.そのほかエイレーネーの従姉妹が776/777年にコンスタンティノープルに逃亡してきたブルガリア王テレリグの妻となっている。Theoph.p.451.



によって、アエティオスが絶大な権力を握るようになったことによって、政権内におけるエイレーネーの指導力は着実に後退した。さらに中央でのアエティオスに対する反感も高まり、エイレーネーの政治力後退に拍車をかけることになった<sup>1</sup>。

こうした状況下、突如として起きたのが802年10月31日未明の宮廷クーデターであり、このクーデターによってエイレーネーは帝位を追われるのである。

## ② ニケフォロス1世・ミカエル1世ランガベと高官

802年10月、コンスタンティノープルでクーデターが起きた。このクーデターの結果即位したのがニケフォロス1世である。ニケフォロス1世はそれまでエイレーネーの下でロゴテテース・トゥー・ゲニクーを努めていた。すなわちエイレーネー政権下の中央行政機構の頂点にあった人々の一人である。

このクーデターへのほかの参加者も、同様に中央政権の最高幹部である。すなわちクアイストルのテオクティストス、サケラリオスのレオン、ドメスティコス・トーン・スコロンのニケタス＝トリフュリオス、その兄弟でかつてトラキアのストラテゴスだったシシニオス＝トリフュリオス、レオン4世時代にオブシキオンのコメスを努めていたグレゴリオス＝ムスラキオス、エイレーネー時代初期にドメスティコス・トーン・スコロンを努めていたペトロス、そしてエイレーネーの一族のレオン＝セランタベコスである。彼らは全員パトリキオスの爵位を持っていた。要するにエイレーネー政権末期の中央政権を実際に運営していた人々の多くがエイレーネーに対して反逆したのである。さらにタグマタの将校も何人が加わっていた。『テオファネス年代記』によると、彼らは大宮殿のカルケ門で、アエティオスが兄弟のレオンを皇帝位に就けるのを防ぐためにエイレーネーがニケフォロスを皇帝にしようと考えている、と嘘をつき、宮殿内に入ることに成功した。そしてエイレーネーのいたエレウテリオス宮殿を包囲して、エイレーネーを捕らえたのである<sup>2</sup>。

こうした経過から、以下の点が確認できる。第一に、このクーデターは中央の高官たちによって綿密に準備されたものだった。先述したようにエイレーネーは政権末期にはその指導力を大きく後退させていた。特にスタウラキオスが失脚して以降、中央政権内においてもエイレーネーやアエティオスに対する反感は強まっていただろう。ニケフォロス1世たちはそれを巧みに利用して政権を獲得したのである。

第二に、中央の高官が結束してクーデターを起こしていることにも注意しなければならない。これまで論じてきているように、8世紀後半以降中央行政機構の頂点にたっている高官たちの政治的影響力は次第に上昇していた。そしてついに802年、結束してクーデターを起こし、それを成功させることに成功するのである。これは高官たちが無視できない政治力を獲得したことを如実に示している。

ただし高官たちの結束も、強固なものではなかった。808年のクアイストルのアルサベルの陰

<sup>1</sup> cf. Treadgold, pp. 115-119.

<sup>2</sup> Theoph. pp. 476-477. cf. 中谷功治「八世紀後半のビザンツ帝国—エイレーネー政権の性格をめぐって—」『西洋史学』174、1994年、36-53頁、51-53頁。

謀<sup>1</sup>に代表されるように、ニケフォロス1世に対する高官たちの陰謀もおきている。高官たちの結束は一時的なものであり、状況に応じての変化もまた大きかった。

第三に、タグマタの参加も無視できない。タグマタの将校やドメスティコス・トーン・スコロン、及びその経験者が陰謀に参加しているということは、エイレーネーの努力にもかかわらず、彼女がタグマタの掌握に最終的に失敗したことを意味している。同時にタグマタが、皇帝位をも左右できる有力なコンスタンティノープルの軍勢力となっていたことをも明らかにする。タグマタもまた、新たな政治勢力として大きな意味を持つようになったのである。

以上要するに802年のクーデターからは、コンスタンティノープルの高官たちとタグマタという、ビザンツ帝国の政局を大きく左右するようになる新たな政治的勢力の成長が明確に看取できる。8世紀中盤、コンスタンティノス5世の時代に本格化した中央集権化傾向は、このような新しい政治勢力の出現をももたらしたのである。9世紀に入って中央集権化がさらに進むにつれ、こうした新しい勢力がさらに大きな意味を持つようになることは、当然の帰結であった。ニケフォロス1世は税制の改革など、テオファネスによって「十の悪政」と総括されるさまざまな経済政策を立案、実行に移している<sup>2</sup>。これが元来経済官僚であったニケフォロス1世の手腕が発揮された結果であることは、以前から指摘されてきている。しかし同時にこれらはまた、中央政権で行政を実際に担当・運営していた高官たちの要求でもあったろう。

ただしニケフォロス1世時代にタグマタの将校たちによる陰謀が頻発したこと<sup>3</sup>などから、ニケフォロス1世がタグマタを完全に掌握しきっていたかには疑問も残る。また先述したアルサベルの陰謀からもわかるように、自らの足元ともいえる高官たちをも完全にまとめきっていたかも疑わしい。しかしニケフォロス1世の政権が、8世紀中盤以降徐々に発展してきた勢力によって支えられていた政権であることを否定することはできない。不完全ではあるものの、ニケフォロス1世は新たな勢力の結集に成功したのである。

811年7月にニケフォロス1世はブルガリアに歴史的惨敗を喫し、戦死した。スタウラキオスは単独皇帝として即位したものの、彼もまた対ブルガリア戦に父のニケフォロス1世とともに参加しており、瀕死の重傷を負っていた。このブルガリアでの戦いには802年のクーデターにも参加したシシニオス＝トリフュリオスなど多くの高官たちが参加し、そして戦死した。スタウラキオスとともにアドリアノーブルまで帰還できた有力者はドメスティコス・トーン・スコロンのステファノス、マギストロスのテオクティストス、そしてニケフォロス1世の娘婿でクロバラテスだったミカエル＝ランガベだけであった<sup>4</sup>。スタウラキオスが瀕死の重傷を負っていたため、ミカエル＝ランガベを皇帝にしようとする動きが生まれる。マギストロスのテオクティストスがミカエル＝ランガベ支持者の筆頭であった。しかしながらドメスティコス・トーン・スコロンの

<sup>1</sup> Theoph. pp. 483-484.

<sup>2</sup> Theoph. pp. 486-487. ニケフォロス1世はその他にも生活必需品に対する国家統制の強化などを行っている。Theoph. pp. 488-490.

<sup>3</sup> 例えば810年10月など。Theoph. p. 488.

<sup>4</sup> Theoph. 490-492.: *Chronicle of 811*, in: I. Dujcev, "La Chronique Byzantine de l'an 811", *TM* 1 (1965), pp. 205-254.



ステファノスがスタウラキオスの即位を主張したため、テオクティストスが譲歩したのである。

しかし死の迫ったスタウラキオスが、皇后のテオファノを後継者にしようと考えたため、状況は一変する。ステファノスとテオクティストス、そして総大主教のニケフォロスは一致してミカエル＝ランガベを皇帝に推挙してしまう。ミカエル＝ランガベに対する歓呼の声を聞いたスタウラキオスは抵抗をあきらめ、自ら修道士となった<sup>1</sup>。

こうした経過から、この時期の帝位継承を左右していたのが中央政権内の諸勢力であったことが明らかになる。すなわちスタウラキオスの帝位継承を決定したのはドメスティコス・トーン・スコロンのステファノスと、その背後にあるタグマタの軍事力だった。さらにスタウラキオスが帝位を追われ、ミカエル1世ランガベが即位した背景には、タグマタとテオクティストスら中央行政機構の頂点にたっていた人々の意向があった。付言するならば総大主教のニケフォロスも806年までプロトアセクレティスを努めていた人物であり、恐らく高官たちと深い利害関係を持っていた。要するにスタウラキオスとミカエル1世ランガベの帝位継承を決定したのも高官とタグマタという、二大新興勢力だったのである。そしてスタウラキオスの意図が無視されたことは、こうした勢力の政治力が皇帝の裁量権をも脅かすまでに成長していたことを現わしている。

### ③ レオン5世の政権

レオン5世は、パトリキオスのバルダスという人物の息子である<sup>2</sup>。そして恐らくエイレーネー時代にドメスティコス・トーン・スコロンなどを歴任した<sup>3</sup>バルダネス＝トゥルコスの一族である<sup>4</sup>。すなわち彼は有力な軍人の家門の出身だったと考えられる。

803年にバルダネス＝トゥルコスがニケフォロス1世に対して反乱を起こした<sup>5</sup>際、レオンは後に皇帝ミカエル2世となるアモリオン出身のミカエルらとともに、バルダネス＝トゥルコスの幕僚として反乱に参加していた<sup>6</sup>。このバルダネス＝トゥルコスの反乱の背景については不明な点が

<sup>1</sup> Theoph.pp.492-493.

<sup>2</sup> Joseph Genesios, *Regum Libri Quattuor*, Berlin, 1978 (以下、Gen.と略), p.26.

<sup>3</sup> 794/95年にドメスティコス・トーン・スコロン。Theoph.p.470.799年にトラケシオンのストラテゴス。Theoph.p.474.そして803年にはアナトリコンのストラテゴス。Theoph.p.479.『続テオファネス年代記』は「東方の5つのテマのモノストラテゴス」としており、『ゲネシオス年代記』の記述もそれに近い。ThC p.6, Gen.p.6.

<sup>4</sup> 『ヨアンニキオス伝』によると、レオン5世の甥に当たる元老院議員のブリュエネスは、「トゥルコスの息子」であるという。このトゥルコスがバルダネス＝トゥルコスと同一人物の可能性はある。ここから、レオン5世とバルダネス＝トゥルコスが兄弟だった可能性が生まれる。Vita Sancti Ioannicii, pp.347, 392-393. このブリュエネスは、ミカエル2世～テオフィロス時代に各地のストラテゴスを歴任したテオフィロス＝ブリュエンニオスと同一人物と考えられる。Constantinus Porphyrogenitus, *De Administrando Imperio*, Washington D.C., 1967 (以下、DAIと略), p.232.; Theodorus Studites, *Epistulae*, Berlin, 1991, 509. なおトレッドゴールドは、レオン5世の最初の妻がバルダネス＝トゥルコスの娘であったと考えているが、誤りである。Treadgold, p.196.

<sup>5</sup> Theoph.pp.479-480.

<sup>6</sup> ThC, pp.6-8, Gen., pp.6-8.

多い。しかしながらバルダネス＝トゥルコスがニケフォロス1世によって小アジアの多くのテマのモノストラテゴスに任命されたこと、反乱の発端がテマの兵たちによるバルダネス＝トゥルコスの皇帝としての歓呼であったこと、さらにバルダネス＝トゥルコス自身にニケフォロス1世と本気で戦おうという意欲が希薄であること<sup>1</sup>を考えると、バルダネス＝トゥルコスはテマの兵たちを抑えることができず、心ならずも反乱の指導者に祭り上げられた、という疑いが強い。ストラテゴスがテマの兵たちの反中央の動きを抑えられない例は、790年のテマ・アルメニアコンとそのストラテゴスであったアレクシオス＝ムセレの場合にも確認できる。この時期、中央に対する地方の反感はきわめて強力だったのである。

しかしながらバルダネス＝トゥルコスと同様、レオンもまたニケフォロス1世と戦おうとは考えていなかった。レオンは同僚のミカエルとともに、いち早くバルダネス＝トゥルコスの陣営を抜け出して皇帝側に寝返った。レオンとミカエルはニケフォロス1世によって厚遇される。レオンはテマ・アナトリコン配下の筆頭トゥルマ、フォイデラトイのトゥルマルケスに任命され、さらにコンスタンティノーブルに邸宅を与えられた<sup>2</sup>。そしてニケフォロス1世時代の末期にはアルメニアコンのストラテゴスに任命される。彼は811年に対ムスリム戦での敗北の責任を問われて更迭される<sup>3</sup>が、ニケフォロス1世が戦死してミカエル1世＝ランガベが即位するとアナトリコンのストラテゴスに任命された<sup>4</sup>。

以上の経歴から、レオンは小アジアのテマでほぼ一貫して経歴を重ねた軍人であり、テマの将兵たちとの個人的結びつきをも持っていた人物だったことが予想できる。その一方で彼はバルダネス＝トゥルコスなどを通じて中央政権の人物とも結びつきを持っていた可能性が高い。実際彼の妻は808年に陰謀を起こして失脚した、先述したアルサベルの娘<sup>5</sup>である。それゆえニケフォロス1世やミカエル1世ランガベのように地方とあまり結びつきのなかった皇帝たちにとっては、地方を任せるにたる人物として映っていただろう。

そしてミカエル1世ランガベの時代、強力なアナトリコンの軍を率いるレオンは、きわめて大きな発言力を持った。この時期タグマタは大きな打撃を受けており、なおさらアナトリコンの軍事力の必要性は高まっていた。レオンは期せずして政権の帰趨を左右する立場に立った。さらにこのような状況は中央に対して不満を持つテマの将兵たちにとっても有利な状況だったろう。

813年、ミカエル1世は自ら軍勢を率いてブルガリア軍と対峙する。しかし6月、ビザンツ軍はベルシニキアでブルガリア軍に大敗し、皇帝はコンスタンティノーブルへ敗走した。これを期に皇帝の指導力、そして軍事的才能の欠如が露呈する。テマの将兵たちは皇帝に公然と反対し、レオンを皇帝に推挙した。そして7月、レオンはコンスタンティノーブルに入って皇帝に就任す

<sup>1</sup> バルダネスは一旦はコンスタンティノーブル対岸のクリュソポリスまで進出するが、すぐに軍を引き、さらに単身軍を抜け出して修道院に入ってしまう。Theoph.pp.479-480.

<sup>2</sup> ThC, p.9, Gen., p.8. なおフォイデラトイはニケフォロス1世の時代コンスタンティノーブルに駐屯し、事実上のタグマタとしての役割を果たしていた可能性が高い。Practorians, pp.246-251.

<sup>3</sup> Theoph.p.489.

<sup>4</sup> Theoph.p.497, ThC, p.12.

<sup>5</sup> ThC, p.35, Gen., p.16.



るのである<sup>1</sup>。

帝位についたレオン5世は、前政権を支えていたドメスティコス・トーン・スコロンのステファノスと、マギストロスのテオクティストスを政権の中枢から外す<sup>2</sup>。しかしながら彼ら以外に、レオン5世の即位に伴って地位を失った人物は確認できない。資料が少ないために確言はできないものの、レオン5世の即位に際して大きなメンバーの変化が起きたことは看取できない。

- 10 その後もレオン5世は彼独自の政局運営を行うことができないでいた。その要因は明らかである。中央の高官たちとの関係を安定させることができなかったからである。先述したようにレオン5世は中央との関係が全くないわけではなかった。しかしレオン5世の舅に当たるアルサベルは失脚した人物であって、レオン5世の中央での発言力の強化には結びつかなかっただろう。また政権交代に伴って中央行政機構のメンバーに大きな変化がほとんどなかったことは、ニケフォロス1世時代以来の高官たちがそのまま大きな政治力を保持したことを意味している。彼らが地方の利害を代表するレオン5世に好意的であったとは考えにくい。

レオン5世と高官との関係については興味深いエピソードが伝えられている。それによると、レオン5世が自らの信任する聖職者であったヨハネス＝グラマティコス（コンスタンティノープル総大主教に任じようとした際、彼の若さと「生まれの高貴さ」の点で「パトリキオスたち」が彼の任命に激しく抵抗したため、任命を断念せざるを得なかったという<sup>3</sup>。ここから高官たちのもつ影響力の大きさがうかがえる。彼が815年に再開したイコノクラスムに対しても、多くの高官たちが反対の態度を示していたことが、テオドロス＝ストゥディテスの書簡や伝記からうかがえる<sup>4</sup>。中央におけるレオン5世の支持基盤はきわめて脆弱だったのである。

- 20 816年、ブルガリアとの間に30年間の和平条約が締結されて対外的脅威が去ると、レオン5世の指導力は後退した。中央の高官たちは次第にレオンに対する反感を募らせ、当時ドメスティコス・トーン・エクスクピトーンで、レオン5世に次ぐ発言力を持っていたミカエルに接近する。ミカエルは先述したようにバルダネス＝トゥルコスの反乱の際、レオンとともにいち早く皇帝側に寝返った人物である。またレオン5世の即位に際しても決定的な役割を果たしていた<sup>5</sup>。しかし

<sup>1</sup> Theoph.pp.499-503.

<sup>2</sup> Treadgold, pp.198. ステファノスは修道士となった。Vita Sancti Theodori Studitae, PG 99, 1903, c. 220A. 一方テオクティストスはミカエル2世の時代に至るまでマギストロスだったことが確認できるが、レオン5世の時代以降政局に大きく介入することはない。そのためトレッドゴールドの考えるように、レオン5世によって政治の中枢から外されたと考えるのが妥当であろう。ただし前政権の中心人物であったテオクティストスを政権から追放することが出来なかったことは、レオン5世の中央における政権基盤の弱さを露呈させているとも言える。cf. Vita Sancti Ioannicii, p.364, 427, Theodorus Studites, Epistulae, 420.

<sup>3</sup> Scriptor Incertus de Leone Armenio, Bonn, 1842, p.359.

<sup>4</sup> I. Sevcenko, "Was there totalitarianism in Byzantium?: Constantinople's control over its Asiatic hinterland in the early ninth century", in: C. Mango & G. Dagron (eds.), Constantinople and its Hinterland, Aldershot, 1995, pp.91-105.

<sup>5</sup> ThC pp.16-17, Gen.p.4.

彼は次第にレオン5世と対立していく。820年のクリスマスの朝、レオン5世はミカエルを支持する人々によって暗殺された。そしてレオン5世に代わってミカエルが皇帝ミカエル2世として即位したのである。

#### (5) おわりに

- 7世紀はビザンツ帝国にとって大きな変革の時期であった。7世紀のビザンツ帝国は領域の縮小という以上の変化を経験した。数多くの変化の中でも特に大きな変化だったのが本章で扱った国家機構と政治支配層の変化であろう。ビザンツ帝国の国家機構は7世紀の間に大きく変化した。それは国家の断絶をもたらしたわけではなく、変化も徐々に行われたものであったが、国家システムを動かす原理は、大きく変化したことは疑えない。そしてその結果、ビザンツ帝国はシステムとしては古代末期の体制以上に、中央集権的体制、そして皇帝に全ての権力が集中する体制を指向することになった。

だが、7世紀そして8世紀には皇帝および中央行政機構は強力な権力を行使することができずにいた。その最大の要因は地方に中央に匹敵する実力を持った力の中心が出現し、中央政権が地方に対して限定的にしか影響力を行使することができなかったからである。そのため8世紀の皇帝、特にコンスタンティノス5世は地方の実力をそいで中央集権化を進展させるために多くの努力を傾注した。コンスタンティノス5世の統治した8世紀中盤には、ビザンツ帝国をとりまく対外的条件や社会的条件が好転しつつあったこともあり、8世紀中盤以降、ビザンツ帝国の中央集権化は大きく進展していくことになった。中央政権と皇帝の影響力が、7世紀に比べてより効率的に浸透していくようになったのである。この過程は9世紀前半まで続くことになる。

- 20 だが、その反面でこうした改革は中央行政機構の政治的影響力を大きく増大させることにもつながった。そしてその中央行政機構の要職に就任していた人々の間に家系的連続性が次第に確認できるようになって来るのも8世紀中盤である。こうした変化の背景にはさまざまな要因が絡み合っていた。なかでも看過できないのは大所領の形成である。彼らの多くは小アジア北東部の生産力の高い地域に所領を形成し、既に国家からの再分配のみを経済的基盤とするのではなくなっていた。彼らは次第に、皇帝の権力行使にとっても脅威となりうる存在へと、変質しつつあったのである。

- 8世紀中盤以降顕在化したこのような傾向は、8世紀末以降も強まりこそすれ、弱まることはなかった。8世紀末以降の皇帝にとっての課題は、こうした条件下で皇帝権力を確立していくことだった。だが皇帝権力の強化の過程は順調には進まなかった。むしろ8世紀末から9世紀初頭には皇帝権力は大きく混乱していく。その要因は二つある。第一に、この時期の諸皇帝たちの多くが、地方を完全に掌握することができなかったことがあげられる。中央に対する地方の不満は、テマの反乱という形で頻発した。第二に、新たに政治力を持つようになった勢力の発展である。すなわち中央行政機構の要職を占めていた高官たち、そしてコンスタンティノープルの陸軍力であるタグマタである。このような中央・地方の勢力に阻まれて、皇帝は独自の指導力を発揮することができなかったのである。

一方こうした皇帝の発言力を抑制していた諸勢力にも弱点があった。中央の高官・タグマタ勢力はニケフォロス1世・スタウラキオス・ミカエル1世ランガベの三代の皇帝の政権基盤となっていた。しかし彼らの結束は弱く、一時的なものであった。皇帝も高官やタグマタを完全に掌握



することはできないでいた。また地方とのつながりが希薄だったこともあって、中央に対する地方の不満を大きくさせることにもつながった。その反面地方のテーマの勢力も、単独で政権を維持することはできなかった。すなわちレオン5世の治世からも明らかなように、帝国の行政を実際に運営している中央の高官たちの意向を無視することはできなかったのである。

要するにこの時期、中央の高官とタグマタ、そして地方のテーマを同時に完全に掌握できる皇帝は皆無だった。そして中央の高官やタグマタの実力が強大化した9世紀に入ると、コンスタンティノス5世のようにテーマの将兵たちと個人的な人間関係を結んで政権を維持する方策もとりにくくなっていた。中央集権化の一層の進展を指向する皇帝権力にとっては、そもそもそのような方策はとることができなかったといったほうがよい。従来とは本質的に異なった方策が必要となっていたのである。

10

### 3 高官層の形成 ～820-856年～

#### (1) はじめに

820年から867年までの47年間、ビザンツ帝国ではミカエル2世、テオフィロス、ミカエル3世の3人の皇帝が在位した。この3人の皇帝は親から子へと帝位を受け継いだ。ミカエル2世が小アジア中央部の都市アモリオンの出身だったため、この3代の系統をアモリア朝と呼ぶことが多い。前章で分析したように、ミカエル2世が即位するまでの約半世紀の間、ビザンツ帝国では帝位が相次いで交代し、陰謀や反乱が相次いだ。しかしミカエル2世の時代以降政情は急速に安定する。ミカエル2世の治世当初に起きたスラヴ人トマスの乱(821-824年)を最後に、大規模なテーマの反乱は後をたつ。続くテオフィロスは活発な建築活動や文化活動を主導する一方で、きわめて強力な権力を行使してビザンツ帝国の政治を主導した。イコン崇拝派に対する弾圧を行っているにもかかわらず、テオフィロスが名君という評価をほしいままにしているのは、テオフィロスがビザンツ帝国の政治や文化で示した強力なリーダーシップによる。

だが、なにゆえテオフィロスはこのような強力なリーダーシップを行使できたのであろうか。ミカエル2世が即位するまでの約半世紀の間、皇帝権力は明らかに後退していた。テオフィロスが行使できた強力な皇帝権力は自明のものではないし、テオフィロスの「公正さ」や有能さといったテオフィロス自身の能力や政治方針にその背景を求めようとする、従来時折行われてきた説明<sup>1</sup>でも不十分である。なぜならこれまで分析してきたように、9世紀初頭までの段階で中央行政機構のコントロールが皇帝にとって重大な政治課題と化しており、特に中央行政機構の要職についている人々との関係が、皇帝にとって大きな関心事となっていた。それゆえテオフィロスが行使できた強力な皇帝権力は、テオフィロスが国家機構や高官たちを自らの統制下に完全に組み入れていたことを意味している。

それゆえ本章では、テオフィロスが何ゆえ高官や国家機構を完全に自らの手の中に掌握することができたのかについて、分析を加えていくことになる。そのために本章でははじめにミカエル2世の時代について考察を加えた後、テオフィロス時代の皇帝権力の展開や高官たちとの関係について、論述していく。

#### (2) ミカエル2世の政権

本節では、ミカエル2世時代の皇帝と皇帝権力をめぐる状況について検討していく。ミカエル2世やその治世については、考慮すべき点はいくつかある。まず彼の経歴や社会的背景は無視できない。そうした要素はミカエル2世と高官たちとの関係にも大きく影響するからである。この反乱の与えた影響についても着目する必要がある。さらにミカエル2世の時代以降、シチリア島やクレタ島がムスリムによって攻略されていく。こうした対外情勢の変化の影響についても、あわせて考察する必要がある。

はじめに彼の出自について分析していく。ミカエルはゲオルギオスなる人物<sup>2</sup>の子として、770

<sup>1</sup> cf. J. B. Bury, *A History of the Eastern Roman Empire: from the fall of Irene to the accession of Basil I* (A.D. 802-867), London, 1912 (以下、Bury(1912)と略), pp. 120-125.; J. Rosser, "THEOPHILUS(829-842): Popular Sovereign, Hated Persecutor", *Byzantiaka* 3(1983), pp. 37-56, pp. 43-45.

<sup>2</sup> *The History of al-Tabari* vol. 32: *The Reunification of the Abbasid Caliphate*, Albany, 1987, p. 45, 144.



年頃に小アジア中央部の都市アモリオンで生まれた<sup>1</sup>。『続テオファネス年代記』などでは、ミカエルは若い頃は貧窮にあえいでいたとされている<sup>2</sup>。だがこの記述は信憑性に乏しい。というのも彼は青年期以降一貫してアナトリコンの幹部として経歴を重ねており、アナトリコンのストラテegosの娘と結婚するまでになっているからである。先述したようにテマの将校の一族だった人物が急速に昇進していく例は多い。また『続テオファネス年代記』にも、ミカエルがアナトリコンの軍に入隊した際には既にミカエルの一族の者がストラテegosの幕僚に参加していたという記述がある<sup>3</sup>。ミカエルは比較的高い社会的背景を持って生まれた人物なのである。トレッドゴールドも、ミカエルの父はある程度の財産を持っていた軍の幹部であったと論じ、『続テオファネス年代記』の記述は強調され過ぎていると断じている<sup>4</sup>。

- 10 ミカエルはレオン5世とは古くからの友人であった。そしてレオン5世によって、ドメスティコス・トーン・エクスクピトーンに任命された。しかしミカエルは次第にレオンと対立していく。『シュメオン年代記』や『続テオファネス年代記』、『ゲネシオス年代記』などによると、ミカエルは皇帝に対する反感を公言していることを知ったレオン5世によって820年のクリスマス・イブにとらえられ、投獄された。しかしミカエルは獄中から自らの支持者に指示を与え、翌朝クリスマスの早朝ミサのために宮廷内の教会を訪れたレオン5世をミカエルの支持者たちが襲撃し、暗殺した。そしてミカエルが皇帝に即位する<sup>5</sup>。

- 20 レオン5世暗殺に関与した人々について検討を加えていきたい。『シュメオン年代記』や『続テオファネス年代記』などによると、宦官のテオクティストスおよびミカエルの一族のパピアスが、獄中にあったミカエルと支持者たちとの間の連絡を担当した。また実際にレオン5世を暗殺した人々としてクランボニテスなる者の名があげられている。クランボニテスら、暗殺の実行部隊の人々がどのような地位にあった人々であるかは、レオン5世暗殺を伝える資料からは明確ではない。しかしながら資料の他の部分から、手がかりを得ることができる。

『シュメオン年代記』などによると、ミカエル2世が没してテオフィロスが即位するとすぐに、テオフィロスはレオン5世の暗殺を実行した人々の処遇について元老院に諮問した。そして元老院が彼らの処刑を決定したため、彼らはヒッポドロームで処刑された<sup>6</sup>。

- 7世紀以降元老院は中央の高官や高位保持者たちによって組成されていた。それゆえレオン5世の暗殺者たちの処遇について元老院が関与していたことは、レオン5世の暗殺者たちの中に高官や高位保持者たち、あるいはその一族が含まれていたことを示す。レオン5世がミカエルの言動に警戒心を抱き、ミカエルを処刑すべく捕らえたのも、レオン5世と対立していたのがミカエル単独ではなく、ミカエルを支持する人々が政府中枢にも存在しており、その影響力が無視できないものになっていたからであろう。

以上要するに、ミカエル2世にはレオン5世に治世から中央政府の高位保持者・高官たちの中

にかなりの支持者を持っていた。そしてミカエルの勢力が拡大していくのを恐れたレオン5世との対立の結果、ミカエルの支持者がレオン5世を暗殺し、ミカエルを即位させたのである。すなわちレオン5世の暗殺とミカエル2世の即位は中央政府内での対立に起因する、一種の宮廷クーデターであったと理解できる。

- しかしながら、このような通常ではない政権交代が行われたにもかかわらず、中央政府内で大規模な人員・役職の移動がおきていたことは看取できない。レオン5世の暗殺に際してその地位を失った人物としては、ミカエル2世の即位を公然と批判したレオンの甥のグレゴリオス＝プテロトスが確認できるのみである。テオクティストス＝ブリュエンニオスのように、その後も高い地位を享受している者もいる<sup>1</sup>。資料が少ないため、大規模な人員の移動が行われなかった理由を確言することはできないが、レオン5世がすでに高官・高位保持者たちの大半の支持を失っていた可能性が高いことは指摘しておきたい。

- しかしミカエル2世の政権が安定したスタートを切ったわけではない。ミカエル2世の政権内部にはレオン5世、さらにはエイレーネーやニケフォロス1世の時代から高い地位を保持し、強力な政治的影響力をもっていた高官たちが数多く残っていたからである。トレッドゴールドも紹介している以下の二例はそれを如実に示している。一人目はヨハネス＝ヘキサプリオスなる人物である。彼は元来ミカエル1世時代にコンスタンティノーブルの城壁防衛長官を努め、皇帝にレオンの反抗を予想・警告していた人物であるが、レオン5世時代にはレオン5世の側近となっていた。そしてミカエルを内偵して皇帝に報告し、ミカエルを逮捕・投獄した。しかし彼はミカエル2世時代にもその地位を失うことなく、トマスの乱後処理で大きな役割をはたしている。二人目はサケラリオスを務めていたレオンである。彼は802年のニケフォロス1世のクーデターの参加者の一人である。彼はイコン崇拝者であったがイコノクラストのレオン5世・ミカエル2世・テオフィロスの治世を通じてその地位を維持していた。彼らはレオン5世に対してと同様、ミカエル2世の政治遂行を制限しうる存在だった。高官や高位保持者たちの行動や対応を全く無視して、政権を維持することはできなかったのである<sup>2</sup>。

『続テオファネス年代記』によると、ミカエル2世は最初の妃をなくした後、しばらく独身を通していたが、元老院のかなり強硬な勧告によって、再婚することに同意した<sup>3</sup>。これは、ミカエル2世の時代に高官や高位保持者たちが、皇帝に対して大きな発言力を持っていたことを示すものであり、皇帝の政治的発言力が制限されていた可能性を示唆している。

次にミカエル2世の治世後半の展開について考察を行ってみたい。

- 30 824年、トマスはトラキアで降伏し、3年に及ぶ大反乱はようやく終結した。トマスはアナトリコンを始めとする小アジアのテマの陸軍力の多くや、テマ・キピュライオタイなどの海軍力をも結集してコンスタンティノーブルの攻略を企てた。小アジアのテマのストラテegosのうち、ミカエル2世側についたのはオブシキオンのコメスでミカエル2世の従兄弟にあたるカタキュラスと、アルメニアコンのオルピアノスのみだった<sup>4</sup>。それゆえ反乱終息後はテマの指導層の再編が

<sup>1</sup> Treadgold, p. 225.

<sup>2</sup> ThC p. 44.

<sup>3</sup> ThC p. 44.: cf. Gen. p. 22.

<sup>4</sup> Treadgold, p. 225.

<sup>5</sup> ThC pp. 33-40, Gen. pp. 15-21, ThM pp. 144-145, LG pp. 210-211.

<sup>6</sup> ThC pp. 84-86, Gen. p. 36, ThM pp. 147-148, LG pp. 214-215.

<sup>1</sup> ThC pp. 57-58, Gen. p. 27. テオクティストス＝ブリュエンニオスに関しては前章参照。

<sup>2</sup> Treadgold, p. 343.: cf. Winkelmann, S. 117.

<sup>3</sup> ThC pp. 78-79.

<sup>4</sup> ThC pp. 53-54, Gen. pp. 23-24.



不可欠となった<sup>1</sup>。また826年以降、シチリア島やクレタ島にムスリム勢力が侵入を開始した。特にクレタ島の失陥は帝国に深刻な影響を及ぼした。クレタ島がムスリムの手に落ちることによって、エーゲ海の諸島のみならず小アジアやバルカン半島の沿岸地域がムスリムの度重なる攻撃を受け、大きな被害を受けるようになったからである<sup>2</sup>。このような状況下、ミカエル2世は信頼できる有能な人物にテマを委ねる必要性に迫られていた。

小アジアの陸海軍に対するミカエル2世の施策の一端を明らかにしてくれる例として、テマ・キビュライオタイのストラテegos任命の経過をあげたい。テマ・キビュライオタイはトマスの海軍力の中核であった。またそれと同時にテマ・キビュライオタイはクレタ島の対岸に位置し、対ムスリム戦の最前線でもあった。すなわちミカエル2世にとっては最も注意を傾倒しなければならないテマであった。

トマスの乱が終息した時にキビュライオタイを統括していたのは、トマスの乱の際に一貫してミカエル2世側に立って行動していたエク・プロソプーのヨハネス＝エキモスであった。恐らく彼はクレタ島へのムスリム侵入が始まった時期にはキビュライオタイのストラテegosを務めていたが、突然修道生活に入る<sup>3</sup>。その後キビュライオタイのストラテegosとなったのはフォティノスなる人物である。

フォティノスは年代記作者テオフィアネスの一族である。この一族にはテオフィアネスの父や後述する10世紀初頭のヒメリオスなど、海将として活躍した人物が多い<sup>4</sup>。フォティノスは『続テオフィアネス年代記』によるとミカエル2世の信頼の厚い将軍であり、トマスの乱後にアナトリコンのストラテegosに任命されていた。フォティノスはキビュライオタイのストラテegosに任命されるとクレタ島を奪回すべくムスリムに対して出撃したが敗北する。しかし彼はその後、ムスリム勢力の攻撃に同じくさらされていたテマ・シチリアのストラテegosに転任して、ムスリムと戦い続けている<sup>5</sup>。

フォティノスの後にキビュライオタイのストラテegosに任命されたのは、クラテロスである。彼は恐らくレオン5世時代に、アナトリコンのストラテegosを務めていた。クラテロスはキビュライオタイのストラテegosに任命されるとクレタに対して出撃したが、ムスリムに敗れて戦死している<sup>6</sup>。

その後対クレタ艦隊の指揮を行ったのはオオリュファスなる人物である。彼は『続テオフィアネス年代記』には「軍隊経験のある人物」とあり、軍隊で経歴を重ねていた人物であることがわかる<sup>7</sup>。彼が指揮していた艦隊はテマ・キビュライオタイの艦隊ではなく、新たに組織された艦隊である可能性が高いが、いずれにせよ皇帝の信任を受けて重大な任務を委ねられた将軍である。但し彼が艦隊を指揮していたのは、ビザンツの各年代記が述べているようなミカエル2世治世では

なく、E.マラムートが示唆しているようにテオフィロスの治世の最初期である可能性が高い。彼は部分的な成功を収めるものの、クレタ島を奪回することはできなかった<sup>1</sup>。

小アジアの陸のテマのストラテegosに任命された人物については情報が少ない。最大のテマでありトマスの乱の中心となったアナトリコンには、先述したフォティノスが任命されている。彼がキビュライオタイのストラテegosに転戦した後は恐らく、レオン5世時代にもアナトリコンのストラテegosを務めていたマヌエルが再任された。エーゲ海沿岸部のテマ・トラケシオンでは、ミカエル2世の治世末期にはコンスタンティノス＝コントミュテスがストラテegosを務めている<sup>2</sup>。トラケシオンは小アジアで最も生産力の高い地域であると同時に、クレタに根拠を置いたムスリム勢力の攻撃を激しく受けた地域でもある。後にシチリアのストラテegosに転じていることなども考え合わせると、彼もフォティノスと同様に皇帝の信任の厚い人物であったろうと推測される。

こうした情報から確認できることがある。すなわちストラテegosなどに任命された人々の多くがミカエル2世と同様の社会的背景を持った人々だったことである。これまで分析してきたように、ミカエル2世は小アジアのテマの将校出身で、その出自もこれまで考えられていたほど低いわけではない。ここで取り上げた人々も同様である。たとえば次節で触れるように、マヌエルはバフラゴニアに所領を持つテマの将校の一門の出身である。オオリュファスもストラテegosに任命される前から軍隊内で経歴を重ねてきた人物であった。

最も特徴的なのはヨハネス＝エキモスである。彼はパレスティナの裕福な家出身の人物であるが、青年期にテマ・キビュライオタイの中心であるアッタレイアに移住してきた。そしてその地の軍司令官の目に留まって引き立てられ、エク・プロソプーに任じられる。そしてトマスの乱後には皇帝ミカエル2世の信任を受けることになる<sup>3</sup>。富裕な家の出身であり、テマの将校として勤務し、最終的に皇帝の信任を受けるようになったという彼の経歴は、他の人物たちにも当てはまるだろう。

要するに、ミカエル2世はテマのストラテegosなどの地方の要職には、自らと同様の社会的背景を持つ人々を登用した。彼らは皇帝に忠実だった。また逆に彼らの観点から見れば、自分たちと出自を同じくする皇帝は、自分たちの利害を代表する存在でもあった。

本節での考察を簡単に小括しておきたい。

ミカエル2世は小アジアのテマの将校出身であり、従来考えられてきたほど低い出自の人物ではなかった。しかし彼らが皇帝であった9世紀初頭までには、中央政府内で高い地位を占める高官たちが大きな政治的影響力を行使するとともに、安定した階層的なまとまりをなすようになっていた。ミカエル2世も彼らの支持なくして帝位につくことはできなかったし、彼らの影響力を無視して国政を運営していくこともできなかった。

その一方で、ミカエル2世はテマのストラテegosに自分たちと同様の社会的背景を持つ人々、すなわちテマの将校たちを積極的に登用した。新たに登用された人々にとって、皇帝は自分たち

<sup>1</sup> ThC pp.53-54, Gen. pp.23-24.

<sup>2</sup> Malamut, pp.72-88.

<sup>3</sup> Vita Sancti Antonii Junioris, in: Pravoslavni Paletinskij Sbornik 19-3(1907), pp.186-216, pp.194-202.

<sup>4</sup> Herlong, pp.102-108. 第8章も参照。

<sup>5</sup> ThC pp.76-77.

<sup>6</sup> ThC pp.79-81, Vita Sancti Theodori Studitae, c.296B.

<sup>7</sup> ThC p.81, Gen. p.35.

<sup>1</sup> Malamut, pp.72-78.

<sup>2</sup> ThC p.137, 175. 第4章も参照。

<sup>3</sup> Vita Sancti Antonii Junioris, pp.187-188, 193-196.



の利害を代表する存在であり、それゆえに皇帝にとっても信任できる存在たりえたのである。

ミカエル2世の支持基盤となっていた軍事力は、首都の高官たちに対抗して政権を維持していく上で、大きな力になった。しかし軍事力のみでは不十分であった。ミカエル2世は高官たちに対して、強力な統制力を発揮することはついにできなかった。

### (3) テオフィロス政権を支えた人々

10 テオフィロス時代の皇帝権力に関する考察をすすめるにあたって、中心となるのは高官との関係である。だがビザンツ帝国の政情には、軍隊も大きな役割を果たしていた。特に前節で分析したように、ミカエル2世はテマの幹部出身であって、軍との関わりが特に深い。それゆえテオフィロスの時代の分析を行うにあたって、軍隊との関係を無視することはできない。またヨハネス＝グラマティコスなど教会関係者などとの関係も等閑視できない。それゆえ本節ではテオフィロスと、テオフィロスの周囲にいた人々との人間関係について、高官との関係を中心に据えつつも、それ以外の人々にまで視野を広げつつ分析を行っていく。

#### ① 官僚機構との関係

はじめに、強力な政治的影響力をもつ高官たちに対して、テオフィロスがどのように対応していたかについて検討していく。

20 前節でも触れたが、テオフィロスは即位するとすぐに、元老院議員を集めて裁判を行い、ミカエル2世と通じてレオン5世を暗殺した者たちを処刑している。これは先述したようにレオン5世を暗殺した者たちが高い身分の人々であったことを示唆している。だが同時に、皇帝と高官たちの関係をみる上でも興味深い。すなわち高官たちに関係する事項の処理に際しては、皇帝の独断ではなく、高官たちとの協議の上、処理が行われる形をとっていることが看取できる。

この措置はテオフィロスの皇帝としての存在理由を危うくしかねない行動であった。それは処刑される直前に、「我々が陛下の父君に加担していなかったら、現在の陛下の地位はなかったのです。」と処刑された者たちが言ったとする『シュメオン年代記』の記述<sup>1</sup>に端的に現れている。しかしながらこの措置をとることによって、テオフィロスは父のミカエル2世や自らに対して向けられていた、クーデターによって帝位についた、非合法的な皇帝という批判を和らげ、高官たちの支持を強固にすることができた。この措置はトレッドゴールドら多くの研究者によって指摘されているように、テオフィロスの権力基盤を強化することになったのである<sup>2</sup>。

この事件からもうかがえるが、テオフィロスは元老院議員を尊重する態度を日頃から示してい

たようであり、年代記にそのことを示す逸話が他にも語られている<sup>1</sup>。また彼は没する際、枕元に帝国の主だった人々すべてを呼び、後事を託している<sup>2</sup>。こうした行動をとった皇帝は少なくとも7世紀以降には全くいない。テオフィロスが常に高官たちを尊重しながら対応していたことを示す好例と言えよう。

10 またテオフィロスが国政の実務に積極的に関与していたことも、高官たちとの関係を考える上で無視できない。テオフィロスは毎週マグナウラ宮殿に赴いて自ら裁判を主宰した。さらにその道中、テオフィロスは気軽に一般の人々からの訴えを取り上げ、適切な措置を官僚や高官たちに命じてとらせている<sup>3</sup>。これほどまで積極的に行政に関与した皇帝はビザンツ帝国史上でも珍しい。こうした行動は彼が公正であるという評価を高めた要因であるが、このことは同時にテオフィロスが官僚や高官たちと積極的に関係・協議しつつ国政を執行していたことを意味する。事実彼の時代には、高官のみならず比較的序列の低い官僚や軍人までがテオフィロスから直接命を受けて政治に関与する例が比較的多く看取できる<sup>4</sup>。例えばスバタロカンディダトスのペトロナス＝カマテロスは、黒海北岸のカザール汗国に派遣され、その功でプロトスバタリオスに昇格している<sup>5</sup>。またイコン崇拝派に対する弾圧に際しては、宦官<sup>6</sup>と並んで中位の官僚たち<sup>7</sup>が盛んに利用されている。さらにテオフィロスは娯楽活動を盛んに行っている。また演劇に対しても深い興味を示していたようである<sup>8</sup>。彼は学問や建築活動にも深く興味を見いだした。ヨハネス＝グラマティコスの従兄弟であったレオン＝マテマティコスがマグナウラ宮殿で高等教育を開始したのも、テオフィロスの命によってである<sup>9</sup>。その結果テオフィロスの時代には、高官はもちろんのこと、中堅官僚層などまでもが皇帝と直接接することが特に多かったと想像できる。そしてそれは、皇帝との間に親密な人間関係を形成する可能性が高まることを意味する。テオフィロスは彼に先行する皇帝よりも広範な人間関係のネットワークを形成していたといえよう。

20 以上要するに、テオフィロスは高官たちを尊重しつつ政治を行う姿勢を示すことによって、高官たちの支持を巧みに獲得していた。また積極的に国政に参画したり、娯楽や文化活動、建築活動などにも精力的に関与することによって、高官たちのみならず官僚機構のかなり広い範囲に、皇帝と親密な人間関係を持った人々を持つにいたっていた。それが彼の権力基盤を支える人的資源となっていたのである。

<sup>1</sup> ThM p.150, LG p.217.

<sup>2</sup> ThC pp.138-139, Gen. pp.51-52.

<sup>3</sup> 例えば ThM pp.154-155, LG pp.222-223.

<sup>4</sup> ThC pp.87-88.

<sup>5</sup> ThC pp.122-124.

<sup>6</sup> テオフィロス時代には、皇帝に私的に奉仕する宦官や家産官僚たちが活発に利用されるようになる。後述するように彼らは9世紀後半以降はビザンツ帝国の政情に大きな影響を及ぼすようになるが、テオフィロスの時代はそうした展開の契機だった。

<sup>7</sup> *Vita Antonii Junioris*, pp.209-211.; ThM p.148-149, LG pp.215-216.

<sup>8</sup> cf. F. Tinnefeld, 'Zum profanen Mimos in Byzanz nach dem Verdikt des Trullanums (691)', *Byzantina* 6 (1974), S.321-343, S.329-330.

<sup>9</sup> ThM pp.155-156, LG pp.224-225.

<sup>1</sup> ThM p.148, LG p.214. 『シュメオン年代記』は10世紀後半に成立した年代記であるが、『シュメオン年代記』の名で伝わっている完全な写本はなく、『テオドシオス＝メリテノス年代記』(ThM)、『レオン＝グラマティコス年代記』(LG)、『続ゲオルギオス年代記A』(GCA)などの名称で残存している。これらのうち『続ゲオルギオス年代記A』は基本的にはミカエル3世時代以降の記述しかないので、レオン5世～テオフィロス時代に関する『シュメオン年代記』の記述は『テオドシオス＝メリテノス年代記』と『レオン＝グラマティコス年代記』に依拠することになる。また『シュメオン年代記』を下敷きに、他の史料等をも利用して編纂されたものに『偽シュメオン年代記』Pseudo Symeo Magister, *Chronographia*, Bonn, 1838 (以下、Ps. Sym. と略)、『続ゲオルギオス年代記B』(GCB)がある。このうち『続ゲオルギオス年代記B』もミカエル3世時代以降の記述。

<sup>2</sup> Bury (1912), pp.124-125.; Treadgold, pp.271-272.



## ② 軍事力の掌握

テオフィロスの政権を強力に支えていた要因として看過できない要素がある。それが軍事力である。ここではテオフィロスと軍隊との関係について、分析を行っていく。

先述したようにミカエル2世は小アジアのテマの幹部出身であると同時に、レオン5世時代にはドメスティコス・トーン・エクスクビトーンとしてタグマタとも深い関係を持っていた。それゆえ軍隊に対する皇帝の影響力は比較的強力だったと考えられる。

10 首都に駐屯する陸軍であるタグマタはテオフィロスの時代以降、次第に帝国の陸軍の中核をなす精鋭部隊としての役割を強め、ドメスティコス・トーン・スコローンはビザンツ陸軍の総司令官と化していく。テオフィロス時代、ドメスティコス・トーン・スコローンにはマヌエルが任命されている。彼は後述するように皇后のテオドラの伯父であり、テオフィロスの最も信頼する側近の一人であった。テオフィロスはマヌエルの子たちが洗礼を受ける際、その代父となっている<sup>1</sup>。R.マクリデスが論じているように、ビザンツ帝国においては洗礼の代父になることによって擬制的な血縁関係が形成され、強力な親密さの要因になることが多かった<sup>2</sup>。テオフィロスのとったこの行動は、マヌエルとの親密な関係を傍証している。また同時に、テオフィロスがさまざまな手段を行使してマヌエルとの個人的な人間関係を構築しようとしていたことをも示している。

また地方に駐屯するテマのストラテゴスなどの幹部たちとも親密な関係を結んでいた。かつてミカエル2世の同僚であった人々が、この時期にはなおテマのストラテゴスやトゥルマルケスとして残っており、テオフィロスの強力な支持基盤となっていた<sup>3</sup>。そればかりではなく、トゥルマルケスのカリストス＝メリッセノスのように、テオフィロスに認められて登用された人物もいた<sup>4</sup>。テマの幹部たちはテオフィロスの時代にも皇帝の強力な支持基盤であったと考えられる。

20 海軍についてはテオフィロスの時代に関しては資料がなく、確実なことは言えない。しかし恐らくテオフィロスの時代に、地中海の情勢の変化に対応して中央艦隊が新設された。これはミカエル2世時代にクレタ遠征のために新設された艦隊が中核となっただろう。先述したように、オオリュファスがテオフィロス時代の初期にこの艦隊を率いていた。中央艦隊の長官であるドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーに誰が任命されていたかは確言できないものの、テオフィロス治世の初期にオオリュファスとその任にあった可能性は高い。彼はテオフィロスの治世末にはドゥルンガリオス・テース・ビグラスに就任していた。そしてアッパース朝から投降してきたペルシア人部隊の長官であり、テオフィロスによって登用された人物であるものの不穏な行動を繰り返し、ミカエル3世の帝位継承にとって障害となっていたテオフォボスの暗殺に参加している<sup>5</sup>。

<sup>1</sup> ThM p.152, LG p.220.

<sup>2</sup> R. Macrides, "The Byzantine Godfather", *BMGS* 11 (1987), pp.139-162.

<sup>3</sup> トマスの乱の際にミカエル2世側についたアルメニアコンのストラテゴスのオルピアノスは、テオフィロス時代にも小アジアのテマのストラテゴスを努めていた。Vita Sancti Ioannicii, p.365, 427. またトレッドゴールドは、テマ・ブーケラリオンのストラテゴスはテオフィロスの母方の従兄弟と考えている。Treadgold, pp.299-300, 442-443.

<sup>4</sup> Vita duo et quatuoraginta martyres Amoriensis, in: Mémoires de l'Académie imp. de Saint-Petersburg VIII série, VII-2 (1905), pp.22-36.

<sup>5</sup> ThC pp.135-136.

彼は明らかにテオフィロスの側近として行動しているのである。オオリュファスはミカエル3世時代の初期には恐らくドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーとして、エジプト遠征などを行っている<sup>1</sup>。また後述するようにオオリュファスの一族（恐らく息子）であるニケタス＝オオリュファスは、ミカエル3世・パシレイオス1世時代にエバルコスやドゥルンガリオス・トゥー・プロイムー職を歴任している。すなわちオオリュファス家はテオフィロス時代以降も海軍と深い関わりを持ち続けていた。

10 テオフィロスは宮廷内の軍事力をも活用している。例えば宮廷内の軍事力の一角を率いるドゥルンガリオス・テース・ビグラスに任命されていることがわかる三人の人物は、みなテオフィロスの側近たちである。すなわち一人目は皇后テオドラの兄弟であるペトロナス<sup>2</sup>、二人目はオオリュファスである。三人目はコンスタンティノス＝マニアケスである。彼はアルメニア出身で、人質としてアルメニアからやってきた時にテオフィロスに認められて登用された。彼は続くミカエル3世時代にも皇帝の側近として行動している<sup>3</sup>。宮廷内軍事力としてヘタイレイアが設置されたのも恐らくテオフィロス時代である<sup>4</sup>。

20 以上要するに、首都及びその近郊に駐屯する陸海軍、及び地方のテマの指導者たちは、テオフィロスが特に信頼を置く人々によって固められていた。先に検討したように、テマはミカエル2世の政権の支持基盤であった。さらにテオフィロスの時代には地方のみならず、中央の陸海軍や宮廷内の軍事力もまた皇帝の強力な支持基盤と化していたのである。その結果、テオフィロスは帝国のすべての軍事力を自らの強力な影響下におくことに成功した。この強力な権力は、高官や高位保持者たちの行動を制約するのに十分な役割を果たしていた。838年にテオフィロスが小アジアでアッパース朝に壊滅的な敗北を喫して、テオフィロスの側近の軍人たちの多くが戦死した際に、一時的に政権が動揺したことがトレッドゴールドによって指摘されている<sup>5</sup>。この事件は政権維持にとって軍の持つ意味がきわめて大きかったことを示唆している。

## ③ 皇帝との血縁関係

テオフィロスの時代に政府内で大きな影響力を持っていた人々の多くに確認できる事実がある。それはテオフィロスの皇后となったテオドラの一族と血縁関係をもっていた人々が多い、という点である。

30 テオドラはテマ・パフラゴニアのエピサという地の出身である。彼の父のマリノスは恐らくミカエル2世時代にトゥルマルケスを努めていた。レオン5世・ミカエル2世時代にアナトリコンのストラテゴスを務めていたマヌエルはマリノスの兄弟で、テオドラにとっては伯父に当たる。テオドラは花嫁コンクールでテオフィロスの皇后に選ばれた<sup>6</sup>。テオドラの場合、花嫁コンクールを実質的に主催していたのはミカエル2世の後で、テオドラの義母に当たるエウフロシネである。彼女はコンスタンティノス6世の娘であるが、彼女の母親、アムニアのマリアは前章で言及

<sup>1</sup> Winkelmann, S.72, 117-118.

<sup>2</sup> ThM pp.148-149, LG pp.215-216.

<sup>3</sup> ThM pp.148-179, LG pp.215-216, ThC p.136, Gen.p.58.第4章も参照。

<sup>4</sup> cf. Praetorians, p.252.

<sup>5</sup> J.-B. Chabot (tr.), *Chronique de Michel le Syrien* vol.III, Paris, 1905, p.95.: Treadgold, pp.301, 443-444.

<sup>6</sup> ThC pp.88-91, ThM p.147, LG pp.213-214.



したようにパフラゴニアの富豪の出である。それゆえエウフロシネとテオドラの一族との間に、以前から何らかの関係があった可能性も否定はできない。

テオドラがテオフィロスの皇后となると同時に、テオドラの一族が中央政府内に大量に進出してくる。マヌエルはドメスティコス・トーン・スコローンに就任した。またテオドラの兄弟たちのうち、ペトロナスはドゥルンガリオス・テース・ビグラスに就任している。バルダスは官職は確認できないものの、テオフィロス時代にテオクティストスとともにアブハジア遠征を行っている。またテオドラの一族であるセルギオス=ニケティアテスもマギストロスとして政権内で重きをなした<sup>1</sup>。

注目すべきは、テオドラの姉妹たちの結婚している相手<sup>2</sup>である。テオドラの三人の姉妹たちのうち、カロマリアはヨハネス=グラマティコスの兄弟のアルサベルと結婚している。アルサベルの姉妹のエイレーネーの夫のセルギオスは前章で言及した総大主教タラシオスの一族である。そしてセルギオスとエイレーネーの結婚から、ミカエル3世時代の総大主教フォティオスが生まれる。二人目のエイレーネーは先述したテオフォボスと結婚している<sup>3</sup>。三人目のエイレーネーはコンスタンティノス=パプーツィコスと結婚している。パプーツィコス家もテオフィロス時代に初めて資料に現れる家門である。テオフィロス=パプーツィコスがテオフィロス時代に小アジアのテーマのストラテゴスを務めていて、838年の対ムスリム戦での敗北の時に捕虜となっている。またテオドシオス=パプーツィコスは839年にヴェネツィアとフランク王国に使者として派遣されている。パプーツィコス家もミュイアレサ家やオオリュファス家と同様、テオフィロスやミカエル3世によって登用され、彼らに忠実な一族であったと考えられる<sup>4</sup>。

彼女たちは恐らく、みなテオフィロスの治世に結婚している<sup>5</sup>。こうしたことから、テオドラの姉妹たちはテオフィロスによって結婚相手を決定されていると考えられる。テオフィロスはパプーツィコス家やヨハネス=グラマティコスの一族など、ミカエル2世からテオフィロスの時代に新たに頭角を現してきた一族と婚姻関係を結んでいる。またそうした一族からさらに婚姻関係が広がっていることも確認できる。すなわちテオフィロスは皇后のテオドラの一族を利用して、自らが信を置いている人々と活発に婚姻関係を結んでいるのである。

そのほかクアイストルを努めていたエウスタティオス=モノマコスも、テオドラの一族との血縁関係があった可能性がある<sup>6</sup>。

一方テオフィロスと直接血縁関係を持っていた人物はあまり多くない。テオフィロスの娘のマ

<sup>1</sup> マヌエルについては ThM p.152, LG p.220. ペトロナスについては ThM pp.148-149, LG pp.215-216. バルダスについては ThC p.137. セルギオス=ニケティアテスについては *Synaxarium Ecclesiae Constantinopolitanae* (Propylaeum ad AASS Novembris), Bruxelles, 1902, c.777-778.

<sup>2</sup> ThC pp.174-175.

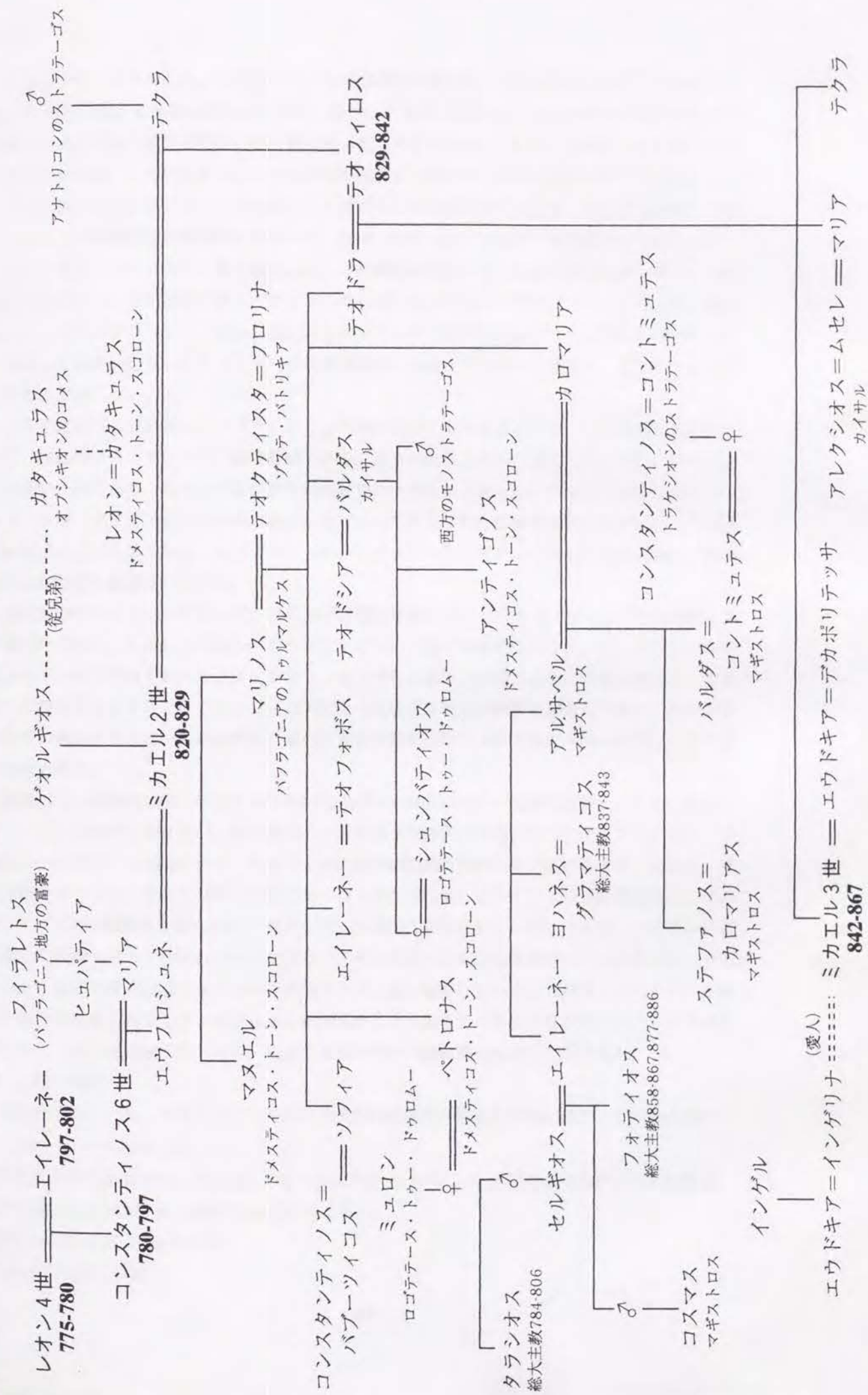
<sup>3</sup> ThM p.148, LG p.215.

<sup>4</sup> ThC p.126, 135, ThM pp.155, 181-182, LG p.218, 261.: Winkelmann, S.163-164.

<sup>5</sup> テオドラの姉妹たちのうちテオドラが最年長で、829年に彼女が結婚した際、姉妹たちはまだ結婚できる年齢ではなかったと考えられる。

<sup>6</sup> 8世紀末から9世紀初頭にかけてパトリキオスだったニケタス=モノマコスはテオドラの一族とされている。彼とエウスタティオスとは恐らく血縁関係がある。 *Vita Nicetae Patricii*, p.325.

系図(1) アモリア朝とバルダス一族 ゴシック体は皇帝、数字は在位年、点線は血縁関係





リアがアレクシオス＝ムセレと結婚しているのが確認できる唯一の例である。同名の人物が8世紀末や10世紀前半にも高い地位を持った人物として資料に現れる<sup>1</sup>。ムセレ家は8世紀末から10世紀にかけて重要な地位を歴任した一族であったと考えられる。アレクシオス＝ムセレはミカエル3世が840年に生まれるまでテオフィロスの後継者と目され、カイサル位を持っていた<sup>2</sup>。

また先述したようにテオフィロスがマヌエルの子たちの洗礼の代父となっていることは、テオフィロスとの擬制的な血縁関係を形成させ、テオドラの一族との結びつきを強化しただろう。

小括すると、テオドラの一族を結節点として血縁関係を媒介とした親族関係のネットワークが形成されていることが確認できる。テオドラの一族を通じて皇帝一門やパプーツィコス家、総大主教ヨハネス＝グラマティコス<sup>3</sup>の一族、フォティオスの一族などが結びつき、広範な「皇帝一門」を形成している。こうしたネットワークは無論偶然に形成されたものではなく、意図的に形成されたものであろう。

こうした結びつきの多くが、パプーツィコス家のようにテマのストラテegosなどを歴任している一門に向けられていることは特徴的である。彼らは前章で詳しく分析したように、テマの幹部出身の一門であり、皇帝と同様の社会的背景を持った人々であった。すなわち親族関係のネットワークは、小アジアのテマ幹部出身者たちによって支えられた政権を強化するために、効果的に利用されていたのである。またマヌエルの子らに対してのテオフィロスの行動のように、擬制的な血縁関係も駆使されている。

親族関係のネットワークは小アジアのテマ幹部出身者に対してのみではなく、中央の家門とも形成されている。しかしヨハネス＝グラマティコス<sup>4</sup>の一族に特徴的なように、ネットワークが形成されている家門はミカエル2世・テオフィロス時代に影響力を持つようになる一族が中心である。すなわちミカエル2世やテオフィロスによって登用された新興勢力が中心であり、既存の高官たちの勢力たちとは一線を画する、皇帝に忠実な新たな集団の中央政府内での強化に大きく資したのである。

無論こうした動きには、ミカエル2世時代以前からの高官たちの反発も起きた。その一例としてミュロンをあげておきたい。彼は恐らくミカエル2世時代の後期にロゴテテース・トゥー・ドゥロムに就任した人物であり、テオフィロス時代の初期にもなおその職にとどまっていた。彼は当時アナトリコンのストラテegosであったマヌエルに関してテオフィロスに讒言を行っている。マヌエルは嫌疑をかけられて一時アッパース朝に亡命すらしている<sup>5</sup>。これは、ミュロンによる讒言が彼個人のみで行われたものではなく、その背後に広範な支持者がいたことを想起させる。

しかしながら彼の娘はテオドラの兄弟のペトロナスと結婚している<sup>6</sup>。これはミカエル2世が高官たちの意見を入れてエウフロシネと結婚したことを想起させる。すなわちテオフィロスは皇帝に忠実な集団を形成する一方で、既存の高官たちとの融和策を推進したのである。

#### ④ 人材の登用

資料が少ないため、テオフィロス時代に中央行政機構内の枢要な役職に就任していた人物につ

<sup>1</sup> 8世紀末の人物はテマ・アルメニアコンのストラテegos。10世紀初頭の人物は第8章参照。

<sup>2</sup> ThC pp.107-109, ThM pp.149-150, LG pp.216-218.

<sup>3</sup> ThM pp.150-152, LG pp.218-221.

<sup>4</sup> ThM p.150, LG p.218.



いては、わずかなことしか確認できない。しかし幸いなことに、中央行政機構内でも特に重要性が高い二つの枢要な役職である、ロゴテテース・トゥー・ドゥロムーとエバルコスについては確認できる人物が比較的多い。

中央行政機構をこの時期事実上統括していたロゴテテース・トゥー・ドゥロムーは、ヨハネス＝ヘクサブリオスから、ミュロンを経てテオクティストスに替わっている。

10 テオクティストスは前節で言及したように、レオン5世が暗殺された際の共犯者の一人であり、ミカエル2世時代にはエピ・テース・カニクレイウーを努めていた。こうした経歴から彼はミカエル2世やテオフィロスの最大の側近と考えられる。テオクティストスは855年に暗殺されるまで、ロゴテテース・トゥー・ドゥロムーの地位を維持した<sup>1</sup>。テオクティストスはテオフィロスにとって、最も信頼のおける側近であった。レオン5世の暗殺に参加した人物の中で、彼のみが何の処罰も受けず、中央行政機構内で最も重要な役職であるロゴテテース・トゥー・ドゥロムーに任じられていることは、テオフィロスから与えられていた信頼の大きさを物語っている。また彼は宦官であり、他の高官たちとは恐らく異質な社会的背景を持った人物であった。テオクティストスがロゴテテース・トゥー・ドゥロムーに任じられたことによって、政府内で他の高官や高位保持者たちが行使できる政治的影響力も制約されただろう。彼がロゴテテース・トゥー・ドゥロムーに任命されたのがかなり遅い<sup>2</sup>ことは、彼に対する他の高官や高位保持者たちからの反発がかなり大きかったことを示唆している。事実、後にテオクティストスが暗殺される理由の一つは、高官や高位保持者たちとの対立であった。

20 エバルコスにはテオドロス＝ミュギアレス（ミュイアレス）が任じられている。彼もテオフィロス時代に初めて言及される人物である<sup>3</sup>。彼はミカエル3世の時代にエバルコスを務めていたコンスタンティノス＝ミュイアレスの一族と考えられる。またサケラリオスにはなおレオンが、クアイストルは先述したエウスタティオス＝モノマコスが努めていた。

こうしたことから、中央行政機構内でも特に重要性の高い役職については、テオフィロスは自らが特に信頼を置く人物を任じていることが確認できる。ただそういった人事は、一気に行われたものではあるまい。テオフィロスはサケラリオスのレオンのような、前代から高い地位をもっていた人々をも重用している。ロゴテテース・トゥー・ドゥロムーへのテオクティストスの任命が遅くなっているのも、宦官である彼への反発に考慮してのことであろう。

30 また注意すべきこととして、旧来からの高官が、テオフィロスの治世が進むにつれて次第に姿を消していくことがある。サケラリオスのレオンやロゴテテース・トゥー・ドゥロムーのミュロンがその例である。彼らは恐らく失脚したのではなく、高齢等の理由によって引退したと思われる。すなわちテオフィロスは官職保持者たちの世代交代をも利用して、自らに忠実な者たちを登用していた。テオフィロスの人材登用は強引に行われたのではなく、摩擦を起こさないようきわめて慎重に、そして漸進的に行なわれたといえる。こうした方策の結果、テオフィロスの治世末

期までには高官たちは皇帝に忠実な集団に再編されたのである。

#### ⑤ 小括

本節での考察の結果を総括したい。

テオフィロスは高官たちを非常に尊重する姿勢を示した。テオフィロスの姿勢は治世を通じて不変であった。それは旧来からの高官たちの好感を獲得するのに資した。その一方で、テオフィロスは高官たちの発言力を制約するための行動をも進めた。まず軍力は完全にテオフィロスの強力な影響下にあった。特に首都やその近郊に常駐するタグマタ・中央艦隊、宮廷内で皇帝に直属する軍力がテオフィロスの強力な支持基盤になっていた。

10 テオフィロスの支持基盤は軍だけではなかった。高官たちの牙城たる中央行政機構にもテオフィロスの手は及んだ。テオフィロスは積極的に政治に参画し、高官のみならず中堅官僚たちとも親密な関係を結んでいた。またテオフィロスは官僚たちとの親密な人間関係を構築するにあたって、競馬などの娯楽や、文化活動などを駆使した。さらにテオフィロスの時代には、新たな人材がかなり多く登用されている。

こうしてテオフィロス時代に中央行政機構内で指導的な役割を果たしていた人物は、テオフィロスと親密な人間関係を持ち、信頼できる人々へと次第に替わっていった。ただこうした変化はテオフィロス時代に一気に行われたのではなく、ミカエル2世時代からテオフィロス時代に徐々に行われた結果であろう。

20 新たに登用された人々はミカエル2世やテオフィロスと同様の社会的背景をもっていた人々であり、かつての同僚でもあった。皇帝は信頼できる側近として地方の有力者たちを捉え、中央政府のメンバーの補充の際に彼らを好んで登用した。その一方で地方の有力者たちは皇帝を自らの利害の代弁者としてとらえ、皇帝の忠実な側近になることで自らの社会的地位を高めようとしていた。ミカエル2世やテオフィロスの政権は、小アジアのテマ幹部出身者による連合政権としての性格も色濃くもっている。そしてテオフィロスは彼らと血縁関係を構築して親族ネットワークを形成した。その際結節点となったのは皇后のテオドラの一族であった。

テマの幹部たちを皇帝に忠実な勢力として取り込む一方で、中央の要職にも就任させたことは、皇帝にとっては中央と地方の両方にまたがる支持勢力を形成させた。だがその一方で高官たちは皇帝の影響下、中央のみならず地方にも影響力を持つ集団へと昇華したのである。

30 このような行動を行えた背景として、皇帝権力と高官たちとの関係を無視することはできない。8世紀末以降、高官たちは次第に独自性を強めつつあった。しかしながら彼らの政治的影響力の源泉が中央行政機構である限り、彼らは皇帝権力に全く依存しない、独自の集団としての行動をとることはできなかった。皇帝権力が動揺していた時期には大きな政治的影響力を発揮していた高官たちも、政情が安定して皇帝権力の動揺が収まるにつれ、独自の発言力を後退させていく。その意味で、8世紀末から9世紀初頭における高官たちの発言力の強さは、弱体化していた皇帝権力に代わって中央の優位を維持するため前面に出てきたと考えられる。

#### (4) 地方行政機構の整備

ミカエル2世とテオフィロスの時代には、地方行政機構も大きく改編された。本節ではこの時期行われた地方組織の変革について概観していく。ミカエル2世とテオフィロスの時代行われた改革は、二つの大きな変更からなる。第一は小アジアのテマの分割、そして第二に民政制度の改変である。

<sup>1</sup> ThC p.38, 148, Gen. p.23.

<sup>2</sup> トレッドゴールドは838年頃と考えている。先述したように838年はテオフィロスがムスリムの軍に敗北し、一時的に政権が動揺した時期でもある。それゆえテオクティストスのロゴテテース・トゥー・ドゥロムー就任は、政権維持のための策の一つだったと考えられる。Treadgold, p.301.

<sup>3</sup> *Scriptores Originum Constantinopolitanarum*, Leipzig, 1901-1907 (以下、SOCと略), pp.223-225.



小アジアのテマは、8世紀にオブシキオンが分割されたものの、他のテマは依然7世紀以来の広範な領域を管轄下においていた。そしてそのストラテゴスの持つ強大な軍事力は、中央政権にとっては潜在的な脅威となっていた。だがこうした大規模なテマは、ミカエル2世とテオフィロスの時代に次々と分割されていく。すなわちアルメニアコンからパフラゴニアとカルディア、そしてアナトリコンからカルシアノンとカッパドキア、セレウキアが分離された。これらはカルディアやカッパドキアのように当初はクレイスラとして分離したものもあったが、10世紀初頭までに正式にテマに昇格する<sup>1</sup>。分割の結果、各テマの軍事力は縮小する。例えばテマ・アルメニアコンの軍事力は、8世紀後半には14000人だったものが842年には9000人にまで減少している<sup>2</sup>。この結果、テマが反乱を起こしにくくなったばかりではなく、テマが増えた結果小アジアの軍事力を糾合して反乱を起こすことも困難になっていった。

次に民政の改編について概観する。9世紀の初頭まで、地方行政制度は古代末期の制度が存続していた。すなわち各属州に派遣されたプロコンスル（アンテュバトス）が地方行政を担当していたのである。8世紀以降テマのストラテゴスの監督権が強まっていた<sup>3</sup>。原則としては古代末期の体制が維持されていた<sup>4</sup>。

この体制に手が入られるのは9世紀中盤である。テオフィロスの時代以降、アンテュバトスは官職ではなく爵位に転化していく<sup>5</sup>。アンテュバトスに代わって地方行政を主導するのはテマのプロトノタリオスである<sup>6</sup>。テマのプロトノタリオスはテマのストラテゴスの下僚となった<sup>6</sup>。

<sup>1</sup> 842/843年の官職リストによると、この時点までに新たにテマ・パフラゴニア、テマ・カルディアが成立しており、恐らくテマ・カッパドキアも成立していた。さらに後にテマとなるカルシアノンもこの時点までにクレイスラとしてアナトリコンから分離しており、恐らくセレウキアも同様である。Listes, p. 49, 55. なおトレッドゴールドはテマ・パフラゴニアはレオン5世時代に分離したと考えている。Treadgold, p. 223. しかしテマ・パフラゴニアはミカエル2世時代、トマスの乱の収拾された直後に分割された可能性が高い。cf. *Vita Theodori Studitae*, c. 309C. 他のテマとクレイスラはテオフィロス時代の成立。

<sup>2</sup> W. Treadgold, *The Byzantine State Finances in the eighth and ninth centuries*, New York, 1982 (以下、State Finances と略), pp. 116-117.

<sup>3</sup> 第2章参照。

<sup>4</sup> 確認できる最初のアンテュバトスはテオフィロスの婿のアレクシオス＝ムセレ。ThC p. 108. ただしアンテュバトスは8世紀から名誉称号・爵位化していた可能性がある。cf. Haldon (1990), p. 204, n. 118.

<sup>5</sup> 842/843年の官職リストには、なお行政官僚としてのアンテュバトスが言及されている。Listes, p. 49. さらにミカエル3世時代のものと思われる印章などにも官職としてのアンテュバトスが認められる。その一方でテマのプロトノタリオスは既にミカエル2世時代から言及されるようになっている。Vita Sancti Ioannis, p. 368. ヴィンケルマンの論じているように、アンテュバトスからプロトノタリオスへの転換は一気に行われたのではなく、ミカエル2世からテオフィロスを経てミカエル3世にいたる時期に各テマ毎に漸進的に進められたと考えられる。F. Winkelmann, *Byzantinischen Rang- und Ämterstruktur im 8. und 9. Jahrhundert*, Berlin, 1985, S. 118-143.

<sup>6</sup> ただしプロトノタリオスに対するストラテゴスの監督権は、9世紀中盤までは明確には確認

だが、テマのプロトノタリオスは同時に、中央の行政官庁であるサケリオン（財務省）から派遣される役職であり、サケリオンの長官であるカルトゥラリオス・トゥー・サケリウの下僚でもあった。むしろ彼らはテマのストラテゴスよりも中央のサケリオンとの関係が強固な役職だったといえる。同時にテマ軍の財務を管理するテマのカルトゥラリオスは中央のストラティオティコン（長官はロゴテテース・トゥー・ストラティオティケー）との関係が、そして地方での裁判を担当するクリテスは中央のクアイストルの下僚であった。

要するに地方行政制度の改変によって、テマは正式に地方行政の単位となり、民政を司る役職に対してもストラテゴスの監督権が正式に及ぶようになった。しかしながらテマの行政を司る役職は同時に中央の関係官庁と密接な関係を持っており、それらの監督下にもあった。むしろ中央の官庁との対応関係が明確になったことによって、地方行政に対する中央官庁の影響力が高まる結果をもたらしたといえる。テマのストラテゴスにとっては、既に8世紀から事実上獲得されていた監督権が合法化された以上のメリットはなかった。むしろ、中央官庁の影響力の強化によって、事実上の権限が後退した可能性の方が高い。古代末期のような完全な形ではないにせよ、軍事と民政の分離が実際には大きく進んだのである。

本節での分析を小括しておきたい。9世紀中盤までにテマは古代末期の属州とほぼ同様の領域を管轄する、地方行政の単位へと正式に転化した。テマの長官であるストラテゴスは軍司令官であると同時にテマの民政に対しても正式に監督権を持つようになった。だがそれは8世紀以来獲得していた権益の追認であり、中央の影響力の強化によってストラテゴスの影響力はむしろ後退した。テマの分割によって各テマの軍事力が縮小したことも相俟って、地方のテマによって中央に対抗することはきわめて困難になった。事実テオフィロスの時代以降テマによる反乱は姿を消す。そしてそれと同時に、地方に対する中央の影響力は大きく上昇した。7世紀以来続けられていた、中央の意向を地方に浸透させる方策がほぼ完成したのである。

#### (5) テオドラの政権

842年1月、テオフィロスはわずか30歳あまりでこの世を去った。後継者のミカエル3世はこの時まだ2歳で、自ら政治を主導していくことは不可能であった。それゆえ幼児のミカエル3世に代わって、テオフィロスの皇后でミカエル3世の生母であるテオドラが摂政となり、事実上の女帝としてビザンツ帝国の頂点にたつことになった。テオドラは856年の春、宮廷を追われて修道院に入るまで、摂政として帝国の政治を担当した。本節ではテオドラが政権を担当したこの14年強の展開について、考察を加えていく。

この時期の政権の最大の特徴は、テオクティストスが大きな実力を持っていたことである。だがテオクティストスの強力な政治的影響力は、テオドラの摂政政権開始直後から行使されていたのではない。それは843年3月のイコン崇拝の復活後進められた。

テオクティストスはイコン崇拝復活の直後に、マギストロスでテオドラの一族であったセルギオス＝ニケティアテスとともにクレタ遠征に赴く。しかしその際セルギオス＝ニケティアテスが没する。またテオクティストス自身は、コンスタンティノーブルで新しい皇帝が立てようとする陰謀が進められているという情報を聞いて急遽コンスタンティノーブルに帰還した。指揮官を失

できない。9世紀末になると、ストラテゴスの監督権が確認できるようになる。Leo VI, *Taktika*, in: PG 107, 1863, c. 705. cf. Winkelmann, op. cit., S. 142-143.



ったクレタ遠征軍は大敗を喫する<sup>1</sup>。

テオクティストスはコンスタンティノーブルへ帰還するとすぐに、小アジアに侵入してきたムスリム軍を迎撃すべく再度出撃する。しかしテオクティストスはマウロボタモンでムスリム軍に惨敗してコンスタンティノーブルに戻ってきた<sup>2</sup>。コンスタンティノーブルに戻ってきたテオクティストスはテオドラの兄弟のバルダスを失脚させ、自らの地位を維持した<sup>3</sup>。

10 以上の経過から確認できる点を述べていきたい。第一に、テオクティストスの政治的位置がきわめて微妙な状況にあったことは明らかである。彼はクレタ遠征や対ムスリム戦などで失敗を重ねている。前節でも触れたが彼は宦官で他の高官たちとは異質な存在であり、彼に対する反感も強かったと考えられる。マウロボタモンの戦いの際、プロトスバタリオスのテオフィアネス＝ファ  
10 ルガネスら何人かの有力者が、テオクティストスに対する反感からビザンツ軍を離れムスリムに投降している<sup>4</sup>ことも、そのことを裏書きしている。第二に、摂政のテオドラもまた、高官たちを完全に掌握しきってはいなかったことがわかる。テオクティストス不在時の陰謀は、高官たちがテオドラを心から支持していたのではないことを示している。

こうした状況下、テオドラとテオクティストスが接近するのは自然な成り行きだった。自らの地位の維持のため、二人は協力する。しかしそれは、高官層との関係を冷却させるものとなっていった。テオドラの時代に政権から遠ざけられていたのはバルダスだけではなく。先述したテオフィアネス＝ファルガネスもその一人である。またアナトリコンのストラテゴスであったメリッセノスも、テオドラの時代に更迭されている<sup>5</sup>。

20 時が経過していくにつれ、テオドラ・テオクティストスと高官層たちの間の緊張は高まっていた。そしてその結末が、855 年秋のテオクティストスの暗殺であった。テオクティストスの暗殺に加わっていたのは、バルダス、テオフィアネス＝ファルガネス、メリッセノスその他の「元ストラテゴスたち」といった、テオドラ時代に冷遇されていた高官たちである。しかしそれだけではなかった。成長したミカエル 3 世自身もこの陰謀に参加していた。ミカエル 3 世がこの暗殺に関与した理由は明白である。ミカエル 3 世が成長したにもかかわらず摂政の地位を離さないテ  
30 オドラに対する反感である。同様の反感はミカエル 3 世周辺の人々も感じていた。バラコイモメノスのダミアノスの関与もそういった観点から説明できよう。さらにテオドラの姉妹のカロマリ  
アも関与している。カロマリアの夫はマギストロスのアルサベルである<sup>6</sup>。

かくして、テオドラの摂政政権の末期には、テオドラやテオクティストスに対する反感が高官  
30 たちの間にきわめて強力に蔓延していたことが看取できる。そして最終的には高官層がテオク  
ティストスの暗殺という形で政治的影響力の拡大に成功するのである。換言すれば、事実上の皇帝

<sup>1</sup> ThM p.159, LG p.229, GCA pp.814-815; *Synaxarium Ecclesiae Constantinopolitanae*, c.777-778.

<sup>2</sup> ThM pp.159-160, LG p.229, GCA p.815.

<sup>3</sup> ThM p.160, GCA p.815.

<sup>4</sup> ThM p.160, LG p.229, GCA p.815.

<sup>5</sup> テオドトス＝メリッセノスがミカエル 3 世時代のごく初期までアナトリコンのストラテゴスであった(ThC pp.165-166.)が、後述するようにテオクティストスが暗殺される際にはメリッセノスは「元ストラテゴス」とされており、ストラテゴス職から外されていたことがわかる。

<sup>6</sup> ThM pp.164-165, LG pp.235-236, GCA pp.821-822, Gen., pp.61-64.

であったテオドラであっても、高官層との親密な関係なしには安定した政権の維持はできなかったということになる。そしてそれは、テオフィロスが行使していた強力な皇帝権力というものの、自らに忠実な高官層との協力の結果生まれたものだったことを示している。テオドラの失脚は、このような政治力学に反した結果であり、いわば当然の帰結だったのである。

#### (6) おわりに

以上、本章ではミカエル 2 世の即位からテオフィロスの治世、そしてテオフィロス没後のテオドラの摂政政権にいたるまでの展開を概観し、皇帝権力と高官たちの動向について分析を行ってきた。以上の考察から導出できる結論は、以下のようになろう。

10 第一に、テオフィロスの時代にいたって皇帝権力が強大化したのは、高官たちとの関係が安定したからである。そして関係の安定は、ミカエル 2 世時代以来続けられてきた高官層の形成の努力によって生じた。ミカエル 2 世・テオフィロスが漸進的に行った高官たちの入れ替えは、皇帝に忠実な、新たな高官たちの登用をもたらした。テオフィロスは彼らを自在に扱うことによって、強力な皇帝権力を行使できたのである。

それゆえテオフィロスの行使できた皇帝権力の基盤にあったのは、彼の登用した高官たちとの人的結合であった。ビザンツ帝国は古代ローマ帝国から受け継いだ緻密な法体系と、7 世紀以降再編された機能的な官僚制を持っていた。そしてこの時期地方行政機構が整備され、地方に対する中央の優位も確立する。しかしながら皇帝権力の基盤は、そういった法的要素や制度的な要素にあったのではなく、むしろ中央・地方の高官たちとの人的結合の上にたっていた。

20 第二に、ミカエル 2 世やテオフィロスは地方の出身だったこともあって、地方の有力者たちを活発に利用した。彼らは地方のみならず中央の要職にも数多く進出し、皇帝の側近となった。その結果、それまでは中央行政機構によっていた高官たちが、中央のみならず地方にも足掛かりを得ることになった。というよりもむしろ、ミカエル 2 世・テオフィロス時代に中央・地方の有力者を包摂する形の、高官層が出現した、といったほうがよい。テオフィロスの時代は、高官たちが質的に昇華した時代だったのである。

第三に、強力な皇帝権力も、高官層の支持を確保し、彼らを完全に掌中に収めた場合に発揮できるものであった。高官層の支持を得られなかった場合には、ミカエル 2 世のように皇帝は大きな発言力を確保することができなかった。またテオドラのように、彼らと対立した場合、失脚にもつながったのである。テオフィロスが強力な権力を行使できた背景には、高官たち個人との密接な結びつきの形成の努力があったことを忘れることはできない。



#### 4 ミカエル3世と「従者団」

##### (1) はじめに

テオフィロスの後を継いだミカエル3世は、評価のあまり高くない皇帝である。彼への評価の源となったのは『続テオフィロス年代記』である。そこではミカエル3世は政治を省みることなく飲酒や競馬などの快楽に溺れた皇帝とされている。今世紀になってから『続テオフィロス年代記』の記述には問題の多いことが明らかにされたが、それによってミカエル3世の政治的手腕が高く評価されるようになったわけではない。オストロゴルスキーのように、「彼（ミカエル3世）は偉大な人物ではなかったが、彼の時代は偉大であった」として、政治の実務にはあまり興味を持たなかった人物と見なす評価<sup>1</sup>が今なお一般的である。しかし、このような評価はミカエル3世の真実の姿を示しているとはいえない<sup>2</sup>。

ミカエル3世の政治遂行について考察していくにあたって、看過することのできないのがはじめに紹介したベックの業績である。ベックは国制史研究との関連でビザンツ帝国の社会・政治構造についても検討を加えている。ベックによると、ビザンツ帝国の社会において首都のコンスタンティノープルが占めていた重要性はきわめて巨大なものであり、そこでは上昇・下降の活発な社会流動が存在していたため、確固たる支配層といったものは成立しなかった。このような活発な社会流動が存在した要因としてベックが主張したのが「従者団」である。「従者団」とは一言で定義すれば、皇帝や有力者に私的に結びついた社会的結合、ということになる。「従者団」にはどんな出自の者であっても、頑健さや美貌などの何か秀でた特徴があれば、誰でも参加できた。「従者」は官位や爵位を持たず、国家の行政機構の外部に位置していた。そして有能であれば「従者団」の持っている結合を利用して急速な社会的上昇を行ない、自ら有力者や皇帝になることも可能だったという。また、主人である皇帝や有力者達にとっては、「従者団」は「統治機構外の統治手段」だった。つまり「従者団」は、正式の統治機構たる官僚制を利用するのに適さない場合に、皇帝や有力者の政治的突撃隊として活用された。特に皇帝選挙が行なわれる際には「従者団」は、候補者の党派の中核として、政治的・軍事的潜在力となったのである。

また、有力者が皇帝位に就いた後も「従者団」と皇帝との関係が終結したのではなかった。整備された官僚制が存在していたビザンツ帝国においては、官僚制は皇帝の行動を制約する要因にもなったため、皇帝は官僚制を制御するために「従者団」を活用した。要約するとベックの主張は以下のようなになる。すなわち、ビザンツ帝国では上下の社会的流動性がきわめて高かった。有力者たちは自己の周囲に出自とは無関係のパトロン関係＝「従者団」を形成した。そしてそれを利用して皇帝位を目指した。そして帝位の交代の都度、支配層の入れ替えが起き、その結果大規模な社会の上昇・下降の流動が起きた。それゆえビザンツ帝国には安定した支配層は存在できなかった。しかし国家運営に不可欠な官僚制は存続し、時には皇帝権力遂行の支障となっていた。それゆえ皇帝は裁量権確保のために、「従者団」を利用して官僚たちを牽制した。

「従者団」について論じる際に、彼が例としてあげたのが本章と次章で取り上げるミカエル3世とバシレイオス1世である。すなわちベックによると、ミカエル3世やバシレイオス1世は自ら

の「従者団」を持っていた。そして彼らは「従者団」をライバルの除去のために利用した。ミカエル3世がテオフィロスを暗殺する際に投入したのがミカエル3世の「従者団」であり、ミカエル3世を暗殺したのもバシレイオス1世の「従者団」であったと、ベックは主張している<sup>1</sup>。こうしたベックの主張は以降のビザンツ研究に大きな影響を与え、ビザンツ社会の流動性はきわめて高く、階級としての支配層が存在しなかったという見解は半ば定説化した。

しかしベックの見解には、いくつかの問題点がある。第一の問題点は、ベックの主張するような「従者団」が、実際に皇帝や有力者が政治に参画するにあたってどのような役割を果たしていたかが不分明なことである。特に、実際に政治を主導していた官僚や高官たちに対して、皇帝が「従者団」をどのように利用していたのかが、明確には述べられていない。第二に、ベックは「従者団」を構成している人々の社会的背景をほとんど考察していない。すなわち「従者団」のメンバーが本当に社会的地位の低い人々であったかが不分明であり、再検討を行う必要がある。

第三に、これまで論じてきたように、ミカエル3世の時代までに帝国には強力な政治的实力を持った高官層が出現していた。前章で分析したテオフィロスの方策からもわかるように、政治支配層に全く流動がなかったわけではないものの、高官の顔触れがかなり安定していたことは疑いない。要するにベックが主張するような大規模な社会的流動と支配層の入れ替え、そしてそれと密接に連動する「従者団」の存在、に対して本質的な疑問の目を向ける必要がある。そこで本章では9世紀中盤、ミカエル3世の時代のビザンツ帝国の支配構造や社会構造がいかなるものであったかを明らかにしていく。考察の中心となるのが皇帝と高官層の関係である。そしてここでの分析を通じて、ベックが「従者団」と呼んでいるものは実際にはどのような勢力であったのか、さらにいうならば本当に何らかの集団を形成していたのかについて、考察していきたい。

史料についても一言触れておきたい。先述したようにミカエル3世は『続テオフィロス年代記』や『ゲネシオス年代記』などでは、政治を全く省みない暗君として描写されている。しかしこれらの年代記が、バシレイオス1世の孫のコンスタンティノス7世ボルフェロゲネトスの命によって編纂されたため、祖父バシレイオス1世の犯罪を正当化するべくミカエル3世を暗君に仕立てあげていること<sup>2</sup>は既に指摘されており、これらの史料中におけるミカエル3世の扱いには注意が必要である。しかし「従者団」についての理論を構築するにあたってベックが依拠したのは主にこれらの年代記であり、その結果彼が描くミカエル3世像にも歪みが生じている。そのため本章ではバシレイオス1世に対して批判的ではあるが比較的公正な『シュメオン年代記』の記述に注意しつつ考察を進めていくことにする。無論他の資料も積極的に利用していく。

##### (2) 親族ネットワークとミカエル3世

本節では、テオフィロス時代に皇帝と高官たちとの間に広範に形成された血縁関係のネットワ

<sup>1</sup> H.-G. Beck, „Byzantinische Gefolgschaftswesen“, *Bayer. Akademie der Wissensch. Phil.-Hist. Kl. Sitzungsberichte* 1965, S. 1-32 (以下、Beck と略); id., „Konstantinopel. Zur Sozialgeschichte einer frühmittelalterlichen Hauptstadt“, *BZ* 58 (1965), S. 11-45. ベックの見解は、渡辺金一氏によって我が国にも詳しく紹介されている。渡辺金一『コンスタンティノープル千年—革命劇場—』、岩波新書、1985年、第6章「社会的流動性」。

<sup>2</sup> R. J. H. Jenkins, „Constantine VII's Portrait of Michael III“, *Bulletin de la Classe des Lettres et des Sciences morales et Politiques Académie Royale de Belgique 5<sup>e</sup> série XXXIV*, 1948, pp. 71-77.

<sup>1</sup> G. Ostrogorsky, *History of the Byzantine State*, New Brunswick, 1969, p. 223.

<sup>2</sup> ミカエル3世像の変化については、E. Kisliger, „Michael III: Image und Realität“, *Eos* 75 (1987), S. 389-400. 参照。



ークが、ミカエル3世時代にどのような展開を示したのかについて、分析を加えていきたい。

この時期に中央行政機構の要職にあった人々の顔ぶれから、二つの点が指摘できる。第一にバルダスの一族や側近が多いことである。例えばロゴテテース・トゥー・ドゥロムーにはバルダスの婿のシュンバティオスが就任している。プロトアセクレティスはバルダスに近いフォティオス(858年に総主教に就任)が占めている。またロゴテテース・トゥー・ゲニクーにはバルダスの親友で側近のフィロテオスが就任している。コンスタンティノープルの軍事力を握っているドメスティコス・トーン・スコローンにも、バルダス自身、ついでバルダスの兄弟のペトロナスや次子のアンティゴノスが相次いで就任している<sup>1</sup>。要するにバルダスはコンスタンティノープルの行政機構・軍事機構の双方に大きな影響力を行使できる体制を築いていたということになる。これはテオフィロス時代とは異なった状況である。テオフィロス時代にはバルダスの一族がこれほどまでに重要な官職を独占する事態は生じてはいなかった。またこのことは、政権内でバルダスの持つ影響力が大きくなっていくことを示している。『続テオフィロス年代記』によると、「全てのアルコンやストラテゴスたち」がバルダスに忠実であったという<sup>2</sup>。バルダスがカイサル位に就いたことも相俟って、ネットワーク内におけるバルダスの地位が上昇し、皇帝であるミカエル3世にも匹敵する実力を持つようになっていたことを示している。

第二に指摘できる点として、テオフィロス時代に形成された親族関係のネットワークが、ミカエル3世時代にも拡大を続けていたことがあげられる。ミカエル3世に子供が生まれなかったことも相俟って、この時代においても皇帝を頂点とするネットワークの結節点となったのはバルダスの一族である。ミカエル2世時代の末期にトラケシオンのストラテゴスを努めていたコンスタンティノス=コントミュテスの一族や、ミカエル3世時代末期にロゴテテース・トゥー・ドゥロムーに就任したグベルの一族<sup>3</sup>、さらにバルダスの娘婿となったロゴテテース・トゥー・ドゥロムーのシュンバティオスなどがその例である。『シュメオン年代記』の記述の中心がミカエル3世とバルダスにあるため、それ以外の家門間における血縁関係についてはよくわからないが、活発に行なわれたと考えるほうが自然だろう。

ミカエル3世時代バルダスの政治的影響力が大きくなったことも相俟って、バルダスの一族を

<sup>1</sup> シュンバティオスに関してはThM p.169, LG p.242, GCA p.828, ThC p.205. フォティオスに関してはThM p.168, LG p.240, GCA p.826. フィロテオスに関してはThM p.171, LG p.244, GCA p.830. バルダスとアンティゴノスに関してはThM p.166, LG pp.237-238, GCA pp.823-824, ThC pp.179-180. ペトロナスは863年にメリテネのエミールが小アジアに侵入してきた際に一時的にドメスティコス・トーン・スコローンに就任し、ムスリムの軍と戦ったと考えられる。ThM p.167, LG pp.238-239, GCA pp.824-825. 『続テオフィロス年代記』にはペトロナスはトラケシオンのストラテゴスとして言及される。ThC pp.179-184.:cf. Ps.Sym., p.666. さらにバルダスの長男(名は不明)は「西方のテマのモノストラテゴス」に就任している。ThM p.166, LG p.238, GCA p.824. 彼は夭折するものの、バルダスは一時的にきわめて多くの軍事力を配下に収めていたことになる。

<sup>2</sup> ThC p.236.:cf. ThC p.205.

<sup>3</sup> バルダスの甥のバルダスがコンスタンティノス=コントミュテスと結婚し、コントミュテス姓を名乗っている。ThC p.175. またバルダスの妻のテオドシアはグベリオス家の出身。Vita Irenes, in: AASS Jul.IV, 1729, c.604D.

結節点とした血縁関係のネットワークは、ミカエル3世のみならずバルダス自身の政治基盤の強化にも大きく影響した。先述した『続テオフィロス年代記』の報告も、親族関係のネットワークがバルダスの地位強化にもつなげたことを示唆している。端的に言ってミカエル3世の時代、親族ネットワークの頂点にはミカエル3世とバルダスの二人がたっていたのである。

彼らがミカエル3世時代の政治にきわめて大きな影響を与えていたことは言うまでもない。前章で検討したテオクティストス暗殺において、暗殺参加者の大半が中央行政機構の要職にあった者たちや高位保持者であったことは象徴的な事例である。そしてそのことは同時に、高官層と関係を持っていない人々の社会的上昇の可能性を著しく減らすことにもなる。ミカエル3世時代においてもテオフィロス時代と同様、高官層は確固たる集団として存続していた。むしろテオフィロスによって形成された高官層は、ミカエル3世時代になってさらに強化されたのである。

しかしこのように高官層の人々によって中央行政機構の要職が占められると、皇帝の政治における裁量権が彼ら高官層によって阻害される可能性は高まる。特にミカエル3世時代にはテオフィロス時代とは違って、皇帝と並ぶ実力者としてバルダスが大きな力を持つようになっていた。事実先に引用した『続テオフィロス年代記』からの記述からも、高官の多くがミカエルではなくバルダスに忠実だったことが看取でき、ミカエル3世が自らの意志を政治に反映させることが困難になる場合も予想できる。このような事態にあって、ミカエルは自己の発言力をいかにして確保していたのであろうか。この点を考えるに当たって、きわめて重要な示唆を与えてくれるのが、実はベックがミカエル3世の「従者団」と指摘している人々である。それゆえ節を改めてミカエル3世の「従者団」について分析を加え、それを踏まえたうえでミカエル3世と高官層との関係について考察を行うことにする。

### (3) 「従者団」の分析

ベックがミカエル3世の「従者団」のメンバーと見なしている人々は、『続テオフィロス年代記』において頻繁に言及される。先述したように、『続テオフィロス年代記』はミカエル3世を暗君として描写しているため、彼の「従者団」のメンバーもきわめて悪辣な人物たちとして描写されている。本節では個々の「従者」たちを分析していき、実際には彼らがいかなる人物だったのか考察していく。

最初に取り上げるのはヒメリオスである。彼は『続テオフィロス年代記』においてはきわめて下品に描写されている。しかし同時に、彼はパトリキオス位の人物とされている<sup>1</sup>。それゆえヒメリオスが中央行政機構内で高い官位を保持していた人物である可能性は高い。またミカエル3世死後の869/70年に開催されたコンスタンティノープル第四宗教会議に、政府側代表の一人として出席しているアンテュパトスの爵位を持つヒメリオスが、彼と同一人物と思われる<sup>2</sup>。要するに彼はミカエル3世の没後も政府の有力者としての地位を維持していたのである。ヴィンケルマンは彼について、ミカエルからバシレイオスの支持者に変わった、あるいは地位の高さゆえにバシレイオス1世も手が出せなかった、の二つの可能性を指摘している<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> ThC p.172.

<sup>2</sup> J.D.Mansi(ed.), *Sacrum Conciliorum nova et Amplissima Collectio* 16, 1902. (以下、Mansiと略) c.19, 27, 81, 96, 134, 143, 158.

<sup>3</sup> Winkelmann, S.83.



第二に、ケイラスとクラサスがあげられる。彼らは『続テオファネス年代記』によると、

（競馬の際に、）皇帝は青組で出馬した。また緑組からはパトリキオスでロゴテース・トゥー・ドゥロムーとなったトマスの父のコンスタンティノス（＝マニアケス）が、白組からはケイラス、赤組からはクラサスが出馬した。彼らは一方はプロアセクレティスの、またもう一方はドゥロモスのプロノタリオスの職務に専念せず、一人は青組の、またもう一人は緑組のコンピノグラフィオス（競馬開催書を書く役人）と化していた。

とある<sup>1</sup>。プロアセクレティスもドゥロモスのプロノタリオスも中央行政機構の要職である。それゆえビュアリの考えるように、彼らは皇帝と私的に競馬を楽しんでいた高官あるいは中堅官僚たちだったと考えられる<sup>2</sup>。ミカエル3世が競馬を楽しんでいたのがコンスタンティノープルのヒッポドロームではなく、首都郊外の聖ママス離宮に付属する競馬場だったことも忘れることはできない。ミカエル3世が行った競馬は離宮で行なわれていた皇帝の趣味だったのである。

なお、『シュメオン年代記』にもほぼ同様の記述があり、そこではケイラスに代わってアガリアノスが言及される。ケイラスとはアガリアノスのあだ名だった可能性も否定できない<sup>3</sup>。

第三はグリュロスである。彼は『続テオファネス年代記』によると、ミカエル3世によって総大主教に「任命」され、仲間と共に典礼のパロディーなどを行なって本当の総大主教であるイグナティオスを馬鹿にしていたという<sup>4</sup>。しかし彼については『偽シュメオン年代記』や10世紀に編纂された『イグナティオス伝』から、グリュロスというのはあだ名で本名はテオフィロス、プロトスパタリオスの爵位を持っていたことがわかる<sup>5</sup>。さらにコンスタンティノープル第四宗教会議のカノンからも、彼がバシレイオス1世時代にもプロトスパタリオスの地位を維持していたことが看取できる<sup>6</sup>。さらにグリュロスと共にイグナティオスを馬鹿にした人々も同じカノンで何人か言及され、みなスパタリオスやスパタロカンディダトスなどの中位の爵位を持った人々である<sup>7</sup>。彼らもケイラスやクラサスと同様、中堅官僚だったと考えられる。

四人目はバシリキノス（バシリスキアノス）である。彼は『続テオファネス年代記』によると、「犯罪者集団の一人で、取るに足らない女々しい宴会好きの男」だった<sup>8</sup>。しかし同時に『続テオファネス年代記』には、彼の兄弟のコンスタンティノス＝カプノゲネスがエバルコスだったことが記述されている<sup>9</sup>。また『シュメオン年代記』によると、彼はパトリキオスであった<sup>10</sup>。

<sup>1</sup> ThC pp.198-199.

<sup>2</sup> Bury(1912),p.162,n.2.

<sup>3</sup> ThM p.174,LG p.249,GCA p.835.:cf.P.Karlin-Hayter,"Michael III and Money",BS 50 (1989),pp.1-8,p.4-5.

<sup>4</sup> ThC pp.200-202.

<sup>5</sup> Ps.Sym.pp.662-664,Nicetas David Paphragnos,Vita Ignatii,in:PG 105,1862,c.528A-C.

<sup>6</sup> Mansi,c.154,169.

<sup>7</sup> Mansi,c.153-154.

<sup>8</sup> ThC p.250.

<sup>9</sup> ThC p.208,250.

<sup>10</sup> ThM p.174,LG pp.249-250,GCA pp.835-836.:cf.R.Guilland,"Patrices des règnes de Théophile et de Michel III",Revue des Etudes Sud-Est Européennes 8 (1970),pp.593-610,pp.602-603.

最後に、コンスタンティノス＝マニアケスをあげることができる。彼は前章で分析したように、テオフィロス～ミカエル3世時代初期にドゥルンガリオス・テース・ビグラスを努めていた。そしてミカエル3世時代末期にもこの職を務めていた<sup>1</sup>。注目すべきは彼の行動である。彼は843年のイコン崇拜復活に強硬に反対した人物である。また855年のテオクティストス暗殺時にはテオクティストスの救出を試みている<sup>2</sup>。このような失脚の危険がきわめて高い政治的行動を行なっているにもかかわらず、彼が失脚することはなかった。また子孫も10世紀に至るまで繁栄した<sup>3</sup>。

彼らの経歴から、我々はベックが考えていたのとは異なった「従者団」像を獲得することになる。彼らはみな高い官位や爵位を持っていた人々であり、中央行政機構の要職に就いていた、いわば官僚層の頂点に立っていた人々が多い。すなわち彼らが「統治機構の外部」に位置していたとは言い難い。彼らは明らかに高官層に属する人々である。

彼らはミカエル3世の近くにおいて、皇帝と官職を越えた親交を深めていたことが看取できる。彼らはケイラスやクラサス、ヒメリオスのように、皇帝の私的な競馬や酒宴に参加したりしている。また私的な行動のみならずグリュロスによる総大主教のイグナティオスへの誹謗行動のように、政治的目的を持った活動の際に、集団となって活動していることもわかる。彼らはバラバラにミカエル3世と結びついていたのではなく、一定のまとまりを持った集団だったのである。

ミカエル3世が政治の実務を行なうにあたって、彼らを特に利用していたことは、グリュロスの例からうかがえる。史料からはそれ以上明確にはできないものの、ミカエルは他の政治の問題についても、彼らと協議を行なったり、彼らに特別に任務を与えて利用していたのであろう。ミカエル3世の側近を形成していた高官の集団だったと考えるほうが実態に即している。すなわち彼らはミカエル3世の周囲において、政治の遂行にあたっていた。ミカエルは彼らを登用し、協議を行っていた。彼らは国家機構から完全に逸脱した存在ではなく、逆に国家機構の中核に位置する存在だったのである。

そしてミカエル3世と彼らとの関係は、テオフィロスと高官たちとの関係ときわめて類似している。ミカエル3世は明らかに、父のテオフィロスと同様の方策をもって高官たちと親密な関係を構築していたのである。

彼らの大半がバシレイオス1世時代になってもその地位を維持しており、政権交代が大きく影響を与えた形跡がないことも注目し得る。政権交代による支配層の大幅な入れ替えが起きたとは考えられない。無論ベックの主張するような社会の大規模な流動が起きたとは考えられないのである。

本節での検討を簡単に小括しておきたい。

ベックは支配構造や社会構造を説明するにあたり、「従者団」という概念を導入した。「従者団」は「統治機構外の統治手段」であり、社会的流動性をもたらす大きな要素であったとベックは主張した。

<sup>1</sup> Gen.p.58,ThM p.174,LG p.249,GCA p.835.:cf.Ps.Sym.p.681.

<sup>2</sup> Gen.pp.57-58,63-64.

<sup>3</sup> コンスタンティノス＝マニアケスの子のトマスはロゴテース・トゥー・ドゥロムーとなっている。もう一人の子のゲネシオスは9世紀末にマギストロスになっている。歴史家ゲネシオスはトマスの子で、コンスタンティノス7世時代にエビ・トゥー・カニクレイウーを務めている。



しかしながら本節で検討したように、ミカエル3世の周囲に存在した集団は、ベックの言うような「従者団」ではなかった。ミカエルの周囲にいた「従者団」は、実際には中央行政機構の要職を占めていた高官や官僚たちであった。彼らはミカエル3世と親密な関係を保ちつつ政治に携わっており、時にはその任務を越えて皇帝と交わり、また皇帝のために集団として行動をとっていた。要するに彼らはミカエル3世が最も安心して利用できた、皇帝の側近高官集団だった。彼らは確かに官僚としての任務を越えてミカエル3世と親交を重ね、また政治的行動をとってはいる。しかしながら彼らは明らかに中位以上、そして大半は高位の官僚たちであった。換言すれば彼らはビザンツ帝国の統治機構のまさに中枢にあって、ビザンツ帝国の政治を担っていた人々であった。彼らは官僚制と対立する存在ではなく、官僚制の中枢に位置していたのである。すなわちミカエル3世の「従者団」とはテオフィロス時代に成立した高官層に他ならない。

ミカエル3世のとったこうした方策は、父のテオフィロスが高官たちに対してとっていた方策ときわめて類似している。ミカエル3世はテオフィロスの手法を受け継いで、高官層と緊密な人間関係を構築していたのである。

#### (4) ミカエル3世と高官層

本節では前節までの分析を念頭におきつつ、ミカエル3世と高官層との関係、および裁量権確保のための方策について検討を加えていく。テオフィロス時代とは異なった状況として、ミカエル3世時代にはバルダスの持つ政治的実力がきわめて大きくなっていた。それゆえミカエル3世と高官たちとの関係を考える上で、バルダスの存在を無視することはできない。本節でもこの点に留意しつつ分析を加えていきたい。

ミカエル3世と高官層との関係を考える上で無視できぬことが三つある。第一の点は、中央行政機構内に前節で検討したミカエル3世の「従者団」の人々を始めとして、ミカエル3世の側近と考えられる人々が多いことである。例えば先述したグリュロス<sup>1</sup>は、サケラリオス職にあった可能性が高い<sup>1</sup>。858年にフォティオスが総大主教に就任した後、プロトアセクレティスにはケイラス（アガリアノス）が就任している。またこの時期のエパルコスにはニケタス＝オオリュファス<sup>2</sup>とコンスタンティノス＝ミュイアレス<sup>3</sup>が就任している。このうちニケタス＝オオリュファスは『偽シュメオン年代記』や『続ゲオルギオス年代記B』によると、ミカエル3世に「忠実な人間」で、ミカエル3世が暗殺されることを聞くや、彼はバシレイオス1世に対して復讐を企てようとしたという<sup>4</sup>。ここからも彼がミカエル3世にきわめて忠実な存在だったことがわかる。なお彼はミカエル3世によってドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーにも任命されている<sup>5</sup>。また前章で分析したようにこの両家ともミカエル3世時代以前から中央行政機構で要職を占めていた一門である。さらにドゥロモスのプロトノタリオスのような中堅の役職にもクラサスが就任している。ミカエル3世の「従者団」の中にはスパタリオスやスパタロカンディダトスのような中位の爵位を持った人々も存在していたことを考えると、他にも中堅官僚のなかにミカエル3世の側近がい

たことは確実である。

こうしたことから、ミカエル3世は自己の側近を中央行政機構の要職につけることによって、行政機構内における自己の立場の足掛かりとしていたことがわかる。これまでの分析から、ミカエル3世の「従者団」は中央行政機構内に形成されていたミカエルの側近集団だったことがわかる。そして『続テオフィアネス年代記』が伝える「従者団」とミカエルの行動も、ミカエルと彼ら側近官僚集団との親密な関係を示すものである。

特にコンスタンティノス＝ミュイアレスやニケタス＝オオリュファスが務めていたエパルコス職は、コンスタンティノープルの行政を担当する職務であり、特に軍事遠征等でコンスタンティノープルを空けることの多かったミカエル3世にとっては重要な意味を持っていたであろう<sup>1</sup>。

ミカエル3世は彼らに対して気前よく贈与を行なっている<sup>2</sup>。贈与が側近官僚集団との親密さを形成する手段だったことは明らかである。またミカエル3世は彼らの子息たちに対して頻繁に洗礼の代父を務めている。前章でも指摘しているように、洗礼の代父となることを通じて形成された擬制的親族関係は、時として血縁や婚姻による本来の親族関係よりも強力な人間関係を形成することがあった。また従来からの友好関係の強化にも資した。それゆえミカエル3世は、側近の高官たちとの関係を強化するために、贈与や洗礼を通じて強力な社会的結合を形成しようとしたと考えられる。

以上要するにミカエル3世は、国家システムの内部に自らに忠実な高官たちを送り込むことに成功していた。それゆえ『続テオフィアネス年代記』の伝えるように、「全てのアルコンたち」がバルダスに忠実だったというのは誇張である。バルダスに対してよりも、ミカエル3世と親密な関係をもっていた高官たちもかなりいたのである。その中には、ニケタス＝オオリュファスやコンスタンティノス＝ミュイアレスのように、ミカエル2世・テオフィロス時代から皇帝に忠実だった家門のメンバーが含まれている一方、ミカエル3世によって新たに重用された中堅官僚たちも含まれている。こうした方策は、政治を行うに際してミカエル3世の独自性の発揮のためには不可欠だったのである。

看過できないのは、ミカエル3世と海軍との結びつきである。タグマタの頂点にたつドメステイコス・トーン・スコローンにバルダス、アンティゴノス、ペトロナスとバルダスの一族が陸続と就任していたのに対して、ミカエル3世は中央艦隊との結びつきが強かった。例えば先に挙げたニケタス＝オオリュファスがドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーに就任していることも、それを示唆する。さらにミカエル3世の「従者団」のメンバーの一人であるバシリキノス（バシリスキアノス）も、「皇帝の三段権船の乗組員」であった<sup>3</sup>。彼のバトリキオスという地位を考えると、彼は中央艦隊の幹部であったと見なすのが自然である。さらに、中央艦隊を設置・強化してきたのがテオフィロスであることや、恐らくミカエル3世の時代にも中央艦隊がかなり強化さ

<sup>1</sup> Photius, *Epistulae*, Leipzig, 1983-1988, 193.

<sup>2</sup> ThM p.168, LG p.240, GCA p.826.

<sup>3</sup> ThM p.173, LG p.248, GCA p.834.

<sup>4</sup> GCB p.17, Ps.Sym., p.687.

<sup>5</sup> GCB p.17, Ps.Sym., p.687.

<sup>1</sup> 860年のコンスタンティノープルへのロシア艦隊襲来の際も、当時小アジア東部へ遠征を行っていたミカエル3世と、エパルコスのニケタス＝オオリュファスとの密接な連絡のあったことが確認できる。ThM p.168, LG pp.240-241, GCA pp.826-827.

<sup>2</sup> ThC p.172.

<sup>3</sup> ThC p.208, 250.



れていることも無視できない<sup>1</sup>。ミカエル3世はテオフィロスの中央艦隊強化策を受け継いだ。そしてそれと同時に中央艦隊との結びつきを強化して、自らの権力行使の基盤としたのである。

ただしミカエル3世と陸軍との結びつきが希薄だったわけではない。ミカエル3世はしばしば自ら軍を率いて小アジア東部に進出し、ムスリムや当時大きな勢力となっていた異端勢力であるパウロ派と戦っている<sup>2</sup>。特に、対ムスリム戦において守勢から攻勢に転じるきっかけとなった戦いとして有名な863年のララカオンの戦いの際には、ミカエル3世は別動隊を率いてムスリム軍の後方を攪乱し、ビザンツ軍の勝利に大きな役割を果たしたことが明らかになっている<sup>3</sup>。ミカエル3世もテオフィロスと同様、自ら軍を率いることによって陸軍やその幹部たちとの個人的人間関係を構築していたのである。

- 10 以上要するにミカエル3世時代、高官層はミカエル3世とバルダスという二人の頂点の下、安定した集団を形成していた。それゆえミカエル3世はバルダスに伍して自らの独自性を確保して、皇帝権力を行使していく必要性があった。そのためにミカエル3世は、高官層内に自らに忠実な集団を形成して、彼らを通じて自らの発言権を強化した。特に帝国の諸機能が集中するコンスタンティノープル行政全般を司るエバルコスと、皇帝に忠実な軍事力である中央艦隊、そしてその長官であるドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーに対しては、ミカエル3世は特に注意を向けていた。その一方、もう一人の実力者であり、陸軍に対する影響力を強く持っていたバルダスに対しても親密な関係を構築・強化して、高官層全体に皇帝の影響力が及ぶよう意図していた。

#### (5) おわりに

- 20 これまで分析してきたように、ミカエル3世は高官たちや中央行政機構の中堅官僚たちの内部に、自らに忠実な側近官僚集団を形成することによって発言力を確保した。その際ミカエル3世が利用したのは、贈与や擬制的親族関係の確保、私的な信頼関係の形成などだった。ミカエル3世は、ベックが主張するような「統治機構外」ではなく、統治機構の内部、高官層の内部に自らの側近集団を形成したと理解できる。さらにミカエル3世は陸軍や海軍などとも密接な関係を

<sup>1</sup> ミカエル3世と海軍に関しては、J.-B. Bury, "The Naval Policy of the Roman Empire in relation to the western Provinces, from the 7th to the 9th century", *Centenario della nascita di Michele Amari* vol. 2, Palermo, 1910, pp. 1-14, Lewis, pp. 156-159, Malamut, pp. 80-82.

<sup>2</sup> ビザンツ側の史料にはミカエル3世の軍事遠征に関してはほとんど報告がないか、あるいは『続テオフィアネス年代記』のように否定的な色彩の強いものである。ThC pp. 167-168, 176-179. しかしながらH. グレゴワールは、ミカエル3世がしばしば軍を率いてパウロ派やムスリムと戦い、勝利を収めたことを明らかにした。H. Grégoire, "Inscriptions historiques byzantines.", *Byzantion* 4 (1927), pp. 437-468, id., "Michel III et Basile le Macédonien dans les inscriptions d'Ancyre I et II", *Byzantion* 5 (1929/30), pp. 327-340, id., "Etudes sur l'épopée byzantine", *Revue des Etudes Grecques* 46 (1933), pp. 29-69.; cf. *The History of al-Tabari*, vol. 34: *Incipient Decline*, J. L. Kraemer (tr.), Albany, 1989, pp. 146-147, 164-165, *The History of al-Tabari*, vol. 35: *The Crisis of the Abbasid Caliphate*, G. Saliba (tr.), Albany, 1985, pp. 9-10.; cf. 渡辺金一「歴史記述におけるビザンツ皇帝の虚像と実像—『続テオフィアネス』第四巻のミハエル3世について—」『ヨーロッパ—経済・社会・文化—』創文社、1979年、51-81頁。

<sup>3</sup> G. L. Huxley, "The Emperor Michael III and the Battle of Bishop's Meadow (A.D. 863)", *GRBS* 16 (1975), pp. 443-450.; cf. H. Grégoire, "Etudes sur le neuvième siècle", *Byzantion* 8 (1933), pp. 515-550.

構築することを忘れてはいなかった。特に海軍との結びつきはきわめて強いものだった。ミカエル3世の方策は当時の支配構造を良く理解した、合理的なものだった。

- 10 だがこうした成果を生み出すことができた背景に、テオフィロスの行動と、彼の築き上げた成果があったことを忘れてはならない。ミカエル3世は叔父のバルダスや、コンスタンティノープル総大主教のフォティオスらとともに政治を行っているが、彼らはテオフィロスによって皇帝一門に組み込まれた人々である。ミカエル3世は高官たちと緊密なネットワークを構築・維持しつつ、安定した政権を現出させていた。このような政権のあり方は、実は前章で考察したように、父親のテオフィロスが構築したものである。ミカエル3世はテオフィロスから高官たちのネットワークを引き継ぎ、維持しながら多くの政治的成果を積み上げていったのである。そしてその際に行った方策もまた、テオフィロスから受け継いだものであった。ミカエル3世はテオフィロスのきわめて忠実な後継者だったのである。それではなぜ、ミカエル3世の政権はバルダスの暗殺、そしてそれに続くミカエル3世の暗殺という悲劇的な形で終わらなければならなかったのだろうか。この点についての詳細な分析は次章で行うことにしたい。

前章と本章で考察してきたように、9世紀の中盤、テオフィロスとミカエル3世の時代には皇帝と高官・高位保持者たちの関係はきわめて安定し、両者が密接に関連しつつ、安定した政治体制を現出させていたことが看取できる。またそれと同時に、地方の有力者たちと皇帝の結びつきも大きな意味を持っていた。地方の有力者たちを中央政府へ取りこむことによって、地方に対する中央政府の優越を一層確かなものにするのができたからである。ビザンツ帝国においては中央集権的皇帝専制体制はまさに彼らの時代、9世紀中盤に頂点に達する。このことは、このような体制が皇帝と高官・高位保持者たちとの親密かつ強力なネットワーク、及び地方に対する中央の優越によって支えられていたことを物語っている。

高官や高位保持者たちが政治的実力の源泉としていたのは中央行政機構であった。確かに、8世紀後半以降高官や高位保持者たちは急速に政治的影響力を増大させ、9世紀初頭には皇帝に対しても大きな影響力を行使できるまでになっていた。しかし中央行政機構が皇帝を頂点とし、皇帝によって主導される体制をとっている以上、高官・高位保持者たちにとっても強力に安定した皇帝権力は不可欠のものであった。高官や高位保持者たちはなお、皇帝権力から完全に独立して成立しうる存在ではなかったのである。9世紀初頭のように皇帝権力が不安定で、動揺を繰り返していた時代には高官や高位保持者たちは大きな政治的影響力を持っていたが、このような時代にはビザンツ国家それ自体が動揺している。帝国の安定のためには、皇帝と高官・高位保持者たちの密接な結びつきが不可欠だったのである。

30 しかしながら次章以下で考察していくように、ミカエル3世が暗殺されてバシレイオス1世が即位して以降、このような皇帝と高官層との関係、さらには中央と地方との関係は次第に崩壊していく。それはビザンツ帝国の中央集権的皇帝専制体制の崩壊をも意味していた。ビザンツ帝国の国家システムは、9世紀後半以降早くも次の変化の過程に入っていた。要するにテオフィロスとミカエル3世の時代は、皇帝と高官層との関係がもっとも安定した時代であると同時に、中央集権的皇帝専制国家体制の帰結点でもあった。9世紀後半以降、帝国は15世紀の滅亡にまでいたる、長い地方分権化の過程へと入っていく。9世紀中盤は、ビザンツ帝国の政治体制のいわば転回点をなしているのである。



## 5 バシレイオス1世時代の支配層

### (1) はじめに

867年9月のある晩、宴会で泥酔して眠り込んでいたミカエル3世の寝所を深夜襲撃した集団があった。ミカエル3世とその護衛の者たちはほとんど抵抗もできずに斬り殺された。ミカエル3世に代わって皇帝となったのがバシレイオス1世である。だが驚くべきことに、バシレイオス1世はすでに1年以上も前からミカエル3世の共同皇帝となっていた。そしてミカエル3世を暗殺したのも他ならぬバシレイオス1世とその配下の者たちであった。

東西国境における積極姿勢、在位中に法典の編纂事業などが積極的に進められたこと、そして孫のコンスタンティノス7世自らが著した伝記において徹頭徹尾称賛されていることなどのため、その治世のプラス面が強調されることの多いバシレイオス1世であるが、その治世はまさに血なまぐさい出来事から始まっているのである。血なまぐさいのは治世当初のみではない。バシレイオス1世の治世には帝国支配層による陰謀の動きが繰り返して露見している。また治世末期、880年代には息子のレオン(6世)との対立が激化した。

レオン6世との対立については別の章において論じることとして、本章ではバシレイオス1世の即位をめぐる状況、および即位後の皇帝をとりまく状況について考察を行っていく。考察を行う際に鍵となるポイントは以下の2点であろう。第1に、既に共同皇帝についていたバシレイオスが、自らを共同皇帝位にまで引き上げてくれたミカエル3世をなぜ暗殺しなければならなかったかという点である。これまで分析してきたように、ミカエル3世は父のテオフィロスから受け継いだ強力な官僚・高官たちとの人的ネットワークのまさに頂点にあった。ミカエル3世の暗殺は、彼の背後にあった支配層を敵に回すことになるから、バシレイオス1世時代に支配層の陰謀が頻発したことの背景の一端もここから説明できる。だがバシレイオスがミカエル3世を暗殺しているという事実は、当時の帝国支配層の多くを敵に回す危険を犯してでも、ミカエル3世を暗殺しなければならない状況があったことを我々に示唆している。第二点目は、彼の治政下における状況である。はじめに述べたように、バシレイオス1世の時代には帝国の政治支配層による陰謀事件が何回かおきている。これは、皇帝と政治支配層との関係が安定したものではなかったことを示唆している。それゆえ本節ではこうした、中央の政治支配層との関係が皇帝の行動にどのような影響を及ぼしたのかについても、分析が加えられなければならない。

バシレイオス1世をめぐる政治状況や帝国支配層との関係については、そう数は多くないものの古くから研究が続けられてきており、最近もC.マンゴやE.キスリンガーらによって研究成果が積み重ねられてきている<sup>1</sup>。しかしこれらはいずれも散発的な研究のレベルにとどまっており、バシレイオス1世時代の政治状況や帝国の政治支配層の行動の背景などについて、総合的な観点が獲得できているわけではない。それゆえ本章ではこうした先行研究を積極的に利用しつつ、バシレイオス1世時代の政治状況がいかなるものであったのか、総合的に解釈していきたい。

<sup>1</sup> C. Mango, "Eudokia Ingerina, the Normans and the Macedonian Dynasty", *ZRVI* 14/15(1973), pp. 17-27 (以下、Mango と略)。: E. Kislinger, "Der junge Basileios I. und die Bulgaren", *JÖB* 30(1981), S. 137-150.: id., "Eudokia Ingerina, Basileios I. und Michael III.", *JÖB* 33(1983), S. 119-136.: R. Guillard, "Contribution à la Prosopographie de l'Empire Byzantin. Les Patrices: Sous les règnes de Basile I<sup>er</sup> (867-886) et de Léon VI (886-912)", *BZ* 63(1970), pp. 300-317.

### (2) バシレイオスの経歴と「従者団」

バシレイオスの経歴については、ベックが自らの理論を構築するにあたって最大の例として取り上げている。ベックによると、バシレイオスは貧農の家に生まれ、若くして首都へ出て始めミカエル3世の一族のテオフィリッツェスの、次いでミカエル3世の「従者団」に加盟して、団内での地位を急上昇させていった。そしてミカエル3世の「従者団」に所属する一方で、自らの「従者団」をも形成し、その助力を得て皇帝位を獲得したという<sup>1</sup>。

しかし、ミカエル3世の「従者団」が、前章で考察したようにその存在に疑問が残るため、「従者団」を利用したバシレイオスの社会的上昇、というベックの所説の再検討は不可避である。またバシレイオスが実際に自らの「従者団」を保持していたかについても再検討が必要である。

それゆえ本節では、始めにバシレイオスの経歴を分析して、彼の社会的上昇が、実際にはどのような行なわれたのかについて検討する。そして次にバシレイオスの「従者団」の成員についても検討を加え、バシレイオスの「従者団」が社会的上昇の機会となっていたのか、またさらにバシレイオスが実際に「従者団」を保持していたのかについても考察していく。

#### ① バシレイオスの経歴

バシレイオスはテマ・マケドニアの中心都市であるアドリアノーブルの近郊の農家の出身である。彼の両親は9世紀前半にブルガリア軍によって連行され、20年ほどドナウ北岸で過ごした後、836年頃にビザンツ国内に帰還して来た<sup>2</sup>。その際テマ・マケドニアに国家から土地を支給されたと考えられ、実際『続テオフィルス年代記』においても、バシレイオスの両親は使用人を利用できる程度の土地を持っていたと描写されている<sup>3</sup>。

バシレイオスは成人すると始めに、マケドニアのストラテゴスだったツァンツェスに仕える。注目すべきはこのツァンツェスが、ドナウ北岸に連行されていたビザンツ人たちの指導者の一人だったことである<sup>4</sup>。また後にバシレイオスが単独皇帝となると、ツァンツェスの一族(恐らく息子)であるステュリアノス=ザウツェスが側近として活躍している<sup>5</sup>。資料からはこれ以上明らかにし得ないものの、バシレイオスの一族とツァンツェスの間には、以前から何らかの人間関係があった可能性が高い。

バシレイオスはすぐにツァンツェスのもとを去って、コンスタンティノーブルへ出るようになる。史料は一致して、彼がコンスタンティノーブルの城壁近くにあった修道院の修道士だったニコラオス・アンドロサリテスの口利きで、当時コメス・トーン・テイケオンだったテオフィリッツェスに仕えることになったとしている<sup>6</sup>。さらに『続テオフィルス年代記』や『ゲネシオス年代記』によると、バシレイオスはコンスタンティノーブルに出て来た当初から、コンスタンティ

<sup>1</sup> Beck, *Gefolgschaftswesen*, S. 4-18.

<sup>2</sup> ドナウ北岸に連れ去られた住民たちの動向とバシレイオスの経歴については ThC pp. 211-255, ThM pp. 161-164, LG pp. 231-235, GCA pp. 817-821.

<sup>3</sup> ThC p. 218.

<sup>4</sup> ThM p. 163, LG p. 232, GCA p. 819. なお ThC は実家から直接コンスタンティノーブルへ出たとしている。

<sup>5</sup> 第7章参照。

<sup>6</sup> ThC pp. 223-224, Gen. pp. 76-77, ThM p. 63, LG p. 234, GCA p. 819.



ノス＝マニアケスと親交を持っていたといい、その理由について『続テオフィアネス年代記』は「彼自身もアルメニアに由来する一族だったから」としている<sup>1</sup>。

ダネリス未亡人との関係もバシレイオスの出自を知る手掛かりとなる。『続テオフィアネス年代記』によると、バシレイオスはテオフィリツェスと共にテマ・ペロポネソスのパトラスという町に赴いた際、かの地の大富豪だったダネリス未亡人から多額の贈与を受けている<sup>2</sup>。バシレイオスがパトラスに赴いたのは、テオフィリツェスに仕えるようになった直後である<sup>3</sup>。仮にバシレイオスが貧農出身だったとすると、このような時期に地方の大富豪が何の理由もなくバシレイオスに多額の贈与を行なうとは考えにくい。コンスタンティノープルに出て来る以前から、バシレイオスが中央で何がしかの発言力を持っており、ダネリス未亡人が自らの中央の代弁者としてバシレイオスと親密な関係を結ぼうとしたと考えなければ、ダネリス未亡人の贈与の理由を説明することはできない。いみじくもジェンキンスが述べているように、バシレイオスは「よく世話されて」いて、「運を試すということはなかった」のである<sup>4</sup>。

テオフィリツェスに一年あまり仕えた後、バシレイオスはテオフィリツェスの推薦によってミカエル3世のヘタイレイアに編入される<sup>5</sup>。ベックはヘタイレイアをミカエル3世の「従者団」と考えているが過ちで、ヘタイレイアは先述したように正式な国家機構である。また前章で検討したミカエル3世の側近集団の人々と全くつながりを持っていない。さらにバシレイオスはすぐにプロトストラトルとなってヘタイレイアを離れている<sup>6</sup>。その結果バシレイオスとヘタイレイアとの関係が全くなくなってしまうとは考えられないものの、ヘタイレイアをミカエル3世の私的な「従者団」と考えることには無理がある。

ミカエル3世に仕えるようになって以降、バシレイオスはミカエルの信任を得て急速にその地位と影響力を強化していく。865年にはパトリキオスの爵位とバラコイモメノスの官位を得、さらに翌866年にはバルダスを暗殺して共同皇帝位に就く。

こういったバシレイオスの経歴を考えていく上で注意すべき点がある。それは、彼が行政機構に関係する役職ではなく、皇帝の身边にいて皇帝の私的な世話をする、家産機制的性格の強い役職を歴任していることである。そして前章で分析したミカエル3世の側近高官集団とは、コンスタンティノス＝マニアケスを除くとバシレイオスとの間の人間関係が全く看取できない。またコ

<sup>1</sup> ThC p.230, Gen. p.78. 『ゲネシオス年代記』は、バシレイオスとコンスタンティノスが「近縁関係 ἀγγιστεία」にあったとしている。

<sup>2</sup> ThC pp.226-228.

<sup>3</sup> バシレイオスがコンスタンティノープルにやって来たのは856年の春頃。N. Adontz, "L'age et l'origin de l'empereur Basile I (867-886)", *Byzantion* 8(1933), pp.475-500, p.489. パトラスに赴いたのは856年の晩春から初夏にかけての頃。N. Tobias, *Basile I (867-886), The founder of the Macedonian Dynasty: A study of political and military history of the Byzantine Empire in the ninth century*, Ph.D. thesis of Rutgers University, 1969, pp.109-110.

<sup>4</sup> R. J. H. Jenkins, "The Classical Background of the Scriptorum Post Theophanem", *DOP* 8 (1954), pp.13-30, pp.27.

<sup>5</sup> ThM pp.160-161, LG p.230, GCA pp.816-817.

<sup>6</sup> ThM p.166, LG p.237, GCA pp.823-824.

ンスタンティノス＝マニアケスもバシレイオスと同様に、ドゥルンガリオス・テース・ビグラスという、家産機制的性格の強い役職に就いていた。こうしたことから、バシレイオスの急速な昇進はミカエル3世との私的な信頼関係が大きく影響していた可能性が高いものの、ベックが主張しているように「従者団」を利用しての上昇であったとはいえないことがわかる<sup>1</sup>。

## ② バシレイオスの「従者団」

先述したように、ベックはバシレイオスもまた自らの「従者団」を組織し、彼らをバルダスやミカエル3世の暗殺の際に投入して政権の獲得に成功したと考えている。本項ではバシレイオスの「従者団」というものがいかなる集団であるのか、分析していきたい。

『シュメオン年代記』によると、バルダス暗殺には「彼（バシレイオス）の兄弟のマリアノス、彼の兄弟たちであるシュンバティオスとバルダス、彼の従兄弟であるアシュレオン、さらにペトロス＝ブルガロス、ヨハネス＝カルドス、そしてコンスタンティノス＝トクサラスが加わっていた」。また以上の人々の他、ミカエル3世暗殺にはヤコビツェス＝ベルセス、エウロギオス＝ベルセス、アルタパドス、グレゴリオス＝フィレモノスが参加、あるいは関与している<sup>2</sup>。彼らがバシレイオスと親しい関係を持った集団を形成していたことは確実である。

彼らは大別して、バシレイオスの一族とそれ以外の人々に大別できる。始めにバシレイオスの一族について検討していく。

バシレイオスの兄弟であるマリアノスは、コンスタンティノス7世の編纂した『儀式について』と、マリアノス宛の総大主教フォティオスの書簡から、ドメスティコス・トーン・スコローンだったことがわかる<sup>3</sup>。そして彼の在職期間についてはヴィンケルマンが、866年にバルダスが暗殺された直後に任命されたことを明らかにしている。すなわちミカエル3世暗殺時には国家の要職を務めていたことになる。またヴィンケルマンはマリアノスが、ドメスティコス・トーン・スコローンに就任する以前から何らかの役職に就いていたと指摘している。また彼はバシレイオス1世時代にはマギストロスの高爵位を得ている<sup>4</sup>。

シュンバティオスについても同様にヴィンケルマンが印章資料などから、ドメスティコス・トーン・エクスクリトーンに、マリアノスと同時期に就任したことを明らかにしている<sup>5</sup>。シュンバティオスは『儀式について』によると、皇帝一門として丁重に埋葬されている<sup>6</sup>ので、バシレイオス1世時代にも高い地位を得ていたと推定できる。バルダスについては他に何の資料も残っていないが、彼の子のバシレイオスは後にライクトルになっており、子孫も10世紀に至るまで繁栄し

<sup>1</sup> 彼は皇帝の側近として大きな政治的影響力を持つようになったとはいえ、中央行政機構の高官となったわけではなく、その社会的地位も高官たちと比べて不安定であった。それゆえ彼が社会的に上昇したとは、この時点ではまだ言いがたく、実際高官たちからも彼が社会的地位を上昇させたとは認識されていなかっただろう。cf. K. Hopkins, "Elite Mobility in the Roman Empire", *Past and Present* 32(1965), pp.12-26.

<sup>2</sup> ThM pp.171-171, 175-176, LG pp.244, 251-252, GCA pp.829-830, 837-838.

<sup>3</sup> Constantinus VII, *De Cerimoniis*, Bonn, 1829(以下、DeCer.と略), 648.: Photius, *Epistulae*, 189, 190.

<sup>4</sup> Winkelmann, S.89-91.

<sup>5</sup> Winkelmann, S.92-94.: ZV 2403.

<sup>6</sup> DeCer., p.648.



ている<sup>1</sup>。バシレイオスの従兄弟のアシュレオンは、『シュメオン年代記』によるとバシレイオス1世時代に罪を得て追放され、その後奴隷たちによって暗殺された<sup>2</sup>。他には何の資料もない。ただしここから少なくともバシレイオス1世時代初期には優遇されていたことは看取できる。

次にバシレイオスの一族以外の人々について検討していく。第一にヨハネス＝カルドスは『シュメオン年代記』によると、「カルディアのストラテラテス（ストラテゴス）になったが、皇帝に対して陰謀を企図したため、ストラテラテスのアンドレアスによってはりつけにされた」<sup>3</sup>。一方、カルディアの中心都市であるトレビゾンドの府主教だったヨハネス・ラザロプロスの『聖エウゲニオスの奇蹟概説』などによると、ヨハネスはパトリキオスの爵位を持ち、シュルメナなる地の修道院の創設者の子で、バシレイオス1世時代にカルディアのドックスを務めていたという<sup>4</sup>。こうしたことからヨハネスはカルディア地方で経済的にも政治的にも発言力を持っていた、地方の有力者だったと考えられる。

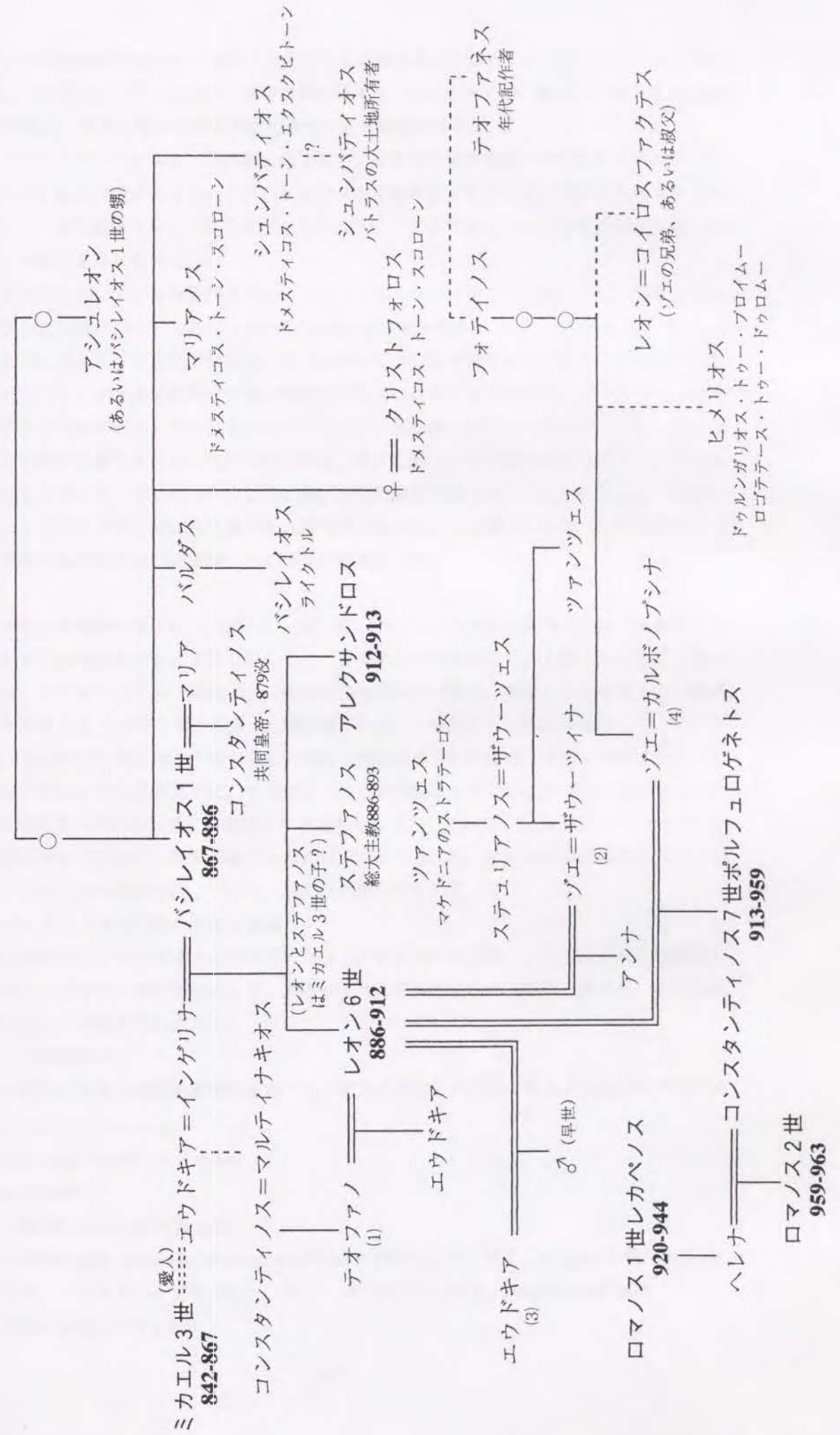
第二にコンスタンティノス＝トクサラスがあげられる。彼は、『シュメオン年代記』によるとテマ・キビュライオタイで不遇の死を遂げている<sup>5</sup>。また『コンスタンティノープル史蹟案内』によると、彼はマンガラピテス（侍従）だったという<sup>6</sup>。バルダスが暗殺される直前にミカエル3世のテントを訪れたバルダスに正式に應對したのがコンスタンティノスだったこと<sup>7</sup>も、彼がマンガラピテスだったことを強く示唆している。

コンスタンティノス＝トクサラスが務めていたマンガラピテスという役職は、次章で分析するようにレオン＝アルギュロスやニケフォロス＝フォーカス（初代）など、小アジア出身の有力者が若年時に務めることの多かった役職である。コンスタンティノス＝トクサラスがキビュライオタイという小アジアのテマで没していることを考えると、トクサラス家も小アジアに根拠をおく家門だったと考えられる。なお、917年にミカエル＝トクサラスなる人物がパトリキオスのヨハネス＝ロディノスと共にシリアに使者として赴いている<sup>8</sup>。彼がコンスタンティノス＝トクサラスの一族である可能性は高い。

ベトロス＝ブルガロスについては何の資料もない。ヤコビツェス＝ペルセスについても彼の悲

系図(2) バシレイオス1世・レオン6世関係

数字は在位年。括弧内の数字はレオン6世との結婚の順。点線は血縁関係。



<sup>1</sup> ThM p.175,GCA p.837.:Herlong,p.77.

<sup>2</sup> ThM p.177,LG p.253,GCA pp.839-840.

<sup>3</sup> ThM p.177,LG p.253,GCA p.839.

<sup>4</sup> N.E.Beés,"Sur quelques évêchés suffragants de la Métropole de Trébizonde",*Byzantion* 1(1924),p.117-137,p.126-127.ただしこの資料は14世紀とかなり後代のものである。資料で言及される「ドックス」も、カルディアのストラテゴス職のことであるか、あるいはカルディアのドックス職のことかも不明である。cf.Listes,p.53.また『ゲネシオス年代記』によると、彼の家門名はツィフィナリテスであったという。家門名をもっているということは、彼の一族が家門的つながりを持っていたことを示唆している。Gen.,p.75.:cf.Guilland,op.cit.,p.303.

<sup>5</sup> ThM p.177,LG p.254,GCA p.840.

<sup>6</sup> SOC,p.250.

<sup>7</sup> ThM p.171,LG p.244,GCA p.830.

<sup>8</sup> ThC p.388,ThM p.207,LG p.294,GCA pp.880-881.



惨な死についての情報しかない<sup>1</sup>。彼はアペラテスなる後辞を付されることがあるが、アペラテスというのは『儀式について』によると軍事義務を負えなくなったテーマの一般兵士が編入された軽装の兵士である<sup>2</sup>。ゆえに彼は社会の下層出身だった可能性がある。

アルタバドスは『シュメオン年代記』によるとミカエル3世暗殺時にヘタイレイアルケスだった<sup>3</sup>。また10世紀の史料によると、バシレイオス1世時代にマギストロスのアルタバドスなる人物がいて、彼の妻はヘレナという名だったという<sup>4</sup>。アルタバドスという名は稀な名だったから、同一人物である可能性は高い。

エウロギオスについては何の資料もない。グレゴリオス=フィレモノスは、バシレイオスが単独皇帝になった直後にパピアスになっている<sup>5</sup>。他には情報がない。

- 10 以上のようにバシレイオスの「従者団」のメンバーについて検討を加えてきた。そしてそこから、その中でバシレイオス1世時代に高い地位を得ている者とそうでない者との間に、明白な差異があることが看取できる。すなわちバシレイオスの一族か地方の有力者たちが、バシレイオス1世時代に大きな影響力を行使しているのである。それに対してその他の者たちがバシレイオス1世時代に有力者になっていたということは資料からは看取できない。バシレイオスの「従者団」が、バシレイオスとの間に結ばれた私的な人間関係であったことは疑えないが、しかし社会的上昇を獲得するための条件は「従者団」への参加ではなかった。

### ③ 小括

- 20 本節での分析を簡単にまとめておきたい。第一に、バシレイオスの社会的上昇は「従者団」に加盟したために達成されたものではなかった。「従者団」が社会的上昇の手段となっていなかったことは、バシレイオスの「従者団」の検討からも明らかである。またバシレイオスの一族が高い地位を享受することができたのは、血縁関係が存在していたからに他ならない。

第二に、中央の有力者と地方の有力者との間の人間関係の存在が指摘できる。ダネリス未亡人やヨハネス=カルドスなどのように、中央の有力者との関係をもっていなかったと思われる人々も、機会を捉えて中央の有力者との結びつきを獲得しようとしていた。さらにバシレイオスの「従者団」の成員の中で社会的上昇が可能だったのはバシレイオスの一族か地方の有力者という、バシレイオスと何らかの関係を持っていた人物たちに限られていた。

### (3) バシレイオス1世の即位と政治支配層

- 30 本節では865年にバシレイオスがバラコイモメノスに就任して以降、ミカエル3世をも暗殺して単独皇帝となるまでの過程を分析して、バシレイオスの単独統治が実現した要因と、政治支配層の動向について考察していきたい。

#### ① バルダスの暗殺まで

バシレイオスが大きな政治的影響力を持つようになるのは、バラコイモメノスに任命されてか

<sup>1</sup> ThM p.177, LG pp.253-254, GCA p.840.

<sup>2</sup> DeCer., pp.695-696.

<sup>3</sup> ThM pp.176-177, LG p.252, GCA p.838.

<sup>4</sup> *De Sacris aedibus deque Miraculis Deiparae ad Fontem*, AASS Nov.III (以下、Deiparaeと略), p.882D. なおジェンキンスはこのヘレナをバシレイオス1世の娘としている。Jenkins, op.cit., p.28.

<sup>5</sup> ThM p.176, LG p.252, GCA p.838.



らである。バラコイモメノスはテオフィロス時代に新たに設置された<sup>1</sup>。宮廷内で皇帝のそば近くに個人的に仕えることの多い役職であるため、皇帝に対する個人的な影響力が高い役職であった。バラコイモメノスは既にテオドラ時代の末期から、宦官のダミアノスが努めていた。855年のテオクティストスの暗殺も、ダミアノスがミカエル3世を動かしてバルダスと結ばせたことが成功につながっている<sup>2</sup>。またダミアノスがバラコイモメノスを罷免されたのも、カイサルとバルダスと対立するようになったからであった<sup>3</sup>。それゆえバシレイオスのバラコイモメノス就任は、バシレイオスの政権内での政治的影響力を飛躍的に高めた。そして日ならずして、バシレイオスとバルダスは激しく対立していく<sup>4</sup>。

10 バシレイオスとバルダスの対立は、バルダスの暗殺という事件で終わる。866年4月、ミカエル3世はバシレイオスやバルダスを引きつれてクレタ遠征の軍を起こす。そしてクレタの対岸に当たるテマ・トラケシオンのケボイという地までやってきたとき、バルダスは皇帝のテントの中で暗殺された。クレタ遠征は即刻中止される。コンスタンティノープルに戻ったミカエル3世は翌5月にバシレイオスを共同皇帝に任命した<sup>5</sup>。

20 この結末はバシレイオスの立場を考えると当然の帰結であった。バルダスの暗殺に関与していたのは、ミカエル3世とシュンパティオスを別にすると、前節で分析したようにみなバシレイオスの「従者団」の人々であった。彼らはバシレイオスの一族と地方の有力者の一族、および下層出身者からなっていた。すなわちバシレイオスの「従者団」はバルダスを支えていた中央政権の高官たちや官僚たちとは全く異なる存在であった。バシレイオスの中央政権内での影響力は、ミカエル3世との個人的関係に支えられていたものであったから、これは当然のことであった。すなわちバシレイオスの政治的影響力はきわめて限定的なものであったのである。このような状況下、バシレイオスがバルダスとの政争に打ち勝つためには、方策は一つしかなかったと言ってよい。すなわち、ミカエル3世の親任を背景として、バルダスを排除するとともに共同皇帝となって高官や官僚たちの上にたつことである。換言すれば、バシレイオスにとってはバルダスの暗殺という非常手段以外に、とるべき道はなかったのである。

## ② ミカエル3世の暗殺

バシレイオスが共同皇帝に就任すると同時に、中央政府内においても若干の変動が起きた。先述したようにタグマタの主要二部隊の長官にバシレイオスの兄弟たちが就任する<sup>6</sup>。一方、バシレイオスと結んでバルダスを死に追いやったバルダスの娘婿のシュンパティオスは、もはや不要の人物であった。彼はロゴテテース・トゥー・ドゥロムーを罷免され、トラケシオンのストラテ

ゴスとして中央を追われる<sup>1</sup>。

だが、こうした方策によってバシレイオスの政権内での地位が安定したとはいえない。その理由の第一として、バシレイオスが親族関係のネットワークを完全に崩壊させることができなかったことがあげられる。確かにバルダスに直接連なる人物たちの排除には成功したが、それ以外には広がらなかったのである。この時点ではなおフォティオスのようにバルダスを支えた人物たちが引き続いて政権内で大きな影響力を行使していた。またバルダスの娘婿のシュンパティオスに代わってロゴテテース・トゥー・ドゥロムーに就任したのはグメルという人物であるが、彼はバルダスと血縁関係を持っていた<sup>2</sup>。

10 また血縁関係が確認できなかった人物でも、ミカエル3世と親しい人物が多数政権内にいた。例えばドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーのニケタス＝オオリュファスである。またこの時期エバルコスを務めていたのは、先述したコンスタンティノス＝ミュイアレスである。彼はミカエル3世が殺されたその日にエバルコスを罷免されている<sup>3</sup>。

20 第二に、バシレイオスに対する官僚や高官たちの支持が広がらなかったことがあげられる。先述したように、バシレイオスは行政機構に関係する役職ではなく、皇帝の身边にいて皇帝の世話をする、家産機構的性格の強い役職を歴任してきており、バシレイオスの急速な昇進はミカエル3世との私的な信頼関係が大きく影響していた可能性が高い。このことは同時に、バシレイオスは実際に帝国の政治をつかさどっていた官僚機構や、それを主導する高官たちと何ら直接的な関係をもっていたのではないということである。バシレイオスが共同皇帝位についても、そのような状況は大きくは変わらない。先述したようにバシレイオスはテオフィロスからバルダス・ミカエル3世に受け継がれた、官僚・高官たちとの間に結ばれた強力なネットワークを崩壊させることができなかった。その結果バルダスが暗殺されるまでバルダスとミカエル3世の二人によって担われていた政局運営は、バルダスがいなくなったことによってミカエル3世一人に集中することになったのである。共同皇帝になったとはいえ、バシレイオスが実際に中央政府内で発言する余地はあまり大きくはなかった。

30 そのことを如実に示しているのが、政権内におけるミカエル3世の影響力が急速に高まっているという事実である。当時、ブルガリアやモラヴィアへの布教や教義上の問題などで、ローマ教会との関係が帝国の外交政策のなかで大きなウエイトを占めていた。ローマ教会との関係はバルダスが暗殺されて以降急速に強硬姿勢に転じていく。ミカエル3世が暗殺されてバシレイオス1世が政治を掌握すると、ビザンツ帝国は政策を大きく変換させて、ローマ教会との融和策に転じていくことから、こうした強硬策はミカエル3世によって主導されていた可能性が高い<sup>4</sup>。

先述したように、バルダスが政治を主導していた時代はミカエル3世とバルダスが親族ネットワーク、さらには中央政府の頂点にたつて政治を進めていく二元的体制が形成されていた。しか

<sup>1</sup> DAI, ch. 50.

<sup>2</sup> ThM pp. 164-165, LG pp. 235-237, GCA pp. 821-822.

<sup>3</sup> ThM p. 169, LG pp. 241-242, GCA pp. 827-828.

<sup>4</sup> ThM p. 169, LG p. 242, GCA p. 828.

<sup>5</sup> ThM pp. 169-172, LG pp. 242-247, GCA pp. 828-833.

<sup>6</sup> 当然これに伴ってアンティゴノスはドメスティコス・トーン・スコローン職を罷免される。これ以降彼がどうなったかは不明である。なおレオン6世の時代、バルダスのコンスタンティノープルの邸宅は皇帝の管轄下に入っているため、バルダスの子孫が失脚し、財産も皇帝に没収された可能性が高い。ThM p. 195, LG pp. 278-279, GCA p. 864.

<sup>1</sup> ThM p. 173, LG pp. 247-248, GCA pp. 833-835.

<sup>2</sup> ThM p. 173, LG p. 247, GCA p. 833. グメルとバルダスとの血縁関係については前章参照。

<sup>3</sup> マリアノスに交代している。後述。

<sup>4</sup> この時期最大の問題であったローマとの関係は、バルダス没後もミカエル3世によって強硬路線が維持され、ミカエル3世の暗殺直後からバシレイオス1世によって和解交渉が再開された。cf. F. Dvornik, *The Photian Schism: History and Legend*, Cambridge, 1948, pp. 91-158.



しながらバルダスが暗殺されたことによって、この二元的体制は崩壊する。バルダスに代わったバシレイオスに対する支持が広がらなかったこともあって、ミカエル3世一人が頂点に立つ体制へと変化していったのである。換言すれば、バルダスの暗殺の最大の受益者は皇帝ミカエル3世であって、暗殺を実行したバシレイオスではなかったのである。むしろバシレイオスは共同皇帝に「棚上げ」されたという色彩が強い。これは恐らくバシレイオスの意図していたこととは大きく異なっただろう。

バシレイオスが共同皇帝に就任するとすぐに、ミカエル3世とミカエルとの関係は急速に悪化していく。各年代記とも、その背景については何も記してはいない<sup>1</sup>。だが、ミカエル3世にとって、明らかにバシレイオスはもはや不要の人間であった。バシレイオスに対してミカエル3世が「お前を皇帝にしたように、他の人間を皇帝にする権力が、この朕にはないのかね?」と言ったとする『シュメオン年代記』の記述<sup>2</sup>は、ミカエル3世が実際に述べた言葉かは確認できないものの、当時のミカエル3世の心境をよく表現しているといえよう。自らの地位を安定させるためには、既にバシレイオスはきわめて危険な存在となりつつあったのである。

一方バシレイオスにとっても、ミカエル3世のこのような変化は、自らの安全にとってきわめて重要な問題となった。中央政府内で孤立していたバシレイオスにとっては、ミカエル3世の庇護が失われることはきわめて深刻な影響を及ぼしたことは想像に難くない。バシレイオスが生き残るための唯一の方法はバルダスの時と同様、ミカエル3世を抹殺して自らが単独皇帝になることしかなかった。

各年代記はミカエル3世とバシレイオスの双方が他方に対して陰謀を企てたことを報告している<sup>3</sup>が、これは恐らく事実であろう。そしてこの二人の対立の行きついた先が867年9月の、バシレイオスとその配下の者たちによるミカエル3世の暗殺であった。

ミカエル3世の暗殺に参加した人々は、既に分析を行ったように、バルダスの暗殺の際と大きな変わりがない。これは、バシレイオスを支持しようとする人々が1年前とほとんど変わっていないことを示している。

ミカエルの暗殺からのバシレイオスの行動も、きわめて多くの示唆を我々に提供している。バシレイオスたちは暗殺を遂行するとすぐに金角湾を渡ってコンスタンティノープル市内に入る。そして大宮殿に直行した。大宮殿に入るにあたっては、バシレイオスたちはヘタイレイアルケスのアルタバスドスの助力を得ている<sup>4</sup>。このことは、バシレイオスとヘタイレイアとの緊密な結びつきを示唆している。しかしそれと同時に、共同皇帝であるにもかかわらず大宮殿にバシレイオスが自由に入ることができなかったことをも示唆している。言うまでもなく大宮殿には政府の中

<sup>1</sup> 『続テオファネス年代記』ではミカエル3世の放埒な行動をバシレイオスがいさめたためとしているが、『続テオファネス年代記』はバシレイオスの行動を隠ぺいしており、全く信用できない。ThC pp.209,247-249。一方『シュメオン年代記』はバシレイオスがミカエル3世を打倒しようとしたことに端を発したとしている。これは背景の一端は説明しているが、ミカエル3世の行動のもたらした影響については言及がなく、一方的な説明と言える。

<sup>2</sup> ThM p.174, LG pp.249-250, GCA p.835.

<sup>3</sup> ThC pp.208-210,249-251,254-255, ThM pp.174-175, LG p.250, GCA pp.835-836, Gen., pp.79-80.

<sup>4</sup> ThM p.176, LG pp.251-252, GCA p.838.

枢機構が集中していた。

大宮殿を掌握するとバシレイオスはすぐにエバルコスを変更してマリアノスを任命した<sup>1</sup>。コンスタンティノープルを管轄するエバルコスの交代は自らの権力の安定のためには不可欠のことであった。そして単独皇帝としての儀礼が終了した時点で、フォティオスを更迭してバルダスやミカエル3世と対立していたイグナティオスを総大主教に再任した<sup>2</sup>。また同時期に、中央行政機構のもっとも枢要な役職であったロゴテテース・トゥー・ドゥロムーもおそらく交代している<sup>3</sup>。バシレイオスは自らの政権維持のために最低限必要な措置をすばやく行ったといえる。バシレイオスは政権交代直後の混乱を、迅速な措置で乗り越えたのである。

### ③ 政治支配層の反応

ミカエル3世の暗殺とバシレイオス1世の単独統治の開始に対して、当時の中央政府の官僚たちや高官たちがどのような対応を示したのか、明確に述べている資料は少ない。それゆえ我々は断片的な資料から、それらを分析していくほかない。

年代記では、ミカエル3世の暗殺後速やかにバシレイオスの単独皇帝としての諸儀礼が進められたことを報告している<sup>4</sup>。それゆえバシレイオス1世の即位に際しては、表立った大きな抵抗はなかったようである。

しかしながら、バシレイオスに対する抵抗は断片的な報告から看取することができる。バシレイオスの即位に際しては既に共同皇帝への就任の際にも一定の反対があったようである。バシレイオスにだまされたシュンバティオスの反乱を別にすると、『シュメオン年代記』で報告されているクアイストルかつアセクレティスのレオンの怪死が目を惹く。『シュメオン年代記』によるとレオンはバシレイオスが共同皇帝になるとすぐにニコメディアに赴いて修道士となり、すぐに謎の死を遂げる。『シュメオン年代記』の写本によってはレオンをクアイストルとはしていないものもあるので確言はできないものの、バシレイオスが皇帝になることに抵抗して、レオンが政府を去った高官である可能性も否定できない<sup>5</sup>。

バシレイオスの皇帝即位に対する抵抗としてもっとも注意すべきなのは、当時ドゥルンガリオ

<sup>1</sup> ThM p.176, LG p.253, GCA p.839. 『シュメオン年代記』にはマリアノスは「ペトロナスの子」とあり、これをバルダスの兄弟のペトロナスと見なす見解もあるが首肯しがたい。Herlong, p.129. Gy. Moravcsik の考えるように、テオフィロス時代のペトロナス=カマテロス(第3章参照)の子と考えるほうが妥当であろう。Gy. Moravcsik & R.J.H. Jenkins, *De Administrando Imperio II: Commentary*, London, 1962, p.154.; cf. Winkelmann, S. 187-188. なお 869/70 年にエバルコスに就任していたのはパトリキオスのパウロスなる人物である。Mansi, c.19, 37, 44, 81, 134, 143, 158.

<sup>2</sup> ThM pp.177-178, LG pp.254-255, GCA p.841.; cf. ThC pp.261-262.

<sup>3</sup> 869年にはロゴテテース・トゥー・ドゥロムーはパトリキオスのヨハネス。Mansi, c.19, 37, 44, 54, 75. このヨハネスはバシレイオス1世の治世末からレオン6世の治世当初にロゴテテース・トゥー・ドゥロムーだったヨハネス=ハギオポリテスと同一人物の可能性はある。ThM p.183, LG p.263, GCA p.849, Photius, *Epistulae*, 286.

<sup>4</sup> ThC pp.255-256, ThM p.176, LG p.253, GCA p.839, Gen., p.80.

<sup>5</sup> ThM p.172, LG pp.246-247, GCA pp.832-833. クアイストルと書いてあるのはThMで、LGとGCAはカストルという家門名としている。GCB, Ps. Sym. も同様。GCB p.14, Ps. Sym., pp.679-680.



ス・トゥー・プロイムであったニケタス＝オオリュファスの動向である。『続ゲオルギオス年代記B』や『偽シュメオン年代記』などによると、ニケタス＝オオリュファスは、「皇帝（ミカエル3世）に対して忠誠を尽くしていた人物であったため、ミカエル帝の復讐のために飛びだした」。これに対してバシレイオスは何とかなだめすかしてニケタスの反抗をおさえたという<sup>1</sup>。

このエピソードはきわめて重要な示唆を我々に提供する。第一に、ニケタス＝オオリュファスが中央艦隊の長官であったことに注意しなければならない。先述したように中央艦隊はムスリムの脅威に対抗するためにテオフィロスによって設置された機動艦隊である。そしてそれはコンスタンティノーブルを拠点としていたため、陸のタグマタと同様コンスタンティノーブルで皇帝に直属する軍事力としてきわめて大きな意味を持っていた。先述したようにバルダスの暗殺後、コンスタンティノーブルの陸軍力であるタグマタの長官にはバシレイオスの兄弟たちが就任している。また皇帝の近辺を警護していたヘタイレイアもバシレイオスの影響下にあった。その反面、コンスタンティノーブルの海軍力である中央艦隊に対してはバシレイオスの影響力がほとんど及んでおらず、ミカエル3世の影響力がきわめて高かったことが看取できる。先述したバシリスキアノスも、ミカエル3世と海軍との結びつきを想起させる。

さらに注意すべき点として、ドゥルンガリオス・トゥー・プロイムとコンスタンティノーブルの高官との深い関係がある。ニケタス＝オオリュファスはドゥルンガリオス・トゥー・プロイムを努める以前、エバルコスを努めていた。またバシリスキアノスの兄弟のコンスタンティノス＝カブノゲネスもエバルコスであった。さらには843年のクレタ遠征では、中央艦隊を指揮していたのはロゴテテース・トゥー・ドゥロムーのテオクティストスであった。ドゥルンガリオス・トゥー・プロイム経験者が中央政府の要職を兼任・歴任する例（あるいはその逆）はミカエル3世時代に限らず、例えば後述するレオン6世時代のヒメリオスのように、本稿で考察している時期を通じて見いだされる。これらは同時期のドメスティコス・トーン・スコローンとは明らかに好対照をなしている。反対に9世紀にドメスティコス・トーン・スコローンに就任した人物は、ほとんどが軍人としての経歴で一貫していて、行政機構の要職に就任したり兼任したりする例はほとんど看取できない<sup>2</sup>。

このように、コンスタンティノーブルの陸軍と海軍の間には高官たちとの結びつきという点で、明確な差異が存在している。ドゥルンガリオス・トゥー・プロイムは、中央行政機構ときわめて緊密な関係を持っていたのである。それゆえニケタス＝オオリュファスの行動も、単なる一個人の突発的な行動と見なすことはできない。彼個人の突発的な行動であったならば、バシレイオス1世が彼に対してきわめて慎重な対応をとっている理由が説明できない。ヴィンケルマンも述べているように、オオリュファスの背後にはミカエル3世を支持する何らかの勢力があったと考えるべきである<sup>3</sup>。

#### ④ 小括

ミカエル3世の時代、政局の運営はバルダスとミカエル3世の二人によって主導される、二元

的体制下にあった。バシレイオスはヘタイレイア、プロトストラトル、バラコイモメノスと皇帝の家産機構的な役職を歴任した人物であったため行政機構の動向には全く関与しておらず、したがって官僚層や高官たちと緊密な結びつきを持っていたわけではなかった。

866年のバルダスの暗殺とそれに続くバシレイオスの共同皇帝への昇格も、バシレイオスのおかれていた立場を大きく改善するものではなかった。バルダスがいなくなった結果従来の二元的体制は崩壊する。だがそれは権力のミカエル3世への集中を意味し、バシレイオスはコンスタンティノーブルの陸軍力をコントロールできるようにはなったものの、中央政権内での影響力拡大にはつながらなかった。むしろミカエル3世にとっては不要となったバシレイオスは次第に孤立していくことになったのである。ミカエル3世とバシレイオスは次第に対立していくようになる。追い詰められたバシレイオスにとって、生き残るためにはミカエル3世を暗殺して自ら単独皇帝になるしか途はなかったのである。

#### (4) バシレイオス1世の時代

バシレイオス1世が単独統治を行ったのは867年から886年までの延べ19年の期間である。本節ではバシレイオス1世と帝国支配層との関係について分析を加えていく。その際特に問題となるのは前節でも取り上げた高官たちと海軍の動向である。

##### ① バシレイオス1世時代の海軍

シチリアに永続的な根拠を形成したムスリム勢力はミカエル3世の時代、さらにイタリア半島にまで進出してきた。ティレニア海側のみならず、アドリア海側をも含むイタリア半島の全域がムスリムの脅威にさらされていたのである。ムスリムの脅威にさらされていたのはエーゲ海も同様であった。ムスリムたちはクレタ島を根拠地としてエーゲ海の島嶼部のみならず、ギリシアや小アジアの沿岸部にも接近して、海賊行為や掠奪活動を繰り返していた<sup>4</sup>。バシレイオス1世にはムスリム艦隊への対策を講じる必要性があった。

既に867年、バシレイオス1世はニケタス＝オオリュファスをアドリア海に派遣した<sup>5</sup>。ビザンツ艦隊はその後南イタリア方面で活動を続け、879年にはナサル率いるビザンツ艦隊がケファレニア島沖でムスリム艦隊に大勝する<sup>6</sup>。またエーゲ海方面においてもビザンツ帝国の勢力回復が進んだ。879年にはニケタス＝オオリュファス率いるビザンツ艦隊がコリントス湾でクレタ艦隊に大勝した<sup>7</sup>。

このような有利な戦況のもと、880年代になると南イタリア方面におけるビザンツ帝国の本格的な反攻が開始される。880年、バシレイオス1世の側近であるプロトベスティアリオスのプロコピオスが指揮したシチリア遠征は、後述するように失敗に終わるものの、南イタリアには名将

<sup>1</sup> Lewis, pp. 132-148, Malamut, pp. 78-82.

<sup>2</sup> ThC pp. 292-293.

<sup>3</sup> イタリア方面におけるビザンツ艦隊の活動とムスリムの動向については ThC pp. 288-299, Constantinus Porphyrogenitus, *De Thematibus*, Vatican, 1952 (以下、Thema と略), pp. 97-98; Lewis, pp. 137-139.

<sup>4</sup> ThC pp. 302-305.

<sup>5</sup> ThC pp. 299-300. ただしエーゲ海の制海権はその後ムスリム側の手中にあったようである。cf. Malamut, pp. 81-82.

<sup>1</sup> GCB p. 17, Ps. Sym., p. 687.

<sup>2</sup> ただし例外として、バシレイオス1世の兄弟のマリアノスがドメスティコス・トーン・スコローンとロゴテテース・トーン・アゲローンを兼任していた可能性がある。Winkelmann, S. 89-90.

<sup>3</sup> Winkelmann, S. 70-75.



ニケフォロス＝フォーカス（初代）率いるビザンツ陸軍の精銳が投入され<sup>1</sup>、南イタリアは11世紀初頭にまでビザンツ帝国の領域として二つのテーマに再編されることになった<sup>2</sup>。以下、このような状況を念頭においた上で、バシレイオス1世と海軍の関係について分析していく。

バシレイオス1世の西方政策で特徴的なこととして、870年代までと880年代とで軍事活動の性格に大きな違いが看取できる。870年代までは、エーゲ海や西方でのムスリムの構成に対抗して、各地の軍事的拠点の回復に主眼が置かれていた。こうした軍事活動を主導したのは中央艦隊であった。また中央艦隊以外の軍事力としては、ヴェネツィアやラグサなどのビザンツ帝国の宗主権下にある諸都市の艦隊が利用され、さらに870年のバリ包囲戦のようにカロリング朝の軍隊が参加している例<sup>3</sup>もある。またこうした遠征軍を指揮していたのはニケタス＝オオリュファスやナサルなどのドゥルンガリオス・トゥー・プロイムであった。

それに対して880年代の軍事活動は大きく異なる。例えば880年のシチリア遠征を指揮していたのはプロトベスティアリオスのプロコピオスである。そして彼が率いていた軍勢は『シュメオン年代記』によると「西方の全てのテーマ」の軍勢から組成されており、彼の配下に「（テーマ・）シケリア（シチリア）のストラテラテス（ストラテゴス）のエウブラクシオス、ケファレニアのモシリケス、デュラッキオンのラブドゥーコス、ペロポネソスのオイニアテス、そしてアポストゥベス」がいたという<sup>4</sup>。すなわちこの時のシチリア遠征は870年代までの軍事活動とは異なり、この時期ビザンツ帝国が投入できる軍事力の大半をつぎ込んだ、大規模で本格的な攻勢であった。これは870年代までの軍事活動とは大きく性格を異にしている。またニケフォロス＝フォーカスの遠征も同様である。

こうした差異の要因はいくつか考えられる。第一に、870年代までの着実に拠点を作る作戦が功を奏して、880年代に本格的な攻勢を行うことができた。第二に870年代まではビザンツ帝国の陸軍力は小アジア東部の対パウロ派戦に集中しており、イタリア方面に力を振り向ける余力がほとんど残ってはいなかった<sup>5</sup>。880年代にイタリア方面軍の指揮をとったニケフォロス＝フォーカス（初代）も、パウロ派との戦いにおいて頭角を現してきた軍人であった<sup>6</sup>。

だが、バシレイオス1世と海軍との関係も考慮に置かなければならない。先述したように、コンスタンティノーブルの海軍力はミカエル3世のきわめて強い影響下にあり、バシレイオス1世にとっては大きな脅威となっていた。この点を念頭においた際、注目すべきなのはニケタス＝オオリュファスのバシレイオス1世に対する反抗を伝える『偽シュメオン年代記』と『続ゲオルギ

<sup>1</sup> ThC pp.312-313.

<sup>2</sup> ロンゴバルディアとカラブリア。Thema.pp.94-98.

<sup>3</sup> 陸上からルイ2世の軍がバリを包囲した。

<sup>4</sup> ThM p.181, LG pp.258-259, GCA p.845. 一方『続テオファネス年代記』によるとこの遠征には皇帝のプロトベスティアリオスのプロコピオス、トラキアとマケドニアのストラテゴスのレオン＝アポストュベスが言及されている。ThC p.305. 『シュメオン年代記』の記述と矛盾しない。

<sup>5</sup> ThC pp.266-276, 277-279, GCB pp.19-20. パウロ派との戦いに関してはさしあたって、P. Lemerle, "L'histoire des Pauliciens d'Asie Mineure d'après les sources Grecques", TM 5(1973), pp.1-144.

<sup>6</sup> ニケフォロス1世＝フォーカス（初代）に関しては、『続ゲオルギオス年代記B』に比較的詳しい経歴の言及がある。GCB pp.20-21.:cf. Cheynet, pp.291-296.

オス年代記B』の記述である。これらはニケタス＝オオリュファスの帰順に続いて、「年月が経つにつれて、彼（ニケタス＝オオリュファス）に首都を委ねて遠征に赴くほどに、（皇帝は）彼に深い信頼をおくようになった」という記述が続く<sup>1</sup>。この記述は、バシレイオス1世とニケタス＝オオリュファスとの関係が安定するまでにかなりの年月を要したことをうかがわせている。ミカエル3世との関係が深く、有能な軍人であったニケタス＝オオリュファスがコンスタンティノーブルにいる場合、バシレイオス1世がコンスタンティノーブルを離れることは、きわめて危険だったのである。

ニケタス＝オオリュファスがバシレイオス1世即位直後のきわめて短期間、ドゥルンガリオス・トゥー・プロイム職を更迭され、エリアスなる人物に代わっていたこと<sup>2</sup>もニケタス＝オオリュファスとバシレイオス1世、海軍との関係を考える上で無視することはできない。エリアスの経歴について、何ら明確なことが確認できないためはっきりとした議論を行うことはできないものの、ニケタス＝オオリュファスがミカエル3世にきわめて近い立場にあった人物であったためドゥルンガリオス・トゥー・プロイム職から外されたことは疑問の余地がない。そして恐らくエリアスは、バシレイオス1世寄りの人物だったのであろう。しかしながらエリアスがきわめて短期間に更迭されている<sup>3</sup>ということは、エリアスが中央艦隊を掌握することができなかったことを暗示しているのではなかろうか。中央艦隊は、バシレイオス1世に近い立場のエリアス、さらにはバシレイオス1世自身に対して反抗的な姿勢を示していたのだと考えるのがもっとも合理的である。

さて、ローマ教会と和解し、フォティオスやミカエル3世を断罪する意味合いの濃かったコンスタンティノーブル第四宗教会議が開催された869/70年には、ニケタス＝オオリュファスも中央艦隊も首都にはいなかったことになる。これは、イコン崇拝を復活させるためにエイレーネーが開催した787年のニカイア第二宗教会議の際に、イコノクラストの多いタグマタを排除した条件下で会議が行われたこと<sup>4</sup>を想起させる。バシレイオスは自らの政権の不安定要因の排除のため、最大の脅威であるコンスタンティノーブルの海軍力をコンスタンティノーブルから遠ざけようとしていた、と推論することは可能だろう。

また870年代末にニケタス＝オオリュファスの後を継いでドゥルンガリオス・トゥー・プロイ

<sup>1</sup> GCB p.17, Ps.Sym., p.687.

<sup>2</sup> Vita Ignatii, c.540B. エリアスはフォティオスがバシレイオス1世によって更迭された際に、総大主教に再任されたイグナティオスをコンスタンティノーブルに迎えるため、彼の幽閉されていたテレピン島へ派遣されている。フォティオスが罷免されたのはバシレイオス1世の即位の諸儀礼が一段落した867年の10月であるから、ニケタス＝オオリュファスはミカエル3世が暗殺された直後きわめて迅速にドゥルンガリオス・トゥー・プロイム職を罷免されたことになる。

<sup>3</sup> ニケタス＝オオリュファスは868年はじめにはラグサの救援に成功する(ThC pp.292-294.)とともに恐らくその後シチリア海域でムスリム艦隊と交戦している。Ibn al-Atir, in: A. Vasiliev, *Byzance et les Arabes II: La dynastie Macédonienne 2: Extraits des Sources Arabes*, Bruxelles, 1950 (以下、Vasilievと略), pp.129-162, pp.131-132. 868年初頭にアドリア海に進出しているということは、コンスタンティノーブルを867年のうちに占領していなければならない。

<sup>4</sup> 中谷前掲論文参照。



ムーとなったナサルについても、アモリア朝との関係を確認することができる。すなわち彼の父親でマギストロスのクリストフォロスは、スラヴ人トマスの乱の際にミカエル2世を強力に支持した人物と、『ゲネシオス年代記』に特記されている<sup>1</sup>のである。ナサルの兄弟のバルサキオスもまたバシレイオス1世時代にドゥルンガリオス・トゥー・プロイムを努め、シチリアのタオルミナ近海でムスリム艦隊を撃破している<sup>2</sup>。兄弟そろって中央艦隊を巧みに指揮していることから、彼らは海軍と深いかわりをもった人物であったと考えられる。そしてミカエル2世とクリストフォロスとの親密な関係をも考え合わせるならば、彼らも海軍を代表する人物として、ミカエル3世寄りの政治的立場にあったと推測することができる。そして彼らもコンスタンティノープルからは遠く離れたアドリア海やシチリア近海に出撃してムスリム勢力と戦っているのである。彼らに関しても、コンスタンティノープルから遠ざけようとする配慮が働いていたのであろう。

以上要するに、バシレイオス1世はミカエル3世という非常手段によって篡奪した皇帝位を維持するために、ミカエル3世がきわめて強力な影響力を行使していた中央艦隊を巧みに操縦していく必要性があった。バシレイオスは当初ドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーの首のすげ替えによってそれを行おうとしたが成功しなかった。そのためバシレイオス1世は中央艦隊を当時緊迫の度を加えていた西方戦線に恒常的に投入することによって、政権の潜在的脅威である海軍をコンスタンティノープルから遠ざける策に出たのである。

## ② コンスタンティノープルの高官・官僚たちとの関係

これまで繰り返して述べてきているように、バシレイオスはミカエル3世に個人的に奉仕する色彩の強い役職を歴任してきた人物である。それゆえ行政経験には乏しく、また官僚機構や高官たちとの人間関係もミカエル3世のように緊密なものをもっているわけではなかった。むしろ先述したように高官たちはミカエル3世と密接な関係を持っており、バシレイオス1世とはその政治的立場を異にしている人々が多かった。

バシレイオス1世と高官たちとの関係を考える上で無視できない資料としては、まず869/70年の宗教会議の議事録<sup>3</sup>がある。この議事録によると、皇帝や皇后、共同皇帝などを除いて、ビザンツ政府代表として会議に参加していた俗人は合計で25人にのぼる。このリストからは、バシレイオス1世政権の持っていた特徴がいくつか示唆される。

第一に、陸軍関係者が会議に参加していることである。会議にはコンスタンティノープル近郊に駐屯するタグマタの長官のうち、ドメスティコス・トーン・エクスクビトーンとドメスティコス・トーン・ヒカナトーンが参加している。これはドゥルンガリオス・トゥー・プロイムが参加していないのみならず、コンスタンティノープルから遠く離れたイタリア戦線へと派遣されていたのとは対照的である。タグマタ長官の筆頭であるドメスティコス・トーン・スコローンは言及されていないが、恐らく当時ドメスティコス・トーン・スコローンを努めていたのはバシレイオス1世の兄弟であるマリアノスであるから、ドゥルンガリオス・トゥー・プロイムのようにコンスタンティノープルから遠ざけられていたとは考えられない<sup>4</sup>。この事実、海軍とは違って

陸軍がバシレイオス1世を支持していたことを示唆している。

陸軍とバシレイオス1世とは緊密な関係を維持し続けた。バシレイオス1世の時代ドメスティコス・トーン・スコローンを努めていたのはバシレイオスの兄弟のマリアノス、バシレイオスの娘婿のクリストフォロス<sup>1</sup>、そしてバシレイオスと古くから親交のあったアンドレアス＝クラテロス<sup>2</sup>の3人であった。バシレイオス1世は後述するように治世末期に後継者のレオン6世と対立する。その際アンドレアス＝クラテロスはレオンを支持したため、治世末期にはバシレイオスとアンドレアス＝クラテロスとの関係は冷却する<sup>3</sup>が、すくなくとも880年代初頭までは彼はバシレイオスをもっとも信頼する有能な軍人であった。彼らを通じて、バシレイオス1世は陸軍に対しては強い影響力を行使していたと考えられる。またバシレイオス1世はしばしば軍勢の先頭にたって小アジアの前線へ遠征している<sup>4</sup>。こうした行動は8世紀のレオン3世・コンスタンティノス5世らの場合と同様、軍と皇帝との一体感を強めることに資したであろう。

第二に、宦官の占める位置の大きいことがあげられる。25人のうち、最高位をもっているのはマギストロスかつパトリキオスのテオドロスとクリストフォロスである。このうち、テオドロスはpraepositusの職にあった<sup>5</sup>。praepositusは古代末期のpraepositus sacri cubiculiの後身にあたるパラコイモメノスカ、あるいは9世紀に宦官の最高の名誉職として現れるプライボシトスである可能性があるが、コンスタンティノス7世の著した『帝国統治論』によるとバシレイオス1世時代にはパラコイモメノスは欠員になっていた<sup>6</sup>ので、プライボシトスである可能性が高い。ただ、いずれにせよ宦官が就任する職である。

またバアネスなる人物もプライボシトスであった<sup>7</sup>。バアネスはこの宗教会議において議長を務めた人物である。バアネスは『シュメオン年代記』などの年代記でもしばしば言及される。例えば彼は867年クリスマスに行われた、バシレイオスの三男のステファノスの洗礼式の際に中心的な役割を果たしている<sup>8</sup>。バアネスはバシレイオス1世の腹心として、初期のバシレイオス1世政権において中心的な役割を果たしていたと考えられる。彼らに限らず、バシレイオス1世時代にはバシレイオス1世の腹心として活躍した宦官が多い。例えば880年のシチリア遠征を指揮した

イアやエフェソスも攻撃されていた。マリアノス（あるいは当時のドメスティコス・トーン・スコローン）はパウロ派の軍勢と戦うため小アジアに出撃していた可能性もある。Gen.,p.86.

<sup>1</sup> 872年頃。ThM p.178, LG p.255, GCA p.841.

<sup>2</sup> バシレイオスがヘタイレイアに編入された際のヘタイレイアルケスだったアンドレアスと同一人物と思われる。ThM p.161, LG p.230, GCA p.817.

<sup>3</sup> 883年に一時的にケスタス＝ステュピオテスに交代した。しかし彼は同年にタルソスでムスリム軍に大敗を喫したために更迭され、アンドレアスが再任された。ThM p.182, LG p.261, GCA p.847, ThC pp.286-287.

<sup>4</sup> 例えば871-72年。ただしこの際は敗北してテオフェラクトス＝アバスタクトス（ロマノス1世＝レカペノスの父親）に救出される。第8章参照。

<sup>5</sup> Mansi, c.19, 75.

<sup>6</sup> DAi, ch.50.

<sup>7</sup> Mansi, c.37, 44, 54, 75, 143, 157-158.

<sup>8</sup> ThM p.177, LG p.254, GCA p.840.

<sup>1</sup> Gen., p.25.

<sup>2</sup> *Chronicle of Cambridge*: in: Vasiliev, pp.99-107, p.100.: cf. Herlong, p.191.

<sup>3</sup> Mansi, c.1-208.

<sup>4</sup> この頃小アジアではクリュソケイル率いるパウロ派の軍勢が小アジア西部にまで侵入し、ニカ



プロトベスティアリオスのプロコピオスもそうである。

だが宦官は皇帝の身辺で私的に奉仕する家産機構的役職についていることが多かった。例えばプロコピオスの努めていたプロトベスティアリオスという役職は、皇帝の衣服を管理するために設けられている役職である。プライポシトスも儀礼の際に役割を果たすのが主な役割であった。彼らは原則的には政治を実際に行う行政機構とは関係がない。そうした人物がバシレイオス1世の特命を受けて行政に関与しているということは、当然のことながら他の官僚や高官たちの不満を惹起したであろう。特にミカエル3世時代、ミカエル3世を支えてきた人物たちは宦官のテオクティストスが政治運営を掌握しているのに不満を持ち、テオクティストスを打倒した人々やその支持者たちからなっていたから、再び宦官・家産官僚たちが大きな発言力を持つようになったことに対しては、大きく反発したであろうことが予想される。例えば880年のシチリア遠征は失敗に終わり、プロコピオスは戦死する。この背景にはプロコピオスに対する不満があった<sup>1</sup>。

ではなぜバシレイオス1世は、高官たちから反発を買うことが自明の、宦官・家産官僚の登用を強行したのであろうか。それはこれまで繰り返して述べてきた、バシレイオス1世の経歴を念頭におけば明白である。官僚や高官たちと緊密なつながりを持たず、むしろ対立関係にあったバシレイオス1世にとって、信頼できる人物というのは宦官や家産官僚しかいなかったのである。

だが、その他の要因があることも無視することはできない。第一に、一族等の登用である。バシレイオス1世時代に新たに登用されて行政機構を枢要な役職を担うようになった人物は、経歴が確認できるかぎりバシレイオス1世の一族やそれに類する人物たちだった。例えばロゴテテース・トゥー・ゲニクーに任命されたコンスタンティノスは、バシレイオスが上京してきた際に宿を提供してバシレイオスと義兄弟の契りを結んだニコラオス＝アンドロサリテスの兄弟である<sup>2</sup>。またダネリス未亡人の子のヨハネスも、プロトスパタリオスに叙任されている<sup>3</sup>。

第二に、政治機構の変質をもあげねばならない。中期ビザンツ帝国の政治機構は9世紀前半、テオフィロスの時代までにほぼ完成した。そこでは皇帝を頂点とする強力な中央集権体制が成立した。そしてそれは強靱で効率的な官僚制度に支えられたものでもあった。

だが、これは同時に、政権内で皇帝が実際に占める位置の低下をも招くことになった。すなわち強靱で効率的な国家機構が完成した結果、皇帝が自ら政治運営に携わる必要性が低下していったのである。その結果、皇帝は次第に政治の実務から離れ、宮廷の奥深くにこもるようになっていく。その結果、皇帝が官僚や高官たちと直接接する機会は少なくなっていった。ミカエル3世が「従者団」を形成して高官や中堅官僚たちと遊び回っていた背景には、こうしたことをも念頭におかなければならない。ミカエル3世の「従者団」は、高官や官僚たちと直接接して、政治の実務における皇帝の強力な影響力を保持しようとする努力の一環でもあった。

皇帝が政治の実務から遠ざかる傾向はレオン6世の時代以降、さらに加速していく。それは当

<sup>1</sup> ThC pp.305-308, ThM p.181, LG pp.258-259, GCA p.845. レオン＝アポステュッペス（アポストゥベス）がムスリムとの戦いの際に裏切り、プロコピオスが戦死した。cf. Winkelmann, S.134-135.

<sup>2</sup> ThM p.179, LG p.256, GCA pp.842-843. ニコラオス＝アンドロサリテス自身はオイコノモスかつシユンケロスとなっている。また他の兄弟たちもパウロスがエビ・トゥー・サケリウー、ヨハネスがドゥルンガリオス・テース・ピグラスになっている。

<sup>3</sup> ThC p.317, 320.

然、皇帝と官僚・高官たちとの関係を疎遠にしていく一方で、宦官や家産官僚の発言力を強めていくことにつながっていく。後で詳しく分析するように、官僚・高官と宦官・家産官僚との対立は、9世紀末以降のビザンツの政治史を考察していくうえで無視することができない。

以上要するに、バシレイオス1世はミカエル3世の時代までに社会的集団としてのまとまりを強くもつようになっていた高官たちとの対立関係を解消することができなかった。それはバシレイオス1世自身の経歴や高官たちの持つ社会的性格にも拠るが、ビザンツ帝国の政治機構の変質にも大きく影響されていた。その結果バシレイオスは政治を遂行するにあたって自らと同様の経歴を持ち、皇帝の近くで個人的な奉仕を行う宦官・家産官僚や、自らの一族に頼らざるを得なくなっていた。

10 高官たちと皇帝との対立関係が解消できなかったことは、バシレイオス1世の治世を通じて高官たちによる陰謀が繰り返して起きたことから看取できる。例えば先述したように既に即位直後に、ニケタス＝オオリュファスがバシレイオス1世に対して反抗している。また877年にはクルクアス家のメンバーによる陰謀が発覚している<sup>1</sup>。そしてバシレイオス1世の最晩年の886年には、高官たちによる極めて大規模な陰謀が発覚する<sup>2</sup>。さらに後述するようにバシレイオス1世は晩年、後継者のレオンとも激しく対立していくのである。

#### (5) おわりに

本章での考察の結果を簡単にまとめておきたい。

20 バシレイオス1世は従来貧農から身を起こして急速な社会的上昇をとげ、皇帝の位にまでのぼりつめた人物として取り上げられてきた。だが彼の経歴を精密に分析した結果、そのような従来の見解は修正が必要なことが明らかになった。彼は明らかに土地所有者の家系に属しており、また中央と全く人間的関係がなかった人物ではなかった。彼がコンスタンティノープルを目指した理由も、その点に求められるだろう。とは言え彼は中央の有力者と、強力な関係を持っていたわけではなかった。そのため彼は当時の中央行政機構では受け入れられず、皇帝に私的な業務で奉仕する家産官僚として、次第に頭角を現していくことになった。

だが彼の影響力拡大は、中央の政治支配層の疑念を呼び起こすことになった。彼はバルダスを暗殺することによって共同皇帝に就任するものの、それは彼の政治的立場を強化するものではなかった。反対にそれはミカエル3世の政治的影響力を強化することにつながり、バシレイオスはミカエル3世からも圧迫される立場におかれた。彼にとってはミカエル3世を暗殺するしか、生き残る道はなかったのである。

30 9世紀中盤、コンスタンティノープルの高官たちは強力な社会集団としての実態を持っていた。その結果、皇帝になってからもバシレイオス1世と高官たちとの間に緊張関係が続いていた。そのためバシレイオス1世は政権維持のため、高官たちと密接な関係にあった中央艦隊をコンスタンティノープルから遠ざける一方で、自らと同様の経歴を持った宦官や家産官僚たちを重用した。それは当然、高官たちとの関係の安定化にはつながらなかった。

<sup>1</sup> ThC p.277. 『続テオフィアネス年代記』では個人名は書かれていないが、11世紀に書かれた『スキュリツェス年代記』ではロマノス＝クルクアスなる人物とされている。Ioannes Scylitzes, *Synopsis Historiarum*, Berlin, 1973 (以下, Scyl.と略), p.140.

<sup>2</sup> 第7章参照。



## 6 陸軍と皇帝・高官

前章でも簡単に説明したように、バシレイオス1世の政権は陸軍の支持によっても支えられていた。本項では陸軍と、陸軍の幹部層たちの動向について、皇帝との関係や中央行政機構との関係に注目しつつ分析を加えていく。というのも第3章で分析したように、9世紀前半のミカエル2世やテオフィロスの場合、小アジアのテマの幹部層との密接なつながりが政権安定の基盤となったのに対して、バシレイオス1世は陸軍との結びつきが政権の安定には必ずしも結びついていない。後継者のレオン6世に陸軍との結びつきがプラスの要因として継承されていないからである。このような差異がどうして生じたのかも、本章では考察していく。

### (1) 小アジア軍事家門の出現

10 ミカエル3世時代からバシレイオス1世時代に特徴的なこととして、10世紀に有力となり、タグマタや有力なテマの幹部職を独占するようになる家門の多くが頻繁に資料で言及されるようになることがあげられる。マレイノス家やフォーカス家がその例である。こうした一門はバルダスの一族に代表される、8世紀末から9世紀末にかけて頭角を現してきた一族とは家門としての展開の様相を大きく異にしている。

例えば9世紀前半の家門に特徴的な例としては、パフラゴニア出身のバルダスの一門を取り上げてみたい。バルダスの一門の中で最初に頭角を現したのはバルダスの叔父のマヌエルである。彼はミカエル1世ランガベの時代に皇帝のプロトストラトルとしてコンスタンティノープルで皇帝に仕えていた<sup>1</sup>。そしてレオン5世時代にテマ・アナトリコンのストラテegosに昇格し、ついでテオフィロス時代に姪のテオドラがテオフィロスと結婚した後、ドメスティコス・トーン・スコローンに就任する。テオフィロスとテオドラの結婚を期に、この一族は中央政界に進出する。20 テオドラの兄弟たちのみならず、セルギオス＝ニケティアテスのように、どのような血縁関係が存在していたのか不明な一族の者まで中央で大きな政治的影響力を持つようになる。さらに彼らは中央政界で血縁関係を構築し、その政治的基盤を堅固にしていた<sup>2</sup>。

ミカエル3世の時代になると、彼らは中央政界で大きな政治的影響力を持つようになる。彼らの一族にはバルダスの兄弟のペトロナスや、バルダスの子供たちのように軍事的役職やテマのストラテegosに就任する者たちもいる一方で、バルダスら一族の多くは中央に活動の拠点があった。そして出身地であるパフラゴニアとの結びつきはきわめて希薄になっていく。866年にシュンバティオスが起こした反乱<sup>3</sup>でも、地方との結びつきは全く感じられない。

30 このような展開は、9世紀前半の有力家門の多くに共通する傾向である。しかし9世紀中盤以降小アジアで発展していく軍事家門は、まったく異なった展開を示していくのである。ここでは例としてフォーカス家を取り上げてみたい。

フォーカス家の初期の歴史について、比較的詳細な記述を残しているのは『続ゲオルギオス年代記B』である。それによると、フォーカス家の成員としてたどりうる最初の人物は、ミカエル

<sup>1</sup> ThC p.24.

<sup>2</sup> マヌエルやバルダスの一族に関しては第3章参照。

<sup>3</sup> ThC pp.240-241, ThM p.173, LG pp.247-248, GCA pp.833-834. シュンバティオスは盟友のゲオルギオス＝ペガネスとともに反乱を起こしたが、彼らの軍の主力はテマ軍のようで、しかもパフラゴニアとは何の関連もない。

3世時代にトゥルマルケスを努めていた。その息子のニケフォロスは青年期にコンスタンティノープルへ上ってマンガラビテスとして皇帝の近辺で奉仕していた。やがて彼はバシレイオス1世に認められてコンスタンティノープルに邸宅を与えられ、小アジアのテマのストラテegosなどを歴任して対パウロ派の戦闘で大きな成果を挙げた。880年代に入ると彼はイタリア戦線に移って南イタリアのビザンツ支配回復の総仕上げを行う。そしてレオン6世の時代になると彼はアンドレアス＝クラテロスの後任としてドメスティコス・トーン・スコローンに就任する<sup>1</sup>。

ニケフォロス＝フォーカスの死後、後を継いだ息子のレオン＝フォーカスもアナトリコンのストラテegosやドメスティコス・トーン・スコローンを歴任する。彼は後述するようにロマノス＝レカベノスとの政争に敗れて失脚するが、ロマノス1世の治世中もフォーカス家はレオンの弟10 のバルダス＝フォーカスのもと、根拠地のカッパドキアで勢力を蓄積していた。そしてレカベノス一門が権力を喪失するとバルダス＝フォーカスはドメスティコス・トーン・スコローンに、バルダスの子のニケフォロスはアナトリコンのストラテegosとなり、再びフォーカス家は大きな影響力を獲得する。ニケフォロスがやがて皇帝ニケフォロス2世として即位すると、フォーカス家の勢力は頂点に達する<sup>2</sup>。

この二つの家門を比較すると、きわめて興味深い事実が浮かび上がってくる。第一に、この双方の家門ともに、小アジアに本来の根拠地があり、小アジアのテマの幹部層を形成していたと考えられる。そして双方ともに家門の初期の成員の中には、中央に出て宮廷や有力者に仕えている人物が存在している。バルダスの家門の場合、バルダスの父のマリノスは小アジアのテマのトゥルマルケスであったし、マヌエルは青年期にコンスタンティノープルへ出てミカエル1世のプロトストラトルを努めていた。同様にフォーカス家の場合も、ニケフォロス（初代）の父はトゥルマルケスであったし、ニケフォロス自身は首都でマンガラビテスとしてバシレイオス1世に仕えている。こうした例は9世紀にきわめて多く、エウスタティオス＝アルギュロスはミカエル3世時代にプロトストラトルを努めていた<sup>3</sup>。またバシレイオスとともにバルダス・ミカエル3世の暗殺に参画したコンスタンティノス＝トクサラスもミカエル3世時代にマンガラビテスを努めていた<sup>4</sup>。要するにこの双方の家門ともに、その初期の段階においては同様の展開をたどっている。

だがそれからの展開は全く異なっている。バルダスの一族がテオドラの結婚を契機として、中央政界に進出して本拠地であったパフラゴニアとのつながりが急速に希薄化していったのに対して、フォーカス家はドメスティコス・トーン・スコローンとなったニケフォロス（初代）以降も中央政界に本格的に進出することはなかった。フォーカス家は根拠地のカッパドキアとの結びつきが強く、レオン＝フォーカスが失脚した後もカッパドキアを基盤にして勢力を温存した。これは、バルダスが暗殺された後のバルダスの一族とは全く異なっている。

そして中央に進出した後のバルダスの一族の多くが中央行政機構の高官に就任しているのに対して、フォーカス家の一門は小アジアのテマのストラテegosやドメスティコス・トーン・スコ

<sup>1</sup> GCB pp.20-21. 第5章第4節も参照。

<sup>2</sup> レオン＝フォーカス以降のフォーカス家についてはCheynet参照。また第8章も参照。

<sup>3</sup> ThM p.171, GCA p.830.

<sup>4</sup> 第5章参照。



ローン職などを歴任し、中央行政機構の重要な官職に就任する例はきわめて希薄である<sup>1</sup>。これもバルダスの一族とは大きく様相を異にしている。

以上要するに、バルダスの一族もフォーカス家とともに小アジアの陸軍の幹部層に、家門としての萌芽が認められる。しかしながらその後の展開は大きく異なり、バルダスの一族が中央への進出を本格化させて小アジアとのつながりが薄れたのに対して、フォーカス家は中央行政機構への進出がほとんどなく、ずっと小アジアの本拠地との強い結びつきを維持していた<sup>2</sup>。こうした差異はこの二つの家門を比較した差異に特徴的に現れることではなく、9世紀前半までの小アジア系家門と、9世紀後半以降の小アジア系家門の多くに共通する傾向である。

このような差異はなにゆえ生じたのであろうか。これまで、その背景としては帝国の軍事制度  
10 の変化や、属州における社会の変化などによって説明されることが多かった。しかしこうした説  
明においては、中央との関係が念頭に入っていないことが多い。だが9世紀中盤を境としてこの  
ような変化が起きたということは、当然中央において何らかの変化があったことをも想起させる。  
それゆえ次節ではこうした差異の背景について、従来からの地方に重点を置いた説明のみならず、  
これまであまり着目されてこなかった中央の変化にも注意を向けて検討して行きたい。

## (2) 変化の背景

### ① 小アジアの状況の変化

第2章で分析したように、8世紀末以降大所領経営が次第に安定化しつつあった。この傾向は9世紀に入っても継続する。しかし9・10世紀に大所領が特に発展したのは、主として小アジア内陸の高原地帯である。この地域ははじめに述べたように山がちで標高も高く、牧畜を中心とした混合農業が行なわれていた地域であり、古代以来現在にいたるまで人口密度は低い。これは、この地域の土地所有が根本的に比較的広大な地域を単位として行なわれていたことを示唆している。特に東方国境に近いアナトリコン、カッパドキア、カルシアノンといった地域はムスリムの攻撃を恒常的に受けていた地域だったため、7・8世紀に旧来の住民が大きく減少した。

アナトリコンの軍を構成していた兵士や将校たちは、小アジアでの駐屯が恒常化していくのにしたがって、この地で土地を取得し、この地に定着していった。元来人口密度が低かっただけではなく、旧住民の多くがいなくなっていたため、彼らの土地取得は比較的容易であったと考えられる<sup>3</sup>。恐らく7・8世紀の段階で、テマの幹部たちの多くは自らの居住する地域に比較的規模の大きな所領を形成していたと考えられる。すでに考察したように、テマにおける昇進にはその社会的背景によって大きな違いがあった。これなどは8世紀の段階で既にテマの幹部たちが大所領を形成しつつあったという事実を前提としている。またニケフォロス1世の「十の悪政」のなか

<sup>1</sup> ニケフォロス2世の時代、ニケフォロス2世の弟のレオン＝フォーカスがロゴテテース・トゥー・ドゥロムーとなっている。Cheynet, p.302.

<sup>2</sup> 11世紀にトルコ人の小アジアへの侵入が容易に進んだ背景として、10世紀末以降のバシレイオス2世による小アジア軍事家門の弾圧政策によってカッパドキアのフォーカス家が決定的打撃を受けた結果、ムスリムと国境を接するカッパドキアに軍事力の空白が生まれたことが指摘されている。Lilie, S. 65.

<sup>3</sup> J.F.Haldon, *Recruitment and Conscription in the Byzantine Army c.550-950*, Wien, 1979, pp.66-81.; Haldon (1990), pp.130-131, W.Treadgold, "The Military Lands and the Imperial Estates".

の「貧民もテマの兵士として徴募する」という規定は<sup>1</sup>、テマの兵士たちが実質的には比較的経済力を持った人々からなっていたことを示唆している<sup>2</sup>。

フォーカス家の成員には、ニケフォロス、バルダス、レオンの三つの名前が繰り返して現れる。このうちバルダスという名前はアルメニア語に起源を持つ名前である。これはP.カラニス<sup>2</sup>が指摘しているように、フォーカス家が資料に現れる9世紀中盤以前の段階において、ギリシア系の一族とアルメニア系の一族の婚姻関係によって家門が成立したことを示している<sup>3</sup>。これは同時に、フォーカス家がすでに9世紀初頭までにカッパドキアで大きな勢力を持つ家門として成立していたことをも示している。同様の例として、同じくカッパドキアに根拠をもつマレイノス家も挙げられる。マレイノス家のさかのぼりうる最古の人物であるバシレイオスは、800年頃にパトリキオスの爵位をもつ、裕福な人物であった<sup>4</sup>。

以上要するに、7・8世紀に小アジアにおいては大きな人口の変動が起きた。その結果旧来の大土地所有者の多くは姿を消した。それに代わってこの地に新たに定着するようになったテーマの幹部たちが大所領を形成していくようになった。後のフォーカス家などにつながる家門は、恐らく9世紀初頭までには小アジア内陸部の牧畜地帯を根拠地として、かなりの大所領を形成していた。そして9世紀に小アジアの状況が平穏になるにつれ、そうした大所領のもつ経済的意義も大きくなっていったのである。

このような変化が、9世紀中盤を境とする、小アジアの家門のもつ性格にも大きな影響を与えた。これまで述べてきたように、7・8世紀においては地方の経済活動が停滞し、コンスタンティノープルや中央政権のもつ経済的影響力がきわめて大きくなっていた。地方の有力者たちはこの時期に多くが没落し、多くの人々は中央で国家からの再分配に依存して、経済的地位を維持するようになっていた。7・8世紀に中央行政機構の要職につくことによって、政治的影響力を持つようになっていた人々がこうしたカテゴリーに属している代表的な例である。そして8世紀末から9世紀前半に中央に進出するようになる小アジアの家門もまた、このカテゴリーに属している。8世紀末～9世紀前半の段階においては地方における大所領の形成よりも、中央に進出して皇帝・中央政権からの再分配を享受することが、また首都コンスタンティノープルに集中している経済的利益を享受することが魅力的だったのである。

それに対して9世紀後半以降、地方における経済活動が再び活性化していく。この時期に入ると、中央からの再分配に依存する割合が、それまでに比べると低下していたのである。

さらに看過すべきでないのは、9世紀前半期における小アジアのテーマの分割である。8世紀にはアナトリコン、トラケシオン、アルメニアコン、オブシキオン、ブーケラリオン、そして海のテーマであるキビュライオタイの6つしか、テーマは存在していなかった。しかしながら9世紀に入ると小アジアの大規模なテーマ、特に辺境地にあるテーマ・アナトリコンとテーマ・アルメニアコンは次々と分割され、新たなテーマが設置された。例えば最大のテーマであるテーマ・アナトリコンからはテーマ・カルシアノン、テーマ・カッパドキア、テーマ・セレウキアが分離した。さらに9世紀末以降、

<sup>1</sup> Theoph. p. 486.

<sup>2</sup> P.E.Niavis, *The Reign of the Byzantine Emperor Nicephorus I (AD 802-811)*, Athens, 1987, pp.68-74.

<sup>3</sup> P. Charanis, "The Armenians in the Byzantine Empire", *BS* 22 (1961), pp. 196-240, pp. 220-223.

<sup>4</sup> Stav., p. 28.



東方国境において領域が次第に拡大するにつれ、新たなテーマが新獲得地に設置されていった。

これは、テーマの官職を通じた中央からの再分配の機会が急増したことを意味している。テーマのストラテゴス職やストラテゴスに次ぐ要職であるトゥルマルケス職はきわめて莫大な年俵が国家から支給された<sup>1</sup>。こうした職はテーマの分割によって急増した。その結果、中央からの再分配を獲得するために中央に進出し、中央行政機構の役職につく必要性は低下したのである。

10 無論、中央との関係がこれによって全くなくなってしまったわけではない。テーマの要職に就任するためには、軍人としての技能や政治家としての技量だけではなく、官職への任命権者である皇帝との人的つながりを維持する必要性があった。ニケフォロス＝フォーカスやエウスタティオス＝アルギュロスのように、9世紀後半になっても青年期に中央に上って皇帝や有力者に使える例が数多く確認できるが、これは青年期に皇帝や中央との太いパイプを築くことによって、後の経歴に役立てようとする目的があったと理解できる<sup>2</sup>。

またもう一つ無視できぬ要因として、情勢の変化による戦術の転換も挙げられる。9世紀中盤以降ビザンツ帝国が守勢から攻勢に転じるにつれて、長期にわたる対外遠征がしばしば繰り返されるようになった。こうした遠征軍の中核となっていたのは、8世紀に設置されたタグマタであることはもちろんだが、小アジアのテーマもこうした状況の変化に対処していく必要性が求められた。その結果、テーマ軍を実際に率いるテーマのストラテゴスやトゥルマルケス職の専門化が進んだ。レオン6世の時代以降、テーマの幹部職やタグマタのドメスティコス職は次第に小アジアの家門によって独占されていく。これはある意味ではやむを得ないことであった。軍事遠征の専門化・大規模化によって、それを率いる将軍もまた専門化していかざるを得なかった。

20 以上要するに、9世紀後半以降地方の状況は大きく変わった。地方行政機構の変革によるテーマ数の増加や辺境交易の活性化、さらには軍事活動の性格の変化によって、小アジア内陸部に根拠をおく家門の経済的基盤や性格も大きく変化していった。9世紀前半までの家門とは違って、9世紀後半以降の家門にとっては経済的利益を獲得するために中央に進出する必要性が低下した。地方において中央からの再分配を獲得する機会も増えていたのである。

## ② 中央の変化

ここでは9世紀中盤における中央政権内での変化とそれが小アジア軍事家門の発展に影響した背景について、これまでの分析をも念頭におきつつ考えていきたい。

30 これまで繰り返して論じてきているように、8世紀以降中央行政機構の要職就任者を核として、中央に新たな支配層が生まれつつあった。彼らは皇帝権力と、そこからの富の再分配によって次第に大きな経済力を持つとともに、中央行政機構の要職に就任することで政治的にも大きな実力を持つようになっていった。そして9世紀に入り、ミカエル2世・テオフィロスによってこうした人々は皇帝を中心とするネットワークに組み込まれ、一つの社会的集団としてのまとまりを示すようになっていった。彼らは相互に血縁関係を結んで、そのつながりを強固にしていた。

しかしながらこれは、新たに中央で社会的上昇を試みる人々にとっては、大きな障害となって

<sup>1</sup> 例えばアナトリコンのストラテゴスやドメスティコス・トーン・スコローンの年俵は2880ノミスマタ。フォイデラトイのトゥルマルケスの年俵は432ノミスマタ。ちなみに一般兵士の年俵は1-12ノミスマタ。また9世紀中盤の国家収入は約33万ノミスマタ。State Finances, pp.98-110.

<sup>2</sup> cf. 根津由喜夫「10世紀小アジア貴族の世界」『古代文化』41、1989年、22-37頁、26頁。

いた。9世紀中盤までに中央行政機構の要職は、いくつかの家門の成員によって寡占されていくことが多くなっていたのである。そのもっとも特徴的な例がミカエル3世の親政期であり、この時期主要な役職の多くはバルダスの一族によって占められていた。バシレイオス1世が高官たちと安定した関係を構築できなかった最大の要因も、バシレイオス1世の経歴に対する高官たちの不信感に求められる。

同様のことが、9世紀後半以降の小アジアの軍事家門に対しても当てはまる。この時期、中央の政治支配層が強力な社会集団として存在していたために、小アジアの軍事家門も、社会的背景を同じくする人々であるにもかかわらず、中央政界に参入することが難しくなっていた。

10 自然、こうした展開は二つの結果を生みだすことになった。第一に、小アジアの家門がテーマやタグマタの役職を独占していくようになったという点である。中央の役職に進出することができなかった結果、彼らは地方の役職を利用して社会的地位を上昇させていった。

第二に、中央の高官たちに対する反感が生まれたことが看取できる。バルダスやミカエル3世の暗殺に際して、ヨハネス＝カルドスやコンスタンティノス＝トクサラスらが加わっている背景には、中央の高官に対する地方の有力者の反感があるだろう。10世紀に入って、小アジアの軍事家門による反乱や陰謀が繰り返されることも、皇帝に対してというよりは高官たちに対する反感が大きかったのである。

20 以上要するに、ミカエル3世時代までに中央で高官層が大きな力を持つようになった結果、小アジアの家門も新たに中央へと進出することが難しくなっていた。その結果彼らはテーマやタグマタの要職を寡占していくことにより、小アジアで中央に対抗する勢力として展開していくこととなったのである。また中央への進出が困難になった結果、中央の高官層に対する反感も次第に生まれつつあった。

## (3) おわりに

従来も指摘されてきたように、9世紀末から10世紀の初頭という時代は、いわゆる小アジア軍事家門が次第に大きな実力を蓄積しつつあった時期にあたる。こうした家門が発展してきた要因についてはこれまでさまざまな研究が行われてきた。しかしながら、中央の政情を深く念頭に置いた検討はこれまできわめて少なかったといえる。

9世紀前半から連続する中央の政情、特に高官層の強化という展開は、地方の有力者にも大きな影響を与えたのである。9世紀の小アジアの情勢を無視することはできないものの、中央の政情もまた、小アジア軍事家門の成立と地方への定着を促す要因となったのである。

30 とはいえバシレイオス1世の時代においては、小アジアに根拠を持つ家門はまだビザンツ帝国の政情に大きな影響を及ぼすには至ってはいない。9世紀末以降、彼らの力はさらに拡大し、中央もまた彼らの実力を無視することはできなくなっていったのである。



## 7 変化の時代 ～レオン6世・アレクサンドロス 886-913年～

### (1) はじめに

886年にバシレイオス1世が没した後、レオン6世、アレクサンドロスとバシレイオス1世の二人の息子が相次いで帝位を継承していく。本章ではこの時期の皇帝と高官、およびそれらを取りまく勢力の動向について論じていく。本章で問題となるのは、バシレイオス1世時代に姿を明確にしつつあった新たな要素の動向である。バシレイオス1世時代には、皇帝に対抗する勢力として高官、海軍が、そして皇帝と近い勢力として宦官・家産官僚と小アジアの陸軍勢力があった。こうした勢力がどのような展開を示し、それがビザンツ帝国の政情にいかなる影響を与えたのか。それが本章での考察課題である。

### 10 (2) レオン6世の即位

バシレイオス1世からレオン6世への帝位継承は、スムーズに行われたわけではない。バシレイオス1世とレオン6世の親子は対立関係にあったからである。

バシレイオス1世には、4人の息子がいた。このうち長男のコンスタンティノスのみが、バシレイオスの前妻のマリアとの間に生まれた子であり、残るレオン、ステファノス、アレクサンドロスの3人は、後妻で皇后となったエウドキア＝インゲリナが生んだ子供である。三男のステファノスは聖職者になるよう育てられ、残りの3人がバシレイオス1世の治世に共同皇帝として次々と戴冠されていた。だがバシレイオス1世は長男のコンスタンティノスを特に愛しており、レオンとの関係は疎遠であった。

20 バシレイオスとレオンの関係が疎遠であった理由はいくつか挙げられているが、特に問題となるのはレオンの出生についての問題である。

これまで触れてきているように、レオンの母親のエウドキア＝インゲリナは、元来ミカエル3世の愛人だった女性である。ミカエル3世は865年にバシレイオスをバラコイモメノスに任命した際、バシレイオスをマリアと離婚させ、自らの愛人であるエウドキア＝インゲリナと結婚させた<sup>1</sup>。エウドキア＝インゲリナとバシレイオスが結婚した後も、ミカエル3世とエウドキアとの関係は867年9月にミカエル3世が暗殺されるまで続いていたようである。そのため866年9月に生まれたレオンと、867年11月に生まれたステファノスは、ミカエル3世とエウドキア＝インゲリナとの子である可能性が存在する。

30 レオン6世がミカエル3世の子であるか、バシレイオス1世の子であるかについては、古くから議論が行われている。近年の研究では、C.マンゴはレオンをミカエル3世の子と考え、一方E.キスリンガーはレオンをバシレイオス1世の子と考えている<sup>2</sup>。どちらにもそれなりの根拠があり、いずれとも決しがたい。しかし重要なのはレオンがミカエル3世の子か、バシレイオス1世の子かという問題ではなく、当時の人々から、レオンはミカエル3世の子であるという疑念を抱かれていた点である。『シュメオン年代記』などの10世紀の年代記<sup>3</sup>にレオンがミカエル3世の子で

<sup>1</sup> ThC p.235, ThM p.169, LG p.242, GCA p.828.

<sup>2</sup> 第5章第1節参照。

<sup>3</sup> ThM p.174, LG p.249, GCA p.835.ただし『シュメオン年代記』はコンスタンティノスをもミカエル3世とエウドキアの間の子としている。これは誤り。しかしバシレイオス1世に対して批判的な『シュメオン年代記』がバシレイオス1世を蔑む目的でこう書いたか、あるいはコンスタンテ

あるという記述があることは、当時そのような考えが一般に広まっていたことを示すものと考えて間違いはない。

こうした観点からすると、バシレイオス1世がマリアから生まれたコンスタンティノスを愛し、レオンとは冷たい関係にとどまっていたこともうまく説明できる。レオンが誰の子であるかは、恐らくバシレイオス1世自身にもわからなかったのではなかろうか。それは当然、レオンに対する態度にも表れたことだろう。そして同様のことは、息子のレオンにもあった。本当の父親かわからないバシレイオス1世に対する反発が、次第に募っていったのであろう。

10 コンスタンティノスが在世していた間は、二人の間に表立った対立は起きなかった。コンスタンティノスがいるかぎり、レオンが政治の表舞台にたつ可能性はなかったからである。しかしながら879年にコンスタンティノスが夭折する<sup>1</sup>と、事態は大きく変化する。コンスタンティノスの死に伴ってレオンが帝位継承者となる。レオンはそれに伴って882年に結婚し<sup>2</sup>、後継者としての地位を明らかにしていった。だが882/3年に母親のエウドキア＝インゲリナが没する<sup>3</sup>と、バシレイオス1世とレオン6世の関係は次第に緊張していく。そして883年にはレオンは陰謀を企てたとして捕らえられるのである。3年余りの間、彼は投獄されていた<sup>4</sup>。帝位継承者に対する扱いとしてはきわめて異例であるが、さらに886年に許されたということもまた異例である。

20 レオンが失脚することなく、許された背景にはいくつかの点が考えられる。繰り返して論じてきているように、バシレイオス1世と高官層は対立関係にあった。そしてバシレイオス1世とレオンとの対立に際しても、高官たちの多くはレオンを支持する側に回っていた。『シュメオン年代記』などを読むかぎりでは、ミクロス・ヘタイレイアルケスのステュリアノス＝ザウーツェス、ドメスティコス・トーン・スコローンのアンドレアス＝クラテロス、マギストロスのステファノス＝カロマリウス、ロゴテテース・トゥー・ドゥロムーのグメル、そしてヨハネス＝ハギオポリテスらが確認できる<sup>5</sup>。この顔触れはきわめて示唆的である。第一に、ミカエル3世・バルダスの一族が大きな役割を示していることである。マギストロスのステファノス＝カロマリウスはバルダスの甥、ミカエル3世の従兄弟に当たる人物である。またロゴテテース・トゥー・ドゥロムーのグメルも、バルダスと血縁関係が確認できる人物である<sup>6</sup>。第二に、バシレイオス1世と関係の深い人物にもレオンを支持している人物が確認できる。例えばステュリアノス＝ザウーツェスは

イノスもミカエル3世の子であるという風評が広まっていたか、の可能性も考えられる。ThMp. 180, LG p.258, GCA p.845.

<sup>1</sup> ThC p.345, ThM p.174, LG p.249, GCA p.835.

<sup>2</sup> ThM p.181, LG pp.259-260, GCA p.846.

<sup>3</sup> Mango, p.25.

<sup>4</sup> ThM pp.181-182, LG p.260, GCA pp.846-847. cf. ThC 348-351. 『シュメオン年代記』にはレオンが幽閉されていたのは3カ月間とされているが、ジェンキンスが証明したように実際には883年8月から886年7月までの約3年間。R.J.H.Jenkins, "The Chronological Accuracy of the "Logothete" for the Years A.D. 867-913", *DOP* 19(1965), pp.91-112 (以下、Jenkins(1965)と略), pp.101-103.

<sup>5</sup> ThM p.182, 184, LG pp.261, 263-264, GCA pp.846-847, 850.

<sup>6</sup> ステファノス＝カロマリウスはテオドラやバルダスの姉妹でテオクティストスの暗殺にも関与したカロマリウスの子。グメルに関しては第4・5章参照。



恐らく、コンスタンティノープルに上る前のバシレイオスが仕えていたマケドニアのストラテゴスのツァンツェスの息子であると考えられる。またドメスティコス・トーン・スコロンのアンドレアス＝クラテロスというまでもなくバシレイオス1世の側近だった<sup>1</sup>。ここから判断するかぎりでは、レオンを支持していた高官はバシレイオス1世と対立する立場にあった人々のみならず、バシレイオス1世が信頼を寄せていた人物をも含んでいた。総じて、バシレイオス1世に近い立場であった人々も、レオンを支持しバシレイオス1世と疎遠になる傾向が現れている。

こうした、バシレイオス1世の政治力の後退は、何に起因するのであろうか。第一の背景としては、やはりレオンの出生が大きく影響していただろう。ミカエル3世の子である可能性が高く、バシレイオス1世とも疎遠な関係にあったレオンに対しては、ミカエル3世・バルダスと深い結びつきをもっていた高官たちの多くにとっては支持するにたる存在であった。

第二に、バシレイオス1世の政治手法に対する反発が挙げられる。すでに分析しているように、バシレイオス1世が政治を遂行するにあたって大きく依拠したのは宦官・家産官僚たちであった。しかしながらこうした政治手法は高官たちの反発を買った。883年にアンドレアス＝クラテロスが一時的にドメスティコス・トーン・スコロン職を更迭されているが、これは当時皇帝の大きな信頼を集めていたエウカイタ主教テオドロス＝サンタバレノスの助言によるものであった<sup>2</sup>。バシレイオス1世のこうした行動は、当然高官たちの不満を大きくすることになった。そしてバシレイオス1世に対する不満が、レオンに対する期待につながったと考えられる。

第三に、エウドキア＝インゲリナが存在が考えられる。エウドキア＝インゲリナはバシレイオス1世の皇后であると同時にレオンの実の母親であり、バシレイオス1世とレオンとの対立を調停する役割を果たしていただろう。レオンと結婚したテオファノはエウドキア＝インゲリナの一族に当たる女性である<sup>3</sup>から、レオンの后選に際してもバシレイオス1世よりもエウドキア＝インゲリナが主導権を握った可能性が高い。だがもう一つ看過できぬポイントとして、エウドキア＝インゲリナの社会的背景がある。エウドキア＝インゲリナはマルティナキオスという家門の出身である。この家門に関しては若干の研究が行われている<sup>4</sup>が、それによるとマルティナキオス家は8世紀末から9世紀初頭以降、ビザンツの宮廷で何らかの役職についていた一門である。それゆえバシレイオス1世時代に要職を占めていた人々とも、バシレイオス1世の即位以前から一定の結びつきがあった可能性が高く、バシレイオス1世と高官たちとの対立に際しても対立を緩和する一種の安全弁的な役割を果たしていたのではないだろうか。

エウドキア＝インゲリナが没した882年暮れ、あるいは883年初頭以降、皇帝をめぐる政治状況は急速に混乱していく。すなわち883年のレオンの失脚とアンドレアス＝クラテロスの一時的な更迭、886年のコンスタンティノープルでの陰謀などである。これは偶然の一致ではあるまい。

<sup>1</sup> 第5章参照。

<sup>2</sup> レオンの逮捕もサンタバレノスの扇動。ThM pp.181-182, LG pp.258-261, GCA pp.845-847.:cf. ThC pp.348-351.

<sup>3</sup> テオファノはコンスタンティノス＝マルティナキオスという人物の娘。ThM p.181, LG p.259, GCA p.846, Herlong, p.119-120, Mango, p.20. 一方エウドキア＝インゲリナはインゲルなる人物の娘であるが、インゲルはマルティナキオス家の出身。Scyl. pp.127-128.:cf. Mango, pp.19-21.

<sup>4</sup> マルティナキオス家については Mango, pp.17-21, Herlong, pp.118-120 参照。

政権の安定に大きな役割を果たしていたエウドキア＝インゲリナがいなくなった結果、皇帝と高官たちとの間での危ういバランス関係が崩壊し、対立が一気に激化したのである。

このような状況下、バシレイオス1世は治世最後の年、886年を迎える。この年の春には、ドメスティコス・トーン・ヒカナトーンのヨハネス＝クルクアスらによって企てられた陰謀が露見する<sup>1</sup>。首謀者のヨハネス＝クルクアス、あるいはその一族は、バシレイオス1世の時代に以前にも陰謀を企てており<sup>2</sup>、バシレイオス1世に対する反対派の中心だったと考えられる。しかしこの陰謀でより重要なのは、66人というきわめて多数の高官＝「元老院議員とアルコンたち」が参加していたことである。またこの陰謀にはミュクサレス、パプーツィコスといった、ミカエル3世と密接な関係を持っていた家門が参加していた。

886年の7月、レオンはようやく牢獄から出され、復権した。しかしこの復権はバシレイオス1世が望んだものではなかった。『シュメオン年代記』には、

皇帝（バシレイオス1世）は聖なるエリアを大いに信仰していたので、聖なるエリアスの日にレオン帝の名誉が回復された。それから行列が行われた。人々はそれを見て「神よ、汝に栄光あれ。」と（レオンに対して）歓呼した。だが皇帝（バシレイオス1世）はそれに答えてこう演説した。「汝たちは朕の息子のために神を称賛しているのか？彼によって多くの苦しみが生み出され、苦しい日々が続くであろうに。」

とある<sup>3</sup>。バシレイオス1世が本心ではレオンを認めていなかったことがここによく示されている。にもかかわらずレオンを復権させざるを得なかったのは、レオンの復権を行わなければ高官との対立を軽減し、政権を維持することが困難になっていたからであろう。

レオンが復活した直後、886年の8月にバシレイオス1世はコンスタンティノープル近郊で狩猟を行った。しかしその際バシレイオス1世は突然飛び掛かってきた獲物によって負傷し、その傷がもとで8月29日に没した<sup>4</sup>。しかしながらこれに際しても、バシレイオス1世は暗殺されたという可能性がある。まずムスリム側の資料である『タバリ年代記』には、

この年、タルソスから来たヤーザマーンからの使者が、ビザンツ皇帝の3人の息子たちが父親に対して反乱を起こして皇帝を殺し、彼らの中の一人が帝位についた、という報告をもって帰還してきた。

という記述がある<sup>5</sup>。『タバリ年代記』は10世紀前半の成立であるので、この記述の信頼性もかなり高いと思われる。また10世紀前半に書かれた『エウテュミオス伝』からは、バシレイオス1世からレオン6世への政権交代に際してステュリアノス＝ザウーツェスが大きく関与していたことが看取できる<sup>6</sup>。ステュリアノス＝ザウーツェスの娘はレオンの愛人となっており、レオンと密接な関係にあった。

<sup>1</sup> ThM pp.181-182, LG p.261, GCA pp.847-848, GCB p.24.

<sup>2</sup> 第5章参照。

<sup>3</sup> ThM p.182, LG pp.260-261, GCA p.847.

<sup>4</sup> ThM p.183, LG p.262, GCA p.848.:cf. ThC pp.351-352.

<sup>5</sup> *The History of al-Tbari vol.37: The war against the Zanj ends*, P.M.Fields(trans.), Albany, 1987, p.153.

<sup>6</sup> P.Karlin-Hayter(ed.), *Vita Euthymii Patriarchae CP.*, Bruxelles, 1970 (以下、VEと略), pp.2-5.:cf. Mango, p.26.



以上要するに、レオンはその出生に疑念がもたれており、バシレイオス1世との関係も疎遠であった。レオンはバシレイオス1世と対立していた高官たちが接近したのみならず、バシレイオス1世の宦官・家産官僚重用に不満を持つバシレイオス1世の側近であった人々の支持をも獲得していた。レオンとバシレイオス1世との対立はエウドキア＝インゲリナが没した後急速に加速する。バシレイオス1世はレオンを失脚させることで封じこみを狙ったが、それは高官たちの反発をかえって大きくすることにつながった。最終的にはバシレイオス1世は高官層の反発を押さえ込むことができず、世を去ることになったのである。

即位したレオン6世が最初に行ったことは、ミカエル3世の亡骸を首都対岸のクリュソポリスからコンスタンティノープルの聖使徒教会に改葬することであった。その際、アンドレアス＝クラテロスを始めとする多数の元老院議員がクリュソポリスまで赴いたという<sup>1</sup>。これは、レオン6世のミカエル3世に対する感情を示すものであると同時に、バシレイオス1世に対する反感をも示すものであろう。テオフィロスが即位当初にレオン5世暗殺者を処断したのと同様、ここではバシレイオス1世やその周囲にいた人々を断罪して、自らの立場の強化や政治的位置の明示を行ったのである。さらに当時の高官たちの感情をもよく示しているといえよう。

### (3) レオン6世の政権

本節ではレオン6世時代の皇帝と皇帝をとりまく諸集団の関係の展開について、分析を行う。

#### ① ザウーツェス一族とサモナス

本項ではレオン6世時代、大きな政治力を持っていたステュリアノス＝ザウーツェスとサモナスの二人の人物を軸に、皇帝とその周辺諸勢力の動きを考察する。

ステュリアノス＝ザウーツェスはバシレイオス1世時代からレオン6世と密接なつながりを持っていた。先述したように総大主教のフォティオスとともに、レオン擁護の発言をバシレイオス1世に行っている。この背景には、ステュリアノスの娘のゾエがレオン6世の愛人になっていたこと<sup>2</sup>も関係している。そしてバシレイオス1世の死とレオン6世の即位に際しても何らかの役割を果たしていた可能性があることについては、既に指摘した。だがバシレイオス1世は死に際して、彼をレオン6世の後見人に指定している<sup>3</sup>。

彼はレオン6世が即位するとすぐにレオン6世によってマギストロスかつロゴテテース・トゥー・ドゥロムーに任命されている<sup>4</sup>。そして894年にはレオン6世によって、新たに設置されたバシレオバトル位を授与されている<sup>5</sup>。

彼が宮廷内で大きな地位を得るにしたがって、彼の一族もまたさまざまな役職に就任するようになる。例えばニコラオスはヘタイレアルケスを努めている。またドゥルンガリオス・テース・ビグラスのヨハネスも彼の一族と考えられる<sup>6</sup>。さらに忘れるべきでないのは娘のゾエであり、

<sup>1</sup> ThM p.183, LG pp.262-263, GCA pp.848-849.

<sup>2</sup> ThM p.186, LG p.266, GCA p.852.

<sup>3</sup> VE p.5.

<sup>4</sup> VE p.7, ThM p.183, LG p.263, GCA p.849.

<sup>5</sup> VE p.7, ThM p.186, LG p.266, GCA p.853.

<sup>6</sup> ThM p.188, 191, LG p.270, 273, GCA p.856, 859.

彼女はテオフィロスの没した後レオン6世と正式に結婚している<sup>1</sup>。

こうしたことから確認できることがある。それは、ザウーツェス一族の就任していた役職が、行政に関わる類のものではなく、ヘタイレアルケスやドゥルンガリオス・テース・ビグラスと言った宮廷内軍事力に関わるものだったことである。ステュリアノス自身もバシレイオス1世時代にヘタイレアルケスを務めている<sup>2</sup>。さらにバシレオバトルという地位も「皇帝の父」という意味からも看取できるように、きわめて私的な意味合いの強い爵位である。

そのせいか、897年、900年のステュリアノス一族の陰謀に際しては、ステュリアノス一族の陰謀を抑え込むために活躍する人々に、高官、あるいは高官と密接な結びつきを持った人々が目に付く。例えば897年の陰謀の際には、マギストロスのレオン＝テオドタケスが裏工作を行って事態の沈静化に成功している<sup>3</sup>。そしてザウーツェス一族が中央での政治力を決定的に失うことになる900年の陰謀の際には、事件の事後処理についてレオン6世は「マギストロスたち」に報告を行っている<sup>4</sup>。またこの際にヘタイレアを率いたヨハネス＝ガリダス<sup>5</sup>は、その後も高官たちと政治的行動を共にすることの多い人物である。

ザウーツェス一族が繰り返して皇帝に対する陰謀を繰り返した背景も、バシレイオス1世時代の高官たちの陰謀のそれとは異なっている。ザウーツェス一族が大きな政治の実力を持った背景は、ステュリアノスとレオン6世との個人的結びつき、およびゾエがレオン6世の愛人～皇后であったことが大きい。他の高官たちと密接な関係を持っていた形跡は看取できない。そえゆえ皇帝の考え方によって、彼らの地位はどのようにもなりえた。特に899年にステュリアノスとゾエが相次いで没すると、一族の立場はきわめて悪化した。900年の陰謀に参加したバシレイオスが

我らの聖なるゾエ陛下がお亡くなりになったため、皇帝陛下は新しい皇后を迎えるために我々全員を抹殺しようとしておられる。

と漏らしたことが『シュメオン年代記』で報告されている<sup>6</sup>。これは、彼ら一族の立場がきわめて不安定な基盤の上にたっていたことを如実に示している。すなわちステュリアノス＝ザウーツェスとゾエの、レオン6世との個人的な結びつきである。

ステュリアノス＝ザウーツェスがニケフォロス＝フォーカス（初代）と血縁関係を結ぼうと試みた理由も、この文脈から説明できる。ステュリアノスは自らと結ぶ勢力を拡大すべく、当時陸

<sup>1</sup> VE p.47, ThM p.189, LG pp.270-271, GCA pp.856-857.

<sup>2</sup> 先述したようにステュリアノス自身はロゴテテース・トゥー・ドゥロムーに就任し、さらにバシレオバトルとなっている。しかし彼は皇帝の顧問官的役割のほうが強いように思われる。資料には彼はパラデュナステウオンであったとされているが、彼以外の知られているパラデュナステウオンがみな宦官であるのは示唆的である。第8章参照。また8世紀以来ロゴテテース・トゥー・ドゥロムーには皇帝の側近とでも言うべき人物が就任することが多く、必ずしも他の高官たちと強調する立場にない人物の就任例が多いことにも注意。エイレーネー時代のスタウラキオスやテオフィロス時代のテオクティストスなどがその例である。

<sup>3</sup> ThM pp.181-182, LG p.270, GCA p.856.

<sup>4</sup> ThM p.191, LG p.273, GCA p.859.

<sup>5</sup> ThM pp.190-191, LG p.273, GCA p.859.

<sup>6</sup> ThM p.190, LG pp.271-272, GCA p.858.



軍を率いていたニケフォロス＝フォーカスと結ぼうとはかったのである<sup>1</sup>。この試みはニケフォロス＝フォーカスが拒否したことによって失敗する。

ザウーツェス一族に代わって宮廷内で大きな発言力を持つようになったのがサモナスである。サモナスはムスリム領出身の宦官である。彼はザウーツェス一族の陰謀をレオン6世に通報してレオン6世の信任を集めるようになった<sup>2</sup>。

10 彼が最も活躍したのはドゥーカス家の陰謀に際してである。彼は904年に突如東方への逃亡をはかる<sup>3</sup>。資料が少ないため確言はできないものの、これはジェンキンスが指摘しているように、自ら小アジア内陸部へ入り込んでドゥーカス一族の動きを監視するためだった可能性が高い<sup>4</sup>。さらにその後もサモナスは活発な行動を展開し、アンドロニコス＝ドゥーカスをアッパース朝へと逃亡させることに成功するのである。

しかしサモナスに対するレオン6世の信任も長くは続かなかった。サモナスは908年に突然失脚する。彼が復権することはもはやなかった。彼の突然の失脚の背景は、レオン6世の信任がサモナスから、別の宦官であるコンスタンティノスに移ったことである。コンスタンティノスはサモナスが失脚した後彼に代わってパラコイモメノスに就任する<sup>5</sup>。この事実、サモナスの地位がレオン6世の信任に大きく依存していたことを意味している。彼ら宦官・家産官僚の実力の源泉が皇帝の信任にあったことがここでも明示されている。

以上の考察からもわかるように、レオン6世時代にもバシレイオス1世時代と同様、宦官・家産官僚が皇帝によって重用されている。これに対してバシレイオス1世時代に彼らと対立していた高官たちはどのような対応を示したのであるだろうか。この点についても少し触れたい。

20 高官たちが中央行政機構の要職を占めている以上、彼らは帝国行政に対して大きな影響力をもっていた。それに対して全体としてレオン6世の時代はバシレイオス1世時代とは違って宦官・家産官僚が帝国の行政に大きく関与したことは看取できない。ステュリアノス＝ザウーツェスはロゴテテース・トゥー・ドゥロムとして行政に関与していたが、高官たちはこれに対しては反感を持っていたと考えられる。ザウーツェス一族の陰謀に際して、高官たちがレオン6世の側にたって暗躍していることがそれを示している。一方サモナスも帝国の行政に介入していた形跡は看取できない。彼はジェンキンスが指摘しているように、皇帝直属の秘密警察の長官といった役割を果たしていた<sup>6</sup>。その他の人々も同様である<sup>7</sup>。

ザウーツェス一族の陰謀の際にマギストロスのレオン＝テオドタケスがレオン6世の手足となっていることや、レオン6世が「マギストロスたち」に報告を行っているように、恐らくレオン

<sup>1</sup> GCB p.28, ThC pp.359-360. ThCはレオン6世からコンスタンティノス7世の復権にいたるまでの部分は『シュメオン年代記』のB系統を借用しており、内容的にGCBにきわめて近い。

<sup>2</sup> VE pp.49-51, ThM pp.190-191, LG pp.271-273, GCA pp.858-859.

<sup>3</sup> ThM pp.194-195, LG pp.278-279, GCA pp.863-864.

<sup>4</sup> R.J.H.Jenkins, "The 'Flight' of Samonas", *Speculum* 23-2(1948), pp.217-235.

<sup>5</sup> ThM pp.198-199, LG pp.283-284, GCA pp.869-870.

<sup>6</sup> Jenkins, op.cit.

<sup>7</sup> バシレイオス1世時代同様、家産官僚が軍を率いている例はある。894年の対ブルガリア戦においてプロトベスティアリオスのテオドシオスが戦死している。ThM p.288, LG p.269, GCA p.855.

6世は高官たちとは政策協議を行いつつ、密接な連絡をとりあっていたと考えられる。これまで分析してきたように、レオン6世は高官たちの支持を受けて帝位についている。レオン6世時代に高官たちの大半が参加するような陰謀がおきていないことや、双方の関係を緊張させるような事件がおきていないことを考えると、皇帝と高官層との関係はバシレイオス1世時代と比べると大きく改善され、比較的安定していたと考えられる。

10 以上要するに、レオン6世時代、皇帝は高官の勢力、家産官僚・宦官勢力の双方と良好な関係を保っていた。そうしたことが可能となった背景としては、レオン6世が元来高官たちの多くの支持で即位したことに加えて即位後も良好な関係を維持したこと、家産官僚・宦官たちとの職分をよく区別していたこと、そして家産官僚・宦官の実力の源泉が皇帝の信任に依存していて、高官層とは違って持続的な政治力を維持することなく、次々と変化していったことが挙げられる。

## ② ドゥーカス一門の反乱

レオン6世時代、政権を脅かした最大の事件は、ドゥーカス一門による反乱であった。ここではドゥーカス一門の動きと皇帝、および皇帝をめぐる諸集団の動向を念頭におきつつ、分析していきたい。はじめにドゥーカス家とはどういう家門であるか、簡単に紹介していきたい。

20 ドゥーカスという家門名はラテン語の *dux* に由来するギリシア語 *δοῦξ* から来ている。実際9～10世紀にはこの一門はドゥークスと言及されているが、本稿ではドゥーカスと表記している。ドゥーカス家の根拠地は小アジア北西部のパフラゴニア地方であったと考えられる<sup>1</sup>。ドゥーカス家の成員で最もはじめに言及される人物は、855年頃の対パウロ派戦の指揮官の一人として、（レオン＝）アルギュロスらとともに挙げられている人物である<sup>2</sup>。その後しばらく資料上に言及されることがなくなるものの、レオン6世時代になってアンドロニコス＝ドゥーカスとその一族が頭角を現すようになってくる。

ドゥーカス家については、アモリア帝室との血縁関係が存在したとする議論ある。例えば A. ヴォグは、ドゥーカス家は女系によってアモリア帝室とつながっており、886年の陰謀の際にもヨハネス＝クルクアスと結んでいた、と考えている<sup>3</sup>。また12世紀以降に成立した叙事詩、『ディゲニス＝アクリテス』にはアアロン＝ドゥーカスなる人物が、ムセロムなる人物の子として描写されている<sup>4</sup>。このアアロン＝ドゥーカスのモデルはアンドロニコス＝ドゥーカスである。そしてムセロムをテオフィロスの娘婿となったアレクシオス＝ムセレとみなす見解が存在する<sup>5</sup>。

30 しかしながらアレクシオス＝ムセレとアンドロニコス＝ドゥーカスの活躍した年代の間に大きな開きがあること、また『ディゲニス＝アクリテス』を9～10世紀に関する歴史的資料として全面的に信用することができないことを考えると、こうした推定に説得力があるとは考えられない。

<sup>1</sup> 913年のコンスタンティノス＝ドゥーカスの乱の後、コンスタンティノス＝ドゥーカスの未亡人がパフラゴニアの所領に戻っている。ThM p.204, LG p.291, GCA p.877.

<sup>2</sup> ThC p.165.: 『スキュリツェス年代記』ではこの人物もアンドロニコスとされているが年代的に首肯しがたい。Scyl.p.92.

<sup>3</sup> A. Vogt, "La jeunesse de Léon VI le sage", *Revue Historique* 174(1934), pp.389-428, pp.420-421.

<sup>4</sup> E. Trapp(ed.), *Digenes Akrites: synoptische Ausgabe der ältesten Versionen*, Wien, 1971(Z version), l.455-457, P.P. Kalonaros(ed.), *Digenes Akrites*, Athens, 1941(Andros version), l.487-491.

<sup>5</sup> J. Mavrogordato, *Digenes Akrites*, Oxford, 1956, pp.254-255.: cf. Polemis, p.5.



またヴォグの見解も推論に基づいたものであり、実証的とは言えない。こうしたことから、ドゥーカス家とアモリア帝室との血縁関係を実証することはきわめて困難である。

だが、ドゥーカス家の出身地がパフラゴニアである、という点には注意を向ける必要がある。というのもパフラゴニアはバルダス一族の出身地でもあるからである。その他にもパフラゴニアはクルクアス家やモノマコス家など、バルダス一族と深いかわりを持った家門の出身地である。さらにドゥーカス家がアルメニア系であるという推論<sup>1</sup>が成立するならば、同じくアルメニア系であるバルダス一族やクルクアス家とはきわめて類似した性格を持っていたことになる。

さらに後述するようにドゥーカス一門が反乱を企てた際、レオン＝コイロスファクテスやエウスタティオス＝アルギュロスなど、アモリア帝室やバルダス一族と何らかの関係を持っていた人々と結んでいることにも注意を喚起しなければならない。ドゥーカス家には明らかに、親アモリア勢力との結びつきが存在していたのである。

またアモリア帝室やバルダス一族と深い結びつきをもっていた有力者たちがみなレオン6世支持で固まっていたわけではないことが看取できる。特にドゥーカス、クルクアス、バプーツィコスといった、中央よりも地方で活発な活動を行っていた一族にそうした傾向が看取できる。先述した886年の陰謀に参加したヨハネス＝クルクアスやバプーツィコスがその例である。こうした一門の多くがパフラゴニアを根拠とするアルメニア系の家門である点など、類似点は多い。そして彼らは10世紀にはカッパドキアなどの小アジア中央部を根拠とする小アジア軍事家門とは一線を画した、むしろ対抗する存在として存続し続ける<sup>2</sup>。

アンドロニコス＝ドゥーカスに話を戻すと、彼が資料に現れるようになるのは904年以降のことである。この年、彼は当時アナトリコンのヒュポストラテースであったエウスタティオス＝アルギュロスとともにムスリム領に侵入し、大きな戦果を上げた。彼はその後も東方戦線でムスリム戦を続行して大きな戦果を上げている<sup>3</sup>。

だが907年に彼は皇帝に対して突然反抗し、1年余り籠城戦を試みた後908年にムスリム領へ逃亡した。この間の事情については『シュメオン年代記』および『エウテュミオス伝』が比較的詳細に報告を行っている。しかしそれらは全体としては共通のことを述べており、共通の原資料の存在が考えられるものの、その一方でそれぞれ独自の言及もあって、これらを総合し、さらにその他の資料や状況をも念頭に入れた分析が必要となる。

『シュメオン年代記』によると、906年にドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーのヒメリオスがムスリムと海戦を行うべく出港した際、サモナスがアンドロニコスをも乗船させようと画策した。しかしアンドロニコスはそれに同意しなかったため、サモナスの扇動により皇帝から反乱者と見なされた。そのためアンドロニコスは一族とともにカバラという小城塞での籠城、そしてムスリム領への亡命を余儀なくされたという<sup>4</sup>。一方『エウテュミオス伝』によるとアンドロニコスのカバラでの籠城には、9人の「高貴の生まれのよい者たち」が含まれ、彼らのうち2人はス

<sup>1</sup> Polemis, pp. 5-6.

<sup>2</sup> cf. 根津由喜夫「十世紀ビザンツ帝国の権力構造—人的関係の視角から—」『富山大学人文学部紀要』17、1991年、53-76頁。

<sup>3</sup> GCB p. 33, ThC pp. 368-369.

<sup>4</sup> ThM pp. 196-197, LG pp. 280-282, GCA pp. 866-868.

トラテース、そして残りはみなプロトスパタリオスの爵位をもっていた。さらにアンドロニコスに対しては総大主教のニコラオス＝ミュスティコスが祝福の書簡を送っていたことも判明した。その結果ニコラオスは総大主教職を更迭された<sup>1</sup>。またドゥルンガリオス・テース・ビグラスのエウスタティオス＝アルギュロスも恐らくこの反乱に関係して罷免され、故郷のカルシアノンに戻る途中に暗殺されている<sup>2</sup>。

以上のことから確認できる点は以下のようなことである。第一に、サモナスとアンドロニコス＝ドゥーカスとの対立関係である。またサモナスはアンドロニコスのほかにもニコラオス＝ミュスティコスなどとも対立する立場にあった<sup>3</sup>。宦官・家産官僚に対して反感を持つ勢力が、レオン6世の時代には中央にも地方にも存在しており、ある程度の影響力を持っていたことが看取できる。第二に、アンドロニコス＝ドゥーカスと結ぶ勢力が中央にも地方にも存在していたということである。二人のストラテースと何人かのプロトスパタリオス、そしてニコラオス＝ミュスティコスの参画がそれを示している。ちなみにニコラオス＝ミュスティコスはフォティオスの家内奴隷の息子であり、フォティオスに師事した人物である<sup>4</sup>。フォティオスもバシレイオス1世の治世末期に自らの一族を帝位に就けようと画策していた可能性が否定できない<sup>5</sup>。こうしたことから、テオフィロス・ミカエル3世時代に皇帝を支えていた高官たちの集団もバシレイオス1世の末期以降は次第にまとまりを欠くようになっており、特にレオン6世に対する支持に関しては二つに分かれていたと考えられる。

以上要するに、907/8年のアンドロニコス＝ドゥーカスの反乱の背景には、レオン6世の支配に不満を持つ、地方の親アモリア派の家門の存在があった。そして彼らと結びつく勢力が、少数ではあるものの中央にも存在した。しかしそれに対してレオン6世はサモナスの暗躍によって事態が大事になるのを防いだ。

ムスリム領に亡命したアンドロニコス＝ドゥーカスであったが、ここにもサモナスの手は及んだ。サモナスの教唆によってアンドロニコスはムスリムに毒殺されたのである。しかしこれによってドゥーカス家の脅威が去ったわけではなかった。アンドロニコスの子のコンスタンティノス＝ドゥーカスは帝国に帰参する。彼はすぐにテマ・カルシアノンのストラテースに任命され<sup>6</sup>、さらにドメスティコス・トーン・スコローンに任命される<sup>7</sup>。

912年にレオン6世は没する。弟のアレクサンドロスも在位1年余りで913年に没し、後にはまだ幼児<sup>8</sup>のコンスタンティノス7世のみが残されることになった。こうした状況下、コンスタンティノス＝ドゥーカスがコンスタンティノープルで反乱を起こす。コンスタンティノス＝ドゥー

<sup>1</sup> VE pp. 89-91.

<sup>2</sup> ThC p. 374, DAI ch. 50.: cf. Vannier, pp. 22-24.

<sup>3</sup> ThM p. 195, LG pp. 279-280, GCA pp. 865-866, GCB p. 33, ThC pp. 370-371.

<sup>4</sup> VE p. 11.: R. J. H. Jenkins, "A Note on the Patriarch Nicholas Mysticus", *Acta Antiqua Scientiarum Hungaricae* 2(1963), pp. 145-147.

<sup>5</sup> ThM pp. 184-185, LG pp. 263-265, GCA pp. 850-852.: cf. A. Vogt, op. cit., Winkelmann, S. 73-75.

<sup>6</sup> ThM p. 197, LG pp. 281-282, GCA pp. 867-868, DAI ch. 50.

<sup>7</sup> ThM p. 202, LG pp. 288-289, GCA pp. 874-875.

<sup>8</sup> コンスタンティノス7世は905年5月生まれ。



カスは自らの配下の軍を率いてコンスタンティノープルに入り、夜陰に乗じてヒッポドロームを占拠し、即位を宣言した。しかしマギストロスのヨハネス＝ガリダス率いるヘタイレイアと市街戦を行って敗死した<sup>1</sup>。この反乱の失敗を契機としてドゥーカス家は完全に失脚する。

『シュメオン年代記』には、コンスタンティノス＝ドゥーカスの反乱に加わった者がかなり詳細に報告されている。それによると、ドゥーカス一門としてはコンスタンティノス＝ドゥーカスのほかコンスタンティノスの義父でマギストロスのグレゴラス＝イペリツェス、ドゥーカスの息子のグレゴラス＝ドゥーカス、従兄弟（あるいは甥）のミカエル＝ドゥーカスが戦死した。さらに息子のステファノスは去勢されて宦官とされた。一族以外では、アルメニア出身のクルティケスなる人物が戦死している。そのほかレオン＝コイロスファクテス、コンスタンティノス＝ヘラディコス、レオン＝カタカリツェス、アベサロム＝アロトアスは追放されたり剃髪されたりしている。さらにエパルコスのフィロテオスや、エウランピオスの子のコンスタンティノス、アイギデスとその一党が処刑されている。一方、コンスタンティノス＝リプスとアセクレティスのニケタスは逃亡に成功している。『シュメオン年代記』によると、「要職にある人の多くも」この時に殺された。また当時総大主教に再任されていたニコラオス＝ミュスティコスもこの反乱に参加していた。

ここから確認できることを述べていきたい。第一に、アンドロニコス＝ドゥーカスの反乱の時と比べて、中央での支持者が大きく拡大している。例えばレオン＝コイロスファクテスは中央政府の実力者の一人で、コンスタンティノス7世の母親のゾエの一族であった<sup>2</sup>。また彼はミカエル2世の側近であるフォティノスと血縁関係がある人物<sup>3</sup>と思われ、アモリア帝室とも関係の深い人物である。レオン＝カタカリツェスは恐らくレオン6世時代にドメスティコス・トーン・スコローンを努めていたレオン＝カタカロンと同一人物である。彼は恐らくミカエル2世の従兄弟で、トマスの乱の際にミカエル2世を助けたカタキュラスの子孫である<sup>4</sup>。その他にもエパルコスのフィロテオス、アセクレティスのニケタスなど、中央行政機構の要職や中堅官僚が参加している点も看過できない。

第二点目として、中央での支持者の中に、後のロマノス1世時代に政権の中核をなした人々と関連のある人物が含まれていることも注目に値する。例えばコンスタンティノス＝リプスはロマノス1世時代にドゥルンガリオス・トゥー・プロイムを努めた人物<sup>5</sup>か、あるいはその一族であ

<sup>1</sup> ThM pp.202-204, LG pp.288-291, GCA pp.874-877.

<sup>2</sup> 『タバリ年代記』によると、彼はコンスタンティノス7世の母方の叔父。The History of al-Tabari vol. 38: The Return of the Caliphate to Baghdad, F. Rosenthal (tr.), Albany, 1985, p.181.: cf. Herlong, p.106.

<sup>3</sup> ゾエ＝カルボノブシナはフォティノスの曾孫。ThC p.76. また9世紀初頭の年代記作者テオファネスは、『帝国統治論』によるとゾエ＝カルボノブシナの叔父であるという。年代的に大きく食い違うのでそのまま信じることはできないものの、テオファネスとゾエ＝カルボノブシナの間に血縁関係のあることは認めていいだろう。DAI ch.22.

<sup>4</sup> GCB p.28, ThC p.359. 彼は資料によってレオン＝カタコイラス、レオン＝カタキュラスなどと表記される。カタコイラス(Κατακοίλας)は当時の発音ではカタキュラスとほぼ同じになる。彼がフォティオスの一族であることは『エウテュミオス伝』に報告されている。VE p.11, DeCer., p.456.

<sup>5</sup> SOC p.289.

る。またコンスタンティノス＝ヘラディコスは、レオン6世の側近でバシレイオス1世によって追放され、ロマノス1世時代にパピアスとなったニケタス＝ヘラディコスを想起させる<sup>1</sup>。またロマノス1世時代にペロポネソスにいたレントキオス＝ヘラディコスは、ロマノス1世の息子のクリストフォロスの義父で、マギストロスであったニケタスの一族である<sup>2</sup>。さらにニコラオス＝ミュスティコスもロマノス1世政権の前半に大きな政治力を持っていた。

一方、クルティケスはコンスタンティノス7世の単独統治期にドゥルンガリオス・テース・ピグラスになったマヌエル＝クルティケス<sup>3</sup>との関係が考えられ、他の人々と一線を画している。なお894年に対ブルガリア戦で戦死した将軍の中にアルメニア出身のクルティケスが言及される<sup>4</sup>。

一方史料から確認できるかぎりでは、コンスタンティノス7世を支えていたのはマギストロスのステファノス＝カロマリアスを中心とするコンスタンティノス7世の後見人たちであった。マギストロスのステファノス＝カロマリアスはレオン6世の即位の際にレオン6世を支持していた人物で、繰り返して述べてきているようにミカエル3世の従兄弟にあたる。またマギストロスのヨハネス＝ヘラダスもステファノスと並んで大きな役割を果たしていた<sup>5</sup>。ヘタイレイアを率いて実際にドゥーカス軍と戦ったヨハネス＝ガリダスも同じくマギストロスだった<sup>6</sup>。彼は900年のザウツェス一門の陰謀の際に、ヘタイレイアを指揮している。彼らはレオン6世が最も信頼していた側近中の側近であり、また当時の高官層の頂点にたっていた人々であったと考えられる。

以上要するに、913年のコンスタンティノス＝ドゥーカスの反乱は、アモリア帝室やバルダスの一族と関係を持った、いわば親アモリア派の人々が二つに分かれて争った対立だった。そのうちの一方、コンスタンティノス＝ドゥーカス側はレオン6世の統治に対して反感を持っていた地方の有力家門を中心とした集団であった。しかし907/8年のアンドロニコス＝ドゥーカスの反乱の際とは異なって、彼らを支持する勢力は中央で大きく拡大している。レオン6世の治世末期に、レオン6世の統治に疑問をもつ勢力が大きく拡大したのである。その背景については明確なことはわからないものの、四婚問題<sup>7</sup>でレオン6世の政治力が大きく後退したことは無視できない。四婚によって誕生したコンスタンティノス7世の即位は、コンスタンティノス7世の皇帝としての正当性に疑念を起こした。それがコンスタンティノス＝ドゥーカスに対する親アモリア派の支持の中央での拡大につながったことは否定できない。

それに対してステファノス＝カロマリアスらは、あくまでもレオン6世を支持していこうという政治姿勢であった。彼らはレオン6世時代にマギストロスとして中央行政機構の頂点にたっ

<sup>1</sup> ThM p.182, LG p.260, GCA p.846.

<sup>2</sup> ThM p.215, 227, GCA pp.891-892, 908.

<sup>3</sup> ThM p.237, LG p.329, GCA p.921.

<sup>4</sup> ThM p.186, LG p.267, GCA p.853.

<sup>5</sup> ThM p.202, LG p.288, GCA p.874.

<sup>6</sup> ThM p.203, LG p.290, GCA pp.875-876.

<sup>7</sup> ゾエ＝ザウツィナの没後、レオン6世はエウドキアなる女性と結婚するがすぐに没する。その後結婚したのが愛人でコンスタンティノス7世の母親となるゾエ＝カルボノブシナである。しかし当然この結婚は教会法違反である。ニコラオス＝ミュスティコスが907年に更迭された要因の一つは彼がレオン6世の四婚に反対したからでもある。



いた人々であり、レオン6世時代の状況の存続を指向していた可能性は高い。また後述するようにコンスタンティノス7世の母親のゾエ=カルボノブシナも彼らと同様の社会的背景を持った人物だったから、コンスタンティノス7世やゾエ=カルボノブシナと結ぶことは双方にとって利益のあるものであった。すなわちステファノス=カロマリウスらにとっては自らの地位や利益の存続の大義名分の獲得、ゾエ=カルボノブシナにとっては強力なバックアップの確保につながった。

しかしコンスタンティノス=ドゥーカスの反乱で示されたように、反レオン6世～反コンスタンティノス7世の勢力は、地方のみならず中央においても無視できないものとなっていた。親アモリア派内部でのこうした対立は、ゾエ=カルボノブシナがコンスタンティノス7世の摂政を務めていた時代にさらに激化していく。

### 10 ③ ヒメリオスと海軍

バシレイオス1世時代、バシレイオス1世に対抗する勢力として重要だった勢力としてはもう一つ海軍があげられる。レオン6世時代、ドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーに就任していたことが確認できるのはエウスタティオスとヒメリオスの二人のみである。ここでは経歴が比較的明確なヒメリオスを主として考察し、皇帝、高官層との関係について論じていく。

はじめに簡単にエウスタティオスについても触れておく。エウスタティオスは、どのような人物であるかははっきりとはわかっていない。彼についてはジェンキンスやH.J.キューンなど、エウスタティオス=アルギュロスと同一人物と見なす見解<sup>1</sup>が現在まである。しかしギューヤンの主張するように、レオン6世時代に同名の二人の人物がいたと考えるほうが無難である<sup>2</sup>。

もう一人のドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーがヒメリオスである。『エウテュミオス伝』によると、彼はレオン6世の4人目の皇后であるゾエ=カルボノブシナの一族である<sup>3</sup>。ゾエ=カルボノブシナは8世紀以来の名門の一家の出身で、アモリア帝室と関係の深い一族でもある。そして伝統的に海軍との関係の強い一族だった<sup>4</sup>。海軍との深い結びつきは、アモリア帝室との密接な結びつきを想起させる。ゾエ=カルボノブシナの一族は、ヒメリオスのほかにもレオン6世時代に中央で数多くの人物が活躍している。例えばレオン=コイロスファクテスはブルガリアやムスリムとの外交交渉で活発な動きを展開している<sup>5</sup>。また恐らくレオン6世時代にマギストロスかつロゴテテース・トゥー・ドゥロムーであったレオン=ラブドゥーコス<sup>6</sup>は、レオン=コイロスファクテスの妻の兄弟だった<sup>7</sup>。彼は880年のシチリア遠征の際、プロトスパタリオスかつデュラッキオンのストラテegosだった<sup>8</sup>。

これらの情報を総合すると、ヒメリオスやゾエ=カルボノブシナの一族は8世紀以来中央で大

<sup>1</sup> R.J.H.Jenkins, "The 'Flight' of Samonas": H.-J.Kühn, *Die byzantinische Armee im 10. und 11. Jahrhundert: Studien zur Organisation der Tagmata*, Wien, 1991, S.108.

<sup>2</sup> R.Guilland, op.cit., pp.304-305. 『シュメオン年代記』には彼の家門名はカラマロスとある。ThM p.192, LG p.275, GCA p.861.

<sup>3</sup> VE pp.109-113.

<sup>4</sup> 第3章参照。

<sup>5</sup> ThM pp.187-188, LG pp.268-269, GCA pp.854-855; al-Tabari, op.cit., p.181.

<sup>6</sup> Herlong, p.274.

<sup>7</sup> ThM p.181, LG p.258, GCA p.845, DAI ch.32.

きな力をもっていた一族であり、海軍や中央行政機構で活躍する人物を輩出した。そしてアモリア帝室との関係が推測できる一方、レオン6世時代にはレオン6世を支持する一族として大きな力を持っていた。

ヒメリオス自身に話を戻す。ヒメリオスの確認できる最も初期の経歴は、プロトアセクレティスである<sup>1</sup>。彼はエウスタティオスに代わってドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーに就任した。そしてロゴテテース・トゥー・ドゥロムーも兼任する<sup>2</sup>。彼はドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーに就任して以降、当時エーゲ海に跋扈していたムスリム艦隊と対峙する。彼はいくつかの海戦で多くの戦果を上げ、一時シリア沿海にまで進出する<sup>3</sup>。前任者以上に巧みに海軍を指揮している点から、彼にはそれ以前に海軍での勤務の経験があった可能性が高い。しかし911年に行ったクレタ攻撃は全くの失敗に終わり、キオス沖の海戦で惨敗し、自らも辛うじてレスボス島に逃げ込んだ<sup>4</sup>。しかもその頃レオン6世が没する。彼は新皇帝のアレクサンドロスによって捕らえられ、コンスタンティノープルの修道院に幽閉されてその生涯を終えるのである<sup>5</sup>。

こうしたことから確認できる点は以下のようなことである。第一に、ドゥルンガリオス・トゥー・プロイムー職とコンスタンティノープルの高官層との結びつきがきわめて強いことである。ドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーとロゴテテース・トゥー・ドゥロムーの兼任は例外的であるにせよ、それが許容されうる条件はあった。すなわち9世紀以来の中央艦隊とコンスタンティノープルの高官との結びつきが、なおこの時期においても強固に存続していたのである。ヒメリオスが、アモリア帝室と関係の深い一族の出身であったことも看過できない。中央艦隊とアモリア朝の諸皇帝との強力な結びつきは、レオン6世の時代になってもなお存続していた。中央艦隊は、親アモリア派の牙城だったのである。

第三に、ヒメリオスの一族がレオン6世にきわめて近い関係を保っていた。この一族で、バシレイオス1世時代に中央で活動していたことが確認できるのはレオン=コイロスファクテス<sup>6</sup>のみであり、彼もまた中央の政情に大きな影響を及ぼすことはなかった。しかしレオン6世時代になると、ヒメリオスの一族は大挙して中央政界で大きな力を持つようになる。これは、この一門がレオン6世を強力に支持していたことを示唆している。ステファノス=カロマリウスらと同様レオン6世を支持するグループに属していたのである。アレクサンドロスが即位するとすぐにヒメリオスを更迭した背景も、この一族とレオン6世の密接なつながりによるものだろう。

ただし、この一族の全体がレオン6世を強力に支持していたわけではない。レオン=コイロスファクテスは反レオン6世の傾向をもっていた。彼はコンスタンティノス=ドゥーカスの反乱に

<sup>1</sup> ThM p.193, LG p.277, GCA p.863.

<sup>2</sup> ThM p.196, LG p.280, GCA p.866, DeCer., p.651, *Vita Sanctae Theoctistae Lesbiae*, in: AASS Nov.IV, 1925, pp.221-233, p.227.

<sup>3</sup> ThM p.196, LG p.281, GCA p.867, Vasiliev, p.43.

<sup>4</sup> ThM p.199, LG p.285, GCA p.870.

<sup>5</sup> ThM p.201, LG p.287, GCA p.873.

<sup>6</sup> バシレイオス1世のミュスティコス。ミュスティコスの職務についてはまだ明確には不明だが、皇帝の側近くに仕えてプロトアセクレティスの権能の一部などを遂行していたようである。



参加して失脚している。またアンドロニコス＝ドゥーカスの反乱にも関与していた可能性がある<sup>1</sup>。レオン＝コイロスファクテスの行動やその背景については不明な点が多い。それゆえ詳細な検討は他日を期したい。しかしいずれにせよ、親アモリア派の家門の中にすら、レオン6世に対する対応には差が存在していた。こうした差が、レオン6世の没後には一層広がっていくのである。

#### (4) アレクサンドロスの政権

912年、レオン6世は45歳で世を去った。コンスタンティノス7世はこの時まだほんの幼児だった。そのため中継ぎ的な意味合いで、レオン6世の弟のアレクサンドロスが即位した。

彼はレオン6世と必ずしも良好な関係を維持していたわけではない。レオン6世の時代、レオン6世の暗殺未遂事件があったが、その背後にアレクサンドロスがいるという風説がたっている<sup>2</sup>。また事実とは思われないが『シュメオン年代記』によるとレオン6世は臨終の際、枕元にやってきたアレクサンドロスに対して、「ああ、悪しき時が13カ月続くのか!」と言ったという<sup>3</sup>。

実際、彼は即位するとレオン6世の側近だった人々を次々と更迭する。先述したヒメリオスはその例である。また総大主教のエウテュミオスも更迭され、レオン6世と対立していたニコラオス＝ミュスティコスが再任された<sup>4</sup>。さらにサモナスの後任のパラコイモメノスのコンスタンティノスも更迭されている。ゾエ＝カルボノブシナも宮廷を追われた<sup>5</sup>。

しかしアレクサンドロスが退けた人々はみな、レオン6世の四婚問題にかかわり、それを支持した人々である。パラコイモメノスのコンスタンティノスは四婚問題との関係が直接には認められないが、四婚が大きな問題と化した時期にパラコイモメノスに就任していることや、後にゾエ＝カルボノブシナが復権すると彼も復活していることから、無関係であったとは考えにくい。

彼は治世がきわめて短いことや、『シュメオン年代記』が彼に対してきわめて否定的態度をとっていること<sup>6</sup>などから、彼が皇帝をとりまく諸集団とどのような関係を持っていたかについては見極めにくい。しかし乏しい資料から判断する限りでは、彼がコンスタンティノープルの高官たちと激しく衝突したようには感じられない。彼が更迭した人物も、恐らく上記のような、レオン6世の四婚に関与した者たちだけに限られていたと思われる。また彼には子供がなかったことから、コンスタンティノス7世やその周囲の人々を全く切り捨てることもできなかっただろう。

『シュメオン年代記』によるとアレクサンドロスは臨終の際、

後見人として総大主教のニコラオス、マギストロスのステファノス(＝カロマリヤス)、マギストロスのヨハネス＝ヘラダス、ライクトルのヨハネス、そしてバシリツェスとガブリエロプロスに、レオンの子のコンスタンティノス(7世)の統治を委ねた。

という<sup>7</sup>。また別の個所でも、アレクサンドロスが没した直後にはニコラオス＝ミュスティコスと

<sup>1</sup> cf. R. J. H. Jenkins, "Leo Choerosphactes and the Saracen Vizier", *Recueil des travaux de l'Institut d'Etudes byzantines* 8(1963), pp. 167-175.

<sup>2</sup> ThM p. 192, LG p. 275, GCA pp. 861-862.; cf. VE pp. 67-69.

<sup>3</sup> ThM p. 199, LG p. 285, GCA p. 871. アレクサンドロスは在位13ヶ月で没した。

<sup>4</sup> ThM p. 199-200, LG pp. 285-286, GCA pp. 871-872.

<sup>5</sup> VE p. 133, ThM p. 205, LG p. 292, GCA p. 878.

<sup>6</sup> cf. P. Karlin-Hayter, "The Emperor Alexander's bad name", *Speculum* 44(1969), pp. 585-596.

<sup>7</sup> ThM pp. 201-202, LG p. 288, GCA pp. 873-874.

ステファノス＝カロマリヤス、ヨハネス＝ヘラダスが後見人として政治を見ていたことが記されている<sup>1</sup>。ライクトルのヨハネス以下の人々はアレクサンドロスの側近たちであるが、彼らはコンスタンティノス7世政権下では影響力を持たず、すぐに失脚している。恐らくアレクサンドロス時代にもレオン6世時代と同様、高官たちと協議の上政治を遂行する、という体制が～若干の変化はあったものの～維持されたのである。

陸軍・海軍についても簡単に見ておきたい。陸軍の総司令官であるドメスティコス・トーン・スコローン職はコンスタンティノス＝ドゥーカスが留任している。海軍の総司令官であるドゥルンガリオス・トゥー・プロイム一職にはヒメリオスに代わってロマノス＝レカペノスが任命されている。彼は海のテマであるテマ・サモスのストラテゴスとして911年のクレタ遠征にも参加しており、順当な昇格人事が行われたと理解できる<sup>2</sup>。

以上要するに、アレクサンドロスの時代にはレオン6世の四婚という、宗教的な問題にかかわった者たちを除くと、レオン6世時代の高官たちが地位を維持している可能性が高い。また陸軍・海軍との関係についても、レオン6世時代後期の状態がそのまま存続していた。

しかしながらこのことは、レオン6世時代から生じていた諸問題が、何ら変わることなく残っていたことを意味している。特にレオン6世に対する高官たちの態度の違いは、四婚によって生まれたコンスタンティノス7世に対する対応の違いへと、問題が一層深刻なものへと昇華しつつあった。そしてアレクサンドロスの早すぎる死によって、この問題は一気に加熱していく。

#### (5) おわりに

全体的傾向を見た場合、9世紀中盤のミカエル3世・バシレイオス1世の時代から大きな変化は経験していない、というのが本章での結論となる。テオフィロス・ミカエル3世時代に強力な社会集団として成長した高官層はこの時期においてもなお強力な発言力を維持していた。そして海軍との緊密な関係も、アレクサンドロスの時代まで維持されていた。

しかしその一方で変化も看取できる。ミカエル3世やバルダスを支持していた人々の間の、政治姿勢をめぐる分裂傾向である。中央の高官たちの多くは、ミカエル3世の子の可能性もあるレオン6世を支持する傾向が強かった。しかし地方との結びつきが強い一族や中央の高官たちの中の一部には、レオン6世に対抗して別の人物を皇帝にたてようという動きも存在していた。

親アモリア派というべき人々の中のこの二つの傾向は、レオン6世時代の末期、レオン6世が後継者作りのために教会法に明らかに違反する四婚を強行し、そこからコンスタンティノス7世が生まれたことによって一層分裂傾向を強めていった。そしてコンスタンティノス7世を後見したアレクサンドロスの早すぎた死も、この双方の対立を激化させる要因となり、コンスタンティノス＝ドゥーカスの反乱へとつながったのである。

<sup>1</sup> ThM p. 202, LG p. 288, GCA p. 874.

<sup>2</sup> ロマノス＝レカペノスについては次章で詳細に分析する。



## 8 ロマノス1世政権の成立と展開

### (1) はじめに

レオン6世とアレクサンドロスの相次ぐ死によって、ビザンツ帝国位にはまだ幼児のコンスタンティノス7世ボルフェロゲニトスがついた。彼は幼児で政権担当能力がないだけでなく、レオン6世の四婚から産まれた子ということで、その帝位継承権にも疑問が持たれる人物であった。ブルガリアの侵入など対外的な混乱も相俟って、コンスタンティノス7世が即位してからのしばらくの間、ビザンツ帝国の政情は激しく混乱を来す。こうした状況下、政権を獲得したのがロマノス1世レカペノスである。ロマノス1世は919年にクーデターによって政権を獲得し、920年には皇帝として即位する。そして内外の困難な状況を打破して944年に至るまで25年間、ビザンツ帝国の政治を主導する。

ロマノス1世の政権の成立と展開をめぐっては、いくつかの重要な問題が存在している。第一に、ロマノス＝レカペノスが政権を獲得するまでの展開が特異である。彼は少なくとも917年までは政権内で何ら大きな役割を果たしてはおらず、彼がクーデターを成功させた理由は、いまだ十分に説明されているとはいえない。ロマノス1世について概説的な著作を現したS.ランシマン<sup>1</sup>に代表される従来の見解では、ブルガリアの脅威が強調される。すなわちブルガリアに対抗するために強力な軍事的・政治的リーダーシップを持った人物が必要だった、とされるのである。しかしながらこうした説明では不十分である。何ゆえロマノス＝レカペノスが強力な政治的リーダーシップをもっていたのか、についての説明がなく、元来自明のこととされているからである。

また、彼が何ゆえ25年に及ぶ長期安定政権を構築できたのか、について問題とする視点が従来の研究には欠落している。

本章では、ロマノス1世レカペノスが政権を獲得する過程とその背景、そして25年に及ぶ長期政権がなにゆえ可能だったのか、考察を行う。この際これまで考察してきたような皇帝と皇帝をめぐる諸集団との関係がポイントとなることは言うまでもない。また945年にコンスタンティノス7世が復権できた要因についても考察を行う必要性もある。こうした考察を経た上で、10世紀前半におけるビザンツ帝国の皇帝権力の動向を、明らかにしていくことが本章の目的となる。

### (2) 摂政政権の時代

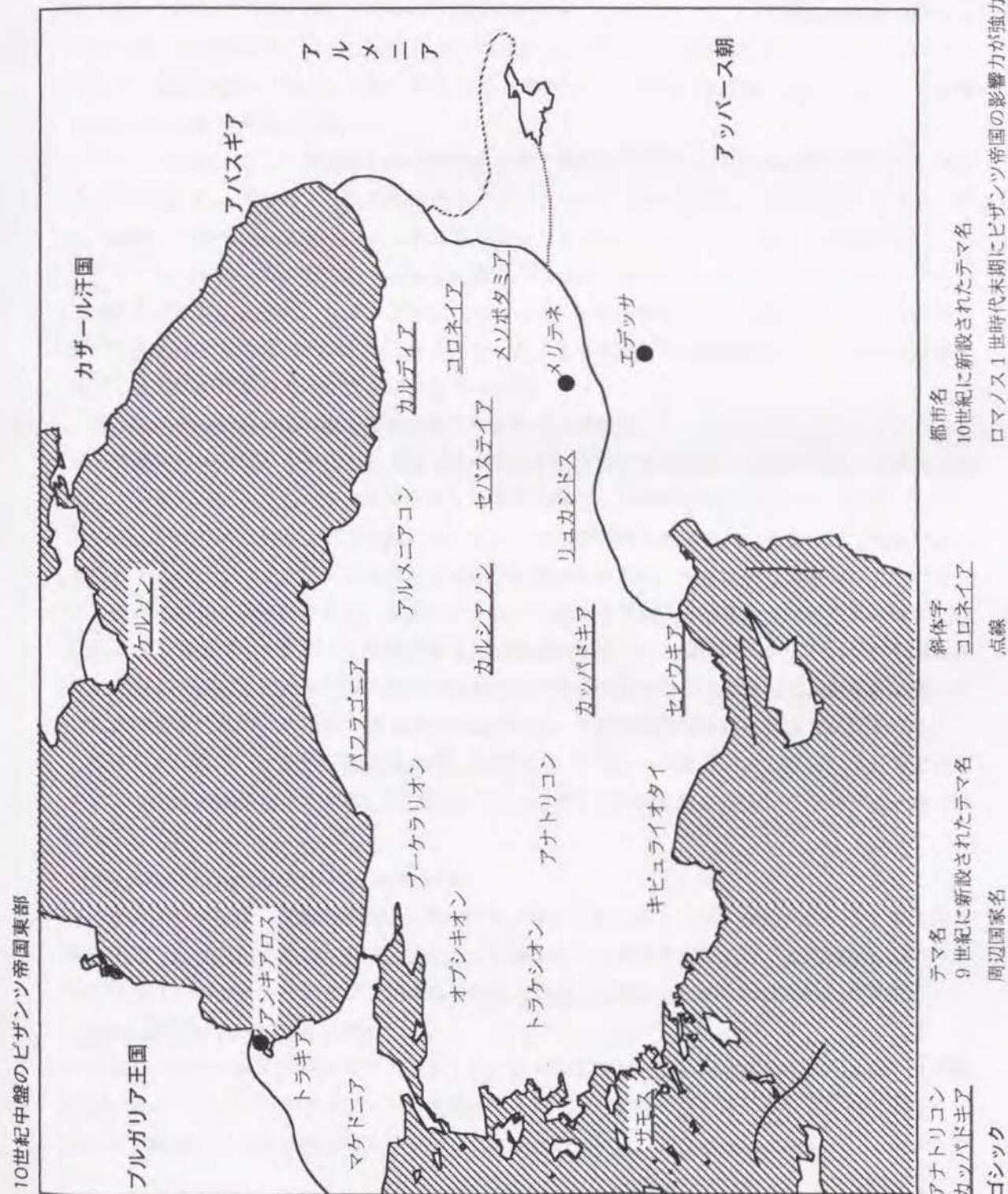
本節ではコンスタンティノス7世の即位から917年までの政権の動向について分析を行う。

913年にアレクサンドロスが没した後、総大主教のニコラオス＝ミュスティコス为首班とする摂政政権が組織された。前章の最後に簡単に述べたように、この政府を組織していたメンバーのほとんどはレオン6世以来高官たちの頂点にたっていた人々から組成されており、それまでの政治路線の継承を目的とした政権であることは疑いない。

だがこの政権は成立早々大きな試練を迎えることになる。すなわち前章で分析したコンスタンティノス＝ドゥーカスの反乱である。この反乱はコンスタンティノブル市内での市街戦によって辛うじて鎮圧できたが、この反乱は帝国の政情、そして摂政政権にも大きな影響を及ぼした。

第一に、この反乱に関与していたニコラオス＝ミュスティコスが失脚した。但し彼は政治への発言権は喪失するものの、総大主教の地位は維持する。

第一点目とも大きく関係することであるが、ニコラオス＝ミュスティコスの失脚によってコン



<sup>1</sup> S. Runciman, *The Emperor Romanus Lecapenus & his reign*, Cambridge, 1929 (以下、Runciman と略)。



スタンティノス7世の生母のゾエ=カルボノブシナが復権した。これに伴って摂政政権も大きく変化する。ゾエ=カルボノブシナを追放したアレクサンドロスの側近たちは失脚する。それと入れ代わりに、アレクサンドロス時代に同じく地位を追われた宦官・家産官僚たちが続々と復権してくる。すなわちパラコイモメノスにはコンスタンティノスが復帰し、またアナスタシオス=ゴンギュリオスとコンスタンティノス=ゴンギュリオスの兄弟が宮廷で大きな力を持つようになった。さらにドゥルンガリオス・テース・ピグラスにも宦官のダミアノスが就任している<sup>1</sup>。

かくしてゾエ=カルボノブシナは復権すると、自らの信任する宦官や家産官僚たちで宮廷内を固めた。コンスタンティノス=ドゥーカスの反乱の際に活躍したヨハネス=ガリダスがヘタイレアルケスにとどまり<sup>2</sup>、またマギストロスのステファノス=カロマリ阿斯が摂政政権の一員としてとどまっていたが、同じくマギストロスのヨハネス=ヘラダスがコンスタンティノス=ドゥーカスの反乱の後ほどなくして没した<sup>3</sup>ことなどもあって、宮廷内での宦官・家産官僚たちの影響力がとみに強まったのである。

ゾエ=カルボノブシナが刷新したのは宮廷内の人事だけではない。彼女は陸軍に対しても必要な方策をとった。すなわちコンスタンティノス=ドゥーカスの代わりにニケフォロス=フォーカス（初代）の息子のレオン=フォーカスをドメスティコス・トーン・スコローンに任じた<sup>4</sup>。

こうした一連の人事はどのような意味を持つだろうか。第一にコンスタンティノス=ドゥーカスの反乱の失敗によって、レオン6世に代わって新しい皇帝をたてようと試みていた一派の勢力が中央においても地方においても大きく後退した。その結果反レオン6世の一派は大きな打撃を受け、政局に影響を与えることができなくなった。

第二に、中央において宦官や家産官僚たちの発言力が増大した。コンスタンティノス=ドゥーカスの反乱の失敗は、中央においてはゾエ=カルボノブシナやステファノス=カロマリ阿斯らの、親レオン6世の高官たちの勝利を導いた。しかし同時に、パラコイモメノスのコンスタンティノスやゴンギュリオス兄弟などが宮廷に進出し、大きな影響力を及ぼすようになった。特にパラコイモメノスのコンスタンティノスはゾエの絶大な信任を背景に、大きな発言力を持つようになった。それに対して高官たちには、ステファノス=カロマリ阿斯とヨハネス=ヘラダスのほかにはゾエ=カルボノブシナに対して発言できるだけの實力を持った人物がいなかった。しかもヨハネス=ヘラダスが没したため、ゾエに対する発言力はさらに狭まることになった。かくして親レオン6世の高官たちは、政権の一翼に参加しながらも、それ以前に比べると発言力が低下した。

こうした状況下、大きな影響力を及ぼした事件が、レオン=フォーカスと宦官のコンスタンティノスとの血縁関係樹立である。すなわち『シュメオン年代記』によるとレオン=フォーカスは

<sup>1</sup> ThM p.205, LG pp.292-293, GCA pp.878-879.

<sup>2</sup> 正確に言うならば、反乱の収拾後一時的にテオフィロス=ドミニコスがヘタイレアルケスに就任する。だが彼はパラコイモメノスのコンスタンティノスと対立してすぐに失脚し、ヨハネス=ガリダスがヘタイレアルケスに再任される。ThM p.205, LG pp.292-293, GCA pp.878-879.

<sup>3</sup> ThM p.205, LG p.293, GCA p.879.

<sup>4</sup> レオン=フォーカスのドメスティコス・トーン・スコローン在任が確認できるのは917年であるが、恐らくゾエ=カルボノブシナの復権後ほどなくして就任したと考えられる。彼は恐らくレオン6世時代にアナトリコンのストラテゴスを務めている。cf. Cheynet, pp.296-297.



パラコイモメノスのコンスタンティノスの婿とされている<sup>1</sup>。コンスタンティノスは宦官であるから、コンスタンティノスの養女あるいは一族の女性と、レオン＝フォーカスが結婚していたと考えられる。レオン＝フォーカスの父親のニケフォロス＝フォーカスがステュリアノス＝ザウツェスとの縁組を拒絶したのは、明らかに姿勢が異なっている。この結果、ゾエ＝カルボノブシナの政権はこれまでとは大きく異なった組成をもつようになった。すなわち宦官・家産官僚と小アジア軍事家門が結びつき、ゾエ＝カルボノブシナを支える形態をとったのである。レオン6世の時代に皇帝を支えていた高官層は、政権に参加はしていたもののその影響力は明らかに後退した。またレオン6世時代以来政権に反感を抱いていた一派は、中央・地方ともに政権から完全に排除されたのである。

- 10   ゾエ＝カルボノブシナの摂政政権の成立によって、国内は一応の安定を取り戻した。続く課題は、対外情勢の打開であった。特にバルカン半島におけるブルガリア問題の解決は、焦眉のこととなっていた。ブルガリアとの和平交渉はニコラオス＝ミュスティコスが行っていたが、彼の失脚によって交渉は決裂した<sup>2</sup>。ブルガリア王のシュメオンは帝国のバルカン領全域に侵入と掠奪を繰り返していた。

ゾエ＝カルボノブシナはまずレオン＝フォーカスに東方への出撃を命じる。東方のムスリムとの和平を締結して<sup>3</sup>から、ゾエ＝カルボノブシナは対ブルガリア戦準備のために全精力を集中した。そして917年、ブルガリア軍との本格的戦闘を開始する。

- 20   917年の夏、レオン＝フォーカス率いるビザンツ陸軍はバルカン半島を北上し、黒海沿岸の都市アンキアロスの近郊に進出した。またドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーのロマノス＝レカペノスの率いる海軍はドナウ川の河口に進出し、ドナウ北岸にいた遊牧民族、ベチェネグ人を渡河させてブルガリアの背後を突こうとした<sup>4</sup>。

それに対してシュメオンは最初にアンキアロスへ軍を進める。そして8月20日、アンキアロス近郊のアケロオス河畔で、シュメオンとレオン＝フォーカスの軍は衝突した。レオン＝フォーカス率いるビザンツ陸軍は惨敗し、レオン＝フォーカス自ら辛うじて難を逃れるほどであった。一方ロマノス＝レカペノス率いる海軍もベチェネグ人の渡河には成功しなかった。艦隊はドナウ河口から南下し、黒海沿岸の都市メセンブリアでレオン＝フォーカスを救出した<sup>5</sup>。

- 30   シュメオンの軍は勝利に乗じてコンスタンティノープルの近くにまで南下してきた。レオン＝フォーカスは残された兵力を率いて再びブルガリア軍と対峙する。しかし彼はコンスタンティノープル近郊のカタシュルタイで再び大敗を喫する。この相次ぐ敗戦によってビザンツ陸軍は大きな打撃を受けたのである<sup>6</sup>。

大きな打撃を受けたのは陸軍だけではなかった。対ブルガリア作戦を立案した政府の威信も大

<sup>1</sup> ThM p.208, LG p.296, GCA p.883.

<sup>2</sup> ニコラオスはシュメオンに皇帝位を認めることで妥協しようとしていた。他の高官たちもそれに同調していたようである。ThM pp.204-205, LG pp.291-292, GCA pp.877-878.:cf.Fine, pp.142-148.

<sup>3</sup> ThM p.207, LG p.294, GCA pp.880-881.:cf.Runciman, p.131.

<sup>4</sup> ThM p.206, 207, LG pp.293, 294-295, GCA p.879, 881.

<sup>5</sup> ThM pp.207-208, LG p.295, GCA pp.881-882.

<sup>6</sup> ThM p.208, LG pp.295-296, GCA pp.882-883.

きく低下した。また陸軍を率いていたレオン＝フォーカスの指導力も低下した。かくして、小アジア軍事家門との連合によって安定政権を構築していたゾエ＝カルボノブシナの政権は激しく動揺する。こうした混乱の中、頭角を現してきたのがロマノス＝レカペノスであった。

### (3) ロマノス＝レカペノスの権力獲得

#### ① ロマノス＝レカペノスの一族と経歴

はじめに、ロマノス＝レカペノスの経歴について概観する。レカペノス一門として、最初に資料に現れるのはロマノスの父親のテオフュラクトス＝アバスタクトスである。『シュメオン年代記』によるとテオフュラクトスは871年頃、バシレイオス1世が小アジア東部のパウロ派撃滅のために軍を進めた際、敗北して命を失いそうになったバシレイオス1世を救出した<sup>1</sup>。

- 10   一方、他の資料にもテオフュラクトス＝アバスタクトスと考えられる人物についての情報が得られる。10世紀に成立した聖人伝によると、彼はパトリキオスの爵位を持っていた。またフォティオスの書簡に現れる、ミカエル3世時代にアルメニアコンのストラテゴスを務めていたプロトスパタリオスのテオフュラクトスと同一人物と見なす見解もある<sup>2</sup>。彼はミカエル3世・バシレイオス1世時代に活躍した地位の高い軍人なのである。

テオフュラクトス＝アバスタクトスは恐らくテマ・アルメニアコンのレカペという地に所領を持っていた。その地で生まれたのがロマノスである。彼のレカペノスという家門名はレカペに由来しており、またアバスタクトスの家門名も並行して利用されている<sup>3</sup>。

- 20   ロマノス＝レカペノスが資料に明確に言及されるのは、911年が最初である。この年、彼は海のテマであるテマ・サモスのストラテゴスとしてヒメリオスの対クレタ遠征に参加していた。サモスのストラテゴスに就任する以前、ロマノスがそのような経歴を重ねていたのかについては、明確なところはわからない。対クレタ戦で大敗してヒメリオスが失脚したのにともない、912年あるいは913年に彼はドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーに昇格している。

海軍との関わりという点では、909-910年に小アジア南部の港湾都市アッタレイアの城壁を修復した、ドゥルンガリオスのステファノス＝アバスタクトスという人物の存在も無視できない<sup>4</sup>。アバスタクトス＝レカペノス一門は海軍との結びつきを深く持っていた家門だったのである。

#### ② 対ブルガリア戦から宮廷クーデターまで

- 30   913年のコンスタンティノス＝ドゥーカスの反乱に際して、ロマノス＝レカペノスが何らかの関与を行った形跡はない。また続くゾエ＝カルボノブシナの摂政政権下でも、彼が政治の前面に出てくることはなかった。ロマノス＝レカペノスが政局に大きく関わるようになるのは917年の対ブルガリア戦以降のことである。先述したように彼はこの年、レオン＝フォーカスらとともにブルガリアに向けて出撃する。彼の任務は艦隊を率いてドナウ河口に進出し、ベチェネグ人をブルガリア領へ渡河させることであった。しかし彼はこの任務を全うすることなく退却する。

コンスタンティノープルに戻ってくると彼は裁判にかけられる。『シュメオン年代記』による

<sup>1</sup> ThM p.178, LG p.255, GCA p.841.

<sup>2</sup> Deiparae, p.887.:Photius, *Epistulae*, 21.

<sup>3</sup> ロマノス＝レカペノスの故郷がテマ・アルメニアコンであったことは『シュメオン年代記』に言及がある。ThM p.229, LG p.320-321, GCA p.911.:cf.Runciman, p.63.

<sup>4</sup> Herlong, pp.146-147.



と、ペチェネグ人との交渉を担当していたパトリキオスのヨハネス＝ボガスがロマノスと対立し、コンスタンティノープルに戻ってから裁判となったと説明している<sup>1</sup>。しかしながらこれが本当かどうかは疑問が残る。というのも『スキュリツェス年代記』によると、レオン＝フォーカスはアケロオス河畔でシュメオンと戦っていた際、ロマノス＝レカペノスが全艦隊とともに「帝国を継承しよう」とコンスタンティノープルへの撤退を開始したとの報告を受け、急ぎ自らも撤退した結果、シュメオンに大敗を喫する結果となったという<sup>2</sup>。『シュメオン年代記』はロマノス＝レカペノスに対して好意的な資料であり、皇帝に対する反逆を報告していない可能性は大いにありうる。それゆえこの『スキュリツェス年代記』の報告も、信憑性はかなりある。

10 ロマノス＝レカペノスには目を潰すという判決が下される。しかしこの判決にマギストロスのステファノス＝カロマリウスと宦官のパトリキオスのコンスタンティノス＝ゴンギュリオスが異議を挟み、ロマノス＝レカペノスは辛うじて留任した<sup>3</sup>。

宮廷内でも、バラコイモメノスのコンスタンティノスに対する不信感が強まっていった。その先頭に立っていたのがコンスタンティノス7世の家庭教師を務めていたテオドロスである。彼はバラコイモメノスのコンスタンティノスを打倒する計画を立案し、ロマノス＝レカペノスも仲間に引き入れた<sup>4</sup>。一方バラコイモメノスのコンスタンティノスもロマノス＝レカペノスをコンスタンティノープルから追い払おうと計画していた。918年末、バラコイモメノスのコンスタンティノスはロマノスにコンスタンティノープルからの退去を勧告するためロマノスのもとを訪れる。しかしロマノスはコンスタンティノスを捕らえて旗艦に幽閉した。これに伴って宮廷でもクーデターが起きる。ゾエ＝カルボノブシナは失脚し、代わってテオドロスとステファノス＝カロマリウス、そしてニコラオス＝ミュスティコスが宮廷内の実権を握った。さらにレオン＝フォーカス  
20 もドメスティコス・トーン・スコローン職を追われ、ヨハネス＝ガリダスに代わった<sup>5</sup>。

917年のブルガリア戦から、宮廷内でのクーデターまでのこうした展開から、どのようなことが確認できるだろうか。以下、分析を行っていく。

第一に、すでに917年の時点でロマノス＝レカペノスが中央政府に対して批判的な立場に立っていたことが確認できる。恐らくこの時点までに、ロマノス＝レカペノスと結んでゾエ＝カルボノブシナの政権を覆そうとする勢力が中央にいたのである。これはどのような勢力であったか。恐らく先述したテオドロスとそのメンバーだったろう。『シュメオン年代記』ではテオドロスとロマノス＝レカペノスが結びついたのをブルガリア戦の後としているが、実際にはもっと以前から結びついていたかもしれない。そして宮廷でのクーデターでゾエ＝カルボノブシナに代わって  
30 実権を握ったのがステファノス＝カロマリウスとニコラオス＝ミュスティコスだったことから、反ゾエ＝カルボノブシナ勢力がどのような性格を持った集団であるかも、明らかである。前節で述べたようにゾエ＝カルボノブシナの政権下ではクルクアス家などのレオン6世からは一歩離れた立場をとっていた親アモリア派の勢力は政治的影響力を排除され、レオン6世を支えていた高

官たちの力も大きく後退していた。こうした勢力がゾエ＝カルボノブシナの政権に不満を持っていたことは想像に難くない。彼らは影響力回復のために一つにまとまったのである。

そして彼らがドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーのロマノス＝レカペノスと結んだことも、きわめて自然な成り行きである。これまで分析してきたように、海軍は9世紀以来親アモリア派の高官たちときわめて密接な関連を持っていた。海軍が親アモリア派の高官たちと結びついたことで、宦官・家産官僚と小アジア軍事家門との連合で成り立っていたゾエ＝カルボノブシナの政権に対抗する、強力な勢力が姿を現したのである。失脚寸前だったロマノス＝レカペノスが難を逃れたのも、こうした勢力の介入によって成功したものであろう<sup>1</sup>。

10 それゆえ917年から918年の一連の事件は、この双方の勢力が激しくせめぎ合った結果引き起こされたものだったといえる。対ブルガリア遠征によってコンスタンティノープルが手薄な状況になることは、コンスタンティノープルでの実力行使には好都合だったろう。また対ブルガリア戦の失敗によってゾエ＝カルボノブシナやレオン＝フォーカスの指導力が低下したことは、反対する勢力にとっては絶好のチャンスだった。そしてついに918年、反対派によるクーデターが成功し、親アモリア派が政権を奪回したのである。

### ③ ロマノス＝レカペノスの勝利

クーデターの成功によって、ニコラオス＝ミュスティコスが政権に復帰し、ステファノス＝カロマリウスとともにコンスタンティノス7世を後見することとなった。しかしこうした体制は長くは続かなかった。

この体制を崩壊させたのは他ならぬロマノス＝レカペノスであった。ロマノスは919年3月24  
20 日に使者を送り、宮廷での拝謁を要求した。しかしニコラオス＝ミュスティコスを首班とする摂政政権はそれを拒絶した。そのためロマノス＝レカペノスは4月5日、コンスタンティノス7世の家庭教師のテオドロスと結んで、大宮殿の南側に面したブーコレオン港に全艦隊を率いて武装して入港した。それと時を同じくして、ロマノスを支持する高官たちも大宮殿に入った。このロマノス＝レカペノスの実力行使によって、頻繁にその構成が変わりつつも913年以来続いてきた摂政政府は最終的に崩壊した。マギストロスのステファノス＝カロマリウスは宮廷を脱出した。また総大主教のニコラオス＝ミュスティコスはパトリキオスでロマノス＝レカペノスの一族であるニケタス＝ヘラディコスが宮殿の外へ連れ出した。かくしてコンスタンティノス7世の後見人  
30 たちを退けた後、ロマノス＝レカペノスは宮廷に入り、皇帝コンスタンティノス7世に拝謁した。彼にはコンスタンティノス7世から信任を受け、マギストロスの爵位とメガス・ヘタイレイアルケスの地位を獲得した。さらに5月、ロマノスは自らの娘のヘレナをコンスタンティノス7世と結婚させ、宮廷内における彼の優位を完全に確立したのである<sup>2</sup>。

最初のクーデターが、反ゾエ＝カルボノブシナ派による宮廷内クーデターの性格を色濃く持っていたのに対して、今回のロマノス＝レカペノスのクーデターは一見するとどのような背景を持っていたのかが不明確である。しかしながらこのクーデター後の中央政権の顔触れを確認すれば、このクーデターの持つ意味はかなり明らかとなる。このクーデターによって、ロマノス＝レカペノス自身はメガス・ヘタイレイアルケスに就任している。そしてヘレナとコンスタンティノス7

<sup>1</sup> ただしコンスタンティノス＝ゴンギュリオスの介入の要因についてはよくわからない。

<sup>2</sup> ThM pp.210-212, LG pp.299-301, GCA pp.885-887.; cf. Jenkins (1965), pp.108-109.

<sup>1</sup> ThM p.208, LG p.296, GCA p.882.

<sup>2</sup> Scyl. pp.204-205.

<sup>3</sup> ThM p.208, LG p.296, GCA p.882.

<sup>4</sup> ThM pp.208-209, LG pp.296-297, GCA p.883.

<sup>5</sup> ThM pp.209-210, LG pp.297-299, GCA pp.883-885.



世の結婚に伴ってロマノスがバシレイオバトルに就任すると、彼に代わってロマノスの子のクリストフォロスがメガス・ヘタイレイアルケス職を継承していく<sup>1</sup>。これは、政権維持に当たってメガス・ヘタイレイアルケスの職がきわめて重要であるとロマノス＝レカペノスが考えていたことを示している。さらにロマノスはドゥルンガリオス・テース・ビグラス職にヨハネス＝クルクアスを任命している<sup>2</sup>。ヨハネス＝クルクアスは886年にバシレイオス1世に対する陰謀を企画したドメスティコス・トーン・ヒカナトーンのヨハネス＝クルクアスの孫である。彼は幼少時テマ・アルメニアコンで成長した<sup>3</sup>。クルクアス家はレオン6世時代から摂政政権の時代まで、政治の前面にほとんど登場してこない。クルクアス家はこれまで示唆してきたように、レオン6世と距離をおく勢力に属していたと考えられる。

10 また注目に値するのは、ニコラオス＝ミュスティコスが失脚することなく強力な影響力を保持している点である。後述するようにステファノス＝カロマリヤスが失脚して追放されているのは対照的である。そしてこのニコラオス＝ミュスティコスはこれまで繰り返して述べてきているように、レオン6世と対立し、アンドロニコス＝ドゥーカスとコンスタンティノス＝ドゥーカスの反乱にも関与している人物である。

20 一方ドメスティコス・トーン・スコローンはマギストロスのヨハネス＝ガリダスが当分は留任している。しかしロマノス＝レカペノスの即位までにアドラレストス<sup>4</sup>がその職についている。『ミカエル＝マレイノス伝』によるとミカエル＝マレイノスの母方の祖父はアドラレストスという名でパトリキオスかつ「全東方のストラテラテス」であった<sup>5</sup>。このアドラレストスとロマノス＝レカペノス時代のドメスティコス・トーン・スコローンのアドラレストスを同一人物と見なす見解は多いが、年代的に無理があるように思われる<sup>6</sup>。ただしこの二人のアドラレストスが血縁関係にある可能性は高い。さらに『ミカエル＝マレイノス伝』によると、アドラレストスの一族は皇帝ロマノスと血縁関係があったという<sup>7</sup>。このロマノスがロマノス＝レカペノスである可能性は高い。

以上から、ロマノス＝レカペノスのクーデターを支援した勢力はバシレイオス1世時代以来皇帝とは距離をおいていた勢力であったと考えられる。この勢力は9世紀後半以降、バシレイオス1世時代のクルクアス一門の陰謀、レオン6世時代のアンドロニコス＝ドゥーカスの反乱、そしてアレクサンドロス没後のコンスタンティノス＝ドゥーカスの反乱と、繰り返して反乱を起こしてきた。そしてついにロマノス＝レカペノスのもと、ついに政権の奪取に成功したのである。

以上要するに、ロマノスは親アモリア派の連合によってゾエ＝カルボノブシナの摂政政府を崩壊させるのに大きな力となった。そしてさらに親アモリア派の中でも9世紀末以来政権からは距

<sup>1</sup> ThM p.212, LG p.301, GCA p.887.

<sup>2</sup> ThM p.214, LG pp.303-304, GCA p.890.

<sup>3</sup> ThC p.426.彼の父は富裕な宮廷官僚だったとも『続テオファネス年代記』は報告している。

<sup>4</sup> ThM p.215, LG p.305, GCA p.892.

<sup>5</sup> *Vita Sancti Michaeli Maleini*, in: *Revue de l'Orient Chrétien* 7(1902), pp.549-568, pp.550-551.

<sup>6</sup> Herlong, p.159. ミカエル＝マレイノスが893年の生まれであることを考えると、アドラレストスが920年代にドメスティコス・トーン・スコローンを努めていた、というのは考えにくい。

<sup>7</sup> ミカエル＝マレイノスは母方で皇帝ロマノスの一族だった、と言及されている。*Vita Sancti Michaeli Maleini*, pp.550-551.

離をおいてきた勢力の支持のもとクーデターを起こし、レオン6世政権下で大きな政治的影響力を保持していたグループを排除して政権を確保したのである。

だがロマノス＝レカペノスによる政権が一気に安定したわけではなかった<sup>1</sup>。当然のことながら政権を追われた側からの反撃が行われたからである。

特に問題であったのは最初のクーデターによって政権から追われた宦官・家産官僚の勢力と、レオン＝フォーカスに率いられた小アジア軍事家門の勢力であった。レオン＝フォーカスは自らの本拠地であるカッパドキアに戻り、反撃の準備を行っていた。そしてそこにはバラコイモメノスの地位を追われたコンスタンティノスやゴンギュリオス兄弟、さらに彼らと密接な関係を持っていたプロアセクレティスのコンスタンティノス＝マレリアスらも逃亡してきていた。レオン＝フォーカスはタグマタの一部や小アジアのテマタを糾合して、政権奪回のためにコンスタンティノープルを目指して進撃を開始していた。レオン＝フォーカスの軍勢はすぐにコンスタンティノープル対岸のカルケドンに到達する<sup>2</sup>。

しかしカルケドンでレオン＝フォーカスの軍は自己崩壊を開始する。そしてレオン＝フォーカス自身がカルケドンから撤退したことによってこの反乱も終息した。レオン＝フォーカスはコンスタンティノープルに連行されて厳しい処罰を受けた<sup>3</sup>。これ以降のレオン＝フォーカスについては全く不明である。またコンスタンティノスなどもこれ以降姿を消す。

レオン＝フォーカスの反乱が終息した直後、コンスタンティノープルではゾエ＝カルボノブシナによるロマノス＝レカペノス毒殺計画が露見する。彼女は宮廷から最終的に追放され、修道院に送られた<sup>4</sup>。こうして、ゾエ＝カルボノブシナ政権を支えた勢力による反撃は排除された。

20 一方中央政権内においても、ロマノス＝レカペノスのクーデターによって排除された高官たちの勢力による陰謀が頻発していた。こうした勢力による反攻は920年にロマノス＝レカペノスが即位して以降もしばらくの間は続く。それに対してロマノス＝レカペノスは陰謀の参加者を厳しく処断していく一方で、こうした勢力の中心人物たちを次々と政権から失脚させていった。ロマノス＝レカペノスを宮廷に引き込むのに助力したコンスタンティノス7世の家庭教師のテオドロスも、兄弟のシュメオンとともに失脚する。彼らはドゥルンガリオス・テース・ビグラスのヨハネス＝クルクアスによって宮廷から連行され、彼らの所領のあるテマ・オブシキオンに追放された<sup>5</sup>。またミカエル3世の従兄弟であるステファノス＝カロマリヤスも、921年に陰謀を企てたとして追放された<sup>6</sup>。彼はミカエル3世時代以来50年以上にわたって中央で大きな政治的影響力を持っていたが、ついに政治的影響力を失って歴史の表舞台から退場するのである。

30 921年、ブルガリアのシュメオンの軍が再びコンスタンティノープルに迫っていたころ、中央

<sup>1</sup> 事実経過からもわかるように、ニコラオス＝ミュスティコスやステファノス＝カロマリヤスらは政権を918年末から919年4月初頭まで維持している。この4カ月あまりの間に、政権の帰趨をめぐる暗闘があったことは想像に難くない。

<sup>2</sup> ThM p.212, LG pp.301-302, GCA pp.887-888.

<sup>3</sup> ThM pp.212-213, LG pp.302-303, GCA pp.888-889.

<sup>4</sup> ThM p.213, LG p.303, GCA pp.889-890.

<sup>5</sup> ThM p.214, LG pp.303-304, GCA p.890.

<sup>6</sup> ThM p.214, LG p.304, GCA p.891.



の高官たちによる陰謀が露見した。この陰謀にはサケラリオスのアナスタシオスらの中央行政機構の高官や中堅官僚、さらには一部の家産官僚も参加していた<sup>1</sup>。これは、ロマノス＝レカペノスが即位してから親レオン6世・コンスタンティノス7世の高官たちの勢力がなお政権内に残存し、ロマノス＝レカペノスの支配に抵抗を示していたことを示している。だが次節で述べるように、この陰謀を境として中央においてロマノス＝レカペノスに反抗する動きは影をひそめる。

#### (4) ロマノス1世の政権

920年の9月24日、ロマノス＝レカペノスはカイサル<sup>2</sup>の地位を得、さらに12月17日にはついに、コンスタンティノス7世とニコラオス＝ミュスティコスから戴冠される。当初のロマノス1世の地位はコンスタンティノス7世の共同皇帝という位置づけであったが、ロマノス1世が実質的な帝国の統治者であることは疑いなかった。そして前節で述べたサケラリオスのアナスタシオスらによる陰謀の後、コンスタンティノス7世を共同皇帝に格下げし、自らが第一皇帝の座につく<sup>3</sup>。だがロマノス1世の即位当初はその支持基盤はまだ盤石のものとはいいがたかった。ロマノス1世の政権を脅かす存在が帝国の内外に存在していたからである。

本節ではロマノス1世がどのようにして25年に及ぶ長期安定政権を構築できたのかについて、考察を行っていく。この際特に問題となるのはロマノス1世の政権獲得の際、ロマノス1世を支持した勢力と対立した勢力がどのような展開をしていったか、ということになる。

##### ① 陸軍と小アジア軍事家門

ロマノス1世の時代、ビザンツの陸軍はさまざまな戦いに参加している。その活動は前後の二期間に大別できる。前半は927年にブルガリアのシュメオンが没するまで続いた、対ブルガリア戦争である<sup>4</sup>。そして後半は、ドメスティコス・トーン・スコロンのヨハネス＝クルクアス率いる対ムスリム戦争である。この時代ビザンツ帝国は上部メソポタミア方面で大きく領域を拡大した。その象徴ともいえるのが934年のメリテネ奪回、そして944年のいわゆる「人間によって描かれたのではないキリスト像」の獲得<sup>5</sup>だった。

まず対ブルガリア戦争との関連から分析していきたい。シュメオンはロマノス1世時代にもビザンツ帝国を激しく攻撃した。ブルガリアは艦隊を持っていなかったため、ビザンツ帝国への攻撃は陸上から行われる。それゆえブルガリア軍と対峙するのは陸軍であった。921年にブルガリア軍が侵入してきた際、それを迎撃したのはドメスティコス・トーン・スコロンのポトス＝アルギュロスである。彼はその直前に没したアドラレストスに代わって、ドメスティコス・トーン・スコロンに就任したばかりであった。だがこのポトス＝アルギュロスは再びカタシュルタイでブルガリア軍に敗北する<sup>6</sup>。さらに923年にはシュメオンの軍はコンスタンティノープル近郊で離宮のあったペゲにまで進出する。それに対してポトス＝アルギュロスとその兄弟のレオン＝アルギュロス、そしてライクトルのヨハネスはタグマタとヘタイレイアを率いてペゲに布陣した。さらに海上からはドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーのアレクシオス＝ムセレが中央艦隊を率

いてペゲ沖に進出していた。だがペゲでビザンツ軍は再び大敗する<sup>7</sup>。

シュメオンは927年に再びコンスタンティノープルへむけて進撃を開始した。だがその途上、シュメオンは病没する。シュメオンの後を継いだベタル王はビザンツ帝国と和平を結び、ブルガリアの脅威は去った。

このような対ブルガリア戦での経過から、明らかになることがいくつかある。第一に、小アジアの軍事家門の関係者の関与が確認できない。この時期すでにレオン＝フォーカスは失脚していたが、917年の対ブルガリア戦にも参加した弟のバルダス＝フォーカスが兄に替わってフォーカス家を統括していた<sup>8</sup>。しかし彼はこれらの戦いには参加していない。それだけではなく、ロマノス1世時代の対ブルガリア戦には小アジアのテマタが参加したことが確認できない。

第二に、対ブルガリア戦を指揮していた人々がきわめて特徴的である。この時期ドメスティコス・トーン・スコロンだったポトス＝アルギュロスとレオン＝アルギュロスの兄弟の父親は、エウスタティオス＝アルギュロスである。エウスタティオス＝アルギュロスはクルクアス家やドゥーカス家などと同様、反レオン6世の立場をもつ人物である。そのエウスタティオスの子であるポトスとレオンがロマノス1世によって重用されているということはきわめて重要である。アルギュロス家はロマノス1世時代まで、その政治的な立場を維持していたのである。

ただしアルギュロス家が一致してこうした立場であったかは疑問が残る。アルギュロス家の根拠はフォーカス家などと同様、小アジア中央部であり、小アジア軍事家門とも近い関係を持っていた可能性は残る。事実917年の対ブルガリア戦においてはレオン＝アルギュロスとその兄弟のロマノス＝アルギュロスが参加している。しかし917年の対ブルガリア戦への参加それ自体が親フォーカス派ということは示すわけではない。またロマノス＝アルギュロスがロマノス1世時代に一切言及されないことも重要であるように感じられる<sup>9</sup>。

さらに、対ブルガリア戦に海軍も参加していた点も見逃せない。いうまでもなく海軍はロマノス1世が長期にわたって指揮官を務めていた勢力であり、ロマノス1世に対して忠実な存在だった。後述するようにドゥルンガリオス・トゥー・プロのアレクシオス＝ムセレもロマノス1世とは関係の深い人物である。またヘタイレイアを指揮していたのがライクトルのヨハネスであった点にも注目する必要がある。ライクトルには皇帝の私的な顧問官的な色彩が強い。事実この職には皇帝の一族や側近が就任している例が多い<sup>10</sup>。

すなわち全体に、対ブルガリア戦に参加したのはロマノス1世に対して忠実な軍であり、その指揮官もロマノス1世に近い立場の人によって構成されていた。

次に、後期の対ムスリム戦争期の陸軍の動向について分析していきたい。この時期ドメスティコス・トーン・スコロンとしてタグマタを指揮していたのはヨハネス＝クルクアスである。彼についてはすでに分析したように、バシレイオス1世時代のドメスティコス・トーン・ヒカナトーンであったヨハネス＝クルクアスの孫であり、ロマノス＝レカペノスが政治の実権を握ってか

<sup>1</sup> ThM p.215, LG p.305, GCA p.892.

<sup>2</sup> ThM p.216, LG p.306, GCA p.893.

<sup>3</sup> cf. Fine, pp.150-157.

<sup>4</sup> ThM pp.234-235, LG pp.325-326, GCA pp.918-919.

<sup>5</sup> ThM p.215, LG p.305, GCA p.892.

<sup>1</sup> ThM pp.216-217, LG pp.306-307, GCA pp.893-894.

<sup>2</sup> ThM pp.224-226, LG pp.315-317, GCA pp.904-907.

<sup>3</sup> cf. Cheynet, p.298.

<sup>4</sup> ThM p.207, LG p.295, GCA p.881.

<sup>5</sup> 例えばバシレイオス1世の甥のバシレイオス。ThM p.175, GCA p.837.



らはドゥルンガリオス・テース・ビグラスに就任している。そして923年までにはドメスティコス・トーン・スコローンに就任している。彼はこの年、テマ・カルディアでカルディアのストラテゴスのバルダス＝ポイラスらが起こした反乱を鎮圧している<sup>1</sup>。

バルダス＝ポイラスに代わってカルディアのストラテゴスにはヨハネス＝クルクアスの兄弟のテオフィロス＝クルクアスが任命された<sup>2</sup>。そして927年、シュメオンが没してバルカン半島の脅威がなくなると、ヨハネス＝クルクアス率いるビザンツ陸軍は小アジア東部でムスリムと戦い続ける。ヨハネス＝クルクアスはレカペノス一門の内紛によって944年にドメスティコス・トーン・スコローンを罷免される<sup>3</sup>まで、ほとんど東方国境でビザンツ陸軍を指揮していたのである。

10 メリアスも彼とともに陸軍を率いていた。彼は恐らくレオン6世の時代にアルメニアから移住してきた人物であり、896年にレオン＝カタカロス率いるビザンツ軍がブルガロフュゴンでブルガリア軍に敗北した際、ビザンツ軍に加わっている。彼はアンドロニコス＝ドゥーカスの反乱に参加して一時ムスリム領に逃亡するが後にコンスタンティノス＝ドゥーカスらとともに許されてビザンツ領に戻ってきた。メリアスはコンスタンティノス＝ドゥーカスの反乱には加わらず、910年代を通じて小アジア東方国境でビザンツ軍を指揮していた。彼はこの時期東部国境に新設されたテマ・リュカンドスのストラテゴスに就任している。彼は最終的にはマギストロスの爵位を得、934年に没している<sup>4</sup>。

こうした経歴からも明らかなように、彼はレオン＝カタカロスやアンドロニコス＝ドゥーカスなど、反レオン6世の人物と関係が深い。彼がヨハネス＝クルクアスとともに軍を指揮するようになったのもこうした関係があったからだろう。

20 その一方、フォーカス家などの家門は冷遇されている。バルダス＝フォーカスが資料上で明確に言及されるのは941年のキエフ艦隊の襲来の際のみである。この時小アジアに上陸したキエフ軍を迎撃するために、バルダス＝フォーカスが出撃している。しかしながらバルダス＝フォーカスの出撃は恐らく予定されていたことではなかった。その証拠に当時東方戦線で戦闘中だったヨハネス＝クルクアスが急遽召喚されている。ヨハネス＝クルクアスが戻ってくると、ヨハネス＝クルクアスが戦闘の中心となったようである。この戦闘では、バルダス＝フォーカスは明らかにヨハネス＝クルクアスが戻ってくるまでの「つなぎ」の役割しか果たしていない<sup>5</sup>。

以上から、ロマノス1世時代の東方領土拡大戦争においても、対ブルガリア戦の時と同様小アジアの軍事家門が冷遇されている。領域拡大戦争の中核であったのはヨハネス＝クルクアスやメリアスなど、反レオン6世・コンスタンティノス7世の立場をとっていた軍人たちであった。

30 またもう一つ注目すべきこととして、ヨハネス＝クルクアス率いるタグマタが、対ブルガリア戦の終結後はロマノス1世の治世末期まで、ほとんど東部戦線にはりついていた。これは無論、

<sup>1</sup> ThM p.218, LG pp.308-309, GCA pp.896-897.

<sup>2</sup> ThC p.428, DAI ch.45.

<sup>3</sup> ThM pp.233-234, GCA p.917.ただし彼に代わったバンテリオスもロマノス1世の一族である。このバンテリオスはスクレロス家の人物だったという議論もある。Cheynet, p.313.スクレロス家は9世紀初頭から資料に現れるアルメニア系の家門。根津前掲論文も参照。

<sup>4</sup> DAI ch.50(l.133-136), Thema.ch.XII(pp.75-76).

<sup>5</sup> ThM pp.231-233, LG pp.323-324, GCA pp.915-916.

ロマノス1世時代の東方への拡大策の結果生じた状況である。しかし恐らくそれだけではない。東方戦線での陸軍の活動の結果、タグマタのみならず小アジアのテマタの精鋭もヨハネス＝クルクアスらの指揮下に入っていた。このことは、小アジアのテマ軍をコンスタンティノープルから離れた東方国境へ遠ざけるとともに、ロマノス1世に対して不満を持つ小アジアの軍事家門の影響下から離してヨハネス＝クルクアスらロマノス1世の側近の指揮下におくことをも意味している。すなわちテマ軍を東方国境へと追いやり、自らが深く信任する将軍に指揮（監視）させることで、政権に与える危険性を回避させる意図もあったと考えられる。

10 以上要するに、ロマノス1世時代、ゾエ＝カルボノブシナの政権を支えていたフォーカス家などの小アジア軍事家門は、明らかに冷遇されていた。彼らに代わって陸軍を主導していたのはヨハネス＝クルクアスやメリアス、ポトス＝アルギュロスといった、ドゥーカス家などと密接な結びつきを持ち、反レオン6世の立場をとっていた勢力の一員だった。それは言うまでもなくロマノス1世の政権獲得を支持した勢力である。

またロマノス1世は、タグマタの主力を東方国境線に集中させた。その結果ロマノス1世の時代には上部メソポタミアでビザンツ帝国は領域を東方へ拡大する。さらにこの方策には、政権存続にとって脅威となりうるテマ軍の主力をコンスタンティノープルから遠ざける配慮も恐らく働いていた。それはバシレイオス1世と海軍との関係と対比できる。

## ② ロマノス1世と海軍

20 ロマノス1世はサモスのストラテゴス、ドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーを歴任した人物であり、海軍との結びつきは特に深かった。彼の政権獲得のきっかけになったクーデターも、海軍をブーコレオンに動かしたことによって達成されている。この緊密な海軍との関係は、ロマノス1世が皇帝になってからはどのように展開していったのだろうか。

海軍に関しては資料が限定されているため、海軍の動向を後付けていくことは困難である。海軍の活動としては、922年にドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーのヨハネス＝ロディノスがレムノス島沖で、レオン＝トリポリテス率いるムスリム艦隊を撃破している<sup>1</sup>。この海戦でムスリム艦隊は壊滅的な打撃を受ける。レオン6世の時代以来エーゲ海や東部地中海各地で激しい活動を行っていたムスリム艦隊の活動も、この海戦によってようやく収束に向かう。さらにビザンツ艦隊は攻勢に出、928年にはエジプトを攻撃している<sup>2</sup>。ビザンツ艦隊がエジプトを攻撃したのはミカエル3世の時代以来のことである。941年にキエフの艦隊が1000隻という多数の艦船をコンスタンティノープルへ向けて進撃させたが簡単に撃破されている<sup>3</sup>。一方ロマノス1世の時代には30 ビザンツ艦隊は中部地中海方面にも進出する。ビザンツ艦隊はティレニア海からプロヴァンス地方まで進出し、プロヴァンス地方のムスリムの拠点であったフラクシネトゥムを海上から攻撃している<sup>4</sup>。全体としてロマノス1世時代、ビザンツ海軍はかなり強化された。帝国にとっては中核部ともいえるエーゲ海の制海権は回復され、南イタリア方面との交通路も確保された。

<sup>1</sup> ThM p.219, LG pp.309-310, GCA pp.897-898.

<sup>2</sup> al-Makin, in: Vasiliev, pp.188-191, p.189.; cf. Lewis, p.149, Runciman, p.137.

<sup>3</sup> ThM pp.231-233, LG pp.323-324, GCA pp.914-916.

<sup>4</sup> 930年代後半以降、中部地中海・イタリア方面でのビザンツ帝国のプレゼンスは大幅に強化される。Runciman, pp.177-201, esp. p.194.; Lewis, pp.149-150.



ドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーの顔触れについても一瞥しておきたい。ロマノス＝レカペノスの後任のドゥルンガリオスについては史料がないものの、919/920年にはアドリアノスがドゥルンガリオスに就任している<sup>1</sup>。彼は恐らく、ロマノス1世の子のコンスタンティノス＝レカペノスの妻であるヘレネの父親で、アルメニアコン出身のパトリキオスのアドリアノス<sup>2</sup>と同一人物である。

922年には先述したアレクシオス＝ムセレがドゥルンガリオスになっている。彼はロマノス1世の娘と結婚している。アレクシオスは皇帝テオフィロスの娘婿で、カイサルに就任したアレクシオス＝ムセレの一族であろう。また先述した『ディゲニス＝アクリテス』の記述を信じるならば、ドゥーカス家とも何らかの血縁関係があったと考えられる。彼は922年の対ブルガリア戦の際、船から落ちて溺死している<sup>3</sup>。それゆえアレクシオス＝ムセレとロマノス1世との間の血縁関係は、ロマノス1世が政治の実権を掌握する以前からあった可能性が高い。ムセレ家はきわめて長期にわたって政治の前面に出てこなかった一族であるが、ロマノス1世の時代に再び現れる。ムセレ家も明らかに親アモリア派に属する一族である。

それに続くドゥルンガリオスは恐らくヨハネス＝ロディノスである。彼は917年に使者としてシリアに送られている<sup>4</sup>。その後のドゥルンガリオスについてはよくわからない。935年にはエピファニオスなる人物がドゥルンガリオスであった<sup>5</sup>。また先述したようにコンスタンティノス＝リプスも恐らくロマノス1世時代にドゥルンガリオスを努めている。さらに941年にキエフ艦隊が来襲してきた際には、パラデュナステウオンのテオファネスが艦隊を指揮している。

以上、ドゥルンガリオス・トゥー・プロイムー就任者の顔触れを見れば、以下のことが確認できるだろう。第一に、ロマノス1世と血縁関係のある人物が多い。このことは、海軍の長官に自らの信頼する人物を送り込んでいたことを示している。またコンスタンティノス＝リプスのような、ドゥーカス家との関係を持つ人物の就任も、同様の理由だろう。

以上要するに、ロマノス1世は自らの最大の支持基盤であった海軍に対しては、十分な配慮を行っていた。彼は中央艦隊の強化に心を砕いていた。またその長官であるドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーには、自らの信頼できる人物を送り込んでいたのである。

### ③ ロマノス1世を囲む人々

ロマノス1世時代、中央政権内で大きな政治力を持った人々については、あまり多くのことはわかっていない。確認できるかぎりと言えることとしては、ロマノス1世が高官たちと盛んに血縁関係を結んでいたことがあげられる。

ロマノス1世には多くの子供がいた。子供たちは数多くの家門と血縁関係を結んでいる。例え

<sup>1</sup> 根津前掲論文、67頁。

<sup>2</sup> ThMp.231, LG p.323, GCA p.914. このアドリアノスを、878年にシチリアのシュラクサ救援に失敗したドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーのアドリアノス(ThC pp.309-312)と同一人物と見なす見解もある(Herlong, p.154.)もあるが、コンスタンティノス＝レカペノスの結婚は931年であるから年代的に無理があり、首肯しがたい。

<sup>3</sup> ThM p.216, LG pp.306-307, GCA pp.893-894.

<sup>4</sup> ThM p.207, LG p.294, GCA pp.880-881.

<sup>5</sup> DeCer., pp.660-661.

ばロマノス1世の娘たちは、ヘレナがコンスタンティノス7世と結婚しているほか、ドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーのアレクシオス＝ムセレ<sup>1</sup>、ロマノス＝アルギュロス<sup>2</sup>、そしてロマノス＝サロニテスと結婚している<sup>3</sup>。アレクシオス＝ムセレについてはすでに考察した。ロマノス＝アルギュロスはレオン＝アルギュロスの子である<sup>4</sup>。一方ロマノス1世の息子たちに関しては、クリストフォロス＝レカペノスと結婚したソフィアの父親はマギストロスになったニケタス＝ヘラディコスである。彼は918年のクーデターの際、ニコラオス＝ミュスティコスを宮廷から連れ出した人物である<sup>5</sup>。ステファノス＝レカペノスの妻のアンナの父親はガバラスという人物だが、ガバラスの父親のカタキュラス<sup>6</sup>は、恐らくレオン＝カタカロスである。先述したようにレオン＝カタカロスはミカエル2世の従兄弟のカタキュラスの子孫と考えられる人物である。これらはレオン6世やコンスタンティノス7世に対して不信感を持っていた集団を代表する家門である。ロマノス1世はヨハネス＝クルクアスとの血縁関係の構築をも意図していた<sup>7</sup>。さらにコンスタンティノス＝レカペノスはドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーのアドリアノスの娘と結婚している。これはアレクシオス＝ムセレの場合と同様、海軍とのつながりの重視、といえるだろう。

ロマノス1世と血縁関係を持っていた人々は、ほとんどがマギストロスの爵位を得ている。7～9世紀、マギストロスには皇帝の顧問官としての意味合いがまだ存続していた。10世紀のロマノス1世の時代にこのような機能がなお強力に残存していたかは明確ではないが、彼らは皇帝一門ということもあり、皇帝の周囲にあって皇帝と密接に関係していた人々だった可能性はきわめて高い<sup>8</sup>。そしてそうした関係は皇帝一門と血縁関係をもっていた人個人のみならず、その一族にも当てはまるだろう。すなわちレカペノス一門のほか、アルギュロス家やムセレ家、カタキュラス家などが広い意味での皇帝一門となり、ロマノス1世を支えていく体制となったのである。これは1世紀前のテオフィロスやミカエル3世がとっていた方策と似通っている。

しかしながらロマノス1世の場合、テオフィロスやミカエル3世の時代とは大きく異なる点もある。それは家産官僚を盛んに利用している点である。ロマノス1世時代に重用された家産官僚の例としては、以下の3人をあげるのが適当であろう。第一はライクトルのヨハネスである。彼は先述したようにブルガリア軍の侵入の際、ヘタイレイアを率いて出撃している。しかしながら彼は後に皇帝と反目し宮廷を追われた<sup>9</sup>。

<sup>1</sup> ロマノス2世時代、マギストロスのロマノス＝ムセレが言及されるが、彼はロマノス1世の孫である。Scyl.p.251.彼の父親は恐らくアレクシオス＝ムセレである。

<sup>2</sup> ThC p.399.

<sup>3</sup> Scyl.p.251.

<sup>4</sup> 917年の戦いに参加した人物とは別人。cf.Vannier,p.33.

<sup>5</sup> ThM p.211, LG p.300, GCA p.886. 彼にはレントキオスという一族がいた。ThM p.215, GCA pp.891-892. これはミカエル3世時代末期のプロトベスティアリオスであるレントキオス(ThM pp.174-175, LG p.250, GCA p.836.)を想起させる。彼はバシレイオス1世によって罷免されている。

<sup>6</sup> ThM p.231, LG p.322, GCA p.913.

<sup>7</sup> ThM pp.233-234, GCA pp.916-917.

<sup>8</sup> Bury(1911), pp.29-33, R.Guilland, "Ordre des Maîtres", *EEBS* 39/40(1972/73), pp.14-28.

<sup>9</sup> ThM pp.219-220, LG p.310, GCA p.898.



第二の人物はミュスティコスのヨハネスである。彼はロマノス1世の治世初期に、ライクトルのヨハネスに代わって、パラデュナステウオンとして大きな政治的影響力を保持していた<sup>1</sup>。彼はブルガリアとの和平交渉のためにシュメオンのもとに派遣されている<sup>2</sup>。彼は後にアンテュバトスの爵位をも得る。だが彼の勢力拡大とともに彼に反感を持つ者たちも次第に増えていった<sup>3</sup>。そしてついに彼はパトリキオスかつロゴテテース・トゥー・ドゥロムーのコスマスによって訴えられる。コスマスは9世紀の総大主教フォティオスの甥に当たり、ロマノス1世の治世末期にマギストロスとなった人物である<sup>4</sup>。コスマスの訴えによってヨハネスは宮廷から追放された。但しコスマスも宮廷で拷問を受けている<sup>5</sup>。

第三の人物が、彼に代わってパラデュナステウオンとなったプロトベスティアリオスのテオフィアネスである。彼は後にパラコイモメノスも兼任した。そしてレカペノス一門が没落して以降、ロマノス1世の息子で当時コンスタンティノーブル総大主教だったテオフィラクトスとともにコンスタンティノス7世に対する陰謀を企画して失敗、失脚している<sup>6</sup>。彼はきわめて有能で、トラキアに侵入してきたマジャール人との和平交渉<sup>7</sup>やブルガリア王ベタルとロマノス1世の孫のマリアとの結婚式の事務<sup>8</sup>、さらには941年には艦隊を率いてコンスタンティノーブルに迫ったキエフの艦隊を撃破する<sup>9</sup>など、各方面にわたる活躍をしている。

以上から確認できる点として、ロマノス1世時代の3人のパラデュナステウオンは、いずれも家産官僚だったということである。しかしこれはロマノス1世時代に限定されたことではなく、パラデュナステウオンとされている人物のほとんどが宦官、あるいは家産官僚である。従来パラデュナステウオンという任務は、皇帝に代わって中央行政機構全体を総括し主導する、宰相的な色彩の強い任務と考えられてきた<sup>10</sup>。しかしながら資料を見るかぎりでは、パラデュナステウオンとは皇帝の顧問官的な色彩の強い任務である。それゆえ皇帝のそば近くに仕える宦官や家産官僚がその地位を持っていたというのは自然である。さらにこの任務はライクトルやミュスティコスと職務が重なることが多いから、そうした職についている人物がパラデュナステウオンとなることも、さほど不思議なことではない。一方彼らが直接中央行政機構に対して直接の権限を持っていたことは確認できない。ミュスティコスのヨハネスとコスマスの例からもわかるように、パラデュナステウオンと中央行政機構の高官たちは、時には対立することもあった。

さらにパラデュナステウオンは中央行政機構の役職の管轄には入りにくい、特別の任務を時に応じて実行することが多いことが看取できる。ロマノス1世時代の3人のパラデュナステウオン

<sup>1</sup> ThM p.223, LG p.314-315, GCA p.903.

<sup>2</sup> ThM p.219, LG p.310, GCA p.898.

<sup>3</sup> ThM p.223, LG p.314, GCA p.902.

<sup>4</sup> ThM p.235, LG p.327, GCA pp.919-920. 彼は934年の農民対策新法の起草者。

<sup>5</sup> ThM p.223, LG pp.314-315, GCA p.903.

<sup>6</sup> ThM p.238, LG p.330, GCA p.923.

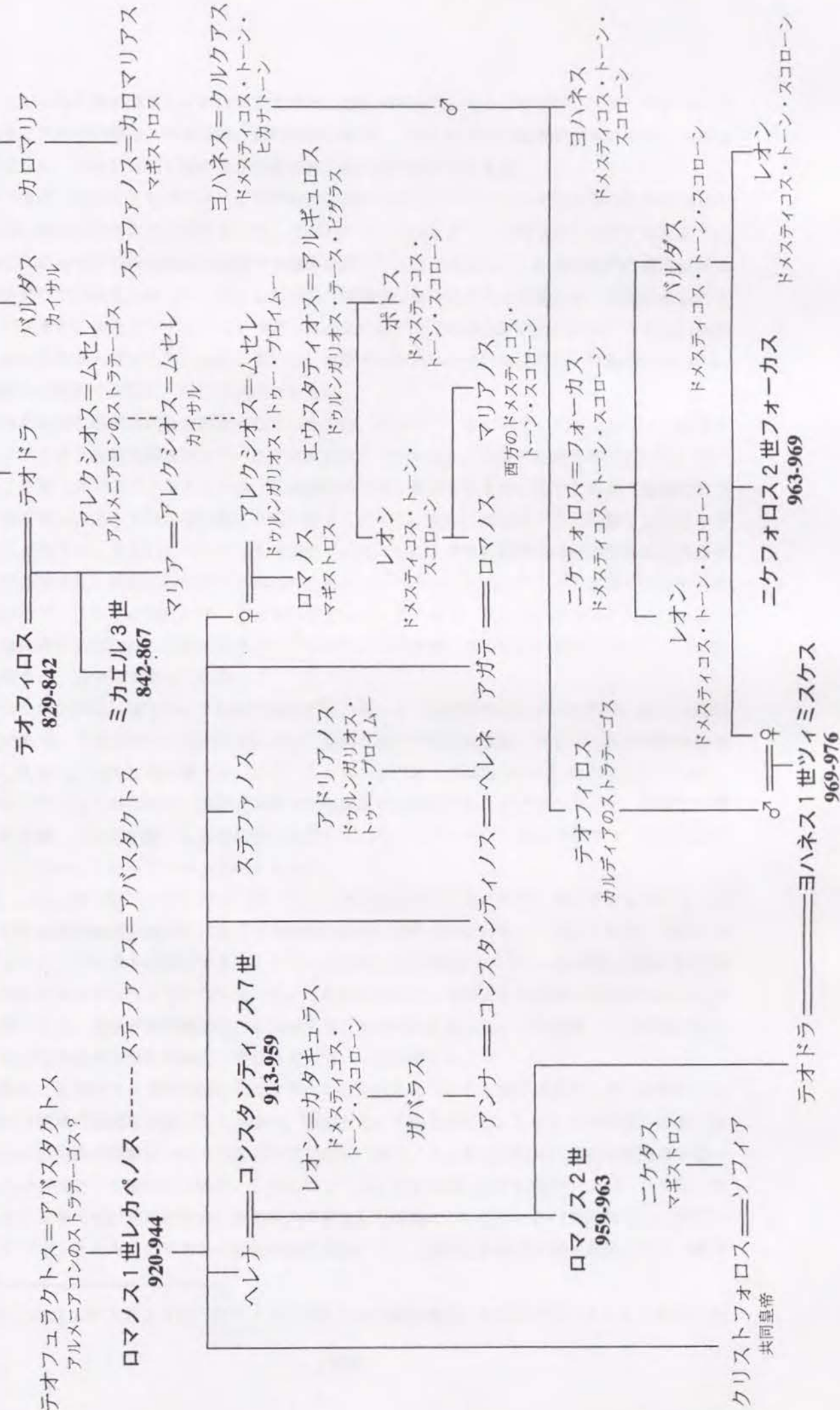
<sup>7</sup> ThM p.231, 234, LG pp.322-323, 325, GCA pp.913-914, 917.

<sup>8</sup> ThM pp.225-226, LG p.316-317, GCA pp.905-907.

<sup>9</sup> ThM p.233, LG p.324, GCA p.916.

<sup>10</sup> H.-G. Beck, „Der byzantinische „Ministerpräsident““, BZ 68(1955), S.309-338.

系図(3) ロマノス1世レカペノス関係 数字は在位年。点線は血縁関係。





が行っている任務を見てもそれは明白である。彼らが主に行っているのはコンスタンティノープルに迫った外敵の撃退、外交交渉、儀礼などである。これらは中央行政機構が本来担当すべき業務ではなく、必要に応じて責任者が任命されて遂行される任務である。

- 要するに、少なくともロマノス1世の時代においては、パラデュナステウオンは皇帝の信頼する家産官僚が任命される任務であった。だがパラデュナステウオンは従来考えられてきたように、皇帝に代わって中央行政機構を統括する権限を持っていたのではなく、皇帝の私的な顧問官的な役割を帯びていた任務だった。すなわち中央行政機構に彼らの与える影響力は、間接的なものだったのである。またパラデュナステウオンは必要に応じて、中央行政機構がカバーできない特別な任務を皇帝から与えられ、実行していた。パラデュナステウオンの業務は、直接的には中央行政機構とは関わりがなく、時には対立もした。

- 皇帝の私的な顧問官的な役割を帯びていたのは、パラデュナステウオンだけではなく、恐らくロマノス1世と血縁関係を持っていたマギストロスたちもまた、同様の任務を帯びていた。ロマノス1世時代のマギストロスたちは、行政機構内で何らかの官位をもっていたのか、確認できない人物が多い。恐らく彼らは実際に官職に就くことなく、皇帝の顧問官として活動していたのではないだろうか。すなわちパラデュナステウオンとともに、皇帝の顧問会議団的なものを形作っていたのである。従来皇帝に代わる宰相的なものとしてパラデュナステウオンが想定されてきた。しかしロマノス1世の時代には、皇帝やパラデュナステウオン、さらにはマギストロスたちによって最高執行会議的なものが形成され、それが中央行政機構、さらには国政を主導していたと考えるほうが、実情にかなっている。

- こうした状況は、以下のような点を導きだす。第一に、国家機構内における皇帝の持つ意味の後退である。7世紀から9世紀においては、皇帝は自ら中央行政機構、さらには国家機構全体を主導していた。強力な皇帝権力は、こうしたシステムによって保証されていたのである。しかしながらロマノス1世の時代、皇帝は単独で国家機構を主導していたのではなかった。皇帝は「最高執行会議」のなかの第一人者的役割に変化していた。こうしたシステムの中では、皇帝は必ずしも必要ではなくなっていた、ともいえる。

- 第一の点と深く結びつく点であるが、第二に家産官僚や宦官との結びつきが強まっている。9世紀以降宦官や家産官僚が主に就任する役職は急速に増やされている。バラコイモメノスやミュスティコス、ライクトルなどである。そして皇帝はこうした任についている人物と密接に結びつき、彼らと政治を行うようになっていく。これは明らかに、皇帝と国家機構との緊密な結びつきの後退による。皇帝が国家機構を自ら主導することが少なくなっていた結果、自らの身の回りにいる宦官や家産官僚との結びつきが強まっていったのである。

同様のことはロマノスの周囲にいたマギストロスたちについても当てはまる。彼らはもちろん中央行政機構の要職を歴任した人が多く、高官たちの代表といえる。しかしながら彼らの多くは実際に国家機構の要職についていたわけではない。ロマノス1世は9世紀以来の高官層の中の一部の支持を得た上で帝位についた。しかしロマノス1世を支持した高官層のメンバーたちは、ロマノス1世時代には実際に中央行政機構の高官として任務についていたわけではなく、パラデュナステウオンとともに皇帝の最高顧問会議を形成した<sup>1</sup>。つまりこの時点で既に皇帝とその当時実

<sup>1</sup> あるいはコスマスのように、ロマノス1世時代に要職を歴任した後にマギストロスに昇格した



際に中央行政機構の枢要な役職についていた人々との直接の結びつきは希薄になっている。

9世紀のテオフィロスやミカエル3世は、国家機構を自ら主導し、強力な皇帝権力を行使していた。彼らが高官たちと結んだ血縁関係は、国家機構を強力にコントロールするために行なわれた方策であった。10世紀のロマノス1世も盛んに血縁関係を構築している。しかしそれは全盛期のテオフィロスやミカエル3世が行った政策とは本質的に異なっている。ロマノス1世は、血縁関係の構築によって国家機構を自ら強力にコントロールしようとしていたのではなかった。少なくともそのような結果はもたらさなかった。10世紀には皇帝と高官、国家機構との関係は9世紀とは決定的に変化していた。高官はもはや、皇帝権力を支える集団ではなくなっていたのである。ロマノス1世の時代以降、ビザンツ帝国の国家システムは大きく変化していく、といっても過言ではない。

#### ④ 小括

ロマノス1世は政権を維持するに当たって、以下のような方策をとった。第一に、潜在的な反対派である陸軍と小アジア軍事家門を政権から排除した。フォーカス家などの小アジアの軍事家門は政権から徹底的に排除された。またタグマタ自体もコンスタンティノープルから遠ざけられ、ロマノス1世の側近であるドメスティコス・トーン・スコローンのヨハネス=クルクアスの監視下、東方戦線に貼り付けられた。反対に、ロマノス1世の最大の支持勢力である海軍は、ロマノス1世の時代にかなり強化された。

第二に、皇帝は家産官僚たちを重用している。特に家産官僚から選任されたパラデュナステウオンは、皇帝の私的顧問官のような任務を帯びていた。第三に、ロマノス1世は政権獲得を支持した高官たちと血縁関係を結んでいた。彼らの代表はロマノス1世時代にマギストロスとなり、パラデュナステウオンと同様皇帝の顧問官的役割を持っていた。彼らは皇帝やパラデュナステウオンとともに国家の最高執行会議の如きものを形成していた。

こうしたシステムの結果、9世紀に皇帝が維持していた国家システムとの緊密な関係、そしてそれに裏打ちされていた強力な皇帝の裁量権は、大きく後退した。皇帝と高官たちとの関係はもはや9世紀とは全く異なったものになっていた。皇帝は宮廷の奥深くにこもり、宦官・家産官僚や一部の信頼する人物たちを通じて、国政にその意図を浸透させていたのである。

#### (5) コンスタンティノス7世の復権

944年の12月、ロマノス1世は突如宮廷から追放される。ロマノス1世を宮廷から追放したのはロマノス1世の息子、コンスタンティノス=レカベノスとステファノス=レカベノスだった<sup>1</sup>。しかしこの二人は最高権力者になることができなかった。コンスタンティノス7世のほうが序列が上で、ロマノス1世の失脚に伴ってコンスタンティノス7世が第一皇帝に復帰したからである。その結果、コンスタンティノス7世とレカベノス兄弟の間で、主導権をめぐる対立が起きた。そして40日余り後、945年の1月17日、コンスタンティノス=レカベノスとステファノス=レカベノスは逮捕される。彼らは修道士にされたうえで追放された<sup>2</sup>。かくしてレカベノス一門による帝国支配は最終的に終結する。コンスタンティノス7世は913年の即位以来32年たって、ようやく

人物もいるだろう。

<sup>1</sup> ThM p.234,236, LG p.325,328, GCA pp.917-918,921.

<sup>2</sup> ThM pp.238-239, LG pp.329-330, GCA pp.922-923.

ビザンツ帝国の主権者の地位に就くことができたのである。

コンスタンティノス7世の復活に伴って、皇帝の周囲にいる顔触れは大きく変化した。ドゥルンガリオス・テース・ビグラスやヘタイレイアルケスなど、皇帝直属の軍事力を掌握する役職のメンバーは一新された。ドゥルンガリオス・トゥー・プロイムーにはコンスタンティノス=ゴンギュレスが任命された。彼はロマノス1世によって失脚させられたゴンギュリオス兄弟と関係のある人物と考えられる。また小アジア軍事家門の復活も看取できる。ドメスティコス・トーン・スコローンに就任したのは、ロマノス1世時代に冷遇されていたバルダス=フォーカスだった<sup>1</sup>。

またロマノス1世時代に大きな力を持った家門においても、変化が看取できるものもある。例えばアルギュロス家ではロマノス1世時代にマギストロスだったロマノス=アルギュロスやレオン=アルギュロスは姿を消す。またボトス=アルギュロスはテマ・ヘラスで反乱を企てている<sup>2</sup>。彼らに代わって、中央ではマリアノス=アルギュロスがコメス・トゥー・スタウルーに任じられ、政治力を持つようになっていく。彼はレオン=アルギュロスの子で、ロマノス=アルギュロスの兄弟に当たる人物であったが、ロマノス1世時代には修道士だった<sup>3</sup>。彼は恐らくロマノス1世時代の境遇に不満を持っており、反レカベノス派に転じたのだろう。

このように、政権交代に伴って政権の指導層は大きく変化した。特に小アジア軍事貴族の復権は大きな意味を持つ。彼らの政治的実力は急速に上昇し、それがバルダス=フォーカスの息子、ニケフォロス2世フォーカスの即位へとつながっていく。

しかしながら、中央政権の持つ性格は、ロマノス1世の時代とは大きく変化がなかった。すなわち皇帝が政治の全面から後退し、「最高執行会議」が政治を主導するという体制である。コンスタンティノス7世時代には宦官のヨセフ=プリンガスやバシレイオス=レカベノス<sup>4</sup>がパラデュナステウオンとして大きな力を持った。そして他の皇帝の側近たちとともに政治を主導していた。これは基本的にはロマノス1世時代と大差ない。違う点があるとすれば、コンスタンティノス7世や後を継いだロマノス2世が政治にあまり興味を示さず、皇帝がさらに政治の前面から遠ざかったことであろう。その結果、家産官僚の実力がさらに上昇したことは否定できない。

以上要するに、ロマノス1世の失脚とレカベノス一族の没落によって、ビザンツ帝国の政治を主導する人々の顔触れは大きく変化した。しかしながら皇帝が政治の全面から後退し、家産官僚

<sup>1</sup> ヘタイレイアルケスにはバシレイオス=ベティノス、ドゥルンガリオス・テース・ビグラスにはマヌエル=クルティケスが就任した。ちなみにコンスタンティノス=ドゥーカスの反乱の際、クルティケスなる人物が戦死している。何らかの関係があるかも知れない。この場合、彼がコンスタンティノス7世の復権に協力した理由は、マリアノス=アルギュロスと同様の背景から説明しなければならない。ThM p.237, LG pp.328-329, GCA p.921.

<sup>2</sup> *Vita Sancti Lucae Junioris*, in: PG 111, 1863, c.411-480, c.465.; cf. R.J.H. Jenkins, "The Date of the Slav Revolt in Peloponnese Under Romanus I", in: *Late Classical and Medieval Studies*, 1955, pp.204-211, p.210. ただしこのボトス=アルギュロスはロマノス1世時代初期のドメスティコス・トーン・スコローンではなく、958年にドメスティコス・トーン・エクスクビトーンを努めていたボトス=アルギュロス(ThC pp.462-463, Ps.Sym., p.756)と同一人物である可能性もある。

<sup>3</sup> ThM p.236,237, LG p.328,329, GCA p.921.

<sup>4</sup> バシレイオス=レカベノスはロマノス1世の庶子。



や側近たちとで協議の上政治を遂行する、という体制は変化がなかった。コンスタンティノス7世時代には、ロマノス1世時代よりも皇帝が政治に関与することが少なくなり、パラデュナステウオンや家産官僚の持つ意味がさらに大きくなっていた。

#### (6) おわりに

ロマノス1世が即位するまでの間、ビザンツ帝国の政情は激しく混乱していた。その背景にあったのは、皇帝をめぐる諸集団の対立であった。ロマノス1世の擡頭も例外ではない。彼はバシレイオス1世時代以降冷遇され続けていた勢力や、自らの足場でもある海軍と深い結びつきを持った勢力との結びつきによって政権を獲得した。そしてロマノス1世は即位してからもそうした勢力との結びつきに立脚して政権を維持した。しかしそのために潜在的な反対派となる小アジア軍事家門は政権から遠ざけられた。そしてそれはロマノス1世が政権を失う要因の一つになった。

またそれまでビザンツ帝国の政情に大きな影響を与えていた高官たちが、ビザンツ帝国の政治の展開に大きな影響を与えなくなった。9世紀にテオフィロスやミカエル3世によって集団として形成され、大きな政治的実力を持っていた高官層であるが、バシレイオス1世時代から分裂と対立を繰り返す。そして残ったグループもロマノス1世時代には行政の実務から遊離して、皇帝の最高顧問となっていた。そして高官たちと皇帝との結びつきは希薄になっていく。無論これ以降も個々の高官はビザンツ帝国の政治の展開に大きな影響を与え続けていた。しかしながら9世紀のように、皇帝を支える集団、あるいは皇帝と政治的に対立する集団としての実体は、ロマノス1世時代に最終的に消滅したのである。

#### 9 おわりに —ビザンツ帝国と9世紀—

はじめに掲げた課題は、9世紀から10世紀前半における皇帝権力の展開を明確にすることであった。そしてそれは具体的には皇帝をめぐる諸集団と皇帝との関係の展開を分析する、という形で進められてきた。本稿の手法によって、この時期のビザンツ帝国の皇帝権力の本質を全て解明できるわけではないし、また分析自体も不十分なものとどまっているが、これまで検討してきた結果を総括することによって、現段階での考察結果を結論として述べていきたい。

またそれを踏まえたうえで、本稿の最初に掲げたもう一つの課題、すなわち中世初期におけるビザンツ帝国の歴史的位位置はいかなるものであったのかを、国王・皇帝権力の動向と展開、という観点から捉え直す作業も行いたい。ただしこの課題についてはきわめて不十分で、今後の研究に向けての準備作業的な考察しか行えないことを、はじめに断っておきたい。

4世紀に成立した後期ローマ帝国の国制は、軍事と民政の分離を最大の統治の原則としていた。理論的にも制度的にも、この双方を統括できる最高責任者は皇帝のみであった。その一方、帝国各地に散在する諸都市の多くはなお自律的都市行政の権限や能力を保持しており、元首政期に比べると大きく後退していたとはいえ、なお一定の発言力を中央に対しても持っていた。

こうした体制は7世紀に崩壊する。間断なく続く戦争状態と外敵の侵入は、帝国を恒常的な臨戦体制下におくことを余儀なくした。その結果地方にはテマが出現する。この時期においても軍事と民政の分離という原則は名目上は維持されていた。しかしながら恒常的な戦争状態下、民政に対する軍事の介入も恒常化し、地方行政機構に対してもテマが大きな影響力を持つようになった。すなわち軍事と民政の双方を統括する存在が地方にも出現したのである。これは外敵の侵入に迅速に対応することを可能にしたが、その反面で地方が中央権力から離脱する傾向をも生み出すことになった。要するに7世紀には中央の求心力が大きく低下したのである。

しかしながら地方は中央から完全に分離独立することはできなかった。これは首都のコンスタンティノーブルの持つ意味とも大きく関わっていた。オリエント属州の喪失などによって、コンスタンティノーブルは帝国の政治のみならず経済・文化など全ての点で突出した一大中心へと変化していた。コンスタンティノーブルはムスリムやスラヴ人などの外敵のみならず、地方の有力者たちにとっても魅力的存在だったのである。

かくして7世紀には、中央政府の求心力は低下しているにもかかわらず、首都のコンスタンティノーブルの持つ求心力は逆に強化されるという一見逆説的な現象が生じる。この時期にテマが起こした反乱が、地方の中央からの独立ではなく、中央を目指して皇帝位を目指すという形態をとるのも、こうした現象によって説明できる。そしてこうした現象はビザンツ帝国の国家統合の崩壊を強力に抑止し、皇帝や中央政権が地方に対して自らの意図を浸透させるための強力な武器となったのである。

8世紀後半以降、皇帝は中央権力を強化する一方で地方の独立性を弱め、中央集権的体制を再構築する政策を推し進めていくようになる。だがこうした政策によって中央権力が着実に強化化するにつれて、中央政権内の実力者たちが新たに大きな政治的影響力を持つようになってきていた。それはすなわち中央行政機構の頂点にたっており、帝国行政を主導していた高官たちである。またコンスタンティノーブルに設置された皇帝直属の陸軍力であるタグマタの長官たちも、無視できない政治的影響力を持つようになっていた。そして8世紀末から9世紀初頭の、相次ぐ皇帝



交替によって皇帝の政権担当能力が低下した時期には、彼らは弱体化した皇帝権力に代わって中央政府の影響力を補完する一方で、皇帝の自由な権能の行使をも抑制する力を持つにいたっていた。かくして9世紀の諸皇帝には、地方に対する中央の影響力を拡大する一方で、中央政府内のこうした新たな勢力を皇帝権力の下に完全に組み込むという、二つの課題を追うことになったのである。

- 10 この二つの課題を解決したのがミカエル2世に始まり、テオフィロス、ミカエル3世と受け継がれるいわゆるアモリア朝の3人の皇帝である。彼らの時代、中期ビザンツ帝国の地方行政制度は最終的に完成される。地方の民政は中央から派遣される官僚によって行われた。彼らは軍司令官であるテマのストラテゴスの下僚である一方で、中央の当該官庁にも所属し、中央と直接に結びつく存在だった。すなわち9世紀には軍事と民政の分離が、古代末期に比べると不完全な形態ではあるものの再び実現されたのである。

一方もう一つの課題をも、この三代の皇帝は克服することに成功した。ミカエル2世は小アジアのテマ幹部出身である。彼やテオフィロスが皇帝に即位するのに伴って、かつてミカエル2世の同僚だったテマの幹部たちが大挙して中央政権に進出してきた。そして彼らは皇帝にきわめて忠実な高官グループを形成した。そしてそれと同時に地方と中央とを皇帝権力の下に結びつけることにも大きく資した。彼らに限らず、9世紀の諸皇帝は地方の有力者たちを中央政府へ盛んに組み込んでいる。これは中央に対する地方の利害の主張にも何らかの役割を果たしただろう。

- 20 そしてテオフィロスやミカエル3世はこのような新しい高官たちを中心として、広範な血縁関係を構築する。さらに帝国の行政とは関係のない点でも高官や官僚たちと親密な人間関係を構築した。その結果、皇帝は中央の高官たちを完全に把握することに成功しただけではなく、高官たちを自分たちに忠実な集団としてまとめあげることに成功した。それまでも例えばニケフォロス1世の即位時のように、中央の高官たちが結束した例がなかったわけではなかった。しかしテオフィロスやミカエル3世は高官たちを強力な永続性を持った集団へと編成し直したのである。そしてその集団の頂点に皇帝自らが立つことによって、きわめて強力な皇帝権力の構築に成功した。9世紀中盤には、皇帝に忠実で皇帝権力を補助する集団として、高官層が出現したのである。

またテオフィロスやミカエル3世によって、コンスタンティノープルの軍事力として中央艦隊も設置された。中央艦隊は9世紀後半以降、コンスタンティノープルの高官層と一体化して政治の展開に大きな影響力を及ぼすようになっていく。

- 30 だがミカエル3世が暗殺されてバシレイオス1世が即位すると、皇帝権力は大きく動揺する。バシレイオス1世はテオフィロス・ミカエル3世時代に成立した高官層とはほとんど関係のない人物であった。彼はバルダスやミカエル3世といった高官層の中核を暗殺するという、いわば非常手段によって帝位についた。無論彼はテオフィロスやミカエル3世のように、高官たちと良好な関係を構築することができなかった。テオフィロスやミカエル3世の時代には皇帝に忠実で皇帝権力を補助する集団だった高官層が、バシレイオス1世の時代には皇帝と対立して皇帝権力を大きく阻害する集団へと変わったのである。そして当然のことながらバシレイオス1世の時代は高官層による陰謀が多発した。

バシレイオス1世は高官層と対立していくために、自らと結ぶ集団を構築していく必要性に迫られていた。高官層に対抗していくためにバシレイオス1世が利用したのは陸軍勢力と宦官・家産官僚の二つであった。地方の有力者を多数取り込むことによって成立した高官層であるが、中

央で何世代か経る間に地方との結びつきが希薄になる一方で地方から新たに中央政権へ入り込むことが困難になりつつあった。また気候の安定や東方国境の安定化の結果、地方で大所領を形成したり、独自の経済活動を行うことも次第に容易になりつつあった。すなわち7世紀以来中央への求心力を保証してきた首都のコンスタンティノープルの強力な求心力が低下しつつあったのである。こうした要因の結果、地方に比較的自立性の高い集団が成立しつつあった。彼らはテマやタグマタで官職を得ることによって、バシレイオス1世や以降の諸皇帝と結びつくようになった。このような地方の陸軍勢力が発展し始まるのはバシレイオス1世の時代以降である。バシレイオス1世時代にはまだ中央の政情に大きく影響することは少なかったものの、彼らは10世紀に入ると皇帝権力に大きな影響を与える集団となっていく。

- 10 また高官層が成立した結果、新たに政権内で影響力を持つためには家産官僚・宦官となって皇帝の側で仕え、皇帝と直接結びついて発言力を持つ方法のほうが現実的となっていた。特に9世紀後半以降、中期ビザンツ帝国の官僚機構が完成の域に達した結果、皇帝が行政の実務から次第に後退する傾向が強くなっていた。これは皇帝と高官との個人的結びつきの希薄化を促したが、その一方で中央行政機構に直接関係しない家産官僚や宦官の介入できる余地をも大きくさせる。政治の実務から後退したとはいえ、皇帝は行政の最高責任者であり、国家システムを統括できる唯一の最高責任者という原則は維持されていたからである。

バシレイオス1世は高官たちに対抗するため、宦官や家産官僚を盛んに登用した。また地方の自律的勢力の登用は、高官たちを地方や陸軍から切り離す効果を持っていただろう。だがそれは皇帝と高官たちとの対立を激化させることになった。

- 20 バシレイオス1世の跡を継いだレオン6世の時代には状況は大きく変化した。レオン6世は即位に当たってバシレイオス1世と対立する高官層の支持を得て即位した。高官層と皇帝との結合が復活したのである。だが高官層の全てがレオン6世を支持していたわけではなかった。高官層はレオン6世の時代にはレオン6世を支持するグループとレオン6世に対抗するグループに分かれつつあったのである。レオン6世と対立するグループは地方との結びつきを比較的残していた集団に多かった。そしてそうしたグループはレオン6世時代にも陰謀を起こす。繰り返して起こされたドゥーカス家の反乱はその代表である。

- 30 親皇帝派の高官層、反皇帝派の高官層、宦官・家産官僚勢力、そして陸海軍という諸勢力はレオン6世時代以降も政治の展開に大きく影響した。これらの連合・対立関係がもっとも鮮明化したのがコンスタンティノス7世の摂政政権時代である。この時期政権を主導したコンスタンティノス7世の母親のゾエ＝カルボノプシナは宦官・家産官僚と陸軍勢力の支持の上に政権を維持した。この時期、地方の陸軍勢力と宦官・家産官僚勢力が結びついたのである。一方親皇帝派の高官層もこの政権には参画していたものの、その影響力は後退した。さらにコンスタンティノス＝ドゥーカスの反乱の失敗で政権奪取に失敗した反皇帝派の高官たちは政権から完全に排除された。

このような対立を利用して帝位についたのがロマノス1世レカペノスである。ロマノス＝レカペノスはドゥルンガリオス・トゥー・プロイムで、元来高官層と関係の深かった海軍を率いていた。彼は反皇帝派の高官層、さらには親皇帝派の高官層をも取り込んで政権を奪取したのである。彼は帝位に就くまでに親皇帝派の高官層をも政権から排除した。基本的にロマノス1世レカペノスの政権は9世紀末以来皇帝と対立してきたグループの支持の上にたっていた。

だがロマノス1世の時代、ロマノス1世の即位を支持していた人々はもはや「高官」ではなか



った。彼らはロマノス1世の時代にはマギストロスとして皇帝の私的顧問官的役割を持っていた。そして彼らは実際に中央行政機構の要職に就任して、実際に行政に責任を持っていたわけではなかった。つまり彼らは皇帝と私的に結ばれた人々であって、家産官僚や宦官たちと実体としては大差がなくなっていたのである。ロマノス1世時代にも宦官・家産官僚が—その構成は大きく変化したものの—引き続き重用されたことも、この点を考えれば理解は容易である。マギストロスたちはパラデュナステウオンなど、皇帝の信任を受けた家産官僚たちとともに帝国の最高執行会議的なものを形成していた。だが彼らは既に中央行政機構の代表ではなくなっていた。1世紀前のテオフィロス・ミカエル3世の時代とは違って、皇帝が中央行政機構の要職就任者と直接親密な関係を結び、皇帝に忠実なグループを形成したのではない。ロマノス1世の政権を支えた人々は、皇帝と職務上の紐帯によっても結ばれていた高官ではなく、皇帝との個人的紐帯のみによって結ばれた人々であった。9世紀には皇帝権力は個人的紐帯のみならず、制定された合法的制度—官僚制度—にも依拠していた。しかし10世紀に入ると皇帝権力は急速に人的結合への依存度を強めていくのである。この傾向はロマノス1世時代以降さらに進展していく。後期ローマ帝国や中期ビザンツ帝国を支えてきた、合法的官僚制度の活力の衰退は、帝国の中央集権的構造をも崩壊に導くものであった。首都のコンスタンティノーブルの強力な求心力の後退<sup>1</sup>や、地方の自立化の進展によって、10世紀以降帝国には地方分権化の傾向が色濃く現れてくる。無論それは皇帝権力の後退へと直結するものであった。同時に、高官たちの政治的影響力の源泉も皇帝個人との密接なつながりに大きく依存していた。それゆえ皇帝とのつながりが希薄化していく9世紀末以降、高官たちの政治的影響力もまた後退していった。

10 12世紀のコムネノス朝政権も、こうした傾向の結果として理解できる。さらにバライオロゴス朝期以降一層進展する国家の分解も、9世紀後半以降のこうした展開の結果と言えよう。

それゆえ本稿で取り上げた高官層も、貴族と言いうるものではない。彼らは帝国の官僚制度に依拠していた集団であり、法的身分として確立していたわけでもない。また当然のことながら本質的には血統を通じて伝承できるものではない。確かに何代にもわたって要職についている家門も存在しているが、法的に保証されたものではなく基本的には個人の才覚に依拠していた。

また彼らが集団としてまとまりを持った最大の要因はテオフィロスやミカエル3世らの諸皇帝による組織化であった。その後は長い分解過程に入り、ロマノス1世の時代には集団としての実体を喪失した。すなわち彼らは庇護者である特定の皇帝の指導のもと集団としてのまとまりを維持していたといえるのであり、例えば古代ローマの元老院貴族層のような永続性や社会的団体としての独自性を強固に持っていたわけではない。本稿では便宜上高官層という用語を用いているが、基本的には彼らが独特な階層を形成していたのでは決していない。

無論極端な図式化は避けなければならない。実際これまでの分析からすると例外的とも言える事例もいくつかあげることができる。だがこの時代の全体的な傾向としてはこのような結論は有効性を持つであろう。

<sup>1</sup> 10世紀後半以降、地方都市の経済力上昇やイタリア諸都市の活動活発化に伴う後退。特にイタリア諸都市はこの頃から直接シリアやエジプトと交易を行うようになっていた。またシリアの際せう服によってアンティオキアがコンスタンティノーブルと並ぶ交易センターとしての地位を回復したことも、影響を与えた。

こうした分析結果を踏まえて、周辺諸地域との比較を簡単に行っておきたい。まず第一に西欧との比較であるが、9世紀にカロリング朝国家が崩壊していったのは、その統合が国王との個人的な人的紐帯に依存する一方、王権の合法的・公的支配を保証する官僚制度や法令がきわめて初等的なものしか存在していなかったことから説明できる。一方9世紀のビザンツ帝国には古代末期から受け継いだ強力な官僚制度がなお機能していた。この官僚制度が国家の統合を維持した最大の要因であったことは疑えない。しかしながらビザンツ帝国においても10世紀に入るとこの強力な官僚制度は次第に崩壊を始める。そして同時に皇帝権力も人的な紐帯に依存する割合が強くなっていく。すなわち10世紀以降、ビザンツ帝国もまた9世紀のカロリング朝とよく似た理由から国家としての統合が次第に失われていくのである。ただし10世紀のビザンツ帝国においては官僚制度がなお存続しており、その崩壊過程もゆっくりとしたものであったため、9世紀のフランク王国のような急激な崩壊は免れた。これはマヌエル1世の没後急速に分解した12世紀のビザンツ帝国と大きく状況を異にしている。

北方のブルガリア王国に関しても、西欧と同様のことが言える。すなわち国王権力が人的紐帯に大きく依存する一方で国家機構が初歩的な段階にとどまっていた結果、国家の統合が維持しにくかった。10世紀の前半、シュメオン王の時代に全盛期を迎えたブルガリアが、シュメオンの子のベタル王の時代に崩壊するのは、人的結合のみに基づく国家統合のもろさを明白に示している。

東方のアッパース朝との違いについても検討しておきたい。アッパース朝はビザンツ帝国と同様、バグダードという強力な中核都市を持ち、ビザンツ帝国と同様古代末期のローマ帝国・ササン朝ペルシアからウマイア朝を経て受け継いだ強力な官僚機構を擁していたが、9世紀後半以降急速に分解していく。注目すべきなのはそれがバグダードの衰退やイスラム圏の縮小を招来しなかった点である。8世紀のウマイア朝の支配領域から、次第に新国家が成立してアッパース朝の支配領域が縮小していったのである。

こうした要因については以下のような要素をあげることができるだろう。第一に、ビザンツ帝国に比べてアッパース朝の領域には多種多様な地域が含まれており、小アジアと東部地中海を主要領域とするビザンツ帝国に比べて遠心力が強力に作用した。特に9世紀以降イスラム世界では都市が発展し、ビザンツ帝国におけるコンスタンティノーブルのように、バグダードが卓越した地位を持っていたのではなかった。コルドバやチュニス、ダマスカスのように強大な経済力を持った都市が数多く存在していたのである。第二に、9世紀のビザンツ帝国では比較的厳密に分離されていた軍事と民政が、アッパース朝においては結合していることが多かった。9世紀後半以降各地に現れるエミールは、地域の軍事面とともに民政部門の多くをも統括していた。先述したように軍事と民政の結合は中央からの地方の独立傾向を加速することになる。9・10世紀のサーマーン朝やトゥールーン朝などはエミールが自立して国家を樹立した例である。第三に9世紀以降活発化したマムルークの導入などの結果、官僚制度とカリフとのつながりが阻害され、さらに官僚制度そのものの衰退へとつながった可能性も否定できない。

こうした周辺諸地域との比較から考えると、9世紀のビザンツ帝国の皇帝権力が強力に安定したものだっただけの理由は、第一に政治的、経済的、文化的などあらゆる点で卓越した力を持った首都コンスタンティノーブルの存在、古代から受け継がれた強力に効率的な官僚制度の存続と軍事・民政の分離、そしてその官僚制度に対する皇帝の発言力の確保にあったといえる。そして官僚制



度に対する皇帝の発言力の源泉が規則や法令、文書によるものではなく、高官たちとの間に結ばれた私的な人的紐帯であった点がこの時期の独自性として注目すべき点である。

ビザンツ帝国は古代ローマ帝国の直接の合法的な後継国家であり、4世紀の後期ローマ帝国時代からでも1100年、元首政期から起算すると実に1500年に及ぶ長期にわたって存続した帝国である。それゆえともすればこの長期にわたって帝国が存続した背景に注目が集まり、1100年、あるいは1500年にわたって大きく変化しなかった要素に対する着目度が高くなる。これはある意味ではやむを得ないことであるし、そういった変化しない要素の探求もまた重要な研究課題である。しかしながらそういう研究指向はビザンツ帝国の歴史を静態的に見る態度につながる。

- 10 だが実際にはビザンツ帝国は各時代毎に異なった姿を見せる、ダイナミズムに富んだ国家であったことを忘れるべきではない。本稿で扱った9世紀、そして10世紀前半もその例外ではありえない。ビザンツ帝国をとりまく環境や中央と地方の関係、さらに皇帝をとりまく諸集団は激しく変化を続けていた。そしてそれを伴って皇帝権力も日々変化を続けていたのである。逆説的な言い方をするならば、ビザンツ帝国が1100年、あるいは1500年というきわめて長期にわたって存続できた理由は、ビザンツ帝国が激しく変化を続けたからに他ならない。帝国の体験した激しいダイナミクスの理解を踏まえた上でこそ、正しいビザンツ帝国史理解が可能になるのではなかろうか。ビザンツ帝国もまた、「時に従って、変転流動して窮まることがない」<sup>1</sup>国家なのである。

<sup>1</sup> 奥平 卓訳、『老子』、徳間書店、第8章。



## 参考文献目錄

### (1) 原資料

- W.Ashburner,*The Rhodian Sea-Law*,Oxford,1909.
- Ioannes Caminiates,*De Expugnatione Thessalonicae*,Berlin,1973.
- J.-B.Chabot(ed.),*Chronique de Michel le Syrien*,Paris,1899-1906.
- Chronicle of 811*,in:I.Dujcev,"La Chronique Byzantine de l'an 811",*TM* 1(1965),pp.205-254.
- Constantinus Porphyrogenitus,*De Administrando Imperio*,Washington D.C.,1967.
- Constantinus Porphyrogenitus,*De Adnistrando Imperio*,eds.,Gy.Moravcsik & R.J.H.Jenkins,London,1962
- 10 (Commentary).
- Constantinus Porphyrogenitus,*De Cerimoniis*,Bonn,1829.
- Constantinus Porphyrogenitus,*De Thematribus*,Vatican,1952.
- Constantinus Porphyrogenitus,*Tres Tractatus de Expeditionibus Militaribus Imperatoris*,Wien,1990.
- De Sacris aedibus deque Miraculis ad Fontem*,in:AASS Nov.III.
- I.Dujcev(ed.),*Cronaca di Monemvasia*,Palermo,1976.
- Georgius Monachus,*Chronographia*,Leipzig,1904.
- Georgius Continuatus A,*Chronographia*,Bonn,1838.
- Georgius Continuatus B,*Chronographia*,Petrograd,1922.
- H.Grégoire(ed.),*Vita Georgii Decapolitae*,Paris,1926.
- 20 •Ioseph Genesios,*Regum Libri Quattuor*,eds.A.Lesmueller-Werner & I.Thurn,Berlin,1978.
- P.Karlin-Hayter(ed.),*Vita Euthymii Patriarchae CP*,Bruxelles,1970.
- P.P.Kalonaros(ed.),*Digenes Aktites*,Athens,1941.
- P.Lemerle(ed.),"La chronique improprement dite de Monemvasie: le contexte historique et légendaire",*REB* 21 (1963),pp.5-49.
- Leo VI,*Taktika*,in:PG 107,1863.
- Leo Grammaticus,*Chronographia*,Bonn,1842.
- J.D.Mansi(ed.),*Sacrum Conciliorum nova et Amplissima Collectio*,Paris-Leipzig,1901-1927.
- J.Mavrogordato(ed.),*Digenes Akrites*,Oxford,1956.
- Nicephorus Patriarchae CP,*Breviarium Historicum*,Washington D.C.,1990.
- 30 •Nicetas David Paphragonos,*Vita Ignatii*,in:PG 105,1862.
- N.Oikonomidès(ed.),*Les Listes préséance Byzantines des IX<sup>e</sup> et X<sup>e</sup> siècles*,Paris,1972.
- A.Papadopoulos-Kerameus(ed.),*Vita Sancti Antonii Junioris*,in:*Pravoslavnij Paletinskij Sbornik* 19-3(1907),pp.186-216.
- Photius,*Epistulae*,Leipzig,1983-1988.
- Pseudo Symeo Magister,*Chronographia*,Bonn,1838.
- Synaxarium Ecclesiae Constantinopolitanarum(Propylaeum ad AASS Novembris)*,Bruxelles,1902.
- Scriptor Incertus de Leone Armenio*,ed.I.Bekker,Bonn,1842.



- *Scriptorum Originum Constantinopolitanarum*, Leipzig, 1901-1907.
- Ioannes Scylitzes, *Synopsis Historiarum*, Berlin, 1973.
- M.A. Shagin (ed.), 'Απολογητικός, VV 1 (1947), pp. 250-254.
- al-Tabari, *The History of Al-Tabari*, Albany, 1985-.
- Theophanes Confessor, *Chronographia*, Leipzig, 1883.
- Theophanes Continuatus, *Chronographia*, Bonn, 1838.
- Theodorus Studites, *Epistulae*, Berlin, 1991.
- Theodosius Melitenus, *Chronographia*, München, 1859.
- E. Trapp (ed.), *Degenes Akrites: synoptische Ausgabe der Ältesten Versionen*, Wien, 1971.
- 10 • A. Vasiliev, *Byzance et les Arabes II: La Dynastie Macédonienne 2: Extraites des Sources Arabes*, Bruxelles, 1950.
- B. Vasilievskij & P. Nikitin (eds.), *Vita Sanctorum 42 Martyrum Amoriensi*, in: *Mémoires de l'Académie imp. de Saint-Petersbourg VIII<sup>e</sup> série VII-2* (1905), p. 22-36.
- *Vita Basilii Junioris*, in: PG 109, Paris, 1863.
- *Vita duo et quadraginta martyres Amoriensi*, in: *Mémoires de l'Académie imp. de Saint-Petersbourg VIII<sup>e</sup> série, VII-2* (1905), pp. 22-36.
- *Vita Irenes*, in: AASS Jul. IV, 1729.
- *Vita Nicetae Patricii*, in: D. Papachryssanthou, "Un Confesseur du second Iconoclisme: la Vie du Patrice Nicetas (†836)", *TM* 3 (1968), pp. 309-351.
- *Vita Sanctae Theoctistae Lesbiae*, in: AASS Nov. IV, 1925.
- 20 • *Vita Sancti Ioannicii*, in: AASS Nov. II-1, 1894.
- *Vita Sancti Lucae Junioris*, in: PG 111, 1863.
- *Vita Sancti Michaeli Maleini*, in: *Revue de l'Orient Chrétien* 7 (1902), pp. 549-568.
- *Vita Sancti Nicholai Studitis*, in: PG 105, 1862.
- *Vita Sancti Philareti*, in: M.-H. Fourny & M. Leroy (eds.), "La Vie de S. Philarète", *Byzantion* 9 (1934), pp. 85-170.
- *Vita Sancti Theodori Studitae*, in: PG 99, 1903.
- *Thesaurus Linguae Graecae* #D (CD-ROM: Property of the Regents of the University of California), 1992.
- *Worlds Atlas ver. 5* (CD-ROM: The Software Toolworks, inc.), 1994.
- (2) 論考・著作
- 30 • N. Adontz, "La Portée historique de l'Oraison Funèbre de Basile I: par son fils Léon VI le sage", *Byzantion* 8 (1933), pp. 501-513.
- N. Adontz, "L'âge et l'origine de l'Empereur Basile I (867-886)", *Byzantion* 8-9 (1933-34), pp. 475-500 (8), 223-260 (9).
- H. Ahrweiler, *Byzance et la Mer: la marine de guerre, la politique et les institutions maritimes de Byzance aux VII<sup>e</sup>-XV<sup>e</sup> siècles*, Paris, 1966.
- H. Ahrweiler, "L'Asie Mineure et les invasions arabes (VII<sup>e</sup>-IX<sup>e</sup> siècles)", *Revue Historique* 227 (1962), pp. 1-32.
- H. Ahrweiler, "Recherches sur la société byzantine au XI<sup>e</sup> siècle: nouvelles hiérarchies et nouvelles

- solidarités.", *TM* 6 (1976), pp. 99-124.
- H. Ahrweiler, "Recherches sur l'Administration de l'Empire Byzantin aux IX<sup>e</sup>-X<sup>e</sup> siècles", *Bulletin de Correspondance Hellénique* 84 (1960), pp. 1-111.
- P. J. Alexander, "The strength of Empire and Capital as seen through Byzantine eyes", *Speculum* 37 (1962), pp. 339-357.
- I. A. Antonopoulou, "The 'Aristocracy' in Byzantium: Evidence from the *Tactica* of Leo VI the Wise", *Byzantiaka* 13 (1993), pp. 151-159.
- E. Ashtor, *A Social and Economic History of the Near East in the Middle Ages*, Los Angeles, 1976.
- P. Aupert, "Les Slave à Argos", *Bulletin de Correspondance Hellénique* 113 (1989), pp. 417-419.
- 10 • T. M. Banchich, "Eunapius and Arethas", *GRBS* 24 (1983), pp. 181-184.
- N. H. Baynes, "The Emperor Heraclius and the Military Theme System", *EHR* 67 (1952), pp. 380-381.
- H.-G. Beck, "Der byzantinische 'ministerpräsident'", *BZ* 68 (1955), S. 309-338.
- H.-G. Beck, "Byzantinische Gefolgschaftswesen", *Bayer. Akademie der Wissensch. Phil.-Hist. Kl. Sitzungsberichte* 1965, S. 11-45.
- H.-G. Beck, "Konstantinopel. Zur Sozialgeschichte einer frühmittelalterlichen Hauptstadt", *BZ* 58 (1965), S. 11-45.
- H.-G. Beck, "Res Publica Romana: Von Staatsdenken der Byzantiner", *Bayer. Akademie der Wissensch. Phil.-Hist. Kl. Sitzungsberichte* 1970, S. 7-41.
- H.-G. Beck, "Die Mobilität der Byzantinischen Gesellschaft", *Orient* 14 (1978), pp. 1-14.
- 20 • H.-G. Beck, "Der byzantinische 'Ministerpräsident'", *BZ* 68 (1955), S. 309-338.
- ハンス・ゲオルグ・ベック (講演会要旨) 「ビザンツ社会の流動性」 (和田廣訳) 『オリエント』 21-1 (1978), pp. 189-198.
- ハンス・ゲオルグ・ベック 「ビザンツ帝国の国制」 (渡辺金一訳) 『南欧文化』 5 (1979), pp. 82-99.
- N. A. Bees, "Sur quelques évêques suffragants de la Métropole de Trébizonde", *Byzantion* 1 (1924), pp. 117-137.
- H. Antoniadis-Bibicou, *Études d'Histoire maritime de Byzance: à propos du 'Thème des Caravisiens'*, Paris, 1966.
- F. Blass, "Die Griechische und Lateinischen Handschriften im alten Serail zu Konstantinopel", *Hermes* 23 (1888), pp. 219-233.
- E. W. Brooks, "The Campaign of 716-718, from Arabic Sources", *JHS* 19 (1899), pp. 19-33.
- 30 • E. W. Brooks, "Byzantines and Arabs in the time of the early Abbasids", *EHR* 15 (1900), pp. 728-747.
- E. W. Brooks, "Byzantines and Arabs in the time of the early Abbasids. (continued.)", *EHR* 16 (1901), pp. 84-92.
- E. W. Brooks, "Arabic lists of the Byzantine Themes", *JHS* 21 (1901), pp. 67-77.
- E. W. Brooks, "The relations between the empire and Egypt from a new Arabic source.", *BZ* 22 (1913), pp. 381-391.
- P. Brown, *The Making of Late Antiquity*, Cambridge, 1978.
- P. Brown, "A Dark-Age crisis: aspects of the Iconoclastic controversy", *EHR* 83 (1973), pp. 1-34.
- J. B. Bury, *A History of the Later Roman Empire from Arcadius to Irene (395 A.D. to 800 A.D.)*, 2 vols, London,



- 1889<sup>1</sup>.
- J.B.Bury, *Imperial administrative system in the ninth century*, London, 1911.
  - J.B.Bury, *A History of the Eastern Roman Empire: from the fall of Irene to the accession of Basil I (A.D. 802-867)*, London, 1912.
  - J.B.Bury, *Selected Studies of J.B.Bury*, Cambridge, 1930.
  - J. B. Bury, "The Relationship of the Patriarch Photius to the Empress Theodora", *EHR* 5(1890), pp. 255-258.
  - J.B.Bury, "The Identity of Thomas the Slavonian", *BZ* 1(1892), pp. 55-60.
  - J.B.Bury, "The Ceremonial Book of Constantine Porphyrogenitus", *EHR* 22(1907), pp. 209-227.
  - J.B.Bury, "The Ceremonial Book of Constantine Porphyrogenitus (continued.)", *EHR* 22(1907), pp. 417-439.
  - 10 •J.B.Bury, "The Naval Policy of the Roman Empire in relation to the western Provinces, from the 7th to the 9th century", *Centenario della nascita di Michele Amari* vol. 2, Palermo, 1910, pp. 1-14.
  - P.Charanis, "Nicephorus I, The Savior of Greece from the Slavs (810 A.D.)", *Byzantina-Metabyzantina* 1-1 (1946), pp. 75-92.
  - P.Charanis, "The Chronicle of Monemvasia and the Question of the Slavonic Settlements in Greece", *DOP* 5(1950), pp. 141-166.
  - P.Charanis, "Ethnic Changes in the Byzantine Empire in the Seventh Century", *DOP* 13(1959), pp. 25-44.
  - P.Charanis, "The Armenians in the Byzantine Empire", *BS* 22(1965), pp. 196-240.
  - P.Charanis, "Kouver, the Chronology of his Activities and their Ethnic Effects on the Regions around Thessalonica", *Balkan Studies* 11-2(1970), pp. 229-247.
  - 20 •V.Christides, "Once Again Caminates' 'Capture of Thessaloniki'", *BZ* 74(1981), pp. 7-10.
  - R.Cornack, "The Classical Tradition in the Byzantine Provincial City: The Evidence of Thessalonike and Aphrodisias", in: M.Mullet and R.Scott (eds.), *Byzantium and the Classical Tradition*, Birmingham, 1981, pp. 103-119.
  - G.Dagron & H.Mihăescu (eds.), *Le Traité sur la guérilla de l'empereur Nicéphore Phocas*, Paris, 1986.
  - A.Demandt, *Die Spätantike: Römische Geschichte von Diocletian bis Justinian 284-565 n.Chr.*, München, 1989.
  - F.Dvornik, *The Photian Schism: History and Legend*, Cambridge, 1948.
  - F.Dvornik, "The Patriarch Photius and Iconoclasm", *DOP* 7(1953), pp. 67-97.
  - F.Dvornik, "Patriarch Ignatius and Caesar Bardas", *BS* 27(1966), pp. 7-22.
  - 30 •W.A.Farag, "Some Remarks on Leo of Tripoli's Attack on Thessaloniki in 904 A.D.", *BZ* 82 (1989), pp. 133-139.
  - J.Featherstone, "A note on the dream of Bardas Caesar in the Life of Ignatius and the Archangel in the Mosaic over the Imperial Doors of St. Sophia", *BZ* 74(1981), pp. 42-43.
  - J.V.A.Fine, Jr., *The Early Medieval Balkans: A critical survey from the Sixth to the late Twelfth century*, Ann Arbor, 1983.
  - K.Fleckenstein (ed.), *Byzantium: Identity, Image, Influence (XIX International Congress of Byzantine Studies)*, Copenhagen, 1996.

- B.Flusin, "Un Fragment inédit de la Vie d'Euthyme le Patriarche?", *TM* 9(1985), pp. 119-131.
- C.Foss, *Ephesus after Antiquity: A late antique, Byzantine and Turkish City*, Cambridge, 1979.
- C.Foss, "The Persians in Asia Minor and the end of Antiquity", *EHR* 90(1975), pp. 721-747.
- C.Foss, "Archaeology and the 'Twenty Cities' of Byzantine Asia", *American Journal of Archaeology* 81 (1977), pp. 469-486.
- C.Foss, "The Lycian Coast in the Byzantine Age", *DOP* 48(1994), pp. 1-52.
- S.Gero, "The legend of Constantine V as Dragon-Slayer", *GRBS* 19(1978), pp. 155-159.
- D.Gorecki, "The Strateia of Constantine VII: The Legal Status, Administration and Historical Background", *BZ* 82(1989), pp. 157-176.
- 10 •M.Graebner, "The Slavs in Byzantine Population Transfers of the seventh and eighth centuries", *Etudes balkaniques* 11(1975), pp. 40-52.
- M.Graebner, "The Slavs in Byzantine Europe - Absorption, Semi-Autonomy and the limits of Byzantinization", *Byzantinobulgarica* 5(1978), pp. 41-55.
- H.Gregoire, "Inscriptions historiques byzantines.", *Byzantion* 4(1927), pp. 437-468.
- H.Gregoire, "Michel III et Basile le Macédonien dans les inscriptions d'Ancyre I et II", *Byzantion* 5(1929/30), pp. 327-340.
- H.Gregoire, "Etudes sur l'épopée byzantine", *Revue des Etudes Grecques* 46(1933), pp. 29-69.
- H.Gregoire, "Etudes sur le neuvième siècle", *Byzantion* 8(1933), pp. 515-550.
- P.Grierson, "The Tombs and Obits of the Byzantine Emperors (337-1042)", *DOP* 16(1962), pp. 1-63.
- 20 •V.Grumel, "Les relations Politico-Religieuses entre Byzance et Rome sous le Règne de Léon V l'Arménien", *REB* 18(1960), pp. 19-44.
- R.Guilland, *Titres et Fonctions de l'Empire Byzantin*, London, 1976.
- R.Guilland, "Patrices de Léon III à Michel II", *Byzantion* 40 (1970), pp. 317-360.
- R.Guilland, "Patrice des règnes de Théophile et de Michel III", *Revue des Etudes Sud-Est Européennes* 8(1970), pp. 593-610.
- R.Guilland, "Contribution à la Prosopographie de l'Empire Byzantin. Les Patrices: Sous les règnes de Basile I<sup>er</sup> (867-886) et de Léon VI (886-912)", *BZ* 63(1970), pp. 300-317.
- R.Guilland, "Ordre des Maîtres", *EEBS* 39/40 (1972/73), pp. 14-28.
- A.Guillou, (Review) "Pauvreté économique et pauvreté sociale à Byzance, 4<sup>e</sup>-7<sup>e</sup> siècles (E. Patlagean, Paris, 1977)", *BZ* 74(1981), pp. 81-84.
- 30 •J.F.Haldon-H.Kennedy, "The Arab-Byzantine frontier in the eighth and ninth centuries: Military organisation and society in the borderlands", *ZRVI* 19(1980), pp. 79-116.
- J.F.Haldon, *Recruitment and Conscription in the Byzantine Army c.550-950*, Wien, 1979.
- J.F.Haldon, *Byzantine Praetorians: An Administrative, Institutional and Social survey of the Opsikion and Tagmata, c.580-900*, Bonn, 1984.
- J.F.Haldon, *Byzantium in the seventh century: The transformation of a Culture*, Cambridge, 1990.
- J.F.Haldon, "Some considerations on Byzantine society and economy in the seventh century", *BF* 10(1985),



pp.75-112.

•J.F.Haldon,"Military administration and bureaucracy:state demands and private interests",*BF* 20(1993), pp.43-63.

•J.F.Haldon,"On the Structuralist Approach to the Social History of Byzantium",*BS* 42(1981),pp.203-211.

•J.F.Haldon,*State,Army and Society in Byzantium:Approaches to Military,Social and Administrative History,6th-12th centuries*,Aldershot,1995.

•J.F.Haldon,"Strategies of defence,problems of security:the garrisons of Constantinople in the middle Byzantine period",in:C.Mango & G.Dagron(eds.),*Constantinople and its Hinterland*,Hampshire,1995,pp.143-155.

•J.F.Haldon,"Military Service,Military Lands,and the Status of Soldiers:Current Problems and Interpretations",

10 *DOP* 47(1993),pp.1-67.

•F.Halkin,"La passion de Sainte Theoktiste",*AB* 73(1955),pp.55-65.

•M.F.Hendy,*Studies in the Byzantine Monetary Economy c.300-1450*,Cambridge,1985.

•M.F.Hendy,"On the Administrative Basis of the Byzantine Coinage c.400-c.900 and the Reforms of Heraclius",*Viator* 19(1988),pp.29-78.

•M.W.Herlong,Kinship and Social Mobility in Byzantium 717-959,Ph.D.thesis of the Catholic University in America,1986.

•K.Hopkins,"Elite Mobility in the Roman Empire",*Past and Present* 32(1965),pp.12-26.

•K.Hopkins,"Social Mobility in the Later Roman Empire:The Evidence of Ausonius",*Classical Quarterly*(new series) 11(1961),pp.239-249.

20 •G.L.Huxley,"The Emperor Michael III and the Battle of Bishop's Meadow (A.D.863)",*GRBS* 16(1975), pp.443-450.

•G.L.Huxley,"Theoktistos,Abasgia and Two Eclipses",*BS* 50(1989),pp.9-10.

•W.H.Ingram,"The Ligatures of early Printed Greek",*GRBS* 7(1966),pp.371-389.

•R.J.H.Jenkins,*Byzantium:The Imperial Centuries AD610-1071*,London,1966.

•R.J.H.Jenkins,"Constantine VII's Portrait of Michael III",*Bulletin de la Classe des Lettres et des Sciences morales et Politiques Académie Royale de Belgique 5<sup>e</sup> série* XXXIV,1948,pp.71-77.

•R.J.H.Jenkins,"The Flight of Samonas",*Speculum* 23(1948),pp.217-235.

•R.J.H.Jenkins,"The Date of Leo VI's Cretan Expedition",*Prosphora eis St.Kyriakiden Hellenica* 4 (1953),pp. 277-281.

30 •R.J.H.Jenkins,"The Classical Background of the Scriptorum Post Theophanem",*DOP* 8(1954),pp.13-30.

•R.J.H.Jenkins,"The Date of the Slav Revolt in Peloponnese Under Romanos I",*Late Classical and Medieval Studies In Honor of Albert Mathias Friend,Jr.*,1955,pp.204-211.

•R.J.H.Jenkins,"A Note on the Patriarch Nicholas Mysticus",*Acta Antiqua Academiae Scientiarum Hungaricae* 11(1963), pp.145-147.

•R.J.H.Jenkins,"Leo Choerosphactes and the Saracen Vizier",*Recueil des travaux de l'Institut d'Etudes byzantines* 8(1963),pp.167-175.

•R.J.H.Jenkins,"The Chronological Accuracy of the "Logothete" for the Years A.D.867-913",*DOP* 19

(1965),pp.91-112.

•R.J.H.Jenkins,"A "Consolatio" of the Patriarch Nicholas Mysticus",*Byzantion* 35(1965),pp.159-166.

•A.H.M.Jones,"The Caste System in the Later Roman Empire",*Eirene* 8(1970),pp.79-96.

•W.E.Kaegi,Jr.,*Byzantine Military Unrest 471-843:An Interpretation*,Amsterdam,1981.

•W.E.Kaegi,Jr., "The Controversy about Bureaucratic and Military Factions",*BF* 20(1993),pp.25-33.

•P.Karlin-Hayter,"La "préhistoire" de la dernière volonté de Léon VI",*Byzantion* 33(1963),pp.483-486.

•P.Karlin-Hayter,"The Revolt of Andronicus Ducas",*BS* 27(1966),pp.23-25.

•P.Karlin-Hayter,"When Military Affairs were in Leo's Hands':A Note on Byzantine Foreign Policy (886-912)",*Traditio* 23(1967),pp.15-40.

10 •P.Karlin-Hayter,"The Emperor Alexander's bad name",*Speculum* 44(1969),pp.585-596.

•P.Karlin-Hayter,"La mort de Théophano(10.11.896 ou 895)",*BZ* 62(1969),pp.13-18.

•P.Karlin-Hayter,"Etudes sur les deux histoires du règne de Michel III",61(1971),pp.452-496.

•P.Karlin-Hayter,"L'hétéroclite.L'évolution de son rôle du *De Cerimoniis* au *Traité des Offices*",*JÖB* 23 (1974), pp.101-143.

•P.Karlin-Hayter,"Constantinople:Partition of an Eparchy or Imperial Foundation?",*JÖB* 30 (1981),pp.1-24

•P.Karlin-Hayter,"Michael III and Money",*BS* 50(1989),pp.1-8.

•P.Karlin-Hayter,"L'enjeu d'une Rumeur",*JÖB* 41(1991),pp.85-111.

•E.Kislinger,"Der junge Basileios I. und die Bulgaren",*JÖB* 30(1981),S.137-150.

•E.Kislinger,"Eudokia Ingerina,Basileios I.und Michael III.",*JÖB* 33(1983),S.119-136.

20 •E.Kislinger,"Michael III-Image und Realität",*Eos* 75(1987),pp.389-400.

•J.Koder,"Zur Frage der Slavischen Siedlungsgebiete im mittelalterlichen Griechenland",*BZ* 71(1978),S.315-329.

•J.Koder,"Delikt und Strafe im Eparchenbuch",*JÖB* 41(1991),S.113-131.

•H.Köpstein & F.Winkelmann(hrsg.),*Studien zum 8. und 9. Jahrhundert Byzanz*,Berlin,1983.

•O.Kresten,"Phantomgestalten in der Byzantinischen Literaturgeschichte:Zu vier Titelfälschungen des 16. Jahrhunderts",*JÖB* 25(1976),S.207-222.

•H.-J.Kühn,*Die byzantinische Armee im 10. und 11. Jahrhundert:Studien zur Organisation der Tagmata*,Wien, 1991.

30 •P.Lemerle,"Esquisse pour une Histoire agraire de Byzance:les sources et les problèmes",*Revue Historique* 219(1958),pp.32-74,254-284,220(1959),pp.43-94.

•P.Lemerle,"Invasions et Migrations dans les Balkans depuis la fin de l'époque Romaine jusqu'au VIII<sup>e</sup> siècle",*Revue Historique* 211(1954),pp.265-308.

•P.Lemerle,"Thomas le Slave",*TM* 1(1965),pp.255-297.

•P.Lemerle,"A propos de la Chronique de Monemvasie et de quelques Textes apparentés",*ZRVI* 8-2(1964), pp.235-240.

•P.Lemerle,"L'histoire des Pauliciens d'Asie Mineure d'après les sources Grecque",*TM* 5(1973),pp.1-144.

•A.R.Lewis,*Naval Power and Trade in the Mediterranean A.D.500-1100*,Princeton,1951.



- K.J.Leyser,"Concept of Europe in the early and high middle ages",*Past and Present* 137(1992), pp.25-47.
- R.-J.Lilie,*Die byzantinische Reaktion auf die Ausbreitung der Araber: Studien zur Strukturwandlung des byzantinischen Staates im 7. und 8. Jahrhundert*, München, 1976.
- R.-J.Lilie,*Byzanz: Kaiser und Reich*, Köln, 1994.
- R.-J.Lilie, "Thrakien" und "Thrakesion": Zur byzantinischen Provinzorganisation am Ende des 7. Jahrhunderts", *JÖB* 26(1977), S.7-47.
- R.-J.Lilie, "Die zweihundertjährige Reform: Zu den Anfängen der Themenorganisation im 7. und 8. Jahrhundert", *BS* 45(1984), S.27-39.
- R.-J.Lilie, "Das 'Zweikaiserproblem' und sein Einfluß auf die Aussenpolitik der Komnenen", *BF* 9(1985), S.219-243.
- R.-J.Lilie, "Die byzantinischen Staatsfinanzen im 8./9. Jahrhundert und die στρατιωτικά κτήματα", *BS* 48(1987), S.49-55.
- R.-J.Lilie, "Stellungnahme zu der Entgegnung W.T.Treadgolds", *BS* 50(1989), S.62-63.
- R.-J.Lilie, "Die Zentralbürokratie und die Provinzen zwischen dem 10. und dem 12. Jahrhundert: Anspruch und Realität", *BF* 20(1993), S.65-75.
- R.-J.Lilie, "Wie dunkel sind die 'Dunklen Jahrhunderte'? Zur Quellsituation in der mittelbyzantinischen Zeit und ihren Auswirkungen auf die Forschung", *JÖB* 43(1993), S.37-43.
- Ja.N.Ljubarskij, "Der Kaiser als Mime", *JÖB* 37(1987), S.39-50.
- Ja.N.Ljubarskij, "Theophanes Continuatus and Genesis: Das Problem einer gemeinsamen Quelle", *BS* 48(1987), S.12-27.
- R.MacMullen, "Social mobility and the Theodosian Code", *JRS* 54(1964), pp.49-53.
- R.Macrides, "The Byzantine Godfather", *BMGS* 11(1987), pp.139-162.
- Paul Magdalino, "Basil I, Leon VI, and the feast of the prophet Elijah", *JÖB* 38(1988), pp.193-196.
- E.Malamut, *Les Iles de l'Empire Byzantin VIII<sup>e</sup>-XII<sup>e</sup> siècles*, Paris, 1988.
- C.Mango, "When was Michael III Born?", *DOP* 21(1967), pp.253-258.
- C.Mango, "The Availability of Books in the Byzantine Empire, A.D.750-850", in: *Byzantine Books and Bookmen: A Dumbarton Oaks Colloquium*, Washington D.C., 1975, pp.29-45.
- C.Mango, "Eudocia Ingerina, the Normans and the Macedonian Dynasty", *ZRVI* 14/15(1973), pp.17-27.
- A.Markopoulos, "Kedrenos, Pseudo-Symeon, and the Last Oracle at Delphi", *GRBS* 26(1985), pp.207-210.
- F.Maijer & O.van Nijf (eds.), *Trade, Transport and Society in the Ancient World: A Source Book*, London, 1992.
- E.M.Meletinsky, "The Typology of the Medieval Romance in the West and the East", *Diogenes* 127(1984), pp.1-22.
- J.Moorhead, "Iconoclasm, the Cross and the Imperial Image", *Byzantion* 55(1985), pp.165-179.
- Gy.Moravcsik, "Sagen und Legenden über Kaiser Basileios I.", *DOP* 15(1961), S.59-126.
- P.E.Niavis, *The Reign of the Byzantine Emperor Nicephorus I (AD802-811)*, Athens, 1987.
- N.Oikonomides, "Silk Trade and Production in Byzantium from the sixth to the ninth century: the Seals of Kommerkarioi", *DOP* 40(1986), pp.31-53.

- G.Ostrogorsky, *History of the Byzantine State*, New Brunswick, 1969.
- D.Polemis, *The Doukai: A Contribution to Byzantine Prosopography*, London, 1968.
- J.Rich (ed.), *The City in Late Antiquity*, London, 1992.
- I.Rochow, "Zu 'heidnischen' Brauchen bei der Bevölkerung des Byzantinischen Reiches im 7. Jahrhundert, vor allem auf Grund der Bestimmungen des Trullanum", *Klio* 60(1978), S.483-497.
- J.Rosser, "THEOPHILUS (829-842): Popular Sovereign, Hated Persecutor", *Byzantiaka* 3(1983), pp.37-56.
- J.Rosser, "The Role of the Great Isthmus Corridor in the Slavonic Invasions of Greece", *BF* 9(1985), pp.245-253.
- S.Runciman, *The Emperor Romanus Lecapenus and His Reign: A Study of 10th-Century Byzantium*, Cambridge, 1929.
- P.Schreiner, "Zwei Bilder aus dem Byzantinischen Shulleben", *Byzantina* 13-1(1985), S.283-290.
- C.Sestakov, "Anonymi cod. Paris. gr. 1712 ei nrednpachi chronoigrafiu Theophana", *VV* 5(1897), p.549.
- K.M.Setton, "The Bulgars in the Balkans and the Occupation in the seventh century", *Speculum* 25(1950), pp.502-543.
- I.Sevcenko, "Was there totalitarianism in Byzantium?: Constantinople's control over its Asiatic hinterland in the early ninth century", in: C.mango & G.Dagron (eds.), *Constantinople and its Hinterland*, Aldershot, 1995.
- A.Sotiroudis, *Die handschriftliche Überlieferung des «Georgius Continuatus» (Redaktion A)*, Thessaloniki, 1989.
- S.Stavrakas, *The Byzantine Provincial Elite: A study in social relationships during the Ninth and Tenth Centuries*, Ph.D. thesis of University of Chicago, 1978.
- A.N.Stratos, *Byzantium in the Seventh Century*, Amsterdam, 1968-1970.
- A.N.Stratos, "The Avar's Attack on Byzantium in the year 626", *BF* 2(1967), pp.370-376.
- N.Svoronos, "Le serment de Fidelite a l'empereur Byzantin et sa signification constitutionnelle", *REB* 9(1951), pp.106-142.
- R.Taft, "How Liturgies Grow: the Evolution of the Byzantine «Divine Liturgy»", *Orientaliachristiana periodica* 43(1977), pp.355-378.
- J.L.Teall, "The Barbarians in Justinian's Armies", *Speculum* 40(1965), pp.294-322.
- F.Tinnefeld, "Zum Profane Mimos im Byzanz nach dem Verdikt des Trullanums (691)", *Byzantina* 6(1974), S.321-343.
- フランツ・ティンフェルト「ビザンツ皇帝権と皇帝批判」(小田謙爾訳)『史林』72-4(1989), pp.110-123.
- N.Tobias, "Basil I (867-886), The Founder of the Macedonian Dynasty: A study of political and military history of the Byzantine Empire in the ninth century", Ph.D. thesis of Rutgers University, 1969.
- C.Toumanoff, "Caucasia and Byzantium", *Traditio* 27(1971), pp.111-158.
- A.Toynbee, *Constantine Porphyrogenitus and his world*, London, 1973.
- W.Treadgold, *The Byzantine State Finances in the eighth and ninth centuries*, New York, 1982.
- W.Treadgold, *The Byzantine Revival 780-842*, Stanford, 1988.



- W.Treadgold, *Byzantium and Its Army 284-1081*, Stanford, 1995.
- W.Treadgold, "The Problem of the Marriage of the Emperor Theophilos", *GRBS* 16 (1975), pp.325-341.
- W.Treadgold, "Photius on the Translation of Texts (Bibliotheca, Codex 187)", *GRBS* 19(1978), pp.171-175.
- W.Treadgold, "The Bride-Shows of the Byzantine Emperors", *Byzantion* 49(1979), pp.396-413.
- W.Treadgold, "The Revival of Byzantine Learning and the Revival of the Byzantine State", *AHR* 84(1979), pp.1245-1266.
- W.Treadgold, "The chronological accuracy on the Chronicle of Symeon the Logothete for the years 813-845", *DOP* 33(1979), pp.157-197.
- W.Treadgold, "Notes on the Numbers and Organization of the Ninth-Century Byzantine Army", *GRBS* 21(1980), pp.269-288.
- W.Treadgold, "The Military Lands and the Imperial Estates in the Middle Byzantine Empire", *Harvard Ukrainian Studies* 7(1983), pp.619-631.
- W.Treadgold, "An indirectly preserved Source for the Reign of Leo IV", *JÖB* 34(1984), pp.69-76.
- W.Treadgold, "On The Value of Inexact Numbers", *BS* 50(1989), pp.57-61.
- W.Treadgold, "The Break in Byzantium and the gap in Byzantine studies", *BF* 15(1990), pp.289-316.
- M.Treu, "Demetrios Kydnes", *BZ* 1(1892), S.60
- F.R.Trombley, "The Council in Trullo (691-692): A study of the Canons to Paganism, Heresy, and the Invasions", *Comitatus* 9(1978), pp.1-18.
- F.R.Trombley, "Paganism in the Greek World at the end of Antiquity: The end of Rural Anatolia and Greece", *Harvard Theological Review* 78-3,4(1985), pp.327-352.
- J.F.Vannier, *Familles Byzantines: Les Argyroi (IX<sup>e</sup>-XII<sup>e</sup> siècles)*, Paris, 1975.
- A.Vogt, "La jeunesse de Leon VI le sage", *Revue Historique* 174(1934), pp.389-428.
- S.Vryonis Jr., *The Decline of medieval Hellenism in Asia Minor and the Process of Islamization from the eleventh through the fifteenth century*, Berkeley, 1971.
- S.Vryonis, "The Question of the Byzantine Mines", *Speculum* 37(1962), pp.1-17.
- G.Weiss, "Antike und Byzanz: Die Kontinuität der Gesellschaftsstruktur", *HZ* 224(1977), S.529-560.
- D.S.White, *Photios*, Brookline, 1981.
- L.J.Wilson, *Women and Imperial Power in Byzantium 780-1056: A study of the reigns of the Empress Eirene and six later Empresses*, Ph.D.thesis of University of Southampton, 1985.
- F.Winkelmann, *Byzantinischen Rang- und Ämterstruktur im 8. und 9. Jahrhundert*, Berlin, 1985.
- F.Winkelmann, *Quellenstudien zur herrschenden Klasse von Byzanz im 8. und 9. Jahrhundert*, Berlin, 1987.
- F.Winkelmann (hrsg.), *Volk und Herrschaft im frühen Byzanz: Methodische und quellenkritische Probleme*, Berlin, 1991.
- ・浅野和生「ゲミレル島、カラジャエレン島（トルコ、リキア地方）のビザンティン都市遺跡」『フィロカリア』10(1993), p.92-113.
- ・相野洋三（研究ノート）「ビザンツ帝国の関税組織について—kommerkianios をめぐって—」『関学西洋史論集』3(1973), pp.31-45.

- ・相野洋三「ビザンツ-アラブ交渉史 —648-965年のキプロス史をめぐって—」『関学西洋史論集』4(1976), pp.65-78.
- ・足立広明「古代末期の単性論派運動」『古代文化』43(1991), pp.1-17.
- ・井上浩一『ビザンツ帝国』、岩波書店、1982年。
- ・井上浩一『ビザンツ皇妃列伝』、筑摩書房、1996年。
- ・井上浩一「ビザンツ「都市・市民」研究の動向と課題—「封建制」論と関連させて—」『史林』59-4(1976), pp.122-138.
- ・井上浩一「転換期ビザンツ社会をめぐるとの共同研究」『西洋史学』110(1978), pp.54-62.
- ・井上浩一「ビザンツ史研究の課題—渡辺金一氏の書評によせて—」『史学雑誌』92-7 (1983), pp.109-117.
- ・井上浩一「ローマ都市からビザンツ都市へ—エフェソスの場合—」『人文研究』35-5 (1983), pp.80-99.
- ・井上浩一「財政からみたビザンツ国家—9～11世紀—」『新しい歴史学のために』185(1986), pp.1-13.
- ・井上浩一「7～12世紀のビザンティオン軍制—比較史研究のために—」『古代文化』41(1989), pp.1-7.
- K.Inoue, "A Provincial Aristocratic Oikos in Eleventh-Century Byzantium", *GRBS* 30(1989), pp.545-569.
- ・井上浩一「ビザンツ帝国の国制と社会」『歴史評論』504(1991), pp.37-50.
- K.Inoue, "The Rebellion of Isaakios Komnenos and the Provincial Aristocratic Oikoi", *BS* 54(1993), pp.268-278.
- ・マックス・ウェーバー『支配の社会学』、創文社、1960-1962年。
- ・上原菜穂子「ビザンツ帝国におけるニケフォロス一世の歴史的意義—商業活動との関連から—」『桃山歴史・地理』25(1990), pp.23-39.
- ・浦野聡「ローマ帝政期小アジアにおける村落の都市昇格—その社会的・法的背景—」『西洋史学』153(1989), pp.40-57.
- ・大月康弘（紹介）「『4～7世紀のビザンツにおける経済的貧困と社会的貧困』（E.パトラリアン、Paris, 1977）」『地中海論集』12(1989), pp.87-94.
- ・大月康弘「ビザンツ中後期の文書『テュピコン』をめぐって」『一橋論叢』110-4(1993), pp.164-173.
- ・大月康弘（書評）「『中世地中海世界とシチリア王国』（高山博著）」『地中海学研究』17(1994), pp.81-94.
- ・小田昭善「十一世紀における小アジアのビザンツ貴族」『西洋史学』144(1987), pp.56-70.
- ・小田昭善「11世紀ビザンティオン軍制の変化—マケドニア朝からコムネノス朝へ—」『古代文化』41(1989), pp.38-51.
- ・太田敬子「11世紀の北シリア山岳部族の運動—Nasr b. Musaraf al-Rawadifi の活動について—」『地中海学研究』15(1992), pp.71-95.
- ・小田謙爾「ビザンツ期に於る「デーモス」(demos/-oi)の語義変遷と「サーカス党派」との関連—『テオファネスの年代記』を中心に—」『西洋史論叢』5(1983), pp.30-42.



- ・加藤博『文明としてのイスラム—多元的社会叙述の試み—』、東京大学出版会、1995年。
- ・倉橋良伸「ペルシア戦争の再発（572年）とその意味—ユスティニアヌス帝以後のローマ帝国—」『紀尾井史学』9(1989),pp.21-32.
- ・倉橋良伸「マウリキオス帝の所謂アンキアロス遠征について—ペルシア戦争（五七二—九一）後のローマ帝国—」『上智史学』35(1990),pp.66-90.
- ・倉橋良伸「ユスティヌス2世・ティベリオス時代におけるローマ帝国の対外政策—東方政策と西方（バルカン・イタリア）政策—」『西洋史学』173(1994),pp.50-63.
- ・篠野志郎「6世紀のビザンツ帝国東方領における都市概念—プロコピオス『建設について』に現れる戦略拠点としての都市—」『地中海学研究』13(1990),pp.33-55.
- 10 ・尚樹啓太郎「いわゆる『モネンヴァシア年代記』について」『バルカン・小アジア研究』7(1981),pp.1-17.
- ・尚樹啓太郎「ツァコニア Τζακονία 考」『バルカン・小アジア研究』15(1989),pp.1-21.
- ・鈴木正幸他編『比較国制史研究序説【文明化と近代化】』、柏書房、1992年。
- ・高山博『中世地中海世界とシチリア王国』、東京大学出版会、1993年。
- ・竹部隆昌「九～十一世紀南イタリアとコンスタンティノープル」『文化史学』44(1988),pp.106-121.
- ・竹部隆昌「南イタリアの「ギリシア人」について—民族構成とビザンツ支配との問題—」『長崎県立女子短期大学研究紀要』40(1992),pp.63-74.
- ・中谷功治「テマからテマ制へ—テマ制度の成立時期をめぐって—」『待兼山論叢史学篇』21(1987),pp.29-50.
- 20 ・中谷功治「テマ反乱とビザンツ帝国—「テマ=システム」の展開—」『西洋史学』144(1987),pp.22-40.
- ・中谷功治（動向）「プロソポグラフィ—研究と八・九世紀ビザンツ—F.Winkelmann の研究を中心に—」『西洋史学』150(1988),pp.69-73.
- ・中谷功治「テマの発展—軍制からみたビザンティオン帝国—」『古代文化』41(1989),pp.8-21.
- ・中谷功治「スラヴ人トーマスの乱をめぐって」『西洋における世界国家の経営と民族問題』、1991,pp.13-20.
- ・中谷功治「イコノクラスムの時代について—八世紀のビザンツ—」『待兼山論叢史学篇』26(1992),pp.63-87.
- ・中谷功治「八世紀後半のビザンツ帝国—エイレーネー政権の性格をめぐって—」『西洋史学』174(1994),pp.36-53.
- 30 ・根津由喜夫「ライデストス穀物専売政策をめぐって—十一世紀ビザンツの国家と官僚—」『史林』70-1(1987),pp.44-72.
- ・根津由喜夫「アレクシオス一世とビザンツ軍事貴族—コムネノス朝支配体制の組織原理—」『西洋史学』151(1988),pp.1-17.
- ・根津由喜夫「ビザンツ貴族と皇帝政権—コムネノス朝安定化への過程—」『史林』71-3(1988),pp.1-40.
- ・根津由喜夫「10世紀小アジア貴族の世界」『古代文化』41(1989),pp.22-37.
- ・根津由喜夫「十世紀ビザンツ帝国の権力構造—人的関係の視角から—」『富山大学人文学部紀要』

- 17(1991),pp.53-76.
- ・根津由喜夫「ロマノス三世アルギュロスの蹉跌—十一世紀前半のビザンツ皇帝権と政治体制—」『史林』74-2(1991),pp.106-139.
- ・服部良久「ドイツ中世貴族史研究の一課題—貴族家門・権力構造・国制—」『史学雑誌』102-2(1993),pp.78-99.
- ・早川良弥「ヨーロッパ中世前期における貴族の親族集団」『西洋史学』131(1983),pp.1-21.
- ・H.ビレンヌ他（佐々木克巳編訳）、「古代から中世へ—ビレンヌ学説とその検討—」、創文社、1970年。
- ・ロバート・ブラウニング『ビザンツ帝国とブルガリア』、東海大学出版会、1995年。
- 10 ・F.ブローデル『地中海 I—環境の役割—』、藤原書店、1991年。
- ・堀川徹（編）『世界に広がるイスラム』（講座イスラム世界3）、悠思社、1995年。
- ・三浦 徹「イスラムの都市性をめぐって」『地中海学研究』13(1990),pp.151-159.
- ・J.C.ミッチェル編『社会的ネットワーク—アフリカにおける都市の人類学—』、国文社、1983年。
- ・南川高志「ローマ皇帝とその時代」、創文社、1995年。
- ・家島彦一『イスラム世界の成立と国際商業—国際商業ネットワークの変動を中心に—』、岩波書店、1991年。
- ・山辺規子（書評）「『ビザンツ帝国』（井上浩一）」『史林』66-1(1983),pp.132-140.
- ・吉野正敏・安田喜憲編『歴史と気候（講座 文明と環境 第6巻）』、朝倉書店、1996年。
- 20 ・渡辺金一『ビザンツ社会経済史研究』、岩波書店、1968年。
- ・渡辺金一「中世ローマ帝国」、岩波新書、1980年。
- ・渡辺金一『コンスタンティノープル千年—革命劇場—』、岩波新書、1985年。
- ・渡辺金一「『テマ』（ΘΕΜΑ）制度成立の時期をめぐる論争の現況」、『史学雑誌』65-10(1956),pp.61-79.
- ・渡辺金一「『テマ』（ΘΕΜΑ）論争の新段階」『史学雑誌』68-11(1959),pp.76-99.
- ・渡辺金一「8世紀後半のイタリアとビザンツ、フランク、ローマ教皇」『一橋論叢』53-5(1965),pp.551-577.
- ・渡辺金一（紹介）「Byzantinisches Gefolgschaftswesen.(H.-G.Beck)」『オリエント』9-1(1966),p.40.
- ・渡辺金一（紹介）「Konstantinopel.Zur Sozialgeschichte einer frühmittelalterlichen Hauptstadt(H.-G.Beck)」『オリエント』10-3,4(1967),p.164.
- 30 ・渡辺金一「ビザンツ理解への道—H.-G.Beckの二点の近業—」『南欧文化』3(1976),pp.40-56.
- ・渡辺金一「歴史記述におけるビザンツ皇帝の虚像と実像—「続テオファネス」第四巻のミハエル3世について—」『ヨーロッパ—経済・社会・文化—』、創文社、1979,pp.51-81.
- ・渡辺金一（書評）「『ビザンツ帝国』（井上浩一）」『史学雑誌』92-2(1983),pp.91-101.
- ・渡辺金一「ビザンツ人の世界（上）—文学を通して見た—」『ブラチア』6(1984),pp.1-9.
- ・渡辺金一「ビザンツ人の世界（下）—文学を通して見た—」『ブラチア』7(1985),pp.1-5.
- ・渡辺金一、「BYZANTZ-MODELL «REDISTRIBUTIONS-» GESELLSCHAFT」、『地中海論集』10(1986),pp.1-9.



- ・渡辺金一「ビザンツ モデル〈再分配社会〉再論」『地中海論集』12(1989),pp.21-27.
  - ・K. Watanabe, „Modell <Redistribution> in der Geschichte der Fall Byzanz“, *Near Eastern Studies* 5(1991), pp.461-468.
  - ・Kin-ichi Watanabe, „Peut-on parler encore de feodalisme byzantin? -essai d'un autre modele, <redistribution>“, *Mediterranean World* 13(1992), pp.1-8.
  - ・和田廣「ビザンツ史研究のデシデラータ：宦官」『オリエント』36-1(1993), pp.149-150.
  - ・和田廣「中世ビザンツ宮廷における宦官について」『社会文化史学』31(1993), pp.1-11.
  - ・和田廣、小田謙爾、井上浩一「井上浩一『ビザンツ帝国』合評会をめぐって」『歴史学研究』517(1983), pp.59-68.
- 10   ・『世界大地図館』、小学館、1996年。
- ・拙稿「ニケフォロス1世の対スクラヴィニア移住政策—9世紀初頭のビザンツ帝国、バルカン半島、地中海—」『西洋史学』181(1996), pp.1-16.